明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正九年十月三十一日印刷納本
大正九年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

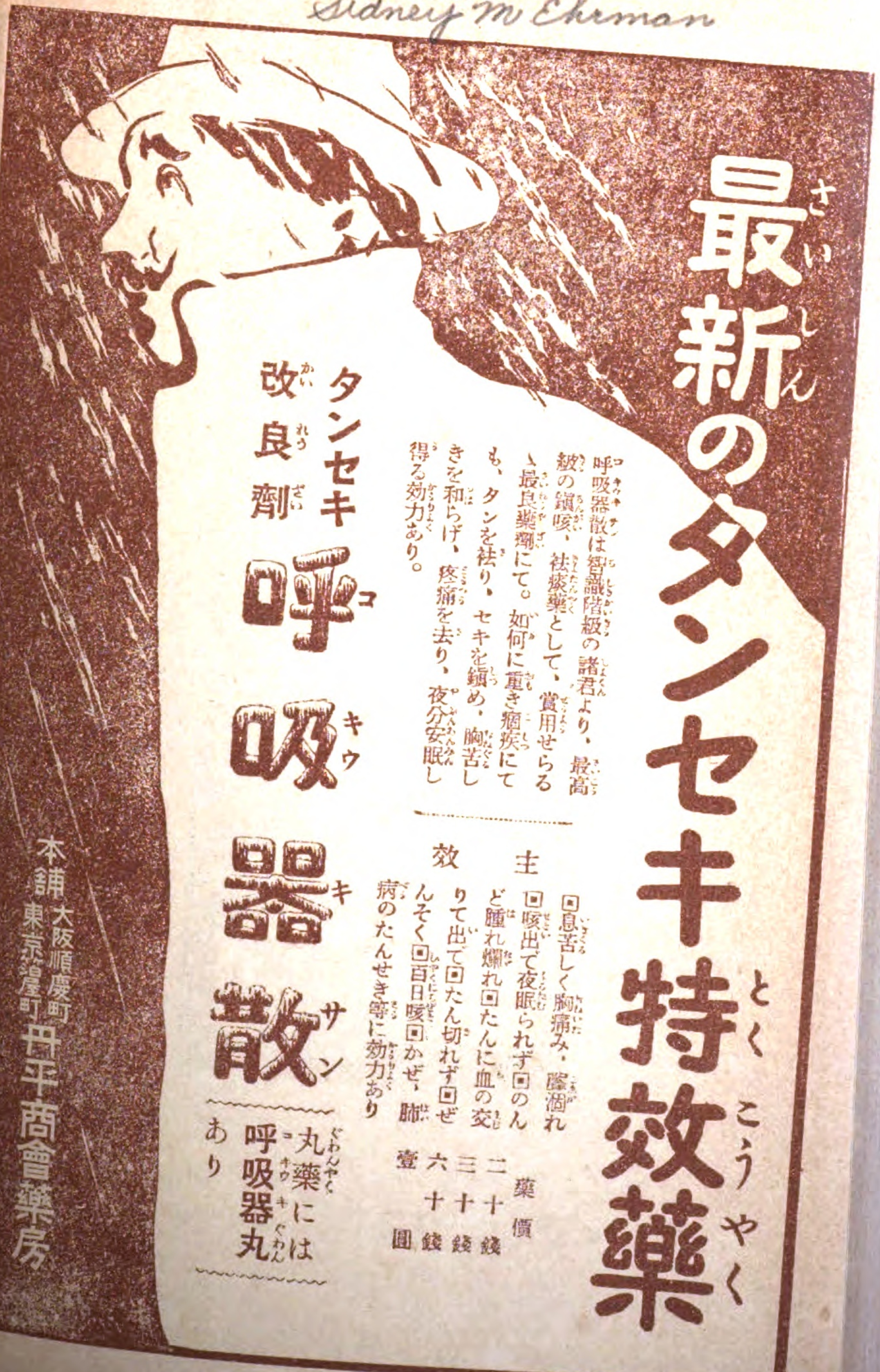
中央公論

11-1920

十一月號

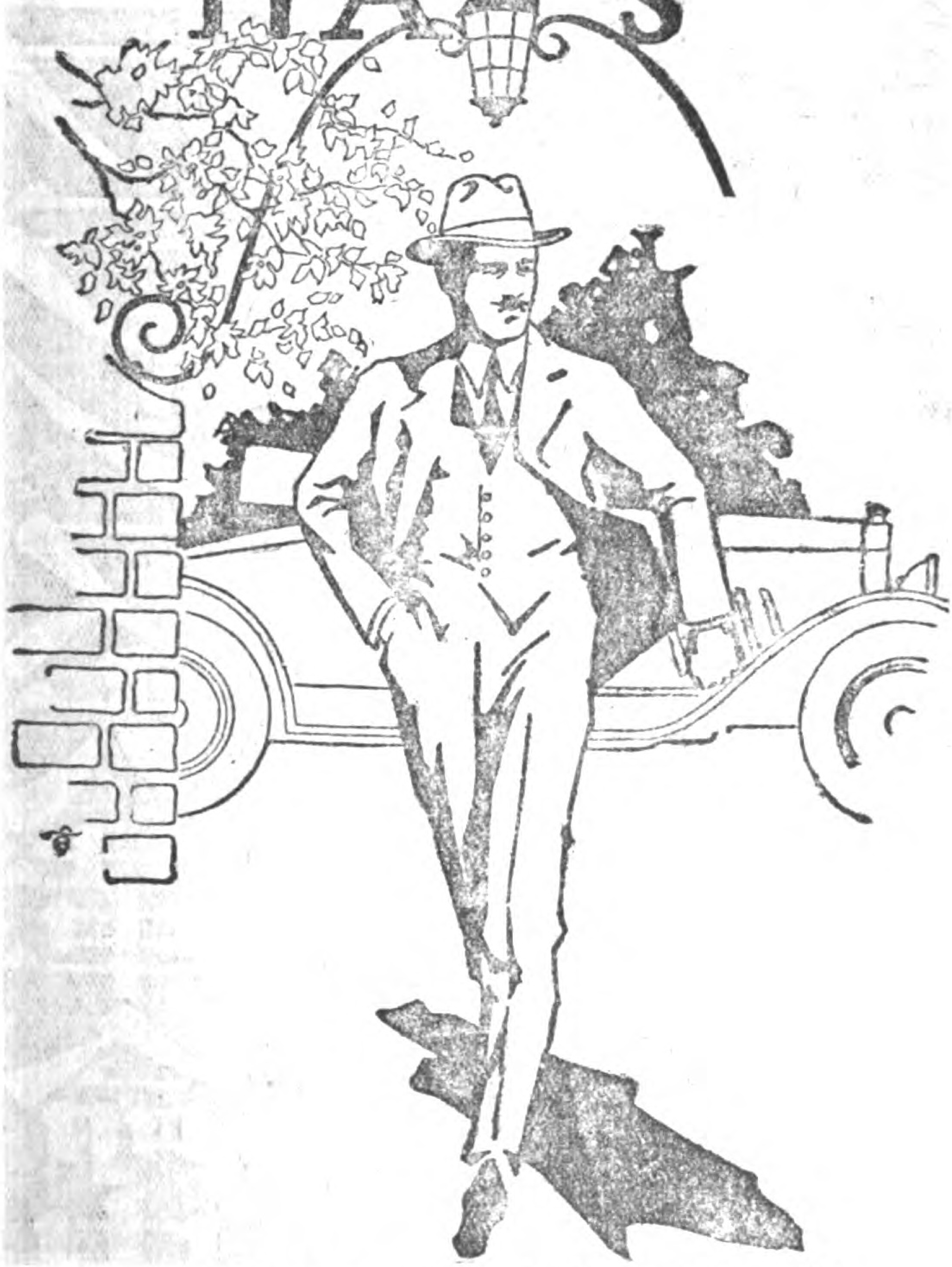
357 12 51

第三十五年第十二號　第三百八十九號



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

STETSON HATS



▲流行の舶來帽子▼

諸君の容姿を粧ふべき帽子は須らく最良品を選ばるべし。

紳士用として、最新型の最良品質の帽子は世界に好評嘖々たる

ステツトソン帽子を措て又他になし

是非御注意の上眞正輸入の

ステツトソン帽子を御需めあれ。

一流の洋品雜貨店に販賣す。

新刊發賣！

▼有島武郎著作集第十二輯（自畫十六葉 原色版二 銅版十四）

旅する心

著者は十數年の前に於て歐羅巴を瞥見した。これはその當時の記錄の斷片である。歐羅巴はその後面目を一新した。然し著者はその眼が見た處のものを無視すべき必要がないと信じてゐる……………（著者）

四六版一二〇頁
定價壹圓拾錢
送料六錢

▼千家元麿、佐藤惣之助外六名合著（岸田劉生氏装）

「詩」同人詩集 麥

「麥」は「詩」の同人詩集だ。自分は此の詩集位皆に愛されてい丶詩集はないと思ふ。自然や人類や藝術を愛する人々の愛と賞讃を立派に受けてい丶本だと思ふ。同人は皆私の敬愛する若い友だ。その未來は光明に滿ちてゐる。自分は現在の友の作品を愛護しつ丶將來の生長に大きな期待を抱いてる者だ自分はこの詩集が人々の精神の糧となり光りとなり、人の心を生々させる事が出來れば幸福に思ふ。…………（千家元麿）

四六版二七五頁
箱入美本
定價壹圓六拾錢
送料八錢

▼福永渙譯（シェンキィヰッチ原作）

全譯 火と劍（前編）

『クオー・ヴァディス』と並び稱せられる彼の代表作『火と劍』は三聯作の第一篇續篇『大洪水』『パン＝ミカエル』と共に十七世紀に於ける戰亂の波瀾を題材としたもので、其優れた描寫の技巧と、その強い愛國的熱情とは、この作物に現はれた著しい特長である。…………（譯文流麗）

四六版七五五頁
箱入美本
定價貳圓九拾錢
送料十六錢

東京市牛込區神樂町二ノ十一　叢文閣　振替口座東京四二八八九番



「光風吹髮覺秋冷」の時
スワン石鹸欠がしなく。
膚研きませ。
朝な夕な。
艶麗の姿になれと。
研きませ。
磨きませ君。
製造元
日本リーバー、ブラザース株式會社
神戸
SWAN
WHITE FLOATING
SOAP
LEVER BROTHERS JAPAN LIMITED



中央公論第卅五年十一月號目次

▼公論

▼說苑




プラトンインキ
智識階級の愛用品として忽ち全國に普及した最新式のインキ萬年筆…其の名はプラトン
萬年筆用
事務用
學生用
プラトン萬年筆
最新型
各種取揃
日本文具製造株式會社製造
中山太陽堂文具部發賣



"VOITURES AUX COURSES" H. G. E. DEGAS.

東京帝國大學

最

米國大統領の改選と其の世界及び日本に及す影響

本月二日を以て行はるゝ米國大統領選擧委員の選擧に依つて、白堊館の主人公としてコックスを迎ふるかハージングを迎ふるかゞ決まる。是れ米國其者に取つて重大事たるのみならず、又實に世界全體に取り、殊に我が日本に取り影響する所決して尠少でない。

米國の大統領の選擧は、實際上前後三回の段階を經て行はるゝことは、人の普く知る所である。第一は改選の前年初夏の候に行はるゝ共和民主兩黨大會に於ける双方候補者の豫選である。第二は同じ年の十一月擧行の定めなる選擧委員の選擧である。第三は前任大統領の任期滿了と共に行はれ、選擧委員の集りて爲す所の大統領の決定的選擧である。第一段階に於ては、各黨共に自家の候補者を一定して全力を一點に集中するの準備をなし、第三段階に於ては、各委員齊しく黨議に從つて必ず自黨の候補者に投ずるが故に、眞に選擧を實質的に確定するものは、第二段の手續である。玆處までは大勢の孰れに歸着するやは判らないが、又是よりは最後の選擧を待たずして大勢は既に明になる。是れ內外の耳目が專ら今次の選擧の結果如何に集中する所以である。

ウヰルソン時代の末年、輿論の歸嚮は民主黨より離れて共和黨に味方するもの段々多きを示して居つた。只民主黨の候補者コックスの方が、經歷に於て人物に於て遙に敵黨のそれよりも優れて居るといふのが、稍々民主黨の强みとする所である。斯くして選擧の結果は殆んど豫測し難いが、若し共和黨が勝つ樣な事でもあつたら、米國政界の樣子は、爲めに著しき變動を見るであらう。

若し夫れ世界の諸國に至つては、改選の結果如何に依て影響を受くること極めて多い。就中國際聯盟の運命は之に繫る所甚だ深いものがある。聯盟の精神を尊重する點と此精神を貫徹するに歐洲大陸諸國の政治家が餘りに利己的なりと觀る點とは、兩黨共に一致して居る樣だが、民主黨は之にも拘らず速に聯盟を成立せしめて、斯の精神の實現に努力せんとするに反し、共和黨は假令聯盟を成立せしめても、聯盟決定の結果として迫り來る米國の負擔は、米國議會の之を可とせる場合に限りて之を受納すべきの留保條件を附加せんと主張してやまない。一方は先づ世界主義に道を讓り、之を助長することによりて國家主義を抑へんとし、他方は世界主義の成立を是認しつゝ、猶ほ國家主義を之に對抗せしめんとする。此兩主義の孰れが勝つかは、世界列國の均しく注目を怠らざる所である。

改選の結果が日米問題の解決の上に如何の關係を及すかも、亦吾人の攻究を怠る可らざる所である。併し日米問題の解決の要諦は、大部分我々の側に爲す可き所ありと反省する點に在るのかも知れない。が、また彼に迫つて然るべき方面も全く無いではない。然らば相手方の如何は、交渉の進捗に大なる關係があると謂はなければならぬ。如何なる關係ありやは又他日を期して論じやう。

中央公論



第卅五年第十二號
十一月號
第三百八拾九號

刻下の世運に對する哲學の使命

田中王堂

一、僞似ロオマンチシズムの生活

これまで、人類は或る特殊の時期に方つて、ロオマンチシズムの生活と呼ばるゝところのものを閲して來た。世上の史家に依つて其れが特徴として擧示されるところに隨へば、それは不思議に彼等が現に置かれた境遇と、現に營む生活とに對して、不滿と壓迫とを感じ、其れに反抗し、觀念的に、其れより解脱する方法として、理想の境地を過去に存在した生活の中に、異國に存在する生活の中に、若しくは、(さういふものの見出だされない場合には)、彼等の想像力が描出

する生活の中に求めるところにあるとされて居る。わたくし共が思想史又は文藝史を繙く時、彼等史家に依つて、ロオマンチシズムの情操の發現たる種々の樣式に關しては、可なりに精密に叙述されて居るのを、わたくし共は見るのである。然し、如何なる種の時代に於て、ロオマンチシズムの情操は發動するに至るか、其れが發動して、どうして其等の樣式を取るに至るか等の重要なる問題に關しては、通例、彼等史家は何等の說明するところもないのである。多分、何等の究明するところもないのであらう。

いかほど押しつめて考へても、人間が幸福を獲得するの道は、彼れが現に有てる力量を以て、彼れが現に置かれた境遇を支配する外にはあり得ない。彼れの生活とは、彼れがさうすることに與へられた名稱であり、そして、彼れの理想とは、彼れがさうする方針に與へられた名稱である。されば、人間として賢く生きる第一條件は、彼れが現に有てる力量と、彼れが現に置かれた境遇との關係を正視し、其れを正用し、大用して、そこから、彼れの生活の方針、即ち、理想を作り出すことであらねばならぬ。理想は內より發揮さるべきものであつて、外に搜索さるべきものではない。そして、人間は、多くの場合、言葉や感情の上では兎に角、實際に於ては、さうして來たのである、さうして居るのである。それであるのに、どうして或る特殊の場合に當つて、人間はこの第一條件を輕視し、若しくは、無視して、彼れの理想を自分の生活の中に見出ださうとしないで、過去の生活の中に、外國の生活の中に、若しくは、想像上の生活の中に見出ださうとするのであるか。

人間の生活に取つて、其れの制度や、道德や、習慣は、鳥の生活に取つて空氣がある如く、魚の生活に取つて水がある如く、其れの存續に必須の環境として彼れの工夫と努力とに依つて作られたところのものである。然しながら、彼れの欲求は次第に變はつて來たに拘はらず、其等の制度や、道德や、習慣が或る事情のために沈滯し、膠著して、其の欲

求を適當に滿たすだけに改まつて來ないがために、反つて其れのはたらきと、發展とを沮害することになると、彼れは一切其等を排斥し、非難しなければならなくなる。然し、生活の方針たる理想は一日もなくてはならない。されば、若し彼れにして其れを現在に見出だすことが出來ないならば、彼れの力の及ぶ限り、どうにかして其れを新たに創造しなければならない。それで、彼れは其れを創造する準備として、汎く、深く、之れが參考品を過去の中に、外國の中に、若しくは、想像の上に覓めるのである。つまり、是等の理想は悉く試驗的のものとして追究されるのである。彼れは、おのれの生活を愛しないために、彼の生活以外に、其等の生活に憬がれるのではなくして、おのれの生活を愛するの極、其れの展開を圖る唯一の方法として、其等の生活の意義と適合性とを吟味して居るのである。

生活の一樣式たるロオマンチシズムは、人間が彼れの生活の持續と發展との頼みとした道徳や、宗教や、習慣が、眞に頼みとするに足らざるを覺つて、之れが代用物を他に見出ださうとする、若しくは、作り出さうとする情操の發動である。この結果として、其等を搜索し、考案するに際し、理智の側面が懷疑となり、感情の側面が煩悶となつて現はれるに何んの不思議もない。そして、この懷疑と煩悶とが深かければ、深いほど、久しければ、久しいほど搜索され、考案される理想は一層豐富となり、一層的確となり、一層立體的となるわけであつて、わたくし共はその實例を文藝復興と佛蘭西革命とに見ることが出來る。是等の運動の含んでゐたあの驚くべき力と、狂信と、自由とはさきの懷疑と煩悶とが一道の通路を得て變形し、凝集した結果に外ならぬのである。

今日この喧噪と騷擾との中にあつて、わたくし共が現に閲しつゝあるものはロオマンチシズムの生活であらうか、果してロオマンチシズムの生活と呼ばれ得るほどに意義あるものであらうか。この一點に關しては、わたくしは大に疑念を挾まざるを得ざるものである、得ざるを悲むものである。

なる程、わたくし共は、わたくし共の生活の環境として、現にわたくし共の生活を取り捲く制度や、道徳や、習慣の多くが、其れのはたらきと發展とを沮害するものたることを知つて、之れが代用物たるべきものを荐りに海外に求め、其等の移植に努めて居る。この一事よりすれば、いかにもわたくし共の生活は、一つのロオマンチシズムの其れであるやうにも想はれる。然し、わたくし共が其れの外殼を衝き破つて、其れの中核を檢する時に、其れは畢竟するに、僞似ロオマンチシズムに過ぎないことを見出だすのである。わたしがわたくし共の生活を僞似ロオマンチシズムのそれと診斷するのには、確かに十分の證據がある。そして、其れは次の二點に歸するのである。

一、眞のロオマンチシズムの生活は、內的の要求より發し、全體の更新の精神となつてはたらくのに、わたくし共の生活は、確かに外的の羨望、若しくは、摸倣として生じ、一部の便益の追究となつて動いて居る。

一、眞のロオマンチシズムの生活には、感激を概念と化する選擇が行はれて居るが、わたくし共の生活には、いつまでも刺激を衝動たるに止め置き、其れを統一して理想と化する工夫が全然缺けて居る。

わたくし共の生活は、是等の二大弱點を生んだ僞似ロオマンチシズムの生活である。生活改造の聲が喧囂を極めて居るのに拘はらず、其れの成績の殆ど見るべきもののないのは自然であると言はねばならぬ。世の(僭越にも)識者、指導者を以て自づから任ずる人々は、外國に於て、特殊の事情の下に、特殊の歷史の行き掛りより結晶した、若しくは、作り出された學說や、政策を手當たり次第に紹介し、宣傳して居る。而も、彼等がさうするに方つて、些しも其等の間の關聯も、矛盾も考察するところはないのである。特に甚だしきは、其等を以て民衆を敎化しようとする親切の心がけより、彼等の境遇と實力とを目安として、其等の意義を改釋し、其等の價値を改價するの思慮を一切闕いて居ることである。然し、彼等が現に彼等のして居ること以上にすることの出來ないのは、多分彼等の力の及ばないためであらう。彼等の

紹介と宣傳とに依つて、わが同胞は或る學說、若しくは、政策に關する機構（technicality）に就いて、多少の知識は得ることとであらう。然し、彼等の生活の改造に就いてどれだけの理會と聰明と自發力とを得るかは頗る疑問に屬する。

わたくしが平生確信し、そして、實に依つて時々刻々に證明されて居るところのものをこゝに忌憚なく披瀝すれば、わが同胞は（學者も、官吏も、民衆も含めて）歷史の運命に依つて、どうあつても近世文明を運用して行かなければならない破目にありながら、未だ十分に其れの組織と意義とに開眼させられないのである。彼等の或る者は、纔かに學術として、若しくは、設備として其れの實利だけは認めることが出來ても、其れを支配する恒久の志向（インテント）に至つては全く體得することが出來ないのである。是れがわたくし共の生活の最大缺陷であり、最大疾患である。

わたくしをして、今日わが國に於て流行しつゝある諸種の社會改造說の或は眞物でなくしてほんの假物でありはせぬかを疑はしめるのは、尠なくとも、淺薄にして、深き根抵のないものでありはせぬかを疑はしめるのは、彼等が大戰前と大戰中とを通じて、この事に關しては全然考慮するところもなく、宣傳するところもなく來て居りながら、（特に、彼等の或る者に至つては、開戰當時に於て一時獨逸の優勢なるを觀て、今後、世界は再び軍國主義に依つて風靡せらるゝものと速斷し、わが國の國民敎育は軍國主義を以て一新されなければならぬなどと途方もなき決議をなしながら）大戰一度戢んで、西洋諸國に於て、各、自國の文明と立場とより、種々の改造論が唱へ出されて來れば、倏ち其れに附和雷同して衝動的に、沒批判的に、無差別的に、其れを受け賣りして居るがためである。わたくしの觀るところでは、わが國の狀態は西洋諸國の其れの如く、大戰前と大戰後とに於てそんなに違つては居らぬ。人間の根本性と、近世文明の歸着點とよりして、わが同胞の幸福と、わが國の繁榮とを目標として、わが國の政治と、商業と、道德と、敎育とを自由化し、民主化しなければならぬといふことは、大戰前と雖も知れ切つた事柄ではなかつたか。それであるのに、平然其れを等

閑に附しながら、或は故意に其れに逆行する措置を取つて來ながら、國際聯盟の成立と共に、西洋に於て、社會改造に關する種々の計畫が唱へ出されたからと云つて、始めてわが國に於て其等と共通なる必要が俄に湧き出したやうに想像するに至つては、わたくしは彼等の聰明と併せて彼等の誠實さへも疑はざるを得ない。あの戰爭も約五年も續いたことである。その間、日本は比較的に閑散な、そして、安全な位置にあつたのである。若しわが國に、眞に近世文明の意義と趨勢とを體認した者が幾人でもあつたならば、世界の文化の進運に貢獻するほどの意見は考へ付かれないまでも、尠くとも、我が同胞の生活の改善と向上とのために、いろいろと研究するところ、施設するところがなければならなかつた筈ではないか。彼等の言動は、今猶ほ昨の如しである。いつでも被動的であつて、自主的ではない。隨つて、西洋に於て出現した風潮とさへ云へば、彼等は玉石を雜拾し、自分の生活の醇化たる鑑識に依つて、其等の間に取捨を施すことを尠しもしない。

之れを要するに、今日わが國の謂ふところの識者に依つて唱へられて居る生活改造說は、單に感激である、衝動である。未だ概念とも、理想ともなつて居ない。

二、我國に於ける最近文明史の一瞥見

經驗ある農夫は善き收穫を得る必要條件として、彼れは先づ土壤の性質を檢し、其れの性質に從つて、種子の種類と、耕作の方法とを擇ぶのを常とする。わが國の指導者を以て自づから任ずる世間の改造論者が、政治や、產業や、道德の改造を鼓吹するに當つて、わが國の文明は如何なる種のものであるか、わが同胞は如何なる種の修養を有つて居るものであるかを理會するところもなく、又、其等を理會しようとする親切をも缺いて居るのは一體どういふものであら

うか。

外見上よりすれば、わたくし共の文明は固有の文明の上に接木された西洋の文明である。然しながら、この西洋の文明は特殊の機會に於て、特殊の動機を以て、固有の文明に接木されたのであつた。わたくし共の文明の總べては、この特殊の事情より發生したのである。されば、眞にわたくし共の文明の特徴を理會しようとするならば、先づこの特殊の事情が如何なるものであつたかを理會せねばならぬ。

わが同胞に依つて、西洋の文明の輸入され始めたのは、わたくし共の祖先に依つて三韓の文明、若しくは、支那の文明が輸入されたのとは、其れの機會に於ても、又は、其れの動機に於ても、非常に異なつて居つた。三韓の文明、若しくは、支那の文明の輸入されたのは、固有の文化を修飾するために欣求されたのであつたが、西洋の文明の輸入されたのは、自國の存續を保障する方策として、嫌惡の情を抑へて、いやいやながら取り入れたのであつた。明治維新の前後に當たつて、鎖國論者と開港論者と、若しくは、保守主義者と進歩主義者との二派あつて、互に對峙し、啀み合つたことは、何人も知つて居る事實である。そして、後者の意見は前者のそれに優れて居たことは、時勢の展開するにつれて證明されるのであるが、彼等は其の手段に於てこそ異なつたが、其の目的に於ては全然一致して居たのである。つまり、兩者の目的は、等しく自國の獨立と尊嚴とを保障するといふ一事に極限されて居たのである。富國强兵の二大モトオ（兩者に取つて、等しく、富國は强兵の手段に過ぎなかつたのであるから）更に極言すれば、强兵の一大モトオは彼等に共通のものであつたのである。たゞ、鎖國論者、即ち保守主義者は、この目的を實現しようとして不可能の方法を空想し、開國論者、即ち進歩主義者は、實際に可能なるべき方法を考慮してゐたのであつた。事實、開國論者、進歩主義者の目的としたところのものは、自國の獨立と、尊嚴とを保障するの一事であつたことは、彼等の中で最も聰明な、

最も大膽な代表者と目せられて居る横井小楠、福澤諭吉等の言論に徵しても明からである。

勿論、一度兵を强うするの方法として、範を西洋に取つた人々は、其れを養成する手段として、國を富ますの方法も範を西洋に取らなければならないやうになる。又、國を富ますには産業を興すことを其れの手段としなければならず、産業を興すのには、其れの手段として學藝を研鑽しなければならず、學藝を研鑽するのには、其れの手段として智德の開發を圖らなければならぬことを覺つたから、彼等は取次に總べて是等の物の範をも西洋に取ることになつた。然し、畢竟、何故に彼等がそんなことをするのに志して行つたかと云へば、其れは彼等の最初の、そして、最終の目的たる自國の獨立と尊嚴とを保障するためであつた。即ち、全然、對外政策としてであつたのである。

維新當時の志士は（社會生活の他の機關に關しては兎に角）一國の獨立を保障し、其れの繁榮を助成する機關に關しては、西洋に存在したものの日本に存在したものに遙に優れて居ることを認識した、苦き實物教育に依つて認識せしめられた。隨つて、自國の獨立と繁榮とを圖ることが何よりの急務と考へた彼等は、其れに必要なる方便として、兵制より交通、産業、政治、教育に至るまで自國に於て承傳されたものを排斥して、西洋に於て發達したものを採用することにした。中には、道德や信仰は無論のこと、言語の如きも西洋の其等を採用するに非されば、自國の獨立と繁榮とは、到底期せられるものではないと極論する者もあつた。かういふ考慮からして、西洋の文明は彼等に依つて一纏めに移植されることになつた。然し、一概に西洋の社會生活の機關と云つても、其等の一々に就いて細かに點檢すれば、發生的にその志向を異にし、關係的にも其の理想の扞格するものが澤山ある。然し、彼等は其等を吟味することなく、又、自國の能力と、境遇と、國民性とに依つて、如何に撰擇し、醇化すべきであるかを反省することもなく、無雜作に取り入れたのである。斯くの如き特殊の機會に於て、斯くの如き特殊の動機を以て、西洋の文明はわが國に輸入されたのであ

る。そして、この結果として明治の初年より今日に至るまで五十年の久しきに亙つて、其れの拔くべからざる特徴をわたくし共の文明に印したのである。

輕卒に、一面より考へれば、わたくし共の父老が外來の强國の壓迫に出遇ひ、死活の十字街頭に立ち、そして、九死の中に一生を得る方便として、自國の固有の文明の中に有力なる機關を一つも見出すことが出來ず、又、新たに其等の機關を作り出す暇も、力も有たなかつた時に、敵の手中に於て其等のものが彼等に依つて立ちどころに利用さるべく作り出されてあつたのは、彼等に取つて非常な仕合せであつたに相違ない。然しながら、一層深酷に、他の一面より考へれば、彼等が何等の大した苦心も須ゐず、何等の大した困難も感ぜずして、餘りに容易に其等を利用することの出來たのは、それから以後のわたくし共の文明が十分に證明した通り、彼等に取つて非常に不幸な事情であつたと云はねばならぬ。さうであつたが爲に、是等の機關はわたくし共の個性に依つて消化されることなく、わたくし共の個性は是等の機關に依つて薫染されることもなく、兩者の關係は今日に至るまで、外的のものに止まつて來たのである。言ひ換へれば、西洋の文明に對するわたくし共の態度は、斷片的の功利の感じに依つて使用する衝動であつて、統一的の意義の鑑賞に依つて運用する概念とはならずして止まつて居るのである。

かういふ譯で、わが國に於ては今日に於ても、猶ほ、外來の文明と、固有の文明との間に物理的の混合はあるが、未だ化學的の融和は成り立つて居ない。父老政治に依つて代議政治が取扱はれ、敎權主義に依つて實驗敎育が支配され、主從關係に依つて産業制度が壓迫されて居る如き矛盾と、不統一とが社會全般に横溢して居るのは、皆、この自然の收穫である。

こゝ五十年間に亙つて、西洋の文明に對するわたくし共の態度は、大略三つの變化を閲して來て居る。明治の初年よ

り、同十四五年に至るまでの間は、盲目なる模倣の態度であつた。其れの特徴は、わたくし共の其れを採用するに當つて、わたくし共の個性の要求を無視し、一向に、在りのまゝに、其れの移植を圖つたところにある。明治十四五年より、同三十年頃までの間は、無理會なる反動の態度であつた。其れの特徴は啓發されることなく、たゞ壓迫されて居た固有の傳説と、教化とが假裝たり、若しくは、借物たる新來の文明に對して反感を抱き、反抗を企てたところにある。其の後に起つて、大正の今日まで續いて居るのは、不徹底なる二元の態度である。其れの特徴は新來の文明も、固有の文明も、刻下のわたくし共の生活に取つてどちらも必要なものであると認められて居るがために、どちらの一方をしても、他の一方を無視させたり、壓迫させたりするといふことはないが、兩者は猶ほ、全然調和することの出來ない二つの原理として、對立せしめられて居ることである。斯くして、新來の文明と固有の文明との調攝に關するわたくし共の態度には、これまで幾多の屈折はあつたが、尠しもの進化はなかつたのである。わたくしは、かゝる事實を以てわたくし共の文明の最大缺陷、若しくは最大疾患と見做するものであるが、根本的にこの缺陷、若しくは疾患が、わたくし共の文明より、全然、取り除かれない限りは、少數の謂ふところの識者に依つて、如何に頻繁に、新らしい學説が紹介され、新らしい政策が宣傳されても、其等の感化に依つて、わが同胞は、自分の性情と、境遇とを出來るだけよく整齊しようとする眞實の要求を標準として、自由な、そして、自發の理想と、活動とを創造することは、未來永劫、むづかしからうと、わたくしは考へる、斷ずる。

それならば、この當の缺陷、若しくは、疾患を取り除く方法として何かあるか。わたくしは確かにあると信ずる。そして其れは二重のものである。然し、今日世上の改造論者も、其れの反對者も、等しく氣付かぬところのものである。

(一)、我國に於て、新來の文明が固有の文明と融和されず、わが同胞が、依然として衝動を以て新來の文明を使用しな

がら、衝動を概念化して、其れを運用するに至り得ないのは、西洋の文明が發生した事情や、其れが經過して來た歴史と、固有の文明が發生した事情や、其れが經過して來た歴史との間に餘りに大なる相違があるからである。西洋に在つては、如何なる學說が出現し、如何なる政策が計畫されても、其等は、それの社會生活の沈澱であり、結晶であるがために、民衆は一度其等の條理さへ理會出來れば、忽ち自分の生活の表現として、其等に對して親しみの感じと、温かみの感じとを有ち得る。然し、其等がわが國に移植され、宣傳されると、其等はわが社會生活と直接の血緣を有たぬ既完の機構として紹介さるゝがために、わが民衆は一通り其れの條理を攻究しただけでは、其れに含まれた眞の志向を鑑賞することは容易でない。其れに對して、結局他處のものであるといふ感じを有つことを免かれない。政體にしても、產業にしても、教育にしても、苟くも其の初め、西洋に於て出現したものは、其れがわが同胞の手に移ると、倏ち生命と自發性とを失なつて、硬直となり死物となる所以である。かういふ譯で、其等は何等までたつても、眞の意味で彼等自身のものとはなり得ない。どうしたならば彼等をして、其等に對して恰も彼等の生活の所產であつたかの如き親しみの感じと、温かみの感じとを起させることが出來ようか。其れは、其等の出現した、或は唱道された當時の社會生活と其等との關係を作用的に說明し、其等の機構を理會させる前に、其等の精神を態と納得させることである。そして、彼等をして其等の發生し、生長した社會生活を觀念的に、即ち、代償的に、生活せしめることとである。

(二)、わが同胞は創造に拙にして、模倣、若しくは、適用に巧であり、敏であると謂はれて居る。これまでの彼等の成績に徵して、或はさうであるかも知れぬ。然し、彼等は衝動を以て外來の文明を使用するに止まり、概念を以て其れを運用するに至らないと云つても、なほ彼等の品性と嗜好とは、絕えずさうして居る中にはたらいて居らねばならぬ。この結果は、意識的に、若しくは、無意識的に、外來の文明の變更となるのである。古來、日本には哲學に於て、藝術に於

て、大した天才は生じなかつた。是等の活動に於ける新しい運動は、大抵、海外に於て起つた新しい運動の感化であつた。然しながら、日本人は朝鮮人でなく、支那人でなく、はた印度人でないといふ單純なる事由よりして、彼等は模倣を事としながら、知らず識らずの間に、彼等に特有の國民性よりして新しい變形を彼等の典型の上に施して行つた。そして、長い間の歲月を經過するに從つて、無數の變形の堆積は殆ど創造に等しいものとなつた。この事實は、何人と雖も尠しくわが國の建築、彫刻、繪畫、學術、宗教等の特徴を點檢したものは、容易に認取し得ることである。西洋の文明がわが國に移植されて以來、日は猶ほ淺い。そして、其れがさきにわたくしが尠しく說明したやうに、特殊の事情の下に移植され、特殊の歷史の下に役立たされて來たのであるから、わたくし共は其れを使用する上に於てわたくし共の國民性をはたらかす餘地は大してなかつた。されば、其れに及ぼした變形も取り立てて云ふほどのもののないのは當然である。然し、其の成績の價値の高下は兎に角、特にわが同胞の日常生活の利害と剴切の關係を有し、隨つて、彼等の品性と嗜好との眞劍にはたらいたところには、其れの變形の痕跡は十分に顯はれて居る。彼等が、彼等の祖先と、彼等自身とが二千有餘年に亙つて、外來の文明を採用し、適用してゐる間に、堆積して來た變形を將ゐて、其等の典型と比較し、其れの傾向を標準として、其等の典型の意義と價値とを商量したならば、こゝに、外來の文明は彼等に依つて改釋され、改價されることになると思ふ。彼等が一度さうして來ると、彼等は外來の文明の奴隷でなくして、其れの主人となることが出來るのである。

然し、外來の文明に對するわが同胞の理會を啓發し、自覺を速進するに必須なるこの二重のヒントを彼等の心の中に涵養し得るものは、果して何物であらうか。

三、哲學は何を爲し得るか

哲學と雖も、畢竟するに、人間の生活の一つの機關として、(たとへば、政治や、道德や、宗教や、科學が其れより派出したやうに)其れより派出したものに過ぎない。哲學は確かに一つの役目を有つ、然し、其れが一つの役目を有つといふところから、其れの效用は必然に有限であらねばならぬ。のみならず、其れが人間の生活の分派であるといふところから、人間にして過失を犯し、ある時代に於ける或る種の問題の理會と解決とには、是非とも哲學を俟たなければならぬことを、尠くとも、其れの援助を俟たなければならぬことをわたくしは知つて居る。そして、刻下のわが國に於ける腐敗に墮せざることの保障されない間は、哲學も亦時としては過失を犯すこともあるし、腐敗に墮することもあるのは明白な事實である。然しながら、其れの本質と、其れが過去に於て成就し得た成績とからして、問題の或るものは、事實さういふ種のものであることをも知つて居る。

哲學は驚異より生ずるとか、其れを母とするとかいふことは、哲學の起原の說明として隨分古いものである。然し、この觀察の眞實性に就いては、今日に於て尠しも渝るところはない。たゞ、人間は如何なる場合に於て驚異を生ずるか、そして、哲學が如何に驚異を取扱へば其れが解決されたと云はれ得るかに至つては、未だ世人に依つて十分に理會されて居ないやうである。

或る意味に於ては、人間を取り捲く總べてのもの、人間が內的に、外的に、經驗する總べてのものは、驚異を惹き起す源泉であると云へる。何故にこんな組織を持つた宇宙が在るか、何故にこんな性情を持つた人間がそこに生れ出たか、といふことより、どうして一本の草が生え、そして成長するか、一本のマッチを擦り付ければ、どうして其れが火を發

し、そして、其の火が熱くなるかといふやうなことに至るまで、悉く人間の驚異の種となり得るものである。科學の知識が如何に進歩しても、其れは、たゞ、與へられた現象を取つて、其れを前行者（antecident）と後隨者と（consequence）に分析し、その間の關聯を見出し、又、それぞれ、この前行者と後隨者とを分析して、その各に含まれた前行者と後隨者とを見出して行くと云ふやうに、さうすることの興味と必要とが續く限り、無窮にこの方法を續けて行くのに過ぎない。如何に深く、遠くこの分析の方法を續けて行つても、結局、何故に其れがさうはたらく性質を有つて居るかに至つては、到底科學の説明し得るものではない、科學としては、ただ、其れはさうはたらくものであると受け取る外はないのである。されば、さうはたらくことを一つの神秘と觀るならば、さういふ神秘はわたくし共の經驗に入り來たる總べてのものの本質であるから、わたくし共は、絶間なく驚異の念に打たれて居らなければならぬわけである。然し、實際の事實として、わたくし共が平常生活して行く上に取つて、經驗に入り來たる總べてのものに對して驚異は起して居らぬ。わたくし共の驚異は、全然、他の興味に依つて、全然、他の方角に於て起るのである。そして、プレ・トオが哲學の母と云つたのはこの種の興味に依つて、この種の方角に於て起るものを指したのである。

わたくし共が、わたくし共の生活の道具として有つて生れた衝動は、其等がはたらいて外界よりある反動を受け、わたくし共が、その性質を知覺して來ると、其れの意義の感化によつて、先に斷片的であつた衝動に潜在した有機的の要素は發揮され、この有機的要素に依つて衝動は生活の方針に組織されて來るのである。欲望、又は理想と呼ばれて居るものは、即ち、是れである。かくして、衝動がはたらくことの久しければ久しいほど、場合が多ければ多いほど、外來の刺激を支配することが精確になり、外界に適應することが豐富になるのである。そして、衝動を變更し、組織して適當に外來の刺激を支配するに役立つやうな生活の方針とするのには、幾度となく失敗と其れの訂正とを反覆するの苦術

が必要であるし、又、わたくしの共の性情も、わたくし共の境遇も、漸遷はするが、急變するものではないから、一度、有益なる生活の方針が建設されると、其れは未來の使用のために大切に保存される。言ひ換へれば、其れは習慣となつて殘る。習慣の特徴は、其れが新しい改造に反抗することである。然し、わたくし共の性情と境遇とは、急變しないで漸遷すると云つても、是等の各は絶えざる出來事の感化に依つて、絶えず或る變更を閲しつゝあるのであるから、或る期間を經過すると、過去に於て工夫された生活の方針では完全に支配し盡せない側面、又は、要素がわたくし共の生活の中に出現して來る。實際に於て、この側面、若しくは、要素だけがわたくし共の驚異を惹起す材料となるのである。古來、あらゆる宗教や、哲學が之れが解決に努めたのは、この種の驚異だけに限られて居たのであつて、プレトオが、哲學の母であると觀たのも、正しくこの種の驚異であつたのである。

わたくし共が過去に建設した生活の方針で、わたくし共の生活に入り來たる總べてのものが遺憾なく支配して行ける限り、わたくし共は何物に對しても驚異などを起さない、そんなものを起す餘裕を有たない。さうして行くことの出來る限り、總べてのものは、たゞ當り前のこととして平氣で受け取られて居る。わたくし共の生活は、太陽を必要とし、そして、其れが何んの故障もなく、朝は東に出で、夕は西に沒して居る間は、わたくし共は其れに對して別に驚異を感じない。其れが日蝕にかゝつて、其れに對して、わたくし共の知識又は豫想が裏切られた時に、始めて、この不思議な現象が驚異となつて現はれるのである。

人間は、元來、實行的の動物である。彼れは理論的たるに先立つて實行的である。されば、彼れのまだ幼稚であつた時代に於ては、彼れはその日暮しを常として居たのである。それで、彼れの生活を支持して行くのには、日夜に襲ひ來たる刺激を或る風に支配し、利用して行かねばならぬが、彼れは其れをするのにたゞ目前の急を救ふだけのことにして

居た。彼れの生活に取つて、どういふ風にか支配し、利用しなければならない一つの刺激が生じた場合に、彼れは、たゞ、その一つを支配し、利用するだけのために、一つの方法を工夫して行つて居た。然しながら、彼れが異なる機會に於て、異なる興味を以て、いろいろ異なる刺激に就いて、いろいろ異なる方法を工夫して行くと、其等の異なる方法の間には、表面、其等を整齊する原理が存在せず、互に矛盾するものとなつて居るから、尠しでも新しい刺激は忽ち驚異を惹起すこととなるのである。こゝに於て、驚異を解決する手段として、新しい刺激を支配し、利用することを標準として、それまで工風されたいろいろの矛盾する生活の方針を整頓する必要を感じて來る。この事は哲學以外の生活の機關に依つてでも、ある程度までは出來るのであるが、其れを最も徹底的に、批判的に爲し得るものは、そして、又、實際に爲して來たものは哲學である。

それでは哲學は如何なる方法に依つて、(時々、さういふことをする必要の起つた場合に)互に矛盾する生活の方針を整頓して、一層廣汎なもの、深遠なものとして來たか。それは他でもない、たゞ、其等の異なる生活の方針の底に潜在し、其等の總べてに共通する志向を發揮することに依つて、其れを成就したのである。

人間の生活は、一面から見れば、絶えず變化して居る。然し、他の一面から見れば常に安定して居る。人間の生活は有機的に、若しくは、連續的に變化して居るとか、動的に安定を保つて居るとか云つたならば、最も適切に、其れの眞相を言ひ表はすことになるであらう。されば ヘラクライタスが『萬物は流轉す』と言つたのは、一面の眞理を喝破したものである。然し、彼れは、單に直接的の側面に立つて、それの一面を喝破したのに過ぎない。パアメニデスが『萬物は一なり』と云つたのも一面の眞理を喝破したものである。然し、彼れは、單に統一的の側面に立つて、其れの一面を喝破し居たのに過ぎない。如何に生活は絶えず流轉すと云つても、確かに、ある期間に亙つて變化しない側面があり、如

何に其れは常に固定すと云つても、一瞬間と雖も硬著しない側面のある限りは、是等の學說の孰づれが觀るやうに生活を觀ても、其れを適當に措置する上に取つて何等の知見をも齎さない。其れ故に、眞の哲學は、人間が如何にして衝動より概念を作り出すかの經過を考察して、時々の要求に應じて衝動の本來の價値を保存するの目的を以て、舊き概念を解體して、新しき概念を創設すると同時に、其の新しき概念を創設するに方つて、其れが、後、未來の生活に取つて障害となる場合が來たならば、おのれの解體に反對せず、出來るだけ素直に、新しき概念の中に入つて、其れの材料に役立つやうに、其れを創設することであらねばならぬ。

哲學は常識と同じものであるか、異なるものであるか。かゝる問に對しては、同じものであり、同時に異なるものであると答へる外はない。されば、兩者を其れの本質よりして同じと觀るものは、其れの發現に於て異なるところあるを知らなければならない。又、之れに反して、其れの樣式よりして異るところのあることを認むるものは、其れの志向に於て同じであることを覺らねばならぬ。つまり哲學は延長された常識であり、おのれのはたらきに對して反省の力を得た常識である。然しながら、人間の生活が、或る段階にまで發展し、到底、單なる常識では其れの複雜と豐富とを働けないで其れを統一することが至難になつて來ると、其れは、自然に哲學と化するのである。

元來、人間の生活の目的は單一であつて、其れは、其れの幸福を實現することに限られる。然しながら、人間の生活は雜多の欲望より成り立つから、其れの幸福を實現する手段も亦多樣であらねばならぬ。人間はどうしても共存的に及び、繼續的に、多樣の手段を以て是等の雜多の欲望を滿たしながら、其等を統一して行かねばならぬ。さうすると、正當に人間の生活を支持するの道は、總べての活動、若しくは、經驗を作用的に識別しながら、本質的に分離しないことにあることは明らかである。こゝに、兎角實行上の必要から、其等を本質的に分離して了ふ常識に一任して置くと、あ

らゆる誤謬と、過失と、混亂とを生ずる機會がある。それで、理論上の興味より其等を作用的には識別するが、本質的には分離しないことを其れの存在の理由とする哲學が要求されることになるのである。

實に、哲學が永久に其れの唯一の見地とするところのものは、あらゆる經驗と活動とを作用的に識別しながら、本質的に分離しないところにあらねばならぬ。是れまで世上に出現した總べての哲學が、其れに特有なるこの大切なる役目を明晰に意識し、十分に其れを滿たしたとは勿論云はれない。が、其等の志向したところのものは確かにさうすることにあつたのである。そして、哲學は獨りこの見地を執ることに依つて、時々の要求に應じて、衝動の本來の價値を保存するの目的を以て衝動をして概念と化せしめたのである。

若し世間に或る人があつて、哲學の職分を劃義して、其れは眞理を發見するに在るとするならば、わたくしは彼れのこの所爲に對して敢て反對しようとはしない。然し、わたくしは（恰も通用貨幣は日常生活の物品と交換されることに依つて、始めて其れの價値を得ると同樣に）、哲學の發見する眞理は獨り日常生活の方針に換算され得ることに依つて始めて其れの意義を得るものであることを主張するものである。時代の異なるに隨つて、衝動の性質が異なり、其等を概念と化する方法が異なる通り、眞理の態容も自づから異ならざるを得ない。事實、ロックの發見しようとした眞理はプレトオの發見しようとした眞理とは異なり、ジエムスの發見しようとした眞理はカントの發見しようとした眞理とは異なつて居た。して見ると、哲學に依つて、今日、わたくし共が發見しなければならぬ眞理は何んであるか、何んであるべきか。わたくしは其れはわたくし共の能力と境遇とを材料とし、標準として、西洋の文明を國民化するの一事に限られると斷言するに躊躇せざるものである。何故ならば、さうすることに依つて、始めて、わたくし共の衝動は（其れが、政治に關するものでも、產業に關するものでも、道德に關するものでも、學問に關するものでも、將た、藝術に關するも

のでも)、わたくし共の生活に取つて、自由にして、同時に、的確なる概念に化せられることが出來るからである。

四、吾人の解放に關する哲學の貢獻

今より十年前にもなるであらうか、當時、東京帝國大學の一外國教師は、わが同胞が感謝して三思しなければならない忠言を殊勝にもわたくし共のために公表したのであつた。わが大學に入つて、經濟學を學ぶ學生は(この教師は經濟學者であつたから、例を其れに採つたのであるが)未だ人間の根本欲求と根本事實とに對照して經濟學の起原と精神とを適切に理會して居らぬ。隨つて、其れの觀察點や、研究法や結果の意義に到つては彼等に依つて全然色讀されて居らない。そして、彼等は、たゞ、無意義に歷史上の事實と統計上の數字との記誦に沒頭して居るのである。畢竟するに、經濟學に對する彼等の知識は全然砂上の家である。是れが、大體この教師の意見であつたと記憶する。わたくしはこの意見を讀んで、わたくしが、平生、わが國の文明の一大缺陷、一大疾患と診斷して居たところのものが、こゝに、其れの縮圖としてこの教師に依つて發見されたかの感を抱いたのであつた。わが學生が、わが同胞一般が、外來の文明の意義に關し、其れの機關のはたらきに關して、いつまでもかゝる無理會の、否、沒分曉の態度を取ることを續けて居る理由を一口に云つて見れば、彼等は、彼等の生活を一つの閉鎖した系體とし、外來の文明と其れの機關とを他の一つの閉鎖した系體として居る自然の結果である。彼等をして、彼等の實際の要求を中心として、端的に、到徹に、彼等の實際の境遇に瞬眼せしめ、畢竟、是等の兩者は等しく其れを組織する二つの要素であり、二つの要素として、始めて、互に交渉と、確執とを有ち得るに至つたことを會得せしむるに役立つものが幾つでもあるであらうか。若し其れがあるとしたならば、わたくしがさきに開陳した見解に從つて、尠なくとも哲學は其れの優なるものの一つであらねばならぬ。

世の中には、わたくしが斯くまでに哲學の役目を推稱するのを聞いて、次のやうに云ふものがあるかも知れない。『そんなに哲學、哲學と云つたつて、現に、澤山の哲學があるではないか。そして、其等の多くは（尠なくとも、其等の體系だけを見得て、其等の發生の由來と窮極の志向とを覺り得ざる俗人に取つては）、其れの假定に於ても、歸結に於ても、また、其れの氣分や功利の程度に於ても、大分に齟齬するところがあるではないか。さうしたならば、其等のいづれを選ぶかに依つて、其れを選ぶ人の生活と、性格とに及ぼす感化には大分の相違が生ずるであらう。然し、いづれが正しく、いづれが誤まれるか、又、いづれが優れ、いづれが劣れるかに就いては、それぞれ、信奉者があることであつて、容易に決定し難き事柄である。論者は、如何にこの問題を處理しようとするか』、と。この（想像上の）質問者の質問には、相應な根柢がある。そして、若しわたくしにして、さうするだけの時間さへあらば（無論、わたくしの見解と確信とを基礎として）、學術的に、今日、わが國に記誦されて居る諸種の哲學に就いて、其の正誤、優劣を論議し、商較し、批判して、世人をして彼等の適從するところを覺らしめることも出來ると思ふのである。然し、そんな手數を費さずとも、手短かに、直截に、彼等をして刻下の日本は、其れの生活改造の一つの方便、若かも、極めて重要なる一つの方便として、何故に哲學を要求せねばならぬかの濶大なる見地より、如何なる風に哲學を利用すべきか、隨つて、如何なる種の哲學が最も善く、この目的を達し得るかの問題を決定することである。

總べての時代は異なる。然し、其等の時代に於て卓越したものはいつでも平等であるとウヰリヤム・ブレエクは云つた。然し、抽象的の條理よりすれば、平等に卓越性を有つて居ると見られる諸種の哲學も、實際的の利用と、鑑賞とよりすれば、其等の有てる哲學の多くは、決して、平等に卓越性を有つては居ない。そして、何物に限らず、其れの眞の卓越性は、獨り或る個人の、若しくは、國民の生活の要求より生ずる實際的の利用と鑑賞とより決定さるべきもので

ある。如何なる種の哲學と雖も、生活の一つの道具として、或る時代に於て、或る群衆を代表する或る個人に依つて工夫されたものであるといふ事實からしても、わたくし共の生活が、ある範圍に於て、ある觀點から、其等と共通の或るものを有つ限り、其等の總ては、わたくしの生活に取つて或る指標價値を有つて居ることは云ふまでもない。それであるから、わたくし共は、時としては、斷片的の觀照より其等が悉く似寄つた得失を有つて居るものと想像しないこともない。然しながら、わたくし共が、一度、統一された興味の上に立ち、眞劍に、現在に生き、現在に處するの目的を以て其等を評價して來ると、其等の價値は自然に判たれて來る。

わたくしは、嘗て『わたくし共に取つてぜひとも適當に解決しなければならぬ問題が三つある。産業問題、婦人問題、國際聯盟問題が、即ち、それである。哲學は是等の三大問題を解決せねばならぬ。哲學と稱しながら、是等の問題を解決するの聰明と、力とを有たないものは眞の哲學ではない』、といふやうな意味のことを、杉森孝次郎氏の語るのを聽いたことがある。哲學といつても、其れには多くの部門もあることであるから、こゝに解決するといふ言葉を、直接に、といふ意味に解釋するならば、わたくしは杉森氏の見解は餘りに狹量に失すると思ふ。然しながら、氏の考へる如く（そして、わたくしも無論さう考へるものであるが）、是等の問題の解決が、他の問題の解決と並んでわたくし共日本人の生き、さうして、榮えて行くのに重大なる關係のあるものならば、わたくし共の要求を材料とし、標準として、是等に對して適切な、そうして、的確な想像力と知見と靈覺とをわたくし共に供給しないものの哲學と稱するに足らざることは明らかである。但し、わたくしとしては、是等の問題の由つて生ずる源泉であつて、同時に、まだ是等の問題の樣式にまで沈澱しないさきの近世文明、若しくは、現代生活の志向と、價値と、方向とに關する問題の解決こそわたくし共の生きて行く上に、――美しく、強く、完全に生きて行く上に取つて、わたくし共に課せられてあるあらゆる問題中の問題であ

ると信ずるものである。

畢竟するに、哲學は智慧の愛であり、賢く生きるの學である。世間の哲學を修める人々が、世界の大勢に取り圍まれた日本人として、彼等に與へられた刺激と、彼等の有てる能力とを出來るだけ善く整齊することに依つて、彼等の生活の方針を創造するためにとならば、彼等がどんなに廣く、どんな種の哲學を參照するにしても、(たとひ、さうすることに大した利益はないまでも) 其れに對して特に非難しようとわたくしは思はぬ。然し、豫め哲學が自分の生活の資料を組織し、利用するに與つて如何なる效果のあるものであるかを理會せず、又、理會しようと努力もせず、單に浮浪の見聞を博めんがために、懦弱な好奇心に任せて、徒に哲學に關する事實を渉獵することを以て、人生の一大事業であるかの如く空想する人々の態度をわたくしは陋なりとするものである。こんな人は、形式的に哲學を記誦することの多ければ多いほど、學としての哲學にさへも遠ざかるのである。こんな人は、宜しく、『昔は哲學者と云へば、自分の力で物を考へる人々の謂であつたが、今は、哲學者とは、たゞ多く他人の書物を讀んで、自分では何事をも考へない人々のことになつた』と云つたクリッフオドの嘲を甘受すべきである。こんな人は『哲學に關して雜多な物識りになるのには、希臘語や、拉甸語や、獨逸語や、佛蘭西語の助けによつて、古今の大哲學者の言行を知る必要もあらうが、眞に獨立した思想家となるのには、自國のホッブス、バアクレエ、ヒユウム等二三大家の著書を精讀すれば其れで十分である』と彼れの名著『ヒユウム』の序文に於て語つて居るハックスレエの忠言を服膺するが宜い。

『わたくし共は、どんなに見すぼらしくても現實を尊重せねばならぬ。何故なれば、どんなに立派な理想と雖も、現實を外にして實現されるところはないから』と、カアライルは云つた。其れは無論さうである。然し、現實を化して理想とするのには、彼れの唱道した『勞作の福音』だけでは十分ではない。こゝに、人間の修養の最も重要なる一部として、

哲學の職分があるのである。それでは、刻下の日本に於けるわたくし共の生活に對して、哲學は如何なる役目を盡し得るか。

哲學は人間の生活其のものの延長であり、成熟である。それの材料も、其れを取扱ふ方法も、もと等しく人間の生活の中に見出されるものである。若し哲學が、時として、素朴な常識の重要として居るものを不重要と見做し、不重要として居るものを重要と見做すことがあるならば、其れは、たゞ、常識に優れて一層人間の生活の價値を尊重し、一層其れの志向の成立に留意するからの結果である。されば、人間の生活が特殊の境遇に置かれた結果、其れの理想を實現するために殊特の方法が必要とされるならば、哲學も、亦、其れに從つて特殊の組織を擇ぶべきは當然である。ソクラテスの興味は、當時のソフィスト等が社會に共認の善惡の標準が果して存在するものであるか、どうかに關して懷疑したのに反對して、現にそんなものの存在することを證明するところにあつたから、彼れの哲學は知覺の中より概念のはたらいて居ることを證明することに集中された。ロックの興味は、當時の特權階級が何んでも彼等の利益となつた世襲の制度や信仰を辯護するために、其等を人間に性來の觀念であると主張したから、其等の幾つが眞に性來の觀念であるかを吟味しやうと志した。それで、彼れの哲學の基調は、性來の觀念の極限の研究であつた。その他、知識の先天性を確立しようとしたカントも、學問を生活化し、人情化しようとしたヂエムスも悉く當時の民衆の興味と要求とを代表して、その哲學に依つて彼等を解放しようとしたのであつた。して見ると、わたくし共日本人の現に置かれた境遇に於て、わたくし共が眞に要求し、そして、わたくし共の生活の機關となり得る哲學は如何なる性質のものであらねばならぬか。今日、世間に紛々擾々たるベルグソンや、ラッセルや、新カント派や、プラグマチズムの紹介や解說も、單なる紹介や解說としてならば、暫らく放つて置いてよい。創造するにしても、適用するにしても、刻下に於けるわたく

し共の生活は、如何なる種の哲學を要求するかといふことを考察することが、わたくし共に取つて一大緊要事である。

古今、東西に亙つて、賢者の企てた社會改造の事業の特色は、ほゞ一致して居る。其れは、簡明、直截であつたことである。彼等は、現存の不正を適確に觀察し、一旦、合理的の、若しくは、經濟的の方法で其れを取り除きさへすれば、從來、民衆の生活に含まれた善いもの、美しきものは自然に保存され、そして、未來に於ける發展はおのづから保障されるものと考へたのである。彼等は、若し彼等にしてさうして了つたならば、其れで、過去の文明に含まれた尊きものが保存されるであらうかどうか、外國の文明に見出される總べての優れたものが取り入れられるであらうかといふやうなことを顧慮しなかつた。彼等は小なる犧牲を拂つて、大なる利益を得ることが賢き生活の第一條件であることを知つて居た。總べての大なる政治家や、立法家や、宗敎家や、藝術家等はこの理會の下に彼等の仕事を遂行したのである。

して見ると、わが同胞のために必要とされる哲學も、其れの志向と輪廓だけに就いて語ることはさう困難でもないやうである。つまり、彼等が現に置かれた境遇と、現に有つて居る實力とを參照した上で、神秘的ではなく、實驗的に、間接的ではなく直接的に、出來るだけ早く彼等の幸福と聰明とを增すと思はれるものならば、それでよいのである。こゝに、わたくしが提議する種の哲學は、わが同胞に依つて要求さるべき唯一の哲學ではあるまい。然し、其等の最も優れたものの一つであることだけは確信する。そして、他にわたくしのとは異つた哲學を提議するものがあるとしても、其等が眞にわが同胞に依つて要求されるものであるならば、其等は、それの歸結に於て、ぜひともわたくしのと同一のものであることと確信する。わたくしは、其れの精神から、假りに其れに命名して、自然的作用主義と呼ばうと思ふ。

何故にわたくしは其れを自然的と呼ぶか。其れは、事實として、人間の生活の自然的經過の中に現はれる、若しくは、分化するものの外、何物をも認めようとしないし、又、尊重しようとしないからである。又、何故に、其れを作用主義

と呼ぶか。其れは、人間の生活に見出だされるあらゆる區別や、對立や、確執は、獨り作用的にのみ識別することに依つて、其等を妥當に觀察し、評價することが出來ると考へるからである。

自然的作用主義の生活を觀察し、評價する方法は、心理的、論理的である。心理的たることに依つて、其れの變遷する經過を觀察しようとし、論理的たることに依つて、さうする機能を評價しようとする。自然的作用主義は、決して哲學研究の方法として、心理的なると、論理的なるとを、相一致せざるものとは考へない。反つて、同時に心理學的たり、論理學的たることに依つて、始めて親切に、忠實に、生活を觀察し、評價することが出來るものと考へる。

自然的作用主義は、人間のあらゆる經驗と活動とを――知識と道德と科學と藝術と社會生活との總べてを――實驗的、作用的、改造的に觀ることに依つて、始めて彼れの生活の事實と、傾向と、法則とは最も正確に、適切に、理會されることが出來ると考へるのである。出來るだけ簡單に說明して見れば、(a)獨自の品性を有つた個人は最後の實在である。彼れは獨身のパアスペクチイブを通して他の個人と交涉し、又、萬有を認識し、觀照する。されば、俗に超個人的とか、超經驗的とか呼ばれて居るものも、畢竟するに、獨自の中心點を以て、獨自の方法で彼れの周圍を統一して居るのである。(b)彼れは、彼れ自身の生活に於ては、異なる知覺や、欲望が作用的に確執し、代償的にはたらいて、そこに、客觀が組織せられ、理想が實現されて居るし、又、他の個人との關係に於ては、(前と同じ物の同じはたらきにより)科學が構設され、法律が協定され、共同生活が經營されて居る。(c)最後に、彼れの知識も、道德も、其の他一切のものも、彼れの生活の置かれた境遇、即ち、契機の變遷するに從つて、絕えず改造されて居る。されば、如何なる思想が正しいか、如何なる行爲が善いかは、獨り、彼れの置かれた境遇、即ち、契機を支配する方法として定まるのである。

以上の所說は、自然的作用主義に關する說明として、(故意にではあるが)專門的ならず、簡粗に失するの觀がある。然

し、勘しでもこの道に通じた人ならば、わたくしが實在論に偏せず、觀念論に墮せず、如何なる立場に立つて、如何なる立場に立つて、如何ることを企てて居るかを容易に諒解出來ると思ふ。そして、か丶る志向と組織とを持つた哲學は、確かにわが同胞を解放するに最も有力なる道具の一つであると、わたくしは信ずるのである。

五、わが同胞は、如何に多くの損害を誤れる思想より蒙むりつ丶あるか

通例、二人の者がある問題に關して、其れに對する意見を異にするために、自然、異なつた言葉に依つて其れを呼ぶことになり、其の結果として、彼等の意見に一致點を見出せなくなつた場合に、相方共に『結局、言葉の相違に過ぎない。』と云つて、その爭議を有耶無耶の中に中止して了ふことが往々ある。然し、わたくし共は、よくよく吟味すると、言葉の相違が最も適切に意見の相違を表現して居るのであつて、其れが議論の中樞をなして居ることも尠くない。

言葉は思想の表現であり、事實の象徴である。言葉は其れが代表する概念、即ち、生活の態度と共に、其れの意義を終始する。されば、或る國民が用ゐて居る言葉の意味を普く理會したならば、其れだけで其の國民の道德的觀念と、社會的感情と、宗教的信念と、科學的、若しくは、藝術的特徵は殘らず解るわけである。

今日、わが國に於て、多くの學術的、若しくは、道德的熟語が何んの批判も、反省も施されることなく、刻下の社會組織と道德關係とに抵觸するやうに、平氣で謂ふところの有識者に依つてさへも用ゐられて居る。彼等は決して空虛に其等の熟語を用ゐて居るのではない。ある意味を與へて、其れに依つて或る思想を云ひ表はさうとして居るのである。不幸にして其等が、全然、わたくし共の現に營んで居る社會組織及び道德關係と扞格するものとなつて居るのであるが、彼等は其れに氣付かぬのである。是れが纔かに一二の人に依つてさう用ゐられて居るのならば、其の弊害も、無論、い

ふほどのことでもないが、其れが多數の、若かも民衆を指導する地位にある有識者に依つてさう用ゐられて居るのであるから、わたくしはその弊害の極めて遠大なるべきものなるを密に怖れて居るものである。昔、徂徠が(彼れの解釋の正當、不正當は別として、)彼れの學說を明らかにするために、『辯名』の一書を著したのには、重大な意味があつたと思ふ。

わたくしは、わたくし共の社會組織と道德關係との指標として、重大なる役目を有つ多くの熟語が、このやうに沒反省的に、沒批判的に、用ゐられてゐるのを見て、畢竟するに、これは正當なる哲學思想がまだ尠しも社會意識に入らず、其れを動かして居らない有力なる證左とするものである。こゝにわたくしは、其等の多くの言葉の中から、機械的、物質的、自然的、功利的、及び個人的の五つを抽出して、之等の熟語が如何に誤つて慣用されて居るかを検討しようと思ふ。

總べて是等の熟語は(其の他の等しく誤用されて居る多くの熟語と共に、)初め西洋より渡來した著書、若しくは、宣敎師を通じて、當時あちらで流行して居た。若しくは、取り殘されて居た意義を以て、西洋より輸入されたものである。是等の熟語の或るものは、基督敎の人生觀の感化の下に作られ、他のあるものは、其れへの反動として他の極端に馳せた傾向の下に作られたのである。されば、よくよく其の意味を吟味すれば、わが國に於て發達し、現存する社會狀態の如何なる側面にも當て嵌らなかつたことは明かである。然し、其の後に至つても、なほ、西洋より渡來する俗人や、俗書は、當初其等に附せられた意義の形骸を無意味に保留するものから、わが同胞も、彼等自身の生活に何等の足がゝりも有たぬ其等の不合理なる意義に對して、依然として尠しも怪むことをしないのである。是等の意義の特徵を一口に言つて見れば、其れは二元的であり、抽象的であり、空想的であり、且つ、靜的であるといふことである。

普通の用語例に從ふと、機械的とは總べて何等の目的もなく、何等の融通も利かず、永久に固定した存在を指すこと

になつて居る。そして、ある目的を以て成長し、又、變化することを意味する有機的に對立せしめられることが常である。云ふまでもなく、機械的なる熟語は、機械より來たつたものである。然し機械といふものは、果して、何等の目的もなく、何等の融通も利かず、固定したものであらうか。わたくしは決してさうは思はない。機械は人間の文化の一つの機關として、彼れの理想のヴェヒクルとして工夫されたものである。其れが或る目的を有ち、其れを滿たすために作られ、且つはたらいて居るからして、始めて、其れが機械たるの資格を具へて居るのである。隨つて、この目的を遂するために其れの各部分は、極めてデリケェトに整齊されて居る。そして、其れの目的の發展と變化とに連れて、絶えず其等の構造を改造することに依つて、絶えず其れは成長して居るではないか。されば、機械的なる熟語が或るものを形容するために用ゐられるならば、それは、一つの目的を以てはたらき、境遇の必要に應じて成長し、變化するものを指すことであらねばならぬ。

通例、物質的なる熟語に與へられて居る理會も、實際、わたくし共の生活の事實に扞挌することの甚だしいものである。是の熟語は、精神的なる熟語と對立するやうに用ゐられ、さう用ゐられた時に、是等の二つは全然異なつた性質の欲望を指すもののやうに想像されて居る。然し、この想像には何等の根柢もあり得ない。俗人は金錢、財寶等に對するの欲望が物質的であつて、藝術、宗教等に對する欲望が精神的であると云つて、是等が二種のものであるがために、直ちにその間に高下の差別が付くやうに空想する。然し、第一義に於て、欲望の對象は獨り其れが享樂され、受用される瞬間に在つてのみ成立するものであるから、其れの準備が如何なる種のものであつても、其れを攝取してはたらく欲望そのものの性質に尠しの相違もないのである。さうすると、金錢、財寶の欲望と、藝術、宗教との欲望との間に高下を立てるならば、(これは、無論、事實ではないが)、前者はやゝもすれば他の種の欲望のはたらきを妨げるまでに生活に分裂

を來たし、其れに反して、後者は他の種の欲望のはたらきを妨げぬやうに若しくは、進んで其れを助けるやうに、適度に生所に役立つといふ想像の上に立つて、居るとしか思はれない。この理屈からすると、どの種の欲望に限らず、部分的にはたらくものは、若しくは、はたらく時は、其れは物質的であつて、又、どの種の欲望に限らず、全體的にはたらくものは、若しくは、はたらく時は、其れは精神的であるのである。して見ると、事實が證明するやうに、金錢、財寶の欲望も（其れが全體的にはたらくと云ふ意味に於て）精神的であり得るし、藝術、宗教の欲望も（其れが部分的にはたらくと云ふ意味に於て）物質的であり得るといふことになる。かう論じて來ると、苟しくもわたくし共にして、合理的に語らうとするならば、物質的、精神的の熟語は、全然わたくし共の語彙より驅逐して、部分的、全體的の熟語だけを、そこに止めねばならぬ。

自然的なる熟語には、漠然ながら、數種の意義が附せられて居る。然し、こゝには其れが、俗に、合理的なる熟語に對照されて、用ゐられて居る場合の意義を取つて、尠しく吟味することにする。

自然的なる熟語が、合理的なる熟語と對照された時に、是等は、全然、其の種と、起原とを異にするものと取られて居る。自然的が、經驗以下のものと解せられて居るに反して、合理的は、經驗以上のものとして解せられて居る。然し、自然的と、合理的とは、全然其の種と起原とを一にするものであつて、たゞ、其の段階を異にするだけである。總べて自然的のものの多くは、合理的となる傾向を有し、總べて合理的なるものは、一つとして、その始め、自然的でなかつたものはないのである。わたくし共の衝動の性質にしても、又は知覺の性質にしても、其れが何故さうあるかと云ふことになると、全然、説明出來ない不合理のものであるといふ意味に於て、自然的である。然しながら、其れに潛在する或る作用が外來の刺激に依つて喚び起され、實際の世界に於て、おのれを有效にはたらかせるために、おのれの中に撰

擇と、醇化と、統一とのはたらきを生じて來ると、さきの自然的のものは、合理化されたと云はれ、合理的となつたと云はれるのである。斯くして、實在は知覺の合理化された結果であり、理想は衝動の合理化された結果である。さうすると、自然的とは、總べて人間の生活の道具の初期に與へられた名稱であり、合理的とは、其れの成熟期に與へられた名稱に過ぎない。

今日、多くの文藝家に依つて、そして、ある哲學研究者に依つてさへも、功利的といふ熟語が卑下されて居ることは實に驚くべきである、恰も非功利的であることが何か尊ときものであるかのやうに。これも彼等が眞に功利的なる熟語の意義を誤解したところから、若しくは、全然、理解しないところから來たつて居るのである。功利的とは、節約の法則に準據して生活するといふことに過ぎない。して見ると、功利的であることは、人間の生活の第一條件であるのみならず、生物界、無生物界を通じて支配して居る最も廣汎なる傾向ではないか。若し人間にして、功利的たることを嫌ふならば、そこに消耗あり、矛盾あるのみである。わたくし共が（そんなことは出來ないし、又、しもしないが）一度、一瞬間と雖も、功利的たることの思慮を遺れたならば、わたくし共の生活は一時にどんな混沌たる狀態に陷つて了ふであらうか。平常、功利的たることを排斥して居る人々は、彼等の文章や、行動や、生活の方針が、どのくらゐ、功利に依つて支配されて來たか、現に支配されて居るかを靜しく反省して見るがよい。

功利的たることが排斥されると同樣に、打算的たることが排斥されて居る。然し、打算のない生活は目的と手段とを全然缺いて居る生活である。されば、打算的たることの非難さるべきは、たゞ、大なる打算の必要であるのに、小なる打算の中に踟蹰して居る場合に限つてのことである。

人間はどうしたつて社交的動物ではないか。彼れの最も小なる私生活を營んで居る間にも、彼れは社交的たることを忘れることも、脱することも出來ぬ。然し、事實として各個人は獨自の遺傳と、境遇と、才能とを以て社交的に、自分の生活を營み、他人の生活を助けて居る。個人的とは、たゞ、この事實を指すのに過ぎない。社會を組織する個人が、ますます個人的たり、彼れに獨自の才能を開發し、彼れに獨自の境遇より生ずる義務を盡すことに依つて、社會はますます向上し、完成されるのである。他人の利益を傷け、他人との共同生活を害する個人は、個人的たるに依つてさうするのではなくして、非個人的たるに依つてさうするのである。言ひ換へれば、個人的たるに十分でないために、さうするのである。古來、大なる宗教家や、藝術家や、立法家は、皆、個人主義者であつた。そして、彼等は、先づ自づから個人的となり、しかる後、他人をして個人的たらしむるに努めて居つたのである。

以上、わたくしは生活の事實に即して、さきに掲げた五個の熟語に就いていささかわたくしが正しと思ふ解釋を試みたのであるが、是れしきの單純なる條理が、世間の謂ふところの識者に理會されないところを見ると、わたくしは、正しき哲學思想のわが國に普及されることの一大急務なることを感ぜずには居られない。

六、哲學宣傳の方法の不徹底

先頃、讀賣新聞紙上に載つた一つの記事は極めて短かいものであつたに拘はらず、不思議にわたくしの注意を惹いたのであつた。それは、當時、長野縣の或る町に講演に行かれた長谷川如是閑氏の談話の一片であつた。今、其れの載つて居つた號が手許にないから、それをわたくしの言葉で傳へることとにするが、其れの筋は、大略、次のやうなものであつた。

長谷川氏は政治上に關する講演に行かれたのである。長野縣は豫ねてより全國中最も敎育の進歩した地方である。隨つて、そこの靑年等の思想は他の府縣の靑年等の其れに比して一層も、二層も進歩して居るに相違ない。然し、氏の講演の要旨の聽衆に依つて全然理會されなかつたと云ふことは、彼等の試みた突梯の質問や、議論の眞面目な個處に於て彼等の發した笑聲からして明らかであると云ふのである。氏は氏に取つてこの意外な結果を說明して、彼等靑年が進歩した思想を持つて居ることは事實であらうが、彼等は、從來、主として文藝や、哲學に關する講演だけを聽いて居つたもので、社會問題に關する講演を聽くのは、全然、初めてのことであつたからであらう、されば、今後、彼等が度々社會問題に關する講演を聽くことになれば、彼等はだんだんに其れを理會するに至るであらうと云つて居られるのであつた。

記事の內容はたゞ是れだけである。が、これが不思議にわたくしの注意を惹いたのであつた。長谷川氏がどんな題目に就いて、どんな風に講義されたかわたくしは知らないが、前後の事情より推測して、氏とてそんなに難解なことを語られたのではあるまいと想はれる。其れならば、平常、自分の思想の進歩に誇り、これまで、しばしば文藝や、哲學に關する講演を聽いた彼等が、どうして、氏の講演に對してそんな態度を取り、それだけの理會しか有つことが出來なかつたであらうか。

畢竟するに、今日、わたくし共日本人が、わたくし共の生活の統一のために、若しくは、其れの發展のために、要求して居る文藝と、哲學と、社會問題の解決とは、過去の一つの格段なる時期に方つて、人間が自己の欲望の貫徹と、其れを滿たす自己の力量とに關して、新たに獲得した自覺と其れを選出する方法との分派ではないか。是等のものは、全然、その目的を同じくするものであつて、たゞ、異なるのは其の手段だけである。事實、(あの格段の時期は俗に文藝復

興と呼ばれて居るが、）文藝復興期に於て、あの驚くべき運動の唱道者となり、指導者となつた者の多くは、一人にして、同時に、哲學者であり、文藝家であり、社會問題の解決者でもあつたのである。そして、彼等はさうあることを當然のこととして、其等の活動の間に何等の障壁を設けず、何等の扞格をも感じなかつたのである。勿論、わたくし共は、あの運動を直接に繼承した者ではない。然し、わたくし共は、現に奇しき運命に依つて、彼等繼承者と等しく其れの完成を强ひられて居る者である。そして、其の完成に取つて何事にも先立つて緊要なことは、何處までも其れが當初の理會と情操とを失なはず、其れが分派たるあらゆる種の活動と、職業との間に一致の精神と協同のはたらきとを保存しようと努めるのみならず、又、其等を張揚しようと努めることであらねばならぬ。そして是等の活動、若しくは、職業の孰づれの一つでも、其れが正しく理會され、正しく充實されるならば、其れは自然に、他の活動、若しくは、職業と其の精神に於て一致し、其のはたらきに於て協同するやうに出來て居るのである。それならば、これまで、しばしば文藝と哲學との講演を聽き、其等の理會に誇る彼等地方の青年は、社會問題の講演を聽くに及んで、どうしてあのやうに、不親密と無理會とを表示したのであらうか。尠し酷のやうではあるが、この一點だけで、彼等は未だ眞に文藝も哲學も理會して居るものでないと、わたくしは斷ぜざるを得ないのである。

然しながら、可なりによく實際の事情を知つて居るわたくしに取つては、彼等青年のさうあるのには、さうある程度に止まつて居るのには、何んの不思議も無いことである。そして、罪は彼等に無くして、全然、彼等に對つて文藝を說き哲學を講じて來た人々の方にあるのである。こゝには問題外として文藝に言及することは暫らく措き、たゞ、哲學の一事に限りて論議して見ようと思ふ。

わたくしは地方に於て行はれる哲學上の講演を一々聽いた者ではない。然し、わたくしが見聞したいろいろの事實か

ら綜合するに、多くの講演者の側に於て、尠なからぬ心得の不足と、不親切とがあるやうである。この不足と、不親切とを說明して見れば、聽衆一般の需要を無視して、彼等は哲學の精神を主として釋明する用心を缺いて、一向に其れの機構の數術の内にだけ蹈蹐して居ると云ふことになるのである。たとひ事實として哲學上の知識を求める地方の靑年の多數は一時の流行につれて、縦かに衝動として其れを求めるにしても、彼等の求めに應じて其れを與ふる講演者は、哲學そのものの起因からしても、若しくは其れの滿たして居る職分からしても、聰明な覺悟と、的確な豫想とがなければならぬ筈である。そして、其れは、わたくしの考へるところでは、哲學の如何なる部門が、如何なる風に取扱はれるにしても、其れに依つて最後の目的とさるべきものは、彼等聽衆者をして、明晰に人間の性情と文明の趨勢とを會得せしめ、彼等をして、これまでよりも一層適切に、親切に、日本人として彼等が現に有てる力量と、彼等が現に置かれた境遇との眞相と、併せて是等兩者の關係の眞相を理會せしめ、さうすることに依つて、彼等をして是れまでよりも、一層合理的に、日常の出來事を評價し、一層經濟的に日常の事件を處理せしむることの一事であらねばならぬ。それには、完成された哲學の組織や系統を說くことよりも、生活を基本として哲學の起原を說き、社會を背景として其れの變遷と發達とを說くことが肝要である。然し、彼等には是等を說くの用心は全然閑却されて居る。尠なくも、彼等聽衆者の生活と理會と情操とを目安として、其等を說くことが閑却されて居る。彼等の聽くところの講演がこの種のものに限らるゝ間は、わたくしは、其れが彼等の聰明を塞蔽するものとはならうが、決して、彼等の理智を啓發するものとはならないと信じて居る。ラマ敎の信者は、彼等の僧侶の彼等に對してなす說敎が、理會出來なければ出來ないほど有難がつて居るといふ話であるが、是等の地方の靑年も、彼等の聽く哲學の講演が彼等の日常生活と離るれば離るゝほど、其れとの指標價値が失はれゝば失なはるゝほど、ます〳〵哲學の尊とさを感じて居るのかも知れない。

然し、彼等講演者は、彼等の講演が彼等の聽衆に與へる惡結果に就いて多少なりとも知らない筈はないのに、何んの思ふところあつて、そんな講演の精神と樣式とを續けて居るのであるか。わたくしは、どうしても講演者自身にさへ今日、何故に哲學が攻究されなければならぬかの理由、卽ち、哲學と生活との關係が理會されて居らないからであると斷言せざるを得ない。彼等地方の靑年は、そんな人々より哲學に關する講演を聽くのである。彼等が哲學を聽く時、一つの區劃の中に入れ、社會問題の講演を聽く時、又、別の區劃に入れるといふことは、極めて自然のことではないか。こゝに於て、わたくしは哲學の聽講者を改良することよりも、先づ哲學の講演者を改良せねばならぬと思ふ。

七、結語

わたくしは、當初、この論文に於て述べて見たい、論じて見たいと思つた事物は、不完全ながら、大抵、述べ盡し、論じ盡したやうに感じられる。然し、なほ、一事こゝに附け加へて置きたいことがある。其れは、世の生活改造論者への忠言である。なるほど、彼等の態度は如何にも熱心である。彼等の學識も必ずしも淺薄だとは限らない。然し、彼等は揃ひも揃つて一大事件を閑却して居る。其れは、彼等の論議をして、畫策をして、有效ならしめるには、彼等が用ゐて居る方法よりも一層も二層も深い、廣い、適切な方法に依つて、わが同胞をして近世文明と現代生活との特徴に開眼せしめねばならぬといふことである。彼等にしてこの工夫を怠つて居る間は、彼等が今日なして居るやうな言說を百千年續けても、其の效果の極めて尠少であらうと云ふことをわたくしは大に氣遣ふものである。

下落すべくして下落せざる小賣相場問題

法學博士　堀江歸一

恐慌と物價との關係

經濟學で說明する事は總て事物の大勢であつて、大勢の斯う爲り、あゝ爲ることは、明瞭であつても、愈々さう云ふ勢の生じるまでには、或る時期を要するであらうし、又反對の勢力の爲めに、終局の歸着點に到達するまでに、大小の波瀾に接することを免かれない。實際家は其波瀾に注意して、大勢を閑却するが、學者は大勢にだけ着目して、波瀾を顧慮しない。是れが實際論と學理論との間に、一致を缺くに至る所以であるが、私は昨今我國に起りつゝある物價問題に就て、矢張り此種の關係の存在することを認めるのである。

今春我國の經濟社會は恐慌に襲はれ、商工業は勿論、地方の農業まで、養蠶業を兼營して居ることの關係から、意外の打擊を蒙り、今や世を擧げて、不景氣の狀態に陷つて居るのである。此不景氣時代が何時まで續くかと云ふことに就ては、人々の間に色々の說があるが、長短孰れにしても、今や不景氣の影響は餘程强く社會の諸方面に浸潤して居るのである。或る會社は幾十名の社員を馘首したとか、或る商會は資產の全部を債權者に渡して、業務の整理を託したとか、船舶の繫留されるものが多く爲つた一方に鐵道の搭載する貨物も著しく減つたとか、生產業者は生產の規模を縮小して、一時の困難に當らうとして居るとか、彼等が斯る處置をしないでも、基礎の薄弱な會社は片端しから潰れて、事實上の生產減縮が行はれて居るとか云ふやうな事は近來屢々私の耳にする所であつて、何れも我國に不景氣の襲い來つた事實を語るものと認めなければならぬ。

斯く不景氣の徵候が濃厚と爲つて來た場合に、我國の物價は如何なる影響を蒙つたであらうか。一片の道理から考へると、不景氣時代には、物價は必ず低落す可きものである。否物價が

下落すればこそ、不景氣が誘致されるのであつて、不景氣と物價の下落とは、相離る可からざる因果關係を持つて居るのである。即ち好景氣時代には、物價が何處までも騰貴するので、物資を生産する者は生産するに隨て、高價に之を賣却することが出來るので、益々生産の規模を擴張し、原料機械の類を仕入れると共に、事務員勞働者を雇入れて、自ら好景氣に伴ふ利益を社會全體に頒つと共に、斯く物資や勤勞に對する需要を増すことが自然物價騰貴の勢を促すことゝ爲るのである。既に好景氣の場合に於て、斯る經濟的現象を生ずるものとすれば、不景氣時代には此反對に産業の規模が總て縮小し、從來其擴張された規模の下に、生産された物資に對する需要が減少するので、一方に生産過剩の狀態を生ずると同時に、他の一方に於て、物價の低落を惹起すことを以て、當然の勢としなければならず、更に不景氣時代に、勤勞に依て衣食して居る人々は或は其職を失うとか、或は俸給賞與の類を削減されるとか、個人會計上に不測の變動を生じて、物資に對する需要を減ずるので、益々物價下落の勢を甚だしからしめるのである。

不景氣と好景氣との循環

一國の經濟社會が恐慌に襲はれ、續いて不景氣の狀態に陷り、諸物價低落して、商工業の沈衰を告げたのは、固より經濟社會の不祥事には相違ないが、如何にして此不景氣時代から以前の好景氣時代に復歸するかと云へば、其れには不景氣の影響が廣く社會全體に行き渡つたことを必要とする。物價問題で云へば、不景氣時代に物價の低落することは、生産者階級に大なる苦痛を加へ、又損失を及ぼす所以であるが、斯く物價の下落した時に於て、生産業者が生産費の節減を謀るなり、冗費を節約するなり、適當な處置を取るので、生産事業をして堅實なる基礎の上に立たしめるを得るのであり、又物價下落の爲めに、生活費が節約されたならば、自然世間の人々をして勤儉貯蓄に勤めさせ、資金の增殖を促すを得るのであつて、此等の事が相重なればこそ、好景氣の再來を期するに至るのである。隨て私は今日の不景氣時代から、如何にして好景氣時代が生み出されるかと問はれたならば、其れは不景氣の勢が兩三年續いて、物價の下落が其奈落の底にまで落ち込んだ後の事であると答へさるを得ないのである。

我國物價の實際問題

此見地から、我國今日の不景氣狀態を觀察して、私の最も奇異に感ずる所は、不景氣時代が來たと云はれながら、物價は餘

り低落しない、或は卸賣相場は下落したとしても、其下落が小賣相場に及ばない一事である。生産業者と利害の關係の密接なるものは卸相場であるが、我々消費者の利害を支配することの大なるものは、小賣相場に外ならない。今日卸賣相場は既に低落しながら、小賣相場は必ずしも下落して居らないとすれば、生産業者は不景氣の影響を蒙りながら、消費者に之に伴ふ利益を得て居らない、利益を得ない所ではない、生産業の衰微不振に依て、消費者階級の内には、所得の一部を削減された者も、其全部を喪失した者もあるであらうに、彼等が所得を投じて、購入す可き物資の小賣相場は除り低落して居らないとすれば、消費者階級に屬する人々は今日生活上に最も大なる苦痛を蒙らざるを得ない道理であつて、而して獨り此間に利益する者は不景氣時代の下落した卸賣相場で、物資を仕入れて、好景氣時代同樣の騰貴した小賣相場で物資を賣却する一部の小賣商業者に止まるのである。小賣商業者の内には、不景氣の爲めに、得意先を失つて、好景氣時代と同樣の程度に、物資を賣上げることに就て、困難を感じて居る者もあるであらう。然し彼等が卸賣と小賣との相場の間に、收め得る利鞘の大なること、今日の如くであるすれば、彼等の利益は必ずしも好景氣時代と異ならざるものと思はれるのである。

卸賣相場と小賣相場

さうすると今日物價論の上で、我々の問題として、考量しなければならぬことは、何故卸賣相場が充分に低落しないのであるか、又卸賣相場に下落の徴候が現はれても、其れだけ小賣相場を低落せしめるに至らないかと云ふ二ツの點に外ならない。是等二個の事實に對しては、共通の原因を以て答へることも出來るし、又別個の理由を擧げなければならぬ事情もある。卸賣相場も充分低落しない、而して小賣相場に至つては、更に低落しないと云ふことに對しては、私は政府の通貨政策の不徹底なることを以て、其一原因とするに躊躇しない。如何にも近來通貨は收縮せんとする傾に爲つて居る。是れは不景氣時代に於ける當然の結果であつて、此勢が現はれてこそ、物價は確實に下落するものであるのに、政府は動ゝすれば通貨縮小の大勢に反抗し、經濟社會救濟を名義として、通貨を膨脹させる態度を示し、又現に其政策に出でたのである。斯る政策の行はれる間は物價は徹底的に下落するものと考へられない。卸賣商人も小賣商人も共に日和見の姿で、現狀を送つて、將來を迎へて居るのであつて、其内には政府の政策が再び人氣煽場に傾いて、物資を騰貴させることに爲るのであらうから、何も今慌てゝ賤價に

手持ちの商品を處分する必要はない、持ち堪へるだけは、持ち堪へる方針を取つて居る一方に、經濟社會救濟の爲めに、社會に撒布される資金は種々の徑路を經て、通貨の形態で、人々の手に渡るので、國民の消費力は當然減退す可き事情の下に居りながら、容易に減退しない。是れが確に卸賣相場と小賣相場との兩者に低落の趨勢の起る可きことを妨げつゝある原因に相違ないのである。

物價を攪亂する政策

第二に物價に存外の低落を示さない他の原因は是れ亦政府に深い關係を持つて居る。即ち今度の恐慌、之に次ぐ不景氣を招致するに至つたのは、原内閣が經濟政策を誤まつた結果であつて、此事は世間公知の事實であり、又此内閣に對する致命傷の一ツに相違ないのである。斯くて政府は此責任を回避する爲めに、今日の不景氣は瞬時の後に過ぎ去るものであるとか、暫時の後に再び好景氣を迎へるとか云ふやうな付景氣か、吹け惜みかに類するやうなことを喋々して居る。私は是等の言說を以て、民心を惑はすの甚だしきものと考へる。論より證據、不景氣風は次第に強烈に爲るではないか、好景氣の曙光は藥にしても之を見るを得ないではないか、是れは今度の不景氣が恐慌に基ひて、其結果として生じたものであるから、永續性を持つに至るものと認めなければならぬ。既に然る以上は、生產業者にしろ、商人にしろ、手元に持つて居る物資は一日も早く相當の價格で賣拔けるのが當り前であつて、又多くの人々が斯うするので、物價に下落を來し、新に生產をしやうとか物資の仕入れをしやうとかする人は總て此下落した物價を標準とする爲めに、物價下落の大勢が一般市場を左右することゝ爲るのである。此春から夏頃にかけて、各地方の機業家や、買繼商の行つた織物廉賣の效果に就ては、兎角の批評もあるやうであるが、廉賣が織物の價格を低落させる先驅と爲つたことは、爭う可からざる事實である。斯う云ふ風に、生產者なり、商人なりが不景氣を見越して、一般の物資を處分したならば、必ず物價下落の大勢を誘致するに至る筈であるのに、實際の事實の斯の如く爲るを得ないのは、何故であるかと云へば、多數の製造業者や商人の内に、政府の不景氣即時恢復論を輕信して居る者があり、どうせ近い内に景氣が恢復するなら、何も今日商品の處分賣りをする必要はないと云ふ考で、賣惜みをするのが一般の風と爲つて居るからである。即ち政府が自分の責任を回避しやうとか、市場に付景氣をしやうとか云ふ目論見の下で、出鱈目に言ひ觸らした言葉は存外に效目があつて、今や物價下落の大勢を阻害する

ことゝ爲つて居るのである。原内閣は曩には人爲的策略を弄して、物價の騰貴する勢を助長し、今日は同じく愚にも付かぬ世迷言を言つて、物價の下落を妨げやうとして居る。唯の一刻一瞬間なりとも物價を高くして、表面の景氣を維持しやうと云ふのが原内閣畢生の願望であつて、爲めに經濟社會に於ける健全な發展を害するの少なからざることは、吾人の何としても咎めざるを得ない所である。

小賣相場の下落せざる所以

然し物資の種類に依つては、今日既に卸賣相場に於て、下落して居るものがあるのに、小賣相場が必ずしも低落しないことに就ては、小賣商業組織の不完全なることを一ツの原因としなければならぬ。小賣商業者が何れも小規模であり、營業上に要する冗費の少なからざることの如き、彼等の間に行はれる競爭は存外鈍く、却つて同業者間の團結で、小賣價格を高い程度に維持しやうとして已まないことの如き、多年來の暴利に慣れて、今日は寧ろ生活に奢つて來たり、諸掛りも增したので、何としても此暴利を收めるに足りる位、物資の價格を高く維持しやうと勉めることの如き、何れも小賣相場に下落を許さない事情であると考へられる。固より小賣相場は小賣商人ばかりの考へで、左右され可きものでないとしても、既に卸賣商人の方に價格を引下げる氣振の極めて薄い今日に於ては、小賣商人の價格を維持しやうとする計畫も餘程強く行はれるし、又行はれ易いことゝ爲るのである。

斯う云ふ場合に若しも日本に有力な消費組合があつて、或る種類の物資を組合自ら生產製造して、原價に等しい價格で、組合員に分配する方法を取つたならば、餘程小賣相場の低落する勢を助けることであらうと想像される。詰り今日は小賣市場で、小賣業者が互に相顧みて、價格を引下げまいとして居り、卸賣業者が價格引下げに反抗する努力は更に小賣業者に高い市價を維持させることゝ爲る。是れでは恰も彼等の間に物價引下げ反對同盟の組織されたと同樣の譯であつて、此組織に相當の力のある間は、物價の下落されることは望まれないのである。斯る場合に上記の如き組織を打破するものは、諸外國であれば、卽ち消費組合に外ならない。消費組合が自ら資本を卸して、物資を生產する場合には、今日のやうに不景氣の風が強く爲つて來て、原料品價格も低く爲つた、諸掛りの費用も節約されると云ふ勢が現はれゝば、組合は其生產した物資の價格を生產費の節約されたゞけ、低くして之を組合員に分配するのに、躊躇する道理はない、組合員が組合を通じて廉價に物資の

供給を受けることは、自ら小賣業者をして暴利を貪ること能はざらしめ、又代價を高く維持することを不可能ならしめ、斯くて物價下落の先驅と爲る道理であるのに、我國には斯う云ふ働きをする消費組合――配給的消費組合でなく、生產的消費組合を以て、許す可きものは、私の知れる限りに於ては、之を見出すを得ない、隨て物價は下落す可き道程に居りながら、下落す可き端緒を得ない次第に爲つて居るのである。

小賣相場と習慣

一體今日の世の中に於て、小賣相場位、習慣に支配され易いものはない。是れは小賣商業者が一都會の到る所に散在して居る一方に、消費者も亦無數に多く、然も是等の消費者は廣く諸所の店舗に就て、小賣相場を比較して、其最も低廉である店舗に於て、買入れると云ふ譯ではなく、唯無意識に自分の平生行き付けた店舗で、買うに止る。多數の賣却者と購入者とが一個の場所に集中し、互に競り合つて、物資の代價を定めてこそ、公定價格も現はれて來るのであるが、右の如き取引では、小賣相場は到底習慣に支配されざるを得ない。以前廉價であつた物資は依然廉價であると共に、一旦高價に爲つた物資には容易に價格の低落することを許さない。世人も亦以前高かつた物資であれば、之に對して高い代價を拂ふことに躊躇しない。而して消費者が小賣相場で買ふ物資の分量も多く習慣で決定され、必ずしも代價の高下に依るものでないと云ふ說さへある。此事も亦實際の事情に適合して居るもの丶如く思はれる。斯く考へたならば、餘程大きな刺戟が消費者に與へられ丶ば兎に角、然らざる限り、彼等の努力で、卸賣相場の下落しただけ、小賣相場の低落を惹起すに至ることは、望まれないのである。

生產減縮と物價

更に今一ツ物價の下落を妨げて居るのは、事業家の物價下落に對する對抗運動である。今春恐慌が我國の經濟社會を襲つて、一方に金融梗塞し、他の一方に從來事業界の膨脹して居つた時代に、生產された物資に對する取引が停滯した爲めに、我國には到る所の生產地方に、生產過剩の狀態を生じて居つたのである、之に對抗する爲めに、紡績業者が率先して操業短縮は行ひ、他の事業家の內にも生產を減縮する方針に出るものが少なからずあつたやうである。是れは一時物價の下落せんとする勢を喰ひ止める上に於て、幾何かの效能を呈するやうであるが、營業者に取つては、自縄自縛の所爲たるに過ぎない。即ち操業短縮の爲めに、勞働者を解雇する、事業縮小の爲めに、

事務員を馘首する、一事業に是等の事の行はれた如く、他の事業にも同樣の事が行はれたならば、一方に生產減縮の結果として、物資の供給高は減じるであらうが、同時に物資を需要する國民の資力も自ら減少する譯であるから、物價を或る程度に維持しやうする、政策は結局何事をも得られないこととなるのである。唯生產減縮とか、操業短縮とか、兎に角物資の供給を乏しくするやうな事の行はれる當初には、其聲だけで物價を騰貴させたり、又は其低落を妨げたりするに至るのを免かれない。我國に於て今日物價の下落しない所以も、斯る關係に基いて居ることを知らなければならぬ。

物價問題の歸結如何

右に述べたやうな種々の事情から、考へて見れば、今日物價殊に小賣相場の下落しない事情も自ら明瞭と爲るであらう。而して我國と共に、諸外國の經濟社會が戰爭時代に蒙つた傷痍を今日に至るまで脫することが出來ず、我國に向つて物資を供給しやう、我國の方でも之を受けやうとしても、双方共に思ふやうに爲らぬことも我が國に於て物價下落の勢を遲々たらしめる一原因に相違ないのである。然し斯る種々の事情で、物價の下落が妨げられて居るとした所で、此勢力は何時まで續くものであらうか。第一に政府の物價政策に就て考へる。政府殊に今の原內閣が物價下落の趨勢の出現することを喜ばないのは、世間公知の事實である。左ればこそ蠶絲の價格が下落すれば、當業者に低利の資金を融通して、之を或る程度に維持させやうとする、米價が下落すれば、直に米の輸出禁止を解除して、其外國に輸出されることを自由にしたり、輸入稅を復活して、外米の輸入を止めやうとする。卽ち政府が物價騰貴の勢を助長し、其下落の趣を沮害するに就ては、誠に至れり、盡せりと評するの外はないが、政府の力は決して無限のものではない。生絲にした處で、米國の需要が戰時同樣の狀態に復活しない限り、價格の低落は免かれ難き數であつて、假令ひ千五百圓臺に維持されても、倘ほ絹織物の價格に低落を招くのは當然である。若し夫れ米の如きに爲れば、今後豐作に依る供給の增加で、何處まで價格に低落を見るかゞ一個の問題であつて、輸出禁止解除の如きは、此大勢を如何ともするを得ないであらう。

生產業者が物價下落の大勢に反抗しやうとする考から、生產を減縮したり、物資の賣止めをしたりすることは、今日まで既に現はれた事實であるが、彼等は斯かる所業を爲すことに依て、何故に利益するかと云へば、畢竟好景氣の時代から、持ち越して來た物資を高價に賣ることが出來るからである。然も斯

る物資を處分し切つて仕舞つたならば、彼等は必ずしも無理な手段まで施して、物價を高く維持して行く必要を感じないであらう。既に原料品の價格も安く爲つた。賃銀も低く爲つたとすれば、彼等は斯くて節約された費用を基礎として、生産費を計算し、是れで行き立つだけの經營を進めて行くのであるから、特に生産を減縮することを必要としないであらうし、又特に法外に高い價格を維持することにも腐心しないであらう。而して生産業者の方で、確實に代價を引下げて來る場合に、小賣業者だけの力で、何時までも價格を壟斷して、好景氣時代と同樣の程度に維持するが如き處置を爲すことを許すであらうか。小賣業者の内には自ら組合もあり、團結もあつて、各自單獨の行動の爲されることを許さないやうなもの丶、一面には小賣業者の間に、營業上の流儀方式の異なつたものがある。卽ち其或る者にして、世間に所謂薄利多賣主義なるものを採用し、卸賣業者より仕入れて來る價格の低落した以上は、之を標準として、小賣價格を引下げる方針を取つたとしたならば、如何であらうか。斯かる小賣業者は必ず得意先を殖やし、販路を擴めるばかりでなく、其引下げた小賣價格を以て、附近の同業者を風靡するに至るのである。物價が下落の方嚮に向つて來て、小賣業者中の誰れかゞ、口火を付けたならば、是れが導火線と爲つて、連續した物價下落を惹起すと云ふ勢を示したときには、最も早く此に火を付けて、物價下落の率先者と爲り、物資の販路擴張に成功した者が第一位の勝利者たるを得る譯である。今日の我國では、小賣業者は聯合の時代であり、又睨み合ひの時代であつて、何人も率先代價を引下げやうとか、卸賣業者に向つて、仕入値段の引下げを迫らうとか云ふ態度に出る者もないが如くに見られるが、若し今後不景氣の時代が續いたならば、必ず何人か此一點に先鞭を付ける者が出て來て、物價に急速の下落を見ることであらう。而して小賣商人が從來の通り、此點に愚圖々々して居つて、卸賣相場と小賣相場との間に於ける鞘開きが餘りに多きく爲つて居るとすれば、世人は果して之に對して風馬牛、相關せざるが如き態度を取るであらうか。數年間連續した物價の暴騰と生活の困難とは世人の生活問題に對する感情を刺戟して止まない。或る商店で商品の見切り賣りをすれば、店前市を爲す位に雜沓して、怪我人すら出したではないか、炭薪類は爭手を求めて、多人數組合つた上で、山元から買出す風が方々に行はれて居るではないか、公設市場の相場は自ら小賣相場の標準と爲つて居るではないか、或る店と他の店との間で、一ツの商品に就て、ドノ位、小賣相場に差別を設けるかと云ふことに注意し、一錢でも五厘でも廉價であると稱される店には、人客が集

まる有樣ではないか。是等は小賣相場に對する世人の考が眞劍に爲つて來たことを證明する事實であつて、前段に述べた小賣相場が習慣で支配されると云ふことは、影が薄く爲つたやうにも思はれる。然らば今日の如く小賣業者が何時までも暴利を貪る者で、卸賣價格の低くなつた、又生産費の減縮された時が來ても、尙ほ法外に小賣相場を高くして居つたならば、結局消費者をして直接に原産地に就て、物資を購はしめると云ふ事實を生ずるであらう。

消費者の對抗運動

固より個々の消費者が原産地に出張して、物資を買ひ調へることは、時間併に費用の許さゞる所であるが、小賣業者の橫暴今日の如くであつて、如何なる商品も彼等の手を經て、市場に供給される爲めに、不廉と爲る事實を知つたならば、原産地と消費地との間に、直接に物資の疏通する道を開くことは、何人かに依て、計畫され、斯くて小賣相場に一般的低落を來たすに至ることは、私の敢て疑を挾まない所である。唯小賣業者は何時までも各自の策略で、小賣相場を高く維持して行けるものゝやうに考へ、不景氣時代に最も必要である生産費の節約にも、資金の充實にも心掛けないで、其內に急劇なる市價の低落に遭過したならば、彼等に取つては、此事は死活問題たらざるを得ない。恰も本年四月の恐慌で、諸地方の生産業者が好景氣の續くと云ふ豫想の下に、仕事の規模を擴張して居つた時に、恐慌に出會つて、非常の窮境に陷つたと同じやうに、小賣業者も急劇な小賣相場の下落に接したならば、之を如何ともすることが出來ず、破産閉店相次ぐと云ふ慘狀を呈するに至るかも知れないのである。原內閣の經濟政策は經濟社會が好景氣に向うときには、百方人爲的煽揚策を講じて、其氣勢を高くする、而して好景氣の反動として、恐慌の起る場合には、好景氣の勢の盛であつたゞけ、恐慌の社會に及ぼす慘害、世間に流す害毒も共に甚だしいものであつた。此事は今春以來國民の深く實驗した所である。而して不景氣時代に爲つてから、政府は種々の小刀細工を施して、物價の下落せんとする自然の大勢を妨遏しやうとして居る。若し妨遏の效を奏して、其間に好景氣を迎へると云ふやうなことがあれば、甚だ結構であるが、是れは恰も秋から直ぐに春が來たり、冬から一足飛びに夏の來るのを望むのと同樣、甚だ無理な註文で、寧ろ出來ない相談であるとしなければならぬ。隨て好景氣の後に、恐慌が起り、之に次いで不景氣の來るのは、已むを得ざるものであるとして、政府のやうに、不景氣時代になつて、尙ほ物價の低落することを妨げて居つたなら

ば、如何なる結果を生ずるであらうか。第一には愈々小刀細工の出し盡された際に、急劇の物價の下落を招いて、小資業者の間に恐慌を起すであらうし、第二には經濟社會をして好景氣時代に恢復させることを遲延するに至らしめるのである。

政府の政策に過誤あり

斯く論じ來つたならば、不景氣の當然來る可き時代に於て、其勢を抑制するほど、愚なることはない。不景氣時代に、不景氣の勢を逞うさせればこそ、人々は將來好景氣時代に、輕卒な所業に耽つて、再び恐慌を迎へたり、不景氣を招いたりすることに就て、躊躇し警戒するであらうし、不景氣時代に思ひ切つて、物價が、低落すればこそ、社會の一部殊に定額の所得で衣食する人々の貯蓄を盛にして、資本を增殖させ、斯く增殖された資本が產業に運用されるやうに爲つて、始めて好景氣を刺戟することゝ爲るのである。さうすれば今日原內閣が行つて居るやうに、不景氣が既に襲來したにも拘はらず、政府自ら百方策を弄して、物價の下落する勢を妨げるときには、如何なる結果を生ずるであらうか。不景氣に對する國民の警戒が薄くなり、投機熱に對する自制心も弱く爲り、一方に物價騰貴の餘映は何時までも殘つて、資本の增殖を不可能ならしめるのである。不景氣風の起つた時には、人々をして出來得る限り、之に當らせる、不景氣の影響を社會到る所に浸み込ませる、是れは甚だ慘酷な處置であるやうに思はれるかも知れないが、實は不景氣を轉じて、好景氣に向き直らせる最捷徑に外ならないのである。思ふに世の中に政治家と呼ばれる代物ほど、近視眼で、一尺先きは愚か、一寸先きすら、見ることの出來ないものは他に類がないであらう。彼等は不景氣の恐る可きことは知つて居るが、如何にしたならば最も早く不景氣の狀態を脫し得るかを辨へない、唯不景氣に對する一寸脫れの方法ばかり考へて、得たりとして居る。而して吾人が學說に基いて、一尺も二尺も、先きの成行を說明してやつても、之に疑を挾むばかりであつて、之を信ずるの道に就けないのである。彼等が幾ら思ひ煩つた所で、智慧の分量は定まつて居る。而して彼等が些細の智慧を絞つた所で、自然の大勢は之を枉ぐるを得ないのである。さうとしたならば、彼等は單に大勢を利導して、早晚來る可き事實を、招き、其間の變動や衝突を成るべく緩和することを以て、最上の方策とす可きである。私は我國に現下起りつゝある小賣相場問題を攻究するに就て特に此感を深くせざるを得ないのである。

人口論に關する一つの考察

慶大教授　野村兼太郎

一

生を營む人間の數は日に日に增加してゆくが、住まれ得る土地の廣さには制限がある。限りある地球上に人間の數が充滿した時、恰もかの細菌が水器中に繁殖し切つて、然る後盡く死滅すると云ふやうに、吾人々類も全滅しなければならないのだらうか。然し乍ら斯の如き時期の到達する迄には餘りに多くの時間が算へられて居る。吾人は恰も何萬年か何億年かの後に地球が其の熱を放散し盡して、月のやうな生物のない世界に化し去ると云ふ科學者の物語を聞くの感がする許りである。人口論は斯の如く遠き未來の問題ではない。フリードリッヒ・アルベルト・ランゲも云へるが如く人口法則は社會問題の始めにして且つ終りである。人口問題の充分に解決し得ない限り、社會問題に關する論爭は永久に止むことがないだらう。現に北米合衆國に於ける、日本人排斥の運動は、何ものかを暗示して居るのではないだらうか。帝國ホテルに於ける中世紀式儀禮の御馳走政策が、よく此の問題を解決し得ると信じ得るだらうか。彼等の云ふ日米親好の演說を眞に受けて、意を安じて居ていゝだらうか。地球は未だ狹くはない。人類が之に充滿する迄には相當の年月がかゝるだらう。然し兎に角限りある地球の表面に現在のやうに大小幾多の國々が存在して、各自其の領土を確守し、而も其の富國策の手段の一つとして人口の增加を冀ふ今日、人口問題は實際的方面より見るもしかく迂遠な問題ではない。又若しかのマルサスの說くところが一部の眞理を包含するとするならば、その自然法則としての人口法則が文化價値要求の立脚地よりして、如何なる解釋を下さるべきであるか。或ひは又マルサスの痛擊するが如く、文化と云ふが如きものは痴人の夢に過ぎないだらうか。自然法則と文化法則との問題は理論的方面よ

り見ても人口論の忽諸に付すべからざる所以である。

以上述べたるが如く、人口論は實際的にも、理論的にも、多大の興味を與へる問題であるが故に、すでに幾多の文獻の世に公にされて居るにも拘らず、敢てこゝに私見を公にしやうとする所以である。素より充分な考證と研究とは此の一小論文のよくし得るところではない。唯人口論に對するある考察の一端を示して、同じ問題に興味を有する人々の參考になり得れば充分なのである。

二

人口論と云へば恐らく何人と雖もマルサスを聯想するだらう。マルサスと云へば何人もかの有名なる命題『人口は若し制限するものがなければ幾何的級數を以つて、增加し、之に反して食物は算術的級數を以つて增加するに過ぎぬ。』と云ふ言葉を想起するだらう。吾人が以下人口論に就いて論述するに當つても、多少學究的乾燥(トロツケンハイト)を免れないけれども、尙ほマルサスに關する議論だけは之を省略することが出來ないのである。

余はこゝにマルサスの經濟學上に於ける地位に就いて論究しやうとするのでもなく、其の人口論に對する諸學者の批評を說明しやうとするのでもない。尙ほ又其の「人口論」の第一版(一七九八年)は第二版(一八〇三年)に於いて多大の修正增補が施され、著者自身「此の再版は一の新著として考へ得る。」と云つて居る位であるが、此の論文に於いては、此の點から此の二つの版を比較研究してマルサス自身の思想の變遷を述べる餘裕はないだらう。唯人口の增殖と文化の發展とに關して考察せんとするに當つて、先づマルサス自身の思考せるところを理解し、こゝに議論の出發點を求めるのが最も便利であると考へるが故に過ぎない。從つて以下若しマルサスの議論を引用する必要がある場合には、マルサス生存中の最後の版たる第六版(一八二六年)から引用する。これが最も此の場合當を得て居ると信ずるからである。(因みにマルサスは一七六六年二月十四日に生れ一八三四年十二月廿九日に逝く。)

吾人がマルサス自身の議論を讀むと、所謂マルサス主義(Malthusianism)が大なる誤りをなして居ると氣が付く。實にボーナーが慨するが如く、「或る著者が一度權威あるものとなると、其の著書は屢々讀まれなくなり、而して其の學說は通貨の如く使用に從つて次第に磨滅し、終には發行者の附したる彫像も刻印も明白に分らなくなる。」讀まずして賞讃するのも、讀まずして非難するのも、共に著者に對する冒瀆である。而して「マルサスは誰も讀まないが、而もすべての人が罵る書物を遺

したと云ひ得る。」のである。(Bonar: "Malthus and his Work." 參照) かくしてマルサスの議論は一般から大なる攻擊を受けて居る。殊に彼が其の議論の結果として現在制度を以つて避け得ない自然的な、必然的なものと見做し、從つて資本主義的制度の辯護をなすものとして非難される。然し彼の說くところには尙ほ多くの眞理が存する。

マルサスの人口論は二つの前提から成立する。卽ち食物は人の生存上に必要なものであると云ふことゝ、男女兩性間の情慾は必要であつて、且つ今後に於いても略々現在と同樣に繼續するだらうと云ふ二つの事實である。此の二つの事柄は極めて例外な人物を除けば一般には確實なる前提である。吾人の生存と云ふ事實を否定しない限り、人間も一個の生物として此の前提は承認せざるを得ない。然し乍らマルサスが此の前提から直ちに人口の增加は生活資料の增加を超えることと大であると云ふ斷定を下したに對しては非難を免れない。(云ふ迄もなく前述したやうな幾何的級數とか算術的級數とか云ふ字句を用ひたのは、單にマルサスが其の議論を具體的ならしめんが爲めに過ぎない。)此の點に於けるマルサスの人生觀、マルサスの哲學はかなり人間の本性に關して悲觀的色彩を帶びて居る。人間は本來物質的快樂のみを追求するものであると云ふ假定のもとに立つマルサスの獨斷である。然し吾人は此の點に關してマルサスに寬大でなければならない。ボーナーの記すところに依れば彼は最も大なる論爭家である。彼の科學的 紫がゴッドウヰン、コンドルセー等の理想的社會觀、樂觀的人生觀に飽き足らなかつたのは、蓋し當然でなければならない。それが反動として悲觀的方面を殊に力說するに至るのはあり得ることである。然しマルサスと雖も人間性に對して全然悲觀して居る者でないことは、後に述ぶるが如くである。故に特に「此の點に於ける」と云ふ限定の言葉を用ひて置くのである。

人口の繁殖力が生活資料の增加力以上であると云ふ議論に就いては、先づ生活資料の意義を明確にしなければならない。若し生活資料と云ふことを單に人間の生命維持に必要なる程度に限るのならば、今日迄の統計はマルサスの斷定の不當なることを證明して居る。生命を持續し得る程度の衣食住ならば、現在人口の全部に給與して尙ほ餘りあるだらう。(此の斷定を確めるには實際の統計を必要とする。然しこゝに一々數字を擧げるのは繁雜であり、且つ無味乾燥である。此の點に就いては Warren S. Thompson が其著 "Population: A Study in Malthusianism." の附錄として揭げて居る委しい統計表を參考されたい。)故に若しマルサスの人口論が單に一動物としてのみの人類を考察

するのであるならば誤りであると云はなければならない。然し人間を人間として觀察すればマルサスの斷定は間違つて居ない。吾人が生活資料と云ふ時は單に生きてゆく糧と云ふに止まらない。吾人が其の當時に於ける文化生活に適應せる生活をなすに必要なる資料と解釋するのが至當であると考へる。かく解するのでなければ「貧窮(ミゼリー)」にして而も生存する、人口過剩と云ふことが意味をなさない。此の點に於いて生活資料の增加力は人口の繁殖力に及ばない。此のことに就いては更に後に述べる必要があるだらう。今は先づ如何なるものが人口の繁殖力を防止(チエツク)するか。此のことに關するマルサスの議論を吟味して見やうと思ふ。

三

「人口の增加に對する究極の防止は、人口の增加と食物の增加とが同一比例でないと云ふとから生ずる食物の缺乏であるが、此の究極の防止は饑饉の場合を除いては普通直接の防止とならない。」(意譯)直接の防止には二つある。豫防的(プリベンティブ)のものと積極的(ポジチブ)のものとである。前者は生活の困難を豫想して結婚を差控へるものの如きが其の一つであり、後者は人口の增加に伴ふ必然的防止である。推論の便宜上先づ後者から始める。

「人口の增加に對する積極的防止は極めて種類が多い。而してある程度まで人の天命を短縮する罪惡や貧窮から生ずる各原因をも包含する。故に此の項目の下には次ぎのやうなものはすべて算へられる。即ちすべての有害なる職業、烈しき勞働、極端の貧乏、子供の營養不良、大都市、すべての種類の無節制、普通の病氣、流行病、戰爭、疾病、饑饉等である。」(意譯)

即ちマルサスの人口法則の必然的結果として是等の弊害は避け得べからざるものである。然しそれは此の法則が自然法則として正當であると見做すが故である。換言すれば一人の男子が一日營々として勞働するも、尙ほ其の妻子家族を養ふに足る生活資料を生產し得ないとするならば、是等の貧窮と罪惡とは社會制度の缺陷にのみ歸することは出來ない。然るに現在資本制度の下にあつて、一方生產品は甚だ過剩であるにも拘らず、他方貧窮を絕滅することの出來ないのは、是等の弊害が此の點に於いては人口法則と何等關係のないことを語るものである。故にマルサスが人口法則を自然的法則として其の必然の結果のみが貧窮を生じたとするのは誤りと云はなければならない。然し上述した貧窮や罪惡が、人口の增加を防止する一つの原因たるは事實である。貧乏の結果ある罪惡を犯す、營養不良になる、防ぎ得る疾病にも冒される。而して人口の減少を來たす。然し乍ら

これ等の點に關して吾人は更に考へることが必要であると思ふ。

今現在に於いて假りに社會主義者、あるひは其の他の社會改良家が理想とする世界が完成され、マルサスが打ち勝つことの出來ないものと考へた「人口の繁殖力と土地の生産力とが自然的に不平等であると云ふこと、及び吾人の天性に關する法則の爲めに、是等二個の力は結果に於いて絶えず平等に保たれなければならぬと云ふ」社會完成の途上に横はつて居る大困難を避け得たと假定する。各人は其の勞働の成果を自由に享樂し得る。而して其の勞働の成果は其の家族全部が其の時に於ける相當の文化的生活を送るに充分であるとする。然るに時間の經過と共に一方人口は增加し、從つて他方各自の文化的生活の程度は向上する。若し單に人口の繁殖力と土地の生産力とのみ考へるならば、マルサスの所謂打ち勝ち難き大困難は必ずしも打ち勝ち難きものではないかも知れない。然し一度文化的生活の向上と云ふことを考へる時に、吾人はさう容易にマルサス說を排斥することは出來ない。若し前述の如く生活資料と云ふものを此の程度迄引き上げる時には、其の增加力が人口の繁殖力に及ばないとするならば、此の點から見て所謂社會主義制度の下の生活もかなり悲觀しなければならない。吾人は現在の制度の下に於いて、資本家の不當なる掠奪の爲めに勞働者が悲慘なる生活をして居ることを認める。從つて勞働者の人格を認めやうとする社會主義の運動には贊意を表する。然し現在の一般の文化生活をそれ以下に引き下げるやうなことがあるならば、而してそれが時と共に次第に墮落するとするならば、少くとも是等の運動に參加することを躊躇せざるを得ない。然らば如何にすべきか。資本主義的現制度を維持繼續すべきであるか。かゝることは時間の針を逆轉させると同じく困難であり、至當でない。云ふまでもなく正當なる勞働の成果を其の勞働者が享受し得ないと云ふことは不當なことであるから　ある。然らば如何にして解決すべきであるか。此のことに就いては暫く後に讓り、更にマルサスの議論より考察し得る他の問題に就いて述べやう。

四

以上の議論は各人が單に一個人として考へられて居る。次ぎに更に國と國との關係に就いて考へる必要がある。マルサスが人口增加の積極的防止の內に算へた戰爭と云ふ事實は、其の根本に於いては、あるひは廣義の貧乏であるかも知れない。卽ち一國に於いて生産される富の不足が他國の領土侵入となり、そこに戰爭を生ずるやうになるかも知れない。然し實際に於て、戰爭の眞の原因は斯の如く簡單には考へ得ない。種々複雜なる

直接間接の原因を有するのが通常である。だがある程度まで人口の增加と云ふことが少くとも外交上の問題となり、延ひて戰爭の慘禍を惹起するに至ることはあり得る。例へば最近吾人の最もよく新聞紙上に於いて議論される加州の排日問題に就いて考へて見やう。我々日本人として加州に於いて我が國人が發展することは最も好ましいことである。從つて日本人が迫害されることに對しては其の不當なる所以を力說する必要がある。又純粹に理論的立場に立つて、人類一般と云ふやうな見地から見れば、所謂人道上しかあるべき筈のものである。然し乍ら若し米國人の立場に立つとしたら如何であらうか。自己の領土に於いて、異人種である日本人が次第に發展すると云ふことは好ましいことであらうか。所謂紳士條約の破棄を求めるのは、極めて自然なことではあるまいか。解り切つたことであるが、更に例を引く。例へば自分の家に人手が足りない。田舍の親類から助けに來て呉れる。吾人は双手を擧げて歡迎するだらう。北米合衆國に於いて未だ人口の極めて稀薄であつた時には、勤勉なる日本人の移住を心から喜んだであらう。然しすでに人數も增した。別段人手に不足するやうなことはなくなつた。然るに田舍の親類は歸鄕して呉れるどころか、妻子をも呼び迎へやうとするに至つては、如何に寬仁大度の主人と雖も心中餘り穩かではないんだらう。

然らば加州の排日運動は許容さるべきであるか。若し現在のやうに各國が各自に其の領土を維持して、各々其の民族の繁榮を希望し、一國の隆盛の爲めには人類全般の幸福を無視することが許されるならば、このことは肯定されなければならない。今少しく煩しくはあるが、最も通俗(ポピュラー)なる經濟學者の人口論に對する結論を引用して、其の所論の當否を考へて見やう。

「之を方今の時勢に鑑み、之を人生並に人道の如何に照して考慮する時は、吾人は大體に於て人口の增加を是認し、人口の減少を否定す可きを思ふ。蓋し人口の減少は其の極、其の種族、其の民族、其の國民の自滅、延いては其の國家の滅亡を意味するものにして、之に反し人口の增加は生理上自然の結果たるのみならず、又吾人同胞の繁殖を欽ぶは道德上に然るべき所なればなり。殊に廿世紀の今日に於ては、國際間の領土の爭奪、人種間の生存の競爭、日に月に激甚の度を加へ、國權の擴張、民族の膨脹は其の國民又は其の民族の自衞上より云ふも切要なる所謂『武裝的平和』の世界となりたれば、此間に處して國を建て、民を擁し、而も其の永遠の安寧と幸福とを計らむと欲せば、勢ひ國家の基礎たる國民の增殖を希ひ、人口の增加を期せざるべからざるは火を覩るよりも明なり。」（津村秀松氏「國民經濟原

論」上卷）

斯の如き見地、斯の如き理由よりして、各國が孜々として其の人口の增加を希ふとするならば、——恐らく今回の大戰後に於いて人口減少せる各國は殊に全力を擧げてこれに當るだらうが——人口增加と戰爭との問題に對しては悲觀的斷定を避けることは出來ない。あるひは「人生並に人道の如何に照して」とか、「道德上」とか、「永遠の安寧と幸福とを計らむと欲せば」とか云ふ極めて圓滑な文字を以つて其の議論を粉飾し、其の正當なることを論理的に是認せんとして居るけれども、云ふ迄もなく一の誤魔化しに過ぎない。要するに國家的競爭の存する時であるからして、人口の增殖は制限すべきでない。制限されざる人口の增殖は更に激烈なる國際的爭鬪に導く。結局人類は常に爭奪止むことなく、不斷に不安の爲めに苦まなければならないのであるか。人口問題の導くところは爭鬪にある。北米合衆國から移民を拒絕されんとする我が國は更に他日濠洲からも、南洋からも、支那からも、目下移民を歡迎すると傳へられる南米からも拒絕される時が來ないと誰が保證することが出來やう。然る時我が國自身は如何なる手段を採らんとするのか。人口の增殖を制限し、移民を中止するか、若しくは積極的行動に出づるか、二つに一つである。

今此の問題に對する一解釋を試みる前に、更にマルサスが豫防的防止なるものに就いて論じて見やう。

五

所謂人口增加の豫防的防止には二つある。卽ち不正行爲を伴ふ——罪惡的防止と、不正行爲を伴はない——道德的防止とである。マルサスが此の道德的防止を稱へるに至つて、（第二版以降）彼が人間本性に對して單に悲觀的斷定を下したものではなく、理想的色彩を認めたものであると云へやう。卽ち道德を守り、性交の純潔を保ち、早婚を愼むと云ふことは人類が其の理性に依つて本能的放逸を抑止すると云ふことである。換言すれば人類は單に動物的本能にのみ捕はれて行動するものでなく、其の意思の力に依つて、ある程度まで本能的衝動を支配し得ることを明示するものである。マルサスの下したる論斷は斯の如く人間の理性を認め、何等の罪惡を伴ふことなくして、而も過度に人口の增加するのを防止し得るものとした。然し乍ら斯の如き性慾的本能の道德的防止は果して一般人にとつて望ましきことであらうか。豫防的防止の内不正行爲を伴ふ罪惡が好ましくないことは論ずるまでもない。何等個人的に罪惡を附隨するものでないとしても、人間正當の慾情に對してある特殊の人間

――例へば財産を持たぬと云ふやうな條件の爲めに――のみが是を抑制すべきであるとするのは少くとも社會的罪惡であると云ひ得る。殊に一般普通人にとつては好ましいことではない。故に貧乏であるからして此の性慾を抑制すべきであるとするマルサスの所論は、個人の意思、個人の價値を無視するものであつて、吾人の俄かに贊成し得ぬところである。且つ斯の如き防止――豫防的防止の大部分は寧ろ現在に於いては――資産者階級に行はれ、行はるべき筈の階級に行はれて居ない。然らば斯の如き單に主觀的なる豫防的防止以外に他の手段のあり得るか如何か。

余は更に論述を進めるに當つて、先づ上述の議論を約言して置きたい。

吾人はマルサス人口論の大前提たる人口の繁殖力は食物の増加力よりも比較的大であると云ふ說を認める。これは大體に於いて多くの經濟學者が不朽の眞理とするところである。此の前提を許せばマルサスの云ふが如く自然的結果として貧窮罪惡が惹起する。少くとも文化的生活の低落は免れない。これは現在に於いて、各人が國家的立場に立つて居ることを無視しての議論である。吾人が國家的立場に立つ時は、更に人類文化生活の理想と人口の増加との間に他の矛盾が存在する。更に他の人口増加の豫防的防止に對しては僅かにマルサスの理想的片影を認めるに過ぎず、其の實際的效果は極めて薄いものであると云はざるを得ない。寧ろ罪惡的防止と見るべき姦婬、亂交等の不正行爲の増加を示して居る。此の點に關してはブレンタノの議論が正當である。(Brentano:—“Die Malthussche Lehre u. d. Bevölkerungsbewegung d. Letzten Dezennien.”參照)

然らばマルサスの所論は如何なる點に於いて正しいか。又如何なる點に於いて誤れるか。以下余が上に述べた諸點に、一つの解釋を試みれば、自ら明瞭になることと考へる。

六

ものを觀察する時、批判する時には必ずある立場を採る。基本のない批判なるものは存在し得ない。故に以下論ずるに當つても先づ余自身の採る立場を明かにして置く必要がある。余は人間の本性に對してマルサス程悲觀的斷定を下ろすものではない。人間は理性的意思を有すると云ふ點に於いて他の動物と異なり、其の意思の力に依つてある程度まで自然を征服して文化を建設し得るものと信ずる。故に此の點に於いては文化目的を假定する理想論者である。然し他方人類は又一の動物に過ぎな

い。其の本能的衝動生活に於いては、全然他の動物と同様に自然法則の下に服從しなければならない。此の本能的生活を脫して、意思的生活に移るところに人類の不斷の努力が要求される。而して文化目的の到達は各人の人格價値の完成に依つてのみ果される。從つて個人の價値は出來得る限り尊重されなければならない。是等の點に關しては從來屢々論述したところであるから、これ以上繰返す必要もあるまい。(拙著「經濟的文化と哲學」及び其の以後に發表した「太陽」七月號、「解放」八月號「中央公論」「三田學會雜誌」九月號等の拙稿を參照して下されば幸ひである。)

此の見地に立てば少くとも各人の自由は許されなければならない。且つ其の當時に於ける文化生活は苟も生存し、且つ勞働する人間である以上許さるべき筈のものである。然るに吾人の勞働の成果が次第に向上する文化生活を各人に保證するには不充分であるとするならば、單に生産物の平等なる分配を以つて滿足することは出來ない。各自が次第に低下せる文化生活をしなければならないと云ふことは人間本來の目的に反する。此の當然の結果として、吾人は何等かの方法を以つて人口の增加を制限しなければならない。若し人類を以つて他の動物と同樣全く本能的生活に終始するものであるとするならば、マルサスの示すが如く――殊に第一版に於けるやうに――全然罪惡と貧窮に依る自然淘汰に至るより外はない。明かに其の境遇に最も適當せるもの丶みが生存するだらう。あるひは劈頭に述べた細菌のやうに、最も繁殖した時が人類破滅の時期であるかも知れない。然し吾人は更に他の方面から斯の如き悲慘な結果を避け得ると思ふ。一つは精神的文化の發展であり、他の一つは優生學(ユーゼニツクス)である。換言すれば人類の理性的自由意思の生活に信賴を置くものであるが、委しくは次ぎに國家と人口の增加とに就いて少しく論じた後に讓る。

吾人は各自が自己を中心としてすべてのものを考へるのを當然であるとする。何故ならば自己を離れて、少くとも現在に於いては、あるものを考へると云ふことは不可能なことであるし、自己なき世界は自己にとつて無價値であるからである。(宗敎的に云ふ大なる自己、若しくは無我に就いてはこ丶には考へに容れない。)故に自己を中心として、其の知己は其の者にとつて知己でない者より親しく感ずる筈であり、自己に關係ある者が自己にとつて懷しく感ずるのも亦當然である。此の點から見て吾人は日本人なるが故に日本に愛著し、日本の國運の隆盛を希望するとは當然である。少くとも英國が隆盛になるより、獨逸が發達するより、米國が富强になるより、日本がそれ等の國以上

に發展することを希望するだらう。これは人類の本能的生活に於いて極めて至當なことである。此の點から一國の發展を望み人口の増加を促進しやうとするならば、戰爭を避くることは世界が一つの國家となる時期の到來する迄、到底不可能なことである。世界平和の夢想の實現は到底豫見し得ない。唯僅かに此の間の齟齬を救ひ得るものは人類の精神的文化の發展に伴ふ各箇人の人格的自覺である。近頃特に我が國に有名なるベルトランド・ラッセルの云ふが如く、英國は其のシエークスピヤを出せることを誇りとし、獨逸はゲーテ、カント等を以つて國の文化の表現として、各々其の領土的野心を放棄するならば世界は平和になるだらう。(Russell: "Political Ideals." "Why Men Fight"等參照)然し乍ら斯の如き平和論が實際に於いて役に立たぬことは歴史の證明するところである。恰も個人に關して云へば基督生れてすでに二千年に近く、釋迦出でゝ二千五百餘年而も尚ほ物質獲得慾の増進こそすれ、減退しないと同樣である。これ即ち人類が未だ動物的本能生活より解脫し得ないに基くことであつて、生命に執着し物的獲得を最上とするが故である。從つて此の範圍内に於いては國家は強食弱肉であり、武力掠奪である。而してマルサスの示すが如く戰爭の罪惡を正當とせざるを得ない。唯吾人が最後に到達せんと欲する文化目的は斯の如き本能的爭鬪ではなくして、理性に依る個人の完成でなければならない。然らば今現在に於いて如何なる斷定を下すかと云へば、吾人は唯人口問題より見たる國際關係に就いては悲觀的に次ぎの如く云ふより外はない。即ち各國は各自に人口の増殖を計つて、結局大戰爭に陷ち入り、もつと痛切に――今度の戰爭以上に、戰爭の慘禍を痛感するより外はないだらうと。更に他方其の各國を構成して居る國民に、人間としての人生に對する自覺を出來る限り理解させんと努力すべきであらう。此の努力は又前に述べた物質的生活資料に餘裕を與へることになる。

七

すでに前に述べたやうに人類の精神的文化の發展が一部物質的生活資料の缺乏を救ひ得る。何となれば各人が次第に人格的に自覺することに依つて、單なる物質的獲得が極めて無意味であると考へるやうになり、あるひは比較的單純な物質的生活に安んずるやうになれば、それだけ物質的生活資料が少くてすむことになるからである。さうなればさうなる程此の人口増加の問題は人類一般に取つて比較的遠い問題となり得る。更に次ぎに他の一つの問題である優生學に就いて略述しやう。

すでに述べたやうに人間自身も生物である以上、他の動物と

同じやうに自然淘汰が行はれて居る。云ふまでもないことであるが生れ得べき筈のものがすべて生れて居るわけのものではない。生れ得た者も又すべて常命を全ふする者ではない。自然は遠慮なく淘汰する。而も唯偶然なる其の時其の場合の適者を標準として淘汰する。從つて人類文化の發展の適否に就いては、時に相反する淘汰を行ふことがある。故に此の點を人爲を以つて改善せんとするのが此の優生學である。單なる適者生存を正當なる優者生存に改めんとするのである。精神的方面に於いても肉體的方面に於いても惡質と見做し得るものゝ繁殖を防止するのである。此の點から現在の科學的知識により優者の選擇を行ひ、且つそれと共に人口の徒らなる增殖を防止することが出來やう。唯すでに生を得たる個人に對しては、何人も其の生存の價値に就いて云爲する權利を有せぬと云ふ理由のみから、其の生命は尊重されなければならない。マルサスの指示する主觀的な道德的抑制が極めて力が弱く、實際的效力が薄い其の缺點を補ふものとして、科學的なる優生學は最も適當なものであると考へる。優生學そのものに就いては、尚ほ醫學上から、倫理學上から論ずべきことが甚だ多い。然し乍らこゝには唯今後人口增殖の制限として文化的に、かなり重要なものであると云ふに止めて置く。(齋藤茂三郎氏「優生學」參照)

以上の論述に依つてもすでに明かであるが如く、マルサスの人口論は自然的法則としては承認すべきものである。即ちあらゆる生物の繁殖力はこれを制限するものがないとするならば、其の生活維持資料よりも大であると云へやう。而して其の必然の結果が自然淘汰となつて現れる。斯の如きは人類とても一個の生物として免れ得ない原則である。此の點より見れば單純なる生存權——單に生存するが故に生存を主張し得るとなす生存權は、その存在の餘地を有たないのである。然し乍ら此の點からマルサスを攻擊するのは當を得て居ない。

生存權とは所謂經濟上の三大基礎權(勞働權、勞働全收權、生存權)の一つである。生存權を主張するには單に生存てふ事實に基くものでなく、何等か生存を主張する理由を必要とする。即ち此の點に於いても文化價値の觀念を必要とする。換言すれば何等かの意味に於いて、吾人の文化生活に貢獻するところあるものでなければ、其の者は生存權を主張することは出來ない。況んや、文化生活に對して阻止し害惡をなす者に對しては、其の生存を否定しなければならないだらう。個人の人格尊重は唯其の根底に於いて文化價値に基礎づけられた時に於いてのみ始めて有意義なのである。(左右田喜一郎氏「價値哲學ヨリ觀タル生存權論」參照)

即ち單なる生存權は人類の文化的生活に於いても、自然法則としての人口論が生ずる理由と違つた根據から排斥されなければならない。かくして人口增加の現象は單に自然淘汰にのみ依らずして、文化淘汰を必要とする。(文化淘汰の言葉は福田博士が其の著「國民經濟講話」乾卷七四九頁以下に用ひて居る意義とは稍異なる。同著參照) かくの如き方法を以つて、事實上何等價値なき人類の生存に依つて、他の價値あるもの丶「時」を沒却することを防止し得るだらう。之の如き理由に於いてのみ他の生命を斷絶することが倫理的であると云ひ得る。優生學が單に肉體的の醫學的の方面に止まる缺陷を補ふには、先づ各人の人格的自覺を促して、其の倫理的觀念を明瞭ならしむるにある。此の點に於いても余は一種の樂天家であり、理想論者であることを否定しない。

以上述べたるが如く、マルサスの人口論は人間を單に一個の動物とのみ見たる點に於いて誤つて居る。故に人間が人間としての理性、併びに意思の發達と共に、所謂人口法則は訂正されなければならなくなる。マルサスの議論の三大部分即ち第一、人口の繁殖力は食物の增加力より大である。第二、食物の增加は人口の增加に基くものである。第三、將來に於いて人口は過剩になるだらうの三つの内最初二個を是認する經濟學者にして、尚ほ第三の部分を誤謬として否定するのは、此の間の消息を語るものではあるまいか。マルサスの人口法則は經濟學上のみの法則ではない。寧ろ一個の自然法則と見做す方が妥當であると思ふ。故に單に人類の自由意思の存在を認める文化を對象とする科學に於いては、人口法則の價値は著しく減ぜざるを得ない。これ一方にマルサスの人口論を以つて過度に推賞する者あると共に、他方極端に反對する者のある所以ではあるまいか。

八

以上大體余が本論文に於いて述べんと欲したところを論じ得たと思ふ。然し乍ら而も尚ほ何等解釋を與へ得なかつたことの多いのを悲まなければならない。殊に余が思索の未だ充分でなかつた爲めに徹底的に斷定することを避けた點が少くない。其の爲めに尚ほ一層曖昧なる斷定に止まり、何等解釋を與へなかつたと同樣な結果を生じたことを知る。殊に一方文化價値の立場よりしてある種の人間の生存權を否定し乍ら、他方何人も各個人の生存の價値に就いて云爲する權利を有せぬと云ふのは、文化價値が當爲であつて、吾人の生活の基礎づけであると云ふ點からして、論理的には何等矛盾しないで考へることが出來るが、實際問題としての解釋を與へ得たとは考へられない。

吾人自身の個人的生活の内に於いても常に矛盾と撞着とを感ずるが如く、社會生活に於いても、國家生活に於いても、又同樣に矛盾を經驗する。平和を稱へる口の下から軍備を擴張するのは世人の見て異とせざるところである。何が故に此の矛盾が惹起されるか。矛盾を單に矛盾として平氣に看過し得る良心の鈍感なる者にとつては、恐らく何等の問題ともなるまい。然し乍ら少しく冷靜に觀察する者は是等の矛盾に對して、少くとも何等かの解釋を求めるであらう。余は社會生活に於ける矛盾も個人生活に於ける矛盾も共に現代の各個人が充分に人間としての自覺に到達して居ないことに起因すると考へる。本能的衝動生活と自由意思的理性生活との混淆が多くの矛盾を生じたものであると解釋する。少くとも個人として何等かの統一を得たものは此の間何れかに歸着點を得た者であると云ふことが出來やう。今こゝに人口論に關してある一つの考案を試みるに當つても、ある一つの國家としての、若しくは個人としての人口問題に對して徹底的な解決を與へ得ないのは、蓋し普通一般の個人なり、國家なりが其の何れの見地をも棄て難い現在の狀態にあるが故ではないのかと考へる。余はこれ等の點に關しても尚ほ多くの考證を缺く。殊に學究的研究は本論文と同樣、他日の考證を以つて補足さるべきところである。唯此の論文は一つの試みとして、余自身の思索が幾分か展開された點に於いてのみ滿足し得るに止まる。（大正九年九月廿一日稿）



世界人心の不安動搖に對する悲觀說樂觀說

世界不安の意義及將來

室伏高信

一

社會主義者は早くから戰爭に目をつけてゐた。第二インタナショナルの人達は一九〇七年のスチュットガルトの會議で戰爭についての重要な決議を發表したことがある。それは戰爭が始まりそうな場合には先づ極力これを未然に防止すること、そして若し未然にこれを防止することができなかつたとすれば、既に始められた戰爭――戰爭によつて生じた政治的及經濟的危機を利用して資本家階級に挑戰してその資本家階級の權力を廢止するために奮鬪するといふの決議であつたのである。この決議は一九一二年の第一次バルカン戰爭の危機が全ヨオロッパを脅威しつゝあつた時にも各國の社會主義者によつて明確に支持せられたのであるが、一九一四年の世界大戰の始まる時になると社會主義者の態度のうへに重大な變化のきたとはどうも疑の餘地がないように思ふ。勿論この戰爭の始まる前にブラッセル會議があつてフランスからはヂョウレス、獨逸からはハーゼが出て戰爭を防止すべきとをそれ〴〵誓言したのであつたが、ヂョウレスは惜しい哉途中で殺されてしまつた。ハーゼは變節してしまつた。そして獨逸では最後まで社會主義の原理のために一直線に戰つたものはカール・リープクネヒトとロオザ・ルクセンブルヒといふことになり、フランスではとう〳〵ヂョウレスの紀念碑を巴里に殘したといふに止まつて、プレフアノフであるとか、カウツキーであるとか、ゲードであるとか、ハインドマンであるとか、兎も角、戰爭前までは正統派のマルキストとして、非安協的の社會主義者として世界的に名聲を走せてゐた各國の代表的の社會主義者がみな愛國者になつてしまつたのである。レニンの惡口を眞似ていふと「ソーシャル・ショウビニスト」となつてしまつたのである。こうしてみなそれ〴〵に、プレ

ファノフはロシヤのために、カウツキーは獨逸のために、ゲードはフランスのために、ハインドマンは英國のために、みな戰爭の口實を考へ出すことに苦心するといふ有様であつて、スチユツトガルトの決議は忘れられてしまつたのである。彼等はこの戰爭が彼等の各國にもちきたした政治的、經濟的危機を利用して資本家階級の權力を廢止するために奮鬪することの代りに、ロシアのザーリズム、獨逸の軍國主義、英國の資本主義、フランスの農民的反動主義と彼等の社會主義とを如何に接續すべきかといふことに腐心してゐたのであつたのである。だからこの世界戰爭の最中においては社會主義は全く愛國主義であつたのである。しかし仔細に各國の內部について見ると、矢張りこの戰爭中に今日の世界的不安の火は小さいながらにみな燃えてゐたのであつて、社會主義の元老連の妥協的態度を見て社會主義は死滅したと見るとはあまりに皮相の觀察であることを免まれないのである。ロシアのボルシェヴォズムだとか英國のショツプ・スチユアート運動であるとか、獨逸のスパルタクス系であるとか、伊太利社會黨の非戰運動であるとかいふものがそれであつたのである。ただこうした革命の小さい火は戰爭中は各國に傳來的な愛國心のために壓迫されてゐるのほかはなかつたのであつて、第二インタナショナルの謂ふところの戰爭によつて生じた政治的經濟的危機が資本家階級の權力廢止のために利用されないで、あべこべに社會主義的革命の勢力を消滅せしめるために働いたのである。實際獨逸ではフォルヴェルツが出されなくなり、英國ではデーリー・ヘラルドが發行禁止になるといふようなわけでは社會主義者のプロパガンダもやり憎かつたといふ事情もあつたとしなければならないわけであつた。しかしロシアでは戰爭の途中から、その他の國では戰爭後において事情が一變してきた。即ち戰爭によつて釀成された政治的及經濟的危機が社會主義者によつて資本家階級の權力の廢止のために利用せられる時がもちきたらされたのであつた。

二

普佛戰爭の後にはパリー・コムミユーンがあつた。日露戰爭の後には一九〇五年の革命があつた。この二つの革命運動はみな機運の未だ充分に熟しなかつた爲に失敗に終つたのであるが、コムミユーン――一九〇五年の革命――ボルシェヴォキ革命――とこう數へてくると失敗に終つた革命も決して無意義に終つたのではない。實際この二つの革命は何れも二ケ月と續かなかつたのではあるがそれが歷史的にもつてゐる革命的意義は決してフランス大革命にも劣らないものであつて、この二つの革命

を考へることなくしては今日のボルシェヴヰキ革命を考へることは到底できないのである。マルクスが『フランスにおける內亂』の最後でいつてゐるとほり、パリー・コムミユーンは各國の勞働運動の側からいふと、『永久に紀念さるべき新社會の光輝ある先驅者』であつたのである。一九〇五年卽日露戰爭の產物として起つたロシヤ革命もまたそれが世界革命のうへに與へた影響は決してパリー・コムミユーンに劣らないものがあるのであつて、この革命において發達したソヴヰエツトの制度こそ實に今日のボルシェヴヰキ革命の核心をなしてゐるのである。この二つの革命は歷史上において、勞働者が戰爭を利用して資本家階級の權力を廢止するために努力した最も顯著な實例であるが、世界大戰もまた結局においてそれ等の歷史的敎訓が繰返されないではゐなかつた。卽ちこの世界大戰によつて生れた政治的經濟的危機が資本家階級の權力の廢止のために勞働者によつて利用されつゝあるとが現代の世界的不安そのもので、社會主義者の側から見るとこの世界的不安こそ實に勞働者階級の歷史的使命の一過程であるとされるのである。この世界的不安が一時的の成敗の問題として見ればどういふ結果に陷るかは何人にも豫言のできないことであるが、これを一八七一年、一九〇五年の二度の勞働者によつての歷史的革命に比べると事情が全然一變してきたことは否みがたい事實である。といふのは一面において資本主義の爛熟がその極度に達してきたとともに勞働運動が各國において堅實な發達をとげてきたのであつて、社會主義にとつての主觀的及客觀的の二要素が可成りの成熟の度合ひにまで達してきた事である。嘗つてマルクスはその『フランスにおける內亂』のうちで、パリーの勞働者は、普魯西軍隊がフランスの二州を獨逸に併合した勝利に面して、全世界の勞働者をフランスに併合したといふ意味のことを述べたことがあるが、このマルクスの言葉は誇張に失してゐること勿論であつて、パリーの勞働者が世界の勞働者をフランスに併合することができなかつたればこそパリー・コムミユーンは失敗に終つたともいへるのであるが、マルクスのこの言葉は今日のロシヤの勞働者において可成りの程度に實現されてゐるのを見る。卽ちロシアはボルシェヴヰキ革命によつてその領土を少さくしたにしても、英國とフランスの政府によつて代表せられてゐるヨオロツパの資本主義の面前において世界の勞働者をロシアに併合しつゝあるからである。實際にボルシェヴヰキ革命も、もし西ヨオロツパにおける勞働者の應援がなかつたとしたら、今日まで權力を支へてゐることは無論できない筈であつて、ボルシェヴヰキ　命の成功は、直接間接に世界勞働者の力であるといはなくてはなる

まい。就中波蘭問題でチャーチル流の政治家が躍起になつて、再戰爭の宣傳が盛んに行はれてゐた時に、英國の勞働者會議がこの戰爭を未然に防止したことなぞは勞働運動の威力が最早や決して資本家的權力の下風に立つてゐるものではないことの動かし難い事實であつた。私が今この小さい論文を書いてゐる時に英國の炭坑夫罷業が始まつたといふ電報が見えてゐるのであるが、この炭坑夫罷業の結果の如何にかゝわらず、百萬の炭坑夫の政治的社會的威力を思ふものは今や英國においては社會革命が大半成就せられたといふことを思はずにはゐられないであらう。嘗つてオーター・バヂョットは英國の主權は下院のうへにあるといふことをいつたが今日ではその下院のうへにあつた英國の主權が大半勞働者會議のうへに移つてゐることは何人も考へずにはゐられないのである。この世界的不安の厳然たる事實に面して、新社會が既に生れつゝあることを悟ることの出來ない人達はやがて狼狽によつてのみ酬ゐられべき人達である。

三

産業革命が避けられたとしたら社會革命は避けられたであらう。此意味からいつて今日の世界的不安は既に産業革命とともに醸成されつゝあつたものであつて、その長きに亘つて醸成されつゝあつたものが今やその總勘定の時に際會しつゝあるのである。卽ち今日の世界的不安は實に資本主義の胎内に養成されてきたものであつて、そはカール・マルクスが製造したものでもなく、ニコライ・レニンがこれを販賣してゐるわけでもなく、たゞ資本主義によつて製造され、資本主義によつて養成され、そして資本主義自身の崩壞へと導いたのであるから、この世界不安の厳然たる事實は歷史の生産物であつて、この事實に面するものは凡ての人が歷史家の態度をとらなくてはならないのである。

四

舊社會から新社會への過程は常に混亂を導くのであつて、この混亂そのものに眩惑されて、その混亂の歷史的使命と倫理的意義とを考へることのできない人達は、幷にその舊社會において特權の享有者であつた人々は、常に大なる失望にと陷るのであり、また失望に足るだけの幾多の混亂が存在するのである。ロシアのボルシェヴィキ革命のごときものもかくのごとき人類の最も不幸な狀態に立つてゐるものであつて、ボルシェヴィキ制度そのものは人道的愛念と民主主義的自由の精神とが堪へ忍ぶにはあまりに殘虐であるのであり、今日の人類の進歩の程度

においても尙ほかくのごとき低級にして殘虐なる制度の存在することは人類の恥辱であるのであるが、しかし人々がたゞかくのごとき混亂と不幸との一面にのみ囚はれてゐる間は、人々は更により以上の虐政の存在してゐることを忘れてゐるのである。またそして混沌と不幸のうちにも新社會の曙光が既に見えつゝあることに氣付かずにゐるのである。ボルシェヴヰキ革命の最中においてロシアの全文化的生活が滅亡しつゝあることを歌ひつゝあつたものはマキシム・ゴルキーであつた。しかしロシアの全文化的生活が滅亡しつゝあると歌つたゴルキーは決して之によつて世界の文明の終焉を豫言したのはでなくして、たゞ昨日の世界の覆滅を意味してゐるのであつた。ゴルキー曰く『今やその日がきた——虛僞、昨日の支配者に對する恐怖すべき勘定の日が!』——今日の世界的不安は『昨日の虛僞』に對する勘定である。世界的不安とはこの勘定の始まつたことを意味するのであつて、またこの勘定の一面は新社會の萌芽が萌えつゝあることを意味するものである。然りそは新社會の萌芽であつて、ウヰリアム・モリスが新社會の曙といつたその曙はもう世界に——混亂と恐怖と不幸とのうちに赤くなつてゐるのである。だから私たちは混亂は避けたい、しかし混亂に失望するものではないのである。何となれば私たちはこの混亂の歷史的使命を知つてゐるからである。この混亂の歷史的使命を指導するものがプロレタリア階級である。

五

プルジョア文明は決して最始からその一切が腐つてゐたものとはいふことはできない。そは人類に自由を敎えたことにおいて不朽に貴重なる光をもつてゐるものである。私たちがゲーテや、シルレルや、バイロンや、ベートベン、そしてシエレイ等の名を思ふ時に、どうしてブルヂョア文明の一切を土とともに葬りさることができるであらう。しかしブルヂョア文明は今や少くとも十九世紀をもつて、その使命を果してしまつたのである。ゲーテやシエレイやベートベンやシルレルやバイロンの名に感激を思ふ人がどうして今日の腐爛しきつた、殘虐な、卑劣な、横暴な資本主義に反感をもたないでゐることができるであらう。資本主義は今や歷史の名においてばかりではなしに道德の名において審判をうけなくてはならない時がきたのである。この審判の指導者がプロレタリア階級であることは前に述べたのであるが、この審判の指導者がプロレタリア階級であることは同時にブルジョア文明からプロレタリア文明への推移を意味してゐるものである。プロレタリア文明の指導原理は廣い意

味においての社會主義であることは何人にも異議のないところである。われ〳〵の言葉でいふとそは民主主義の完成を目的とするものであつて、この民主主義の完成のためには、民主主義の最惡の妨害者としての經濟的階級制度——從つて經濟的奴隷制度を撤廢することが最初の戰ひである。この戰ひの前衛に立つてゐるものはロシアの共産黨である。ロシア・ボルシェヴヰキについては前にも述べたとほりわれ〳〵の民主主義的精神の堪ゆるにはあまりに低級であり、あまりに殘虐であるのであるが、しかしこの現代勞働運動の最惡の體現——從つてプロレタリア文明の最惡の表現としてのボルシェヴヰズムは新社會の建設についての感激的の原理を包含してゐると見ることはできないのであつて、レニンはプロレタリア運動の現時の最大の指導者ではあるが、プロレタリア文明の豫言者としては彼れの頭腦はあまりに非創造的である。しかしプロレタリア運動の最惡の體現者としてのボルシェヴヰキ運動はかくのごとき缺陷をもちながらも、それを腐敗しきつた資本主義文明に比べたらどうか。就中これをザーリズムのロシアに比べたらどうか。そのザーリズムのロシアは權力と腐敗と苦惱とのロシアであつたに對しソヴヰエット・ロシアは少くとも腐敗のロシアではない。ザーリズムのロシアにおいて凡ての權力者が亂倫と壓制と賣國とに滿たされてゐたといつてもよかつたのに對し、ソヴヰエット・ロシアの指導者としてのレニンはパリーに於けるエーミーグレーとしてのレニンとしての生活をクレムリンにおいてなしつゝある質素な政治家である。ゴルキーがそのウエルズの書簡において記るしてゐるところによればレニンは正直であり、彼れの心はピユーリタンの心であるとのことである。何れにせよ、ロシアの舊王朝の政治家に比べてレニンが遙に多く道德的の生活を送りつゝあることは事實であり、またボルシェヴヰキの兵卒においても、彼等が世界の勞働運動の前衛者であるといふの誇りと、そしてかくのごとき運動に對する彼等の犧牲的精神——自己を自己以上の者に屈するところの敬虔的の態度と、それに對して絞取と利己的歡樂との以外に何等の道德的良心をもたなかつたザーリズムとを比較して見る時に、私たちはザーリズムからボルシェヴヰズムへの變化が決して全體としてのロシア人に、またそしてロシアの文化的生活のうへに、何等の退歩をも意味するものでないことを斷言しうるのである。就中『共産土曜』の制度のごときものは資本主義において見ることのできない高度の道德的生活の表現であるのであつて、これ等の道德的生活の存在は、混亂と不幸と、そして殘虐と壓制とのボルシェヴヰズムの間から倘ほ資本主義文明よりもより高度の文明が生れるであらうとい

ふことを豫言してゐるのであつて、プロレタリア運動はその最惡の形においてさへ、尙ほ一點の光を失はずにゐるのである。

六

カアペンタアは『文明、その原因と救治』の冐頭で、今日の文明が既に疾病期に入つたこと、そしてその疾病が、凡ての子供に痲疹と百日咳とが避けがたきものであるがごとくに、凡ての人種に避くべからざるものとなつてゐるといふ意味のことを述べてゐるが、現代文明は今や慥に疾病期に入つてゐる、その疾疾は救治すべからざるものであることが分つてきた。そしてその舊文明の廢墟のうへに既に新らしい文明が彼れ自身を置き換えようとしつゝある。然り、私たちは新らしい文明が古るき文明にとつて代らうとする戰ひの最中に立つてゐる。そしてこの戰ひの歷史的使命を解しつゝこの戰ひの進行を眺めつゝある。この戰ひの進行のうへに私たちは何等の悲觀すべき將來を認めない。否なそこに私たちはより高き道德的世界が既に幾分づゝかその片鱗を現はしてきてゐるように思ふ。その來るべき世界においての道德が消極的のものでなくして生產者的なものであることも既に現實として現はれてゐる。私たちは實に大なる創造への道として今日世界的不安のもとに置かれてゐるのであつた。この創造的の世界において學問も藝術も、一切の文明が頽廢するであらうと考へることのできるものがあるであらうか。否、學問も藝術も、一切の人間の寶が、資本主義的價値の世界と兩立ができなくなつたのではないであらうか。科學者としてのフレデリック・ソデイはその近著の『科學と人生』のうちで、科學について今日までの個人主義的方法が科學を豐かにする所以でないことを說いて、そして科學は現實に且つ實行において、共產主義的のものであるといふことを忘れてはならないといつてゐることは、私たちに大なる響を與へる(F. Soddy, Science and Life, pp 2-3)

世界人心の不安動搖について

東京女子高等師範學校長　湯原元一

一般に言へば猛烈なる社會的生存競爭、これが第一に人心を不安動搖せしむる原因であつて、それに經濟文化進步に伴ふて增大する人間の慾望が加はつて、益〻其傾向を甚しくする。であるから、實に人心の不安動搖は文明國民の生活に附物である

と言つてよい。其證據には新興國ほど國民は進取的であるが、何となく落着がない。戰前の獨逸人など其一例であつた。斷えず興奮狀態を示して少しも餘裕がなかつた。今日では米國人が一等騷々しい。代はりに突進又突進で、勢力絕倫で、盛に新事業を興こす。昔は日曜日には教會に參詣して、心身共に一日の安息を得たが、今では此風も衰へて、安息は唯睡眠中だけでそれさへ十分でなく惡夢に襲はれ勝ちである。歐洲人でさへ紐育邊に半歲も居ると、神經衰弱になると言つて居る。吞氣な日本人などは最も落着いた英國人に交つても、忙殺される感がある。併し、生存競爭の場裡に立ちて落伍しない爲めには、元氣も旺盛で、身體も强健で、斷えず油斷なく奮鬪せねばならぬ、そこで、人心の不安動搖といふことは、文明生活の變態でなくて、寧ろ其常態である。此不安動搖の狀態から逃れるには一切の慾望を棄てゝ無抵抗主義でもとるの外はない。

併し、こゝに問題として提供されて居るものは、斯んな尋常の事ではない。大戰に由つて起れる物質的精神的の大變動に伴ふ人心の不安動搖に關してである。負けた者は勿論、勝つた者も、大戰の創痍から未だ癒へない。人生の慘事恨事を嘗め盡した人心は深く傷けられて、悲哀、怨恨、憎惡、失望等を以て充されて居る。其調子は此に根底に於て狂ふて居る。從來慣れて來た秩序慣例等は多く破壞されて、世の中が一時に變つて、何人も只迷ひの有樣である。民衆の勢力は增したが、權威の所在がわからない。昔は戰勝者は戰勝に就て神に感謝し、戰敗者は戰敗に關して神に懺悔して、戰爭の始末を附けて精神的に新しい生活に入つたものであつたが、今回はそんな事も出來ない。戰爭は濟んだやうで、實は濟まないも同然の狀態に在る。否、それのみでない、戰爭中は敵に面前して、努力の目標が定つて居たが、今日は敵が何處に隱れて居るやらわからない。

勝者は敗者の復仇を恐れて、條約に依りて表面負擔させた以外に內密に其再興を妨ぐる工夫をして居る。佛國の如きは其最たるものである。英國が獨逸に同情を寄せて居るのは佛國の心配の種となつて居るが、英國は又英國で獨逸人が其植民地に入込むのを頗ぶる警戒して居る。東洋に來る獨逸人は寄港中に上陸を許さぬさうである。伊太利も其將來に就ては大に苦悶して、內々獨墺の感情を和げんと努めて居る。敗者の獨逸の蕭條さ樣の一方ならざるは言ふまでもないことである。其他南歐諸小國の內情も一向に安定して居らぬ。獨立は許して貰つたが、ウィルソンの睨も餘り利かなくなつた今日では、何日又敵にやられるかわからないので、色々の緣故を考へ、聯盟を作つて、自衛の途を講じ始めたので、大體の觀察では、民族自決は出來ても、

民族自主が出來る否やは未だ疑問である。若し其獨立に强大國の後援を要すとすれば、世界は大戰前と變はりなく、依然小數强大國の持物である。二百萬にも足らぬ人口を有する、地理の先生でもなければ知らぬ程の未開の小國が一國一票の權利を得たとて、それだけの權威を加へるであらうか。實力なきものゝ侮られるのは今も昔も變りはあるまい。斯んな國は昔の日陰物であつた當時の方が、却て幸福かも知れぬ。

民族自決主義の唱へらるゝや、他國の羈絆を脱せんとするものゝみならず、自己の本國より分離獨立せんと企つるものも現はれた。朝鮮や愛蘭は其著しい例である。ウイルソンは此主張に依つて敵の國を解體せるばかりでなく、味方の家にまで火を附けた。朝鮮に對する遣口は未だ恕するとしても、愛蘭に對する仕打は實に露骨無遠慮である。戰前まで運命と諦めておとなしくして居た幾多の小民族までが、急に獨立騷ぎをして、陰謀暗殺の多きは未だ曾て見ざる程である。戰時に於ける世界の人心は陽險であつたが、平時に於ける其れは陰險になつた。何人も大暴風雨一過後の一點曇なき晴天を見んと樂んで居たが、事實は全く豫期に反して、風雨は今以て休まない、空色は依然暗憺として居る。軍備縮少處か、內々其擴張に努めて居る國もある。要するに、今度の大戰ほど割の悪いものはない。勝つても勝つた顏することも出來ず、又してもならぬ。昔のやうな凱旋門を造つて國威の發揚に誇つた戰勝者得意の愉快さは味ふとしても味はれない。加之、若し、そんな事でもしたら、列國から世界平和の精神に背くものとして批難される。

更に各國國內の事情を見れば、何れの國でも多少に拘はらず赤化の危險を感じて居る赤化は有史以來の國家社會の組織を根本から覆さんとするのである。無政府主義者か、非國家主義者を除いては、是れには何人も少からざる恐れを抱いて居る。而して是れが却て侮り難い勢力である。露國は赤化し盡し、獨逸も伊太利も大分赤色に染んだ。英國にも、米國にも火の粉が飛んで居る。富の生產には資本勞働二者の協力が必要とすれば、利益の分配は公平ならざるべからずといふ理由で、從來勞働條件の改善が唱へられたが、今日では其上に大戰に際して勞働者が軍國に寄與した多大の貢獻に對して大に報ふる所がなければならぬ。かくの如くにして勞働問題は經濟問題より一進轉して政治問題となり、產業の管理權を一切勞働者の手に收めんとする運動さへ起つて、資本家と勞働者との位置は將に顚倒せんとして居る。加之、露國は言ふまでもなく、獨逸も、伊太利も、勞働者の爲に其政治の方針を左右されんとして居る。其他の諸國でも勞働者の機嫌を損じては何事も出來ぬといふ有樣である。

是れ實に古今未曾有の大變動である。併し、平和條約に依りて勞働問題は特に國際的に議定することになつた以上は、此問題は決して一國内に於ける一時的のものにあらずして、世界的に永遠に亘りて攻究解決せねばならぬものである。今や各國は恐るべき赤化の策原地は露國のソヴイエツト政府にありとして、之さへ倒せば、赤化の危險去るやうに考へて居るも、赤化の危險は勞働問題と始終して、勞資兩者が互に反目して相爭ふ處には必ず赤化の危險がある。それで、たとへソヴイエツト政府は倒れても、世界の將來は斷えず赤化の危險に脅かされることを免れない。所謂レツト・ヒステリイ、是れがこゝ暫らくの間は各國々民の一般に罹る社會病であらう。

然らば、將來世界の運命は何うなるか、悲觀か樂觀か。勞働者の跋扈は資本家の專横と同じく、自他共倒れの結果を齎すべきは、鏡に掛けて見るが如しである。管理の能力なき者が產業を管理しても、甘く行かう筈はない。元來、今日までの經濟論は動もすれば生產の爲に分配を忘れんとしたので、遂に勞働者の激昂を來したが、今や又其反對に、經濟論は分配の爲に生產を忘れんとして居る。分配も宜しきを得ないのも惡いが、生產の衰退は即ち富の減少であるから、其結果に於ては、資本家も勞働者も結局は共に大打擊を被るのである。如何なる立派な經濟上の主義でも、只主義として唱へただけでは何にもならぬ。之を實行して、それが爲に一層多くの幸福が得られねばならぬ處が、それが得られぬとあれば、そこに其主義は命脈を絶たれるのである。今日の處では共產主義など議論としては倘抑々に氣焰萬丈だが、併し、之を實行して見た成績は、一向面白くない。其前途の如何は略ぼ推測が出來やうと思ふ。資本家も其行動を戒むるであらうが、又勞働者自らも反省悔悟するの時機が早晩來るに相違ない。抑々爭奪は物あつて後の事で、物が無くなれば爭奪のしやうがない。さうなると、又出直して先づ以て大事な物を造り出すことに骨折るやうになる。そこで、今日の勞資の激戰も行く處まで行けば何うにか落着くに極つて居る。

勞働者の政治も同樣で、政治の能力なき者が甘く一國を治めて行くことは、到底困難であらう。現にそろ〱專門家を採用して其援助を受けて居るのは獨逸ばかりでない、露國でもハンチング連だけでは本當の政治は出來ないので、嫌やでも官僚の古手を賴んで、實際の仕事をやらせて居るではないか、而してそこに、既に反動の氣運が兆して居るのである。官僚の專制政治も面白くないが、土方の親分の威壓に屈服するよりもまだ優しであらう。ソヴイエツト政府の運命もさう永くはあるまい、何れ其内には穩健な政府が起つて之に代はるであらうと思ふ。

各國の國際關係、是れは何時まで經つても大した變りはあるまい。世界大戰の再びせられることは當分あるまいが、さらばと云つて、世界的永遠の平和を樂むと云ふ所謂黄金時代は矢張り一種のユトピヤに過ぎない。各國々民は今回の大戰を經驗してどれだけ悔悟したであらうか、是れが既に疑問である。局外から見れば、折角に築き上げた文化の精神をむざ／＼破壞した戰爭の慘害は、實に此上なく恐るべきものだが、當の本人達は何物とも交換しない自己の命をも棄てゝかゝつた位であるから、そんなに苦痛とも思つて居ないであらう。思慮でも增したか、身體でも良くなつたかと云ふに、是れもさうでない。片眼の人は多くなつたが、三眼の人は出來ない、片脚の人は多くなつたが、三脚の人は出來ない。彼等は依然として人間である。名利の心も失せぬ、復讐の念もある人間である。況して宣戰當時に勝手に附けた理窟は今も尙正當と信じて居る。されば、悔悟處か、或は益々非を遂げんとする禍心を包藏して居るものも少くないやうである。此依然たる人間に向つて、所有慾望を抛つて創作慾望だけで滿足せよ、と說法して見ても、何程の效果があるであらうか。人間は見様では無限に向上發達するものである、それで、遂には神に近いものになるかも知れぬが、今日の處では未だそんな域には達して居らぬ。まあ、大體に於ては大戰前と多く變はる所ないものと視て、各自國家の[illegible]を行ふて行くのが安全の策だと思ふ。人心の不安動搖は世界がこんな人間から出來て居る以上は、之を絕對に鎭靜に歸するとは不可能である。それで、寧ろ此不安動搖を善用して、所謂自彊息まざる進取的元氣を養成するが文明國民の宜しく努むべき最大急務である。

現實悲觀と理想樂觀

土田杏村

一

現今世界に蟠つて居る人心の不安は、歐洲の大戰が未だ其の到達すべき最終の點に到達して居ない事を示すものである。カアペンタアの『產業自由の方へ』(Carpenter, Towards Industrial Freedom, 1917) の序言には、忌憚なく現代歐洲の虛僞を暴露し、時勢は當然『理性と正義との上に置かれたる新らしき社會秩序』を要求する樣に進んで居るにも拘らず、各國の政治家政策家は『地震の眞直中にあつての賭博者の如くに、古い凡俗のゲームを遊んで居る』と嘲笑して居るのである。而して彼は此の斷言（アッサアシヨン）を爲す爲めに、先づ羅馬史家フェレロが Il Seccolo

に書いた論文の趣旨を引用して居る。フェレロの言葉によれば『大いなる事が世界に於て成熟しつゝある。一端より他端へ、從來は且つて見られる事の無かつた最も大いなる、若き又は試み(ordalia)が、國家に就き、王朝に就き、國民に就き、政黨に就き、宗教に就き、哲學的教理に就き準備せられてある。其れは恰も一般の審判の日の如し。世界的の冠と力とは、彼等の古代の光彩と、彼等の偶像と、彼等の祭壇と、及び彼等の信仰とを以て、明かに泥土に委せられようと爲しつゝある。』(Carpenter, pp. cit. pp. 9-10.)何人か此の言葉の大膽にして而かも唐突なるに驚かないものがあらう。しかもカアペンタアは更らに種々の事實に就て歐洲の今後の趨勢を豫言して居るが、其の豫言は著々として適中するのを我々は如何にしても閑却することが出來ない。余輩は敢てマルクスの唯物史觀を取る譯では無いが、人心の不安を誘起するもの、恐らくは我々の生活の經濟的脅威に過ぐるもの他に無いであらうと考へる。大戰は終つたとしても、歐洲各國の國民生活は、寧ろ戰時にも優つて悲慘なるものとなつて居る。此の慘苦の淘冶を受けて居る間に、國民は益々現代文化の根本的立脚點に疑惑を重ねて、「理性と正義との上に置かれたる新らしき社會秩序」への仰望は火の如くに熾烈となつて來る。此の仰望の勢力が、例へ一度や二度は古き政治家政黨家の最も凡俗なるゲームによつて沈壓させられて居るとしても、凡そ世に潜勢力ほど恐ろしいものは無い。此の抑壓と禁斷とは何十年の運命を掌握することが出來るであらうか。此の舊と此の新どの爭鬪こそは、即ち現今世界の人心不安となつて、至るところの世相に表現せられて居るものの正體であるのだ。

二

戰後歐洲の經濟界の狀勢に就て、我々に敎へてくれた文献は、其の著者の我國への來遊と同時に最もポピュラアとなつた、ヴアンダアリップの『歐洲の狀勢』(Vanderlip, What Happend to Europe, 1919.)を始めとして、フウヴアー、スタアリング等のもの等可成りに多數あるのである。(勞農露西亞の狀勢を記述した文献を一先づ看過するとして)併し此等の論述の中で余が最も推服するところのものは『エコノミスト』誌の發行したパンフレット『歐洲に於ける經濟的恐慌』(The Ecomic Crisis in Europe, 1920)であつた。同書の趣旨は未だ何處の雜誌へも紹介せられて居ない樣であるから、此處に其の論述の結論だけを引用して、歐洲に於ける人心不安の根本條件を指示して置かう。同誌は言ふ悲觀論は是れである。事柄はよりよくなつては居ない。其等は寧ろより惡しくなりつゝある。而して若しも何

事かゞ急速に爲さるゝに非ざれば、全歐洲を蔽うて恐る可き困厄があるであらう。其れは何等か殆ど避ける事の出來ないものである。併し歐洲に困厄があるのみならず、又母と子と老人とは飢ゑと寒さと及び肉體と精神とを保護す可き日常必需品の缺乏によつて死滅するのみならず、其處には流血と暴動と內亂との新らしい破裂があり、其れは惡病の如くに中部及び西部歐羅巴のすべてを蔽うて擴がるであらう。而して恐らくは、我國に於ても我々自身の安全と平和とは脅威せられる事であらう。』あゝ此れは又何といふ危險なる豫言であるか。『エコノミスト』誌は石炭、運輸、食物、原料品、信用、金融の六項目に就き、事實的に可成りに詳細に點檢して、此の豫言の已むを得ざる所以を論斷して居る。余輩は其の論述の總べてを紹介しようとは思はないが、例へば其の中に引用せられたマツク、ドゥーガルの獨逸に於ける農業狀態報告の中に、伯林の貧民階級が常食にして居る馬鈴薯は、恐く腐敗したもので、英國の農民は恐らくは此れを自家の家畜にすらも與へようとは夢想せざる可く、何人も此れを人間の食するものとは信ぜないであらうと記述せるが如き、中部歐羅巴に就てのウヰリアム、グウドの報告に、セルビアに於ては、五十萬人の父無き孤兒あり、彼等の大部分は營養不良と捨て曝しとの爲めに慘憺たる狀態を呈し、セルビアの人口の三十五％は結核患者となり、眼病の如きは最も至るところに見られ、匈國に於ては、ブダペストの病院の入院患者二萬一千の中、小兒は五千を超えて居ると記述せるが如き、國民の文化と體質とが此等諸國に於て今後如何に頹廢し行くかを思ひ、我々の心膽を寒うせしめるものがある。更に同誌の論ずるところに隨へば、此の如き經濟恐慌は、以上六項目の全般に亙り、しかも六者は互に相關の關係を爲して居るが爲めに、一は他の原因であると同時に結果であると言ふ如き、狀態となり居り、起き上るに非常の困難があるといふ。手つ取り早く例を以て說明して見れば、生產を盛んにしようとすれば、原料品を外國から輸入することが必要であり、原料品を輸入するには其れだけの金の準備を必要とするが、とても其れだけの準備が無いから外國の借款に待つ外は無い。併し外國の借款には其れだけの信用を要し、此れの擔保となり得る生產事業の存在することを必要とする。斯樣にして原因はぐるりと一巡りして了ふのである。斯ういふ相關作用を以て落ち込むだけ落ち込んで了つた現在の財界では、今後の形勢益々惡化して行く外は無く、起き上りの見込みは當分皆無だと言つて差支へが無い。『エコノミスト』誌は此れが唯一の救濟策として、生產を增大し、消費を節約することを徹底的にやらなければならぬとして多少の細案をも出し

て居るが、併し此れとて前の相關作用ある以上、容易に適用の出來るものでは無い。又其の細案も現在の資本家階級は中々に承諾しさうにも見えないものであるとして見れば、實行案として採用せられる事さへ困難であらう。然らば其の救濟は殆ど不可能なるものとなり、時勢は同誌豫言の方向へ遠慮も無く陷ち込んで、世界全體の人間の生活が、一度は夢想だにして居なかつたほどの慘憺たるものとなり、運命の出來るだけの徹底をやつて見るより外に行き方は無いであらうと思ふ。此處に至つて余輩は現今の世界的人心の不安は、其の出來するところ頗る深く、到底一朝一夕に救濟せらる可きもので無く、今後に亘つて益々不安定のものとなり、思想は更らに惡化して、當路者の最も嫌忌して居る危險思想などは、遠慮會釋も無くあちこちから飛び出して來るに相違ないと考へる。吾人が其の著眼をひたすら現實世相の上に置いて居る以上は、此の狀勢は將來に亘つて誠に悲觀せざるを得ない恐る可きもので無くて何であらう。

三

蒔いた種は刈り取らねばならぬといふ言葉がある。我々は今や正に歴史の總勘定をやつて居るのである。危險思想を生んだものは危險社會の外の何物でも無い。我々も此の點も不安なる生活の脅威に遭ひ、此の不安なる人心の動搖を眼前に見て居るが、余輩はさうした悲痛の生活の中からして、何と無く自由な伸び々々した、萬事が自分の意のまゝになると言つた風な、高かに歡呼の聲を擧げたい悅びの情緒が溢れて來て居ると告白せざるを得ない。なほ換言すれば、文明評論家としての批評が、遺憾無く現實の人間の動きの中に表現せられ、社會人としての要求が殘るところ無く社會の習慣と道德と制度とに反映せられて來る、生き甲斐ある人生は、かうした社會經過に於てゞなければならない、我々は批評の可能なる、此のプラスティックの社會にあつて最もよく自己を發揮することが出來るといふ愉悅を禁ずることが出來ないのである。現實悲觀は即ち理想樂觀である。現代の人心が漸く荒廢したと言つても、余輩は毫も此れに失望するもので無い。遠慮も無く古い制度に批評を加へる所謂危險思想が諸處方々に持ち上り、所謂社會運動が頻繁となり、所謂外來思想が海の彼方からひた／＼と我國へ押し寄せて來たとしても、余輩は寧ろ此れを慶す可きの事柄として觀察して居る。何故なれば此等の思想や運動によつて危險を感ずる樣な道德や制度や地位ならば、どし／＼倒れて行つて何等の差支へも無いからである。我々は捨つ可きものに少しの未練をも持つてはならない。かうした試煉に遭遇しても、何等變革を加へられ

ない信念や德義心やは、卽ち我々の準乎として把持す可き信念であり德義心である。かうした批評によつて解剖せられ、新らたに建設せられた制度や地位やは、卽ち我々が新らしい歷史に準據し、新らしい生活要求に立脚しての、完全なる自己表現としての制度であり地位である。其れを知らない古い政治家政策家が、凡そ現代を救濟す可き何の抱負を持ち、何の責任を持つか。怪むし可きの限りである。

文化とは余輩が從來何度と無く論じ來れる如く、存在へ價値の內在した第三世界である。其れはリッケルトの所謂價値關係(Wertbeziehung) の世界であつても、所謂價値判斷 (Werturtheilen)の世界では無い。文化は何處までも歷史といふ流動する現實世界の上に立脚して居るのである。隨つて此處に制定せられたる惡法があるとしても、此れが法律として其の社會に妥當して居る以上は、其處には法律的文化世界が成立して居ると言はなければならない。又現在の資本家制度、賃銀制度、貨幣制度等が、或る論者の批評する如くに、甚だ我々の價値意識に背反するものであるとしても、其れが我々の經濟社會であるとして一般に認容せられて居、又此の社會の外に我々の經濟生活を爲す可き場處が無いとするならば、此れも立派に一の經濟的文化世界を構成するものであると言はなければならない。要するに其の文化世界が價値によつて充實せられ盡して居ると否とを問はず、兎に角何等かの價値の觀點に立つて觀られ得るもの、或は其の價値によつて批判せられ得るものであるならば、此れを文化の世界なりと呼ぶのである。隨つて價値は批判の原理であるけれども、文化は何等此の種のものでは無い。否な寧ろ我々は更に進んで、價値によつて文化を批判することが必要である。此く文化を批判することは、卽ち我々の所謂文明批評であり、此の批評によつて、歷史に立脚する文化は次第に其の理想を具現する文化主義的進みを爲すことが出來る譯である。

併し歷史に立脚する文化は、其れが全然理想的のものであると無いとに拘らず、兎に角其れが文化であるとして社會意識に認容せられて居る限りに於て其の文化の流通する一つの力を有するものである。例へば貨幣を使用することは經濟的文化價値の觀點より見て、其れが理想的であると否とを問はず、現在の經濟社會に生活する限りに於て、全く不可避的なるが如きものである。此の流通の力は屢々價値批判の力に對抗する。なほ進んでは、社會に生活する各人は、知らず識らずの間に此の文化意識を以て價値意識であるかの如くに誤認するやうに習慣づけられて了ふ。而して若しも何ほどかの價値意識の上より此の現實文化を批評する思想がある時には、此れを危險思想と目するに

至る。併し眞實の危險思想とは此くの如きものに非ずして、價値意識を傷害するものこそ其れであると言ふ可きである。現に角現實の文化意識の流通の力は、我々を驅つて文化の上に謬誤の價値判斷を爲さしめる樣習慣づけ、我々が此の習慣の力を制服し、良心より出でたる自由の價値判斷を爲すは容易で無いのである。併し其の如き傳統の拘制を離れた自由の價値判斷は、今の如く過去の道德と制度と地位とに恐く疑惑の眼を差し向けた時に、最もよく其の機能を發揮する事となつて居る。昨年來我々文化批評に從ふものの思想が著しく急進的となり、保守論者は進歩論者に、社會改革家は社會主義者に、社會主義者はサンディカリストに轉じたとさへ言はれて居るが、此れ偏へに批評家が其の傳統の拘制より理性を解放したに外あるまい。此れを社會に就て考察するも、將た亦余輩自身の信念に就て内省するも、我々は從來合理的であると思惟して居た多くのものが如何に複雜なる不合理の纏綿する本體であると意識し出したか知れない。不合理なる傳統の殼を拔け出る、其處に我々は動搖する意識の苦悶を眺めるが、しかも其の動搖や不安や、價値意識の内容方面の事柄であり、價値の價値たる所以の形式方面では無い。我々は寧ろ此の動搖によつて、益々確實に理想の光輝を認識し、益々熱心に此れを仰望する許りである。若しも此處に人心の不安を認む可くんば、此れは寧ろ慶す可きの不安であると主張せざるを得ない。

四

理想仰望より來るところの人心の不安、其の結果としての文化革新には、凡そ如何なる手段が採らる可きであるか。曰く議會主義。曰く直接行動。

余輩は此の二者を比較論評するに、先づ直接行動は原理的に多大の眞理を含むとは言ふものゝ、しかも此れ佛國自由の哲學の不當なる擴充であり、其のまゝに取り來つて我々の政策と爲す可きであるとは信じない。蓋し力に對抗するものは力である。ラッセルも言つた如く、鬪爭よりはたゞ鬪爭が生れるだけである。此れを指導する理想原理の無いエラン、ヴィタルは何の意義も無い。(念の爲めに言つて置くが、河上博士は『我等』九月號で、「勞働者の指導」といふ時の「指導」といふ言葉は一種の特權思想に本づくと言つて居られる。コオルも或るところで略ぼ同樣の事を言つて居る。恐らく余の常に使用して居る「指導哲學」(leitende Philosophie) 又は「指導原理」の「指導」まで其の中に含むのでは無からうが、今ちよつと心配になつたから附記して置く。余の場合の「指導」なる語に特權思想の意味の含まれ

て居ない事は事新らしく此處に論ずるまでも無い。)暴力の支配による革命によつて、我々は政治的、經濟的に、現在よりもよりよき生活狀態に到達する事が出來るとしても、しかも此れが爲めに拂ふ文化的犧牲は、果して其の功過を償ふや、否や余輩は此れを甚だ疑問であるとする。我々の人生の究極の理想地である學問や藝術やは、此れが爲めに或は一二世紀を後らされぬとも限らぬものである。此の意味に於て『ネエション』誌に掲載せられ、既に我國に二種まで飜譯の現はれたラッセルの論文『千九百二十年のソヴイエット露西亞』の趣旨に、余輩は大體賛意を表せざるを得ない。ラッセルがゴリキイに滿腔の同情を表したなども、頗る面白いところであると考へる。(彼は矢張舊爵の哲學者であつたのだ」といふ『解放』社同人の批評に余輩は服することの出來ないものである。)

併し其れであるからと言つて、余輩は事實としての議會主義にも全然的に贊同出來るものでは無い。蓋し議會主義は一の原理として見れば、必ずしも無下に此れを排斥す可きだとは考へない。たゞ運用の事實問題として見る時に、殊に此れを我國の議會主義として見る時に、我々は少なからず此れに失望を感ぜざるを得ないのである。恐らく此れは余輩一人の感慨ではあるまい。機會を見て本年中多少接觸する事の出來た地方の青年などに就て見ても、少しく自律的の理性を持つたものには最早現在の議會などに改造の望みを嘱すまいといふ氣風が多分に見えて居る。此れ偏へに爲政者の議會の運用が惡い爲めであつて、當局者が人心の惡化を防がうとならば、少しく其等の點を反省して然る可きである。

然らば現在の社會を改造して理想的社會を産出する合理的手段は何であるか。余輩は此處に略ぼナショナル、ギルドの主張者達がやつて居る樣な、自治的自己表現聯合體(アッソシエーション)の擴充を主張しようと思ふ。我々の所謂社會は、多くの中心の周圍に團を爲して團結して居る聯合體(association)の多元的集團である。此れは余輩が既に數年前に書いた『文明に於ける人生觀の段階と均衡とを論ず』といふ論文に論述した通りである。此れと同樣の多元論を主張して居るものがコオルの社會論である。然るに此のコオルの社會論は、實はルソオの民約説と及びトロント大學の教授であるマックアイヴァーの社會論に胚胎し來つたものである。マックアイヴァーの社會論は其の點で大いに注意を要する。彼れによれば、所謂我々の社會は、トェンニイスの所謂 Gemeinschaft であつて、其の中に多數の Gesellschaft を含まれるのである。(Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, 1887.)マックアイヴァーは此の前者を community と呼び、後者

を association と呼んだ。(Maciver, Community : A Sociological Study, 1st Ed. 1917. 2nd Ed. 1920.) 余輩が既に批評したコオルの近著社會論(Social Theory, 1920)は全く此の思想を受けついで居るのである。余輩は今此處に詳細に兩氏の社會論を批評して居る暇は無いが、兎に角其等はボサンケ等のヘエゲル學派流の國家觀社會觀に反對して居るものであつて、(Bosanquet, The Philosophical Theory of the State. 參照) 余が理解するところでは其れは要するに新らしく解釋せられたる民約說であると思ふ。而して此の考へは、マックアイヴァーによれば、既にラスキの懷抱したところであり、其の二著 Studies in the Problem of Sovereignity と Authority in the Modern State とに現はれて居るといふのである。(Maciver, op. cit. p. 46.) 玆に於てか余輩の探究的興味は余輩をしてすゞろに此等諸說の比較考察に進めさせようとする。

併し此の如き思想の生れ出て來るといふのも亦一つには時代思潮の反映である。此の社會觀を爲す時には、我々は如何にも巧みに議會主義と直接行動主義とを結びつけることが出來るのである。社會の制度は固定する。しかも其の精神は常に流動的でなければならない。社會意識によつて現實的の文化であると認識せられて居る制度や傳統やを破壞して、更により理想的なる制度や傳統やを建設しようとしても、古い傳統は新を抑制する權力を把持して居るが故に、此の權力に對抗する事は頗る困難なるものとなつて居る。議會主義は此處に破れて直接行動論は勝利を占めざるを得ない。併し余輩は先きに論じた如く、暴力による直接行動を否定する。若し其の權利を破壞する直接行動ありとすれば、其れは新らしい理想によつて新らたに結合した聯合體の自らなる力の直接行動でなければならない。此の場合の直接行動は理想によつて居り、又其の聯合體の結合は理想によつて居るが故に、如何なる制度、如何なる傳統といへども、此の光輝に刃向ふ權利を持つては居ない。紙幅の關係上余輩の論はいさゝか抽象的に傾いて了つたが、明治の維新は正しく此の新らしい仕方の、換言すれば理想的仕方の直接行動を爲したものであると信ずる。比較は少しく不穩當であるかも知れないが、現在の愛蘭のシン、フエイン黨も亦略ぼ類似の手段を取つて居る樣に考へられる。今では思慮ある地方の靑年などにも、此のタクティックスを自ら會得したものが、否な寧ろ現在の議會の腐敗によつて自ら會得させられたものが多數にある樣である。老人を老人として殘し置け。頑迷者を頑迷者として、爲すところを盡さしめよ。我々は我々の信ずる文化理想に隨つて、其等の老人、其等の頑迷者を無視した、新らしい理想的の

聯合(アソシエーション)體を至るところに建設する。其の中心は最初は極く少數のものであつてもよい。羨むものは次第に模倣しよう。蓋し理想は終に不合理を征服せざれば已まないものである。余輩は現在社會の秩序混亂と人心不安の中に立ち、其の將來の理想社會の建設を仰望する點に於て毫末も悲觀する事無く、又其の意志を阻喪しないものである。（十月十五日、洛外紫野に於て稿）

不安を感ずる者の悲哀と滿足

文學博士　三宅雪嶺

人は自らの能力に相應する境遇を求め、之れを得ねば不安を感ずる。時代は一樣に云へず、動反動あるとし、大體に於て初め少數が不安を感じて運動し、漸く多數が之を感じて運動し、遂に一般が不安を感ずるに及ぶ。不安の石を池の眞中に落し、波が次第に擴まるに似て居る。初め君主の地位に就て爭があり、強い者が弱い者に代つたりする。日本で天武天皇、支那で明太宗など、其の著るしい例に居る。君主に限らず、之と密接の關係ある階級、即ち貴族といふが如きものが、權力爭ひを始め、往々猛烈を極めるに至る。幕府の更迭や、群雄の割據や、皆之に屬する。更に擴まつて、紳士准紳士といふ可き所で運動し、日本で云へば明治維新の如きを指す。歐洲の或る國で國會開設を要求したのは之に相當し、日本よりも數百年早くし、近年まで其狀態で續いて居る。徐々漸々變遷しつゝ、十九世紀の政變及び革命は、要するに紳士准紳士の運動たる性質を帶びて居る。新に農工商の富んだ者が紳士に列し、等しく運動する。絶えず問題となるは選擧權擴張であつて、其の爲めに屢々騷擾を惹き起し、尚ほ更に普通選擧と稱するに至つた事は、一般平民が運動に與る樣になつたのである。之れ未開より文明に進み、いよいよ進まうとするのであつて、知識の點よりせば、前に少數者に限られて居つたのが漸次廣きに及び、普及の狀態を示す事になる。東洋は之に後れ、半世紀前まで貴族の運動に止まつて居つた。東洋で紳士准紳士が運動する頃、歐米の主なる國々が一般平民の運動するのを見る。歐米でも從來の運動は男子に限るとして、婦人も運動せねばならぬと云ふのが近年の事、實に世界戰役に伴ひ、僅かながら婦人代議士を出すに至つた。將來尚ほ廣きに及ぶの餘地あるが、東洋に比べて現に運動範圍の頗る廣いのを認めねばならぬ。

そこで選擧權は、略ぼ擴張し得るだけ、擴張し得たとし、斯

く擴張し得たのは、知識の普及を意味して居る。甚だ不十分なのが多いけれど、前よりも確かに進んで居る。普通教育を當然とするのは、教育に限つて普及すべしと云ふのでなく、一般に力を増して來たのである。日本の明治維新は勞働者が與からず、勞働者自ら興るべきものと考へなんだ。前世紀に於ける歐米の政變も、多くは勞働者と沒交涉であり、勞働者は政治に興味を覺えなんだ。今は左うでなく、尙ほ十分とは云へぬが、勞働者が多少政治に興味を覺え來つて居り、國に依つては勞働者で代議士を出し、或は大臣を內閣に送り出して居る。昔、君主又は貴族が權力の縮少を恐れ、之を擁護しようとし、或は之を擴張しようとしたのが、次第に廢きに及び、或る程度まで多數勞働者が之を事とする姿になつて居る。曾て少數者が能力に比例する境遇を求め、戰爭するを辭しなかつたと同じく、今は多數が之を求め、頻りに運動して已まぬ。最初より抽象的に斷定し、人は平等であり、能力の如何で差別すべきでないと唱へるのもあるけれど、能力相當の處に落着くの外なく、若し人々眞に能力に比例する境遇となれば、一先づ不安の大部分を無くす事になる。

所が其の比例を紊し、不平不滿を感ぜずに居れぬのは、能力が進む程、度を減し、境遇が好くなる程、度を增し、相並行せぬ許りでなく、相反對しようとするのである。能力はパラボラで進み、境遇はハイパアボラで進まうとする。碁の流行らぬ所では、或る少數者が碁を圍み、それが碁打と知られ、外で彼れ此れ云はれぬ。碁の流行る所では、多數が何程か碁を圍み、廣島縣の因の島の如き、殆んど誰でも圍碁するとの事である。碁は勉强次第、初段近くに達する事が出來、それから幾段と段があり、八段の如き天下の名人となるが、初段より一二目進む位の者である。初段は笊碁連に井目風鈴を置かせて手も無く勝つのであつて、それから見れば一二目は何でも無いやうでありながら、本因坊と平(ひら)初段連と大いなる間隔がある。手合せして優劣が分るけれど、手合せせぬ間は各笊碁連に向つて勝手な事を云ふ。碁は相手に對して優劣が判明するとし、斯く判明せぬ事が隨分多い。素人義太夫は銘々天狗で勝手な熱を吹き、碁の如く優劣を定める譯に行かぬ。而して名人と非名人と僅かの違ひで名人は全く違つた待遇を受ける。攝津大掾や越路や、人が下にも置かぬ待遇振りを爲し、其外の連中は聞くに堪へぬとか、味噌を腐らすとか評する。眞に聞くに堪へぬのもあるけれど、又殆ど之に拮抗するのがある。大隅の如き、攝津と一得一失に云はれてゐた。之れ程で無い連中も自分で劣らぬと思ふのが幾人もあり、相當に待遇せられぬので不平を云つたりする。是等

は優劣を決するの標準を缺くも、聽衆が自づと決定する形になつて居り、聽衆の前で語らねば、銘々思ふ存分に天狗となり、攝津の地位に据わらうと思へば据われると云ふに至る。昔君主が權力爭ひしたのは、自ら優ると信じての事であり、保元の亂に上皇と天皇と互に自ら優るとし、武士を狩集める事になつた。群雄割據など銘々國家の權力を握らうとするのである。闘つて見ねば分らず、彼れ位の事は爲し得るとて、吾れも吾れもと飛出さうとする。勝つた者は天下樣と崇められ、敗けた者は之れに屈服せねば殺されて了ふ。前に互角の勢で爭つて居りながら全く寄り付けぬ程の違ひを生ずる。

産業か盛んになり、機會均等で利益を得るとし、儲かる者は儲かる程いよ〳〵儲け、儲からぬ者は常に貧乏に追はれるを免かれぬ。土佐に岩崎彌太郎に劣らぬと考へた者が幾人もあり、各々命儲けに取掛つたが、今日の所、梯子掛けても岩崎に及ぶ事が出來ぬ。姑く彌太郎の能力が他に優つて居ると假定し、現在の財産を作り、前の同僚をして御出入たらしむる程違ふと云へない。能力で僅かの差であつて、境遇で大いなる差を生ずる。此狀態が何處にでも知られて居り、只以前に深く怪しまれず、世間は左ういふものと諦めて來たが、近來自づと其邊に氣付き、斯かる事のあり得べきかと疑ふに傾く。一々意識するのでなければど、奇異なる現象を認めずに居れぬ。選擧權擴張に奔走した頃、其方に忙がしく、此方に注意を拂はなんだが、既に普通選擧となつて見れば、權利のみを得て何程の利益あるかと疑ふ。選擧權を得るのは、國家の事を議するのであり、之を議するに於て、總理大臣と變りないとする。ジョンやジャックや、智慧も知識も無けれど、ロイド・ジョオジを友達と思ひ、或ひはジョーが下手な事をすると論ずる。中には智慧あり知識ある者も居り、場合によつて内閣に入り恥かしからぬやうに見える。

併し政治の方は相應の代表者を出して置いたので、之に事を扱はしめれば可いし、別段に能力も優さつて居さうもない者が億萬の財産を擁し、自分は一年中間斷なく黽勉して其の一日に得る所を得る事が出來ぬのは、何ういふものであるかと疑ふ。若し億萬の長者が、身代を以て優る程能力を以て優るならば、人は諦めずに居れぬ。能力で優らず、身代のみで優るので、如何にして其身代を得たか、考へる程分らなくなる。分らぬとて之を究めようとせず、何かにつけて不平を漏らし、時として暴擧を敢てするに及ぶ。文明は知識の增進を要し、文明國は一般民衆の知識の進んで居るのであり、其の進んだ知識を以て現狀を察し、不思議に感ずる所少くない。特別に筋道立てゝ考へるのでなけれど、何故に自分は斯くて甘んぜねばならぬかと疑は

ずに居れぬ。

而して之れ獨り經濟上の事でなく、他の凡てに於て同樣の事を認める。昔貴族を尊んだ如く僧侶を尊び、何でも其の云ふ事を信じた。知識が進んで見れば、僧侶共の知識は自分と格別の違ひが無い。經文の暗誦に於て叶はぬが、說教に合點行かぬ事を云ふので困まる。天國は何うなつて居るのか、地獄は何うなつて居るのか、基督が神の子とは何事か、習慣で怪しまぬものの、怪しんで考へれば隨分怪しく覺ゆる。それで年々歲々盛んになり來つた科學が、能く疑を解いて吳れるかと云ふに、左うでなく、分らぬ事は矢張分らぬ。天の河を寫眞にして說明してあるけれど、其の夥しい太陽形のものが、只徒らに存在して居るか、人間は天の河の中に居つて望遠鏡で見えぬ程小さな星に居る許りで、人生を果敢ないと云はうか何と云はうか、さつぱり當てが付かぬ。誰に聽いても說明を與へて吳れぬ。或は此無數の太陽の中にあつて、一地球にのみ人類が居り、それで萬物の靈と稱するが、左ういふ太平樂が云へるか何うか。言葉の綾で左うも云ふが、億を以て數へる太陽が只徒らに存在して居るなど、餘りに無造作な考方ではないか。且つ眼に見える物の外、見えぬ力の限り無く働いて居るのを打消す事が出來ぬ。此無數の太陽の廻轉するのは、恐く見えぬ力に依る。光りでも、紫の外に或る線があり、赤の外に或る線がある。之れを感じ得たならば、世界が違つた色に見えやう。吾等は畢竟何者であるか、自分が死んでも、此世界は此儘に存在して居ると思ふけれど、事によつては自分の死ぬと共に此世界が消滅するかも知れぬ。自分の五官で之れまで一定の形に世界を識り來つたが、此五官が無ければ、此世界が斯く見えぬ。自分の死んだ後に世間で此儘に世界があると考へるのも、自分で斯く考へるからであつて、斯く考へるものが無くなると共に、斯く考へた所のものも無くなるのかも知れぬ。

昔から此類の事を考へるものが居つたけれど、知識の進むに從ひ、多數が何程か此處に考へ及ぶ。深く考へるのがあり、淺く考へるのがあれど、何程か此邊に考へ及ぶものの多くなつたのを否定する事が出來ぬ。いろ〳〵の解釋ありながら、いよ〳〵之れぞと云ふ程のものに出逢はぬ。僧侶でも好加減の說明をなし、學者も好加減の說明をなす。好加減でなく眞劍で說明するのであつて、實際好加減と選ぶ所が無い。學校でさま〴〵の事を敎へられるが、いよ〳〵多くを知つて、詰り何の得る所あるかゞ分らなくなる。遠方の太陽から光線が幾萬年かゝつて來り、現に其星が何うなつて居るか、眞に存在して居るか、之れを知る事が出來ぬと云ひ、不審がつたりするけれど、自分共の生存するのは蛆虫と何程の違あるかを說明して吳れる者が無い。强

ひて立派さうに考へさせようとするだけで、實は何程の違ひがあるか。知識が進んで悲哀を感ずるとは、この事である。現實暴露に悲哀を感ずる者あるが、學校で敎へる事、即ち智能を開發する事が殆ど悉く悲哀を感ぜしめる。知識の增進とは果して斯かる事で終る可きものか何うか。斯くて終りたくなけれど、今日の所此狀態である。悲哀を感ずるに就て濃い淡いがあり、極めて淡泊なのもあるけれど、何處かに其分子を含む所がある。平生全く忘れて居るにしても、何かにつけて考に浮んで來る。千年も二千年も前の人の云ふた所を信じ、それで十分とするのもあるが、之を以て時代錯誤とする者は、自ら生存について不安を感ぜずに居れぬ。何處となく世界に不安の漾ふは、今日までの知識增進に伴ひ避く可からざるものである。生活と思想と双方に不安を感じ來つて居る。然し今日から觀れば、前の不安狀態、即ち中世頃の盲目的信仰が封建時代の服從と變りがなく、慣れに感ぜられる。今日自由に不安の念を抱き得るは、悲哀と共に一種の滿足を感じ得る所である。今尚ほ安んぜず、更に一層滿足を感じようとするので進歩を遂げる事が出來る。百年千年、何時までも何程かの不安が伴なはうが、今日の人が分らぬとして不安を感ずる所で、分かる事が多からう。アダム、エバが知識を得て不安を感じ初めたと傳へるのは、傳説として尤もの事であつて、實に心配を增して來て居る。禁を犯した罰といへば言へる。併しアダム、エバが樂園に閉ぢ籠り、永遠に知識を開發せなかつたならば何うであらうか。其れが望ましいと思へるか。少くとも今日人生は現に遭遇するが如きものと觀て、生れなんだより劣るとせぬ。生れただけの事あると考へる者が多からう。神は斯く人を造つたと言へるでないか。

自信あり創造力あるものは樂觀して可なり

法學博士　吉野作造

世界の人心が何について動搖不安を感じて居るか。現狀打破の露骨な、そして猛烈な運動についてゞある。現狀を維持することに利益を有つて居る特殊階級は云ふ迄もないが、理に於て所謂現狀に重大な缺陷を認めて居るものも、急激なる打破による異常の慘狀を想像して、當今の形勢に云ふべからざる憂愁の念を濺いで居るのである。

同じやうな心配は、無論戰爭以前にもあつた。現狀打破の改革的要求は昨今に始まつた事ではないからである。併し大體に

於て戰前に於ては、如何にして內部の根本的改革を成就すべきやよりも、如何にして現在の狀態を彌やが上にも堅めて、外國との競爭に勝ち得るやが主たる問題であつた。國際競爭の方面が忙しくて、餘程自信のある國でなければ內部の改革には手を着けない、流石の英吉利と雖も、ロイド・ジョーヂの遣つた社會改革が關の山であつた。あれでもあの當時は、他國の眞似難い破天荒の大改革であつたが、今日から見れば頗る不徹底なものと云はなければならない。之は英吉利だから出來た。他の國では、道理は之をいゝとなつても、現狀の甚だしき變化による一時的の紛更をすら怖れて、容易に手を着け得なかつたのである。況んや現狀の根本的革新に至つては、結局に於てそれが必要だと云ふ事を認めても、重大の懸念を前途に繫けて、土臺之を問題としなかつた。偶々問題にしようと云ふものがあつても、遠慮して思ひ切つた提唱を避けると云ふ有樣であつた。そこに保守派の押し强く出る餘地がある。社會の一隅に偶々突飛な革新論が起つても、空吹く風と聞き流して先づは平然たることを得たのである。

然るに此狀態は、今次の戰爭を機として一變した。保守派によつて支へられた所謂「現狀」は意外な弱點を暴露した。從つて現狀維持を支持するの說は、大いに鼎の輕重を問はるゝことになる。戰爭によつて混亂された世界を整理する爲め[illegible]狀打開の必要はある。況してあらゆる弱點の暴露を見た眼から[illegible]すれば、今日を機として根本的廓淸を加ふるを必要と思ふやうになるのは當然である。斯う云ふ新らしい時勢の傾向に促され、之れまで小さくなつて居つた現狀打破派は新たに勇氣と自信とを得て、大いに突進することになつた。最早何物にも遠慮はしない。斯くして現狀打破の要求は、飽くまで其目的を達せずんば止まずと云ふ勢を以て社會の各方面に戰を挑んで來た。そこで所謂「現狀」に據つて社會に優勝の地位を占めて居つた連中は、甚だしく前途を悲觀することになつた。

歷史上の事實として現狀打破の社會的運動には二つの種類がある。一つは主として從來の權威に反抗せんが爲めに起るもので、他は專ら新理想の出現と建設とを目的として居るものである。こゝに主としてと云ふのは實際に於ける出來事は單純に之れのみによつて生ずるものでない事を意味するのである。佛蘭西革命の如きは新理想の實現と云ふ方面も多少はあるが、少くとも最初の形は古い專制政治に對する反抗として起つたものであつた。今度の戰爭に伴ふ社會的動搖不安は予輩の觀る所を以てすれば、軍國主義とか資本主義とかに對する現實の不平から

起つた點もあるが、併しそれよりも寧ろ社會人生に關する新らしい理想を實現せんとする方面が著るしい。そは何れにしても今日の世變は佛蘭西革命當時のそれと比較すると、我々は其形を等しうして其意味の頗る趣を異にするを見るのである。十九世紀の初めに入つて來ると、歐洲一般の社會は段々、新理想に誘はるゝと云ふ方面が著るしくなつたけれども、併し革命勃興の初めの間は、舊時代の壓制に堪へられなかつた民衆が止むを得ずして、盲目滅法に遣つた反抗運動であつた。從つて革命當初四五年の間は天下の事モツブの指揮するに任せ識者も隨分手古摺つたのであつた。

こゝに予輩が佛蘭西革命を引合に出した所以は盲目滅法なモツブの暴動に源を發した革命運動でさへ、一旦舊い權威を倒して否應なしに新建設の幕に來ると何時の間にか一箇の理想を指導者として仰ぐやうになる、と云ふことを云ひたいためである。革命當時の事を考へて見ると、世界の人は、いろいろに之を批評した。あゝ云ふモツブの妄動に任かして居つては佛國の前途はどうなるだらうと非常な悲觀説を吐くものが頗る多かつた。而かも今日は如何と云ふに、何人もあんな革命のなかつた方が歐洲の爲めに幸福であつたと論斷する人はない。今日得て居るやうな幸福は革命がなくとも得られたらうと説く學者はある。けれども無い方がよかつたと論ずるものは予の寡聞なる未だ之に接しない。蓋し妄動に初まつた人類の活動は結局貴い或るものを實現するに成功したと云ふ事實は儼として疑ふ事が出來ないからである。而して此事は何を我々に教ふるか。即ち人間には實に偉大な創造力が潜んで居ると云ふ事を語るものではないか。

斯くして、今日の所謂動搖不安を觀る。我々は之を佛蘭西革命當時の狀況以下に評價する事が出來るか。戰爭は從來の形勢の行き詰りとして起つた。起つた初めは戰爭以前の心持ちで飽く迄戰ひに勝たんと努力した。けれども戰爭の異常の擴大に伴ふ異常の慘狀は大いに世界の人心を反省せしめた。此一大試練に遭遇して我々は如何に戰前の世界が人間にとつて住心地の惡いものであつたか、如何に當時の世界の狀態が人間の本性に裏切るものであつたかを痛切に感ぜしめられた。そこで世界の人は期せずして此の世の中をもつと住心地のいゝものにしようと熱求するやうになつた。それにはどうすればいゝか。又何が從來の世界をして此理想から遠ざからしめて居つたのであるか。玆に愼重な省察を加へて各方面に改革の理想を發見し、而して此等を統一して結局「何人も自己の爲めに他を犧牲にしてはいけない」と云ふ原則をあゆる方面に十分徹底せしめねばならな

いと云ふ事に氣がついた。此原則の實現の最も激しく要求せらるゝ方面が一つは國際關係である、一つは國內社會階級の關係であることは云ふを俟たない。從來は强國は弱國を犧牲にして益々其强を養ふて居つた。而かも彼等は自己の强を養ふのは世界の爲めであり、又弱國の爲めであると主張して居つた。恰度資本家が勞働者を虐使してその富を增すことが、國家の富を增す所以なりと主張して居つたのと同樣である。强國が益々强くなることが果して世界の爲めであるか、資本家が益々其富を大にするのが果して國家の爲めであるか、それは分らない。只疑のないのは之によつて弱いものが何等得る所がなかつたと云ふ事である。そこで改造が叫ばれる。而して改造の理想が前に述べたやうなものであることは多言を要せずして明かであらう。

且つ又前に述べたやうな原則は、もと十九世紀文明の根本精神をなすもので、昨今初めて明かになつたのではない。只十九世紀に於ては此原則は部分的に適用を見たに過ぎなかつた。併し之が本來人類生活の根本理想である以上、あらゆる方面に徹底せねばならない道理である。第十九世紀はいはゞ此理想の部分的發現を促した時代で、其統一的發現の事業は我が廿世紀に殘されたものと云つていゝ。十九世紀は部分的發現であつた丈け、心あるものには矛盾と煩悶が感ぜられざるを得なかつた。此感がやがて統一を喚び來たす動因となるのである。二十世紀の初頭に於て特に戰爭の試煉を經た今日に於て、我々は初めて統一の機運の熟せるに際會し、こゝに前途の光明を見て大いに胸躍らざるを得ざる所以である。

して見ると、今日の所謂不安動搖の種たる現狀打破の要求と運動とは佛蘭西革命當初のやうな妄動ではない。一定の理想に導かれて居る。果して然らば現狀打破の後如何なる狀態を將來に來たすかについて我々は何故に深く憂ふるの必要があるか。人間の創造力は理想に導かるゝ時に一層大膽に活躍する。

現狀の打破は、兎に角舊い秩序の破壞である。加之破壞運動は、往々にして破壞すべきものと破壞すべからざるものとの間に區別を立つるの餘裕がないから、少くとも一時大いに混亂するのは已むを得ない。只併しながら混亂が收つて段々安定に歸する迄の時期については必ずしも豫測が出來ないのみならず、安定が餘りに遲ければ玆に又意外の弊害を來たすの怖れがないでもない。是に於て現狀打破の必要は、かゝる意外の弊害の現出をも顧るべからざる程切迫して居るかどうかと云ふ問題が起る。人間の偉大なる創造力を信じ、現代人の胸裏に鬱勃たる改造の大理想に贊嘆するものは此間何等の疑惑も不安もない。何

故なれば彼等は自己の力を以て前途に横はるあらゆる荊蕀を切り展かんとするの勇氣に滿ちて居るからである。此自信の無いもの丶、就中、從來の仕來りによつて辛うじて自己の生存を立て丶來たすものは、自ら非常な苦痛を感ぜざるを得ない。故に今日の場合悲觀說を取るものは、多く自己の生存を専ら舊い世界に依存せしめて居る連中に多い。時代がどう變らうが自分の生活を獨立に立てて行く丈の自信あるものに悲觀說の發生する餘地はない。

何時の世にも樂して旨い事をしようとするものと、働いて困しむことを辭せざるものとある。出來上つたい丶境遇に無理に身を置いて旨い事をしようと云ふものと、自分で自分の運命を開拓して行かうと云ふものとある。詰り自分の身の據り所を自分自身に置くか、周圍の境遇に置くか、人間の本性と其偉大なる創造力を掘つて居るかどうかによつて悲觀樂觀兩様の別は着く。今日の時勢は悲觀するものにとつては悲觀に値し、悲觀するものが多けれゞば確かに悲觀すべき將來を現出する。けれども樂觀するものにとつては徹底徹尾樂觀で押し通せる。或意味に於ては此問題は斯うか、あ丶かと云ふ問題と云ふよりも、寧ろ斯うする、あ丶すると云ふ問題であるかも知れない。而して客觀的立場から今日の時勢に於て悲觀論者と樂觀論者との孰れが多數かと云へば、云ふ迄もなく樂觀論者の方が多い。此點に於て予輩は今日の不安動搖の前途を樂觀してい丶と考へて居る。

次號卷頭論文

新時代の理想的原則序說

杉森孝次郎

右は筆者が近來稀に觀る苦心の餘に成る長篇にして、本年最後の論壇を飾る一大卓論なり（論者しるす）



排斥される日本人と排斥する亞米利加人

佐々木指月

これは私がシヤトルにゐた時のことであつた。私はある晩、日本人街にあつた活動寫眞館へはひつて見た。北米大陸殖民史と云ふ一巻を映出してゐた。

巻頭に映し出された小映は、曠野のなかの沙丘の上に立つた一人の男が、小手をかざして遠くを眺めてゐるところだつた。空は暗雲にとざされて、地平のあたりには一帶の水が銀をたわめたやうに光つてゐた。沙丘のこなたは、夕暮の陰に落ちて、そのなかには一つの幌馬車(テントワアゴン)があつて、小兒を抱いた一人の婦人が乘つてゐた。馬車のうちには、桶だの銃だの斧だのが掛けてあつた。

○

寫眞は觀客の沈默のうちに展開してゐた、狐の毛皮の帽子を被り肩からは銃を負ひ、なめし皮の獵服を着て、馬に乘つた一隊が、まづ先(さき)に現れ、そのあとからは、幌馬車(テントワアゴン)の、長い列が、つゞいてゐた。

この一隊は、今、とある新開の小驛をはなれて、これから未知の曠野を横斷しやうとするところである。彼等は、その旅程に先立つて、この小驛に住んでゐる同族に、別れをつげてゐた。

老婆たちは抱きあつて涙にくれ、幼いものどもは、犬(いぬ)とと

もに、先發隊のあとを追ひ、若い男女は幌馬車の轍の陰で、何かひそ〱と話をしてゐた。

○

夜は、はや、しら〱と明け離れてゐる。後に見える大河の上には横雲が棚引いて、ここかしこの地ぶくれは、そのゆるやかな波をこの平原のなかにうねらしてゐた。

件の旅隊は、たゞ、黒い小さな斑點となつて、とある沙丘の麓を綴つて、進むともなく止まるともなく蠢いてゐた。

○

幌馬車のなかには、若い婦人がマトレスの上に横はつてゐた。今、うまれたばかりの赤兒を抱き上げた父親は、空に向つて祈禱をさゝげた。旅隊のうちの女たちは集つて、何くれとなく世話をしてゐた。

男たちは、拾ひ集めた薪木の上に、魚だの兎だのをあぶつて、これから食事にとりかからうと云ふ。氣の早い連中は、早くも酒を持ち出して、その口をぬかうとして、さはいでゐた。

そこへ、手に手をとつて現れた、若い男女があつた。反對する父親を排して、居合した人々の同情にすがつて、結婚式を擧げやうと云ふのである。

旅隊のなかの牧師は、そこへ引き出され、二人の爲に、婚禮の、聖書の一節を、讀みあげた。

平原を照らしてゐる太陽は、これらの出來事の上にも、その日なかの光線を、雨の如くに注いでゐた。

映畫のフイルムのこすれる音は、映されてゐる、これらの樂しい光景に和して、さらさらと觀客の耳に、快感を齎してゐた。

○

これは、この大陸に昔から土着してゐた、赤銅色の一種族、印甸人である。

酋長と覺しきは、鳥の羽根をつがねた兜をうしろながに着ながしてゐる。

いづれも驛馬にまたがつたものどもが、顏には赤や黄の刺青をして手には毒矢をたばさみ、或ひは銃を持つて、今、はるか向ふを通つてゐる彼の旅隊を屠らうとして、沙丘を蔽ふて此方から殺到した。

早や、銃の烟は、そこここからあがつた。

私と並んで、これを見てゐた、白人の一勞働者は、溜息をついてゐた。

場内にゐた、日本人の子供たちは、拍手喝采した。

狼狽した彼の旅隊は、女や子供を、皆、幌馬車のなかにかくして、應戰しながら逃げのびやうとしたけれども、もう、遲かつた。

彼等は、廣場に、幌馬車を廻らして、それでサアクルを作つた。馬は中に追ひ込んで、マトレスだの毛布だの、色々なものを持ちだして、それで馬車と馬車との間をふさぎ、男はみな銃を取り出して、ここに慘憺たる血戰の幕はひらけた。

○

月は青白く夜の曠原の上を渡つてゐた。血に染まつた母のわきには、今朝うまれたばかりの赤兒が、乳房に飢えて泣いてゐた。今日の晝、太陽のさす下で、樂しく結婚をした若者は、今宵は必ず抱くべかりし花嫁をも失ふて、車の轅に身をかけて、冷く息は、斷えてゐた。

私は、うしろの席から、そこにゐた白人の女たちの、すすりあげる聲をきいた。流石に日本人の子供たちも、音をひそめてゐた。隣にゐた勞働者は、くもつた聲で私に話をしかけた。『我々白人がこの太平洋沿岸へ、最初の殖民をする迄には、ああした尊い犧牲を拂つてゐるのだ。お前は日本人か。お前たちはどんな犧牲をこの太平洋沿岸の爲に、拂つてくれるんだ。』

私は、その時、苦笑ひすることさへ、出來なかつた。

……………………

これは私が紐育にゐた時の話しである。私は、一時ある美術商店のなかの畫室で、色々な古美術品の修繕をしてゐた。

そこに、金箔師の、プリンツと云ふお爺さんがあつた。このお爺さんは、なかなかの樂天家で、晝すぎて、畫室のスカイライトから太陽の暖かい光線がもれる時刻になると、彼れはいつも面白い話をして、私たちを笑はせた。

○

或る日のことに、プリンツは、さも思ひ出したやうに、私に妙な質問を發した。

『お前、ハング、エ、チャイナマン。』と云ふことを知つてゐるかと云ふ。言葉の意味から察すると、『支那人を私刑にしろ。』と云ふことである。私は何んのことだかわからなかつた。プリンツは、金箔を彫刻物の上へ置きながら、さも愉快さうに、その說明をした。

『米國の西部の或る州(ステート)に、人口のまことに少い一村落があつた。そこに一軒の村鍛冶があつた。田舍のことだからして、蹄鐵をうつとか、百姓道具を繕らうとかして、なかなか村人に重寶がられてゐた。ところが、どうした事か、この鍛冶屋が、人殺しをしたので其頃の州法によつて、これを絞殺することになつた。其州の習慣としてはこれを高く樹上につりあげて殺すのであるが、村人はそれに對して色々と苦情を持ち出した。

元來、この村には、一人しか鍛冶屋がゐない、今、それを殺してしまつては、村中は翌日から、馬を使ふにも、畠を耕すにも、ひどく不自由をしなければならない。これはどうあつても、彼れを樹に懸けるわけにはゆかないと云ふことになつた。然し州の役人が來て、檢死を行ふときに、誰も樹の上にぶらさがつてゐなければ、濟むまいと云ふことであつた。

○

すると一人の村人が、『ハング、エ、チャイナマン、』と云つた。この村には、二人の支那人がゐて、どちらも、洗濯屋をしてゐる。一人は、ワング、ロングと云ふ名で、もう一人は、ワング、チョングと云ふ名だ、ロングと、チョングの違ひはあるにしても、どちらも、ワングに違ひはない。この村には、一人の洗濯屋で澤山だから、ワン、オブ、ワングを、ハングすることにしやうではないかと云ふので、衆議これに一決して、その、ワングの一人を、とうとう、樹に、ひつかけてしまつた。』

プリンツ爺(ぢい)さんは、かく説明し了(をは)つて、腹をかかへて笑つた。お爺さんの、はげあたまには金箔がくつついて、へらへらと翻つてゐた。私も笑はないわけには行かなかつた。

○

お爺(ぢい)さんは、また私に質問を發した。『イズ、ザツト、ライト？』それでよからうかと云ふわけである。いいにも悪いにも、てんでお話(はなし)しになつてゐないと私は思つた。然しこの場合それを悪いと云ふには、あまりに滑稽(ユーモア)を解しなすぎるところがあるので、私もやつぱり『ザツ、オーライ！』と、返事をした。

お爺(ぢい)さんは、また、よろこんで笑つた。

そこにゐた、デュシンスキイと云ふ露西亞人の畫家も、やつぱり、笑つた。

○

それから後の幾日かは、事あるごとに、この『ハング、エ、チャイナマン。』を、その畫室での套語にしたくらゐであつた。

しまひには、ハング、エ、チヤイナマンでは面白くなくなつて、『ハング、エ、ジヤツプ。』と、かへてしまつた。私自身は、その、ジヤツプの一人であるが、然し、それでも面白がつて笑つた。

私は、この笑ひを、自分の上に笑ふに及んで、亡ぶ弱者を見てゐるやうな、痛快を感じた。

……………………

一千九百十三年の、加州土地法案が通過しやうと云ふ騒ぎを、私は、シヤトルにゐて見てゐた。加州地方からくる電報を、シヤトルの新聞は朝夕に掲載して、蹄鐵のやうな大きな活字を、その一面に摺り出してゐた。往來で出逢ふ白人の悪太郎は、私たちを見ると『キル、ゼム、オール』あいつらを皆殺せと叫んだ。

○

マニラでは日本の商船が港外で砲撃されたとか、桑港のゴオルデンゲイトの沖には、日本の艦隊が遊弋してゐるとか、色々の噂が、それからそれへと傳へられた。田舍にゐる日本人は、農業をやめて、わざ〲シヤトルまで出てきて、様子を聞きまはつてゐたくらゐであつた。

私は市街へ出るたびに、通りすがりの白人から、冷笑の眼を以て見られるやうな氣がして、實際、肩身のせまさを感じないわけにはゆかなかつた。

○

私はその頃、暇さへあれば、カンバスを抱へて郊外の寫生に出歩いた。時候は丁度、春で、野には、タンポポやクロバアの花が一面に咲き亂れて、空の彼方にはレニヤ山が、一萬何千呎と云ふ峯の上に、雲を頂いて、ピユーゼツトサウンドの海霧のなかから、ほんのりと浮んでゐた。

私はシイダと云ふ針葉樹の杜に通ずる一筋の道を、繪のなかへとり入れて、タンポポの花の開いてゐる黄色い野面を近景として、そこへカンバスを据えてゐた。

○

その時、私の目の前に、開けてゐたところの自然は、つまり私の繪であつて、私の心とこの自然との間には、一切の隔たりと云ふものはないわけである。私はその一つのものに成りきらうとして、パレツトの上の繪の具と自然の色彩とを、等分に見まもつてゐた。

すると、私は胸に、何んとなく穏かでないわだかまりのあることを感じた。

私は、それをぐつと見詰めなければ、ならなかつた。

そこに立つてゐる樹は、土の上から、幹を伸ばしてゐた。

これは、この土に屬くしたものである。私も今、同じ土の上に坐つてゐる。私もこの土の上に養はれてゐるものの一つである。然し、私はこの土から産れたものではない。私は遠い四千里外の、日本の土を母として、そこに産れたものである。

海を隔てた、彼方の土に屬してゐる、私であると云ふ、その自覺が、この自然と私とを隔るものになつてゐると云ふことに、氣がついた。

目をあげて、杜を見ると、杜は、私とは何の關係もないものになつて立つてゐた。

いや、これらの土地からは、私たちは退かなければならないものになつてゐるのだ。私は左右の、タンポポの草原を見た。今までは可愛いと思つて見てゐたタンポポも、今では私を逐ふもの丶一つである。私はそこに續いてゐる道を、それより深く歩んでゆく心にはなれなかつた。

私は、自分の、書きかけた繪を見ながら、ばらばらになつて私とは遠ざかつてしまつた自然のなかに佇んだ。

自由であるべき藝術に携はつてゐる身としての、胸に潜んだこの悶えを、剔り出した私は、みじめだつた。

○

たしかこのことのあつた二三日後だつた。シヤトル在留の日本人は、ワシントン街と、メイナイード街の角、その邊は俗に云ふ、ジヤパニスタウンのうちにある、日本館ホールへ集つて、遙にカリホルニヤの同胞を、後援し、また合衆國の大統領に向つて、シヤトル在留日本人の心膽を披瀝した、決議文を送らうと云ふので、その決議案を、凝議しやうとする宵が來た。

○

晩春の雨の降る宵だつた。日本館と云ふのは、エリオット灣を見おろす高地の上に建てられた大きな建物で、二千人ぐらゐは、はひることの出來るやうなホールが、そのなかにあつた。

滿場の日本人は、今、演壇に立つて、所感を述べてゐる、ある老人の言に耳を傾けてゐた。

この老人は、日本人としては、この市に於てのパイオニヤであつて、この市のまだ草分けの時代からこゝに住んでゐた人であつた。

その物語つてゐるところは、たしかに、東洋人が、米國人から受けて來た、その屈辱史の一頁であつた。

『桑港の、ハプキンスとか、或ひは、スタンフオドとか云ふ金持は、彼等の、沒落が悲慘であつたやうに、彼等は、其頃加州地方で勞働をしてゐた支那人を、悲慘な目に、合はした。

今を去る事四十年、其頃はこの大陸を横斷する鐵道と云ふものも、まことに微々たるものであつた。線路は多く、支那人の鐵道工夫によつて敷かれてゐた。

ユニオン太平洋鐵道や、それからサンタフイ鐵道なぞでも、あのシエラネバタ山脈を横ぎるところや、モハベの沙漠を通りぬけるあたりは、あれは殆んど支那人が落した命の紀念である。

支那人は、年に二回、彼等の勞働の勘定を貰ふことになつてゐた。

勘定を貰ふ日の夕暮は來た。彼等は色々な樂しい空想をゑがきながら、金貨が、ずつしつりと手のひらに置かれるその瞬間を、待つてゐた。

彼等の勘定の入れてある、匣を載せた馬車は、長い道を通つて追々と彼等に近づいて來た。

山麓の平地の上に、二列に並はされた彼等は、暮れてゆく日を、うらめしさうに眺めてゐた。然し彼等は、金貨の代りに、死の勘定を貰ふのであると云ふことを、知るよしはなかつたのである。

トンネルを作るために用ふる、ダイナマイトが爆發して、多數の支那人が死んだと云ふ事は、その翌日の新聞に出てゐた。

富豪、ハプキンスが、桑港のカリホルニヤ街の丘上に、豪奢を極めた邸宅を築いた、その落成式の宵である。金門灣の眺望を眼下にあつめたバルコニーの上に登つた彼れは、祝賀の意を來客に述べようとして、先づ、シヤンペンのグラスを高くさし上げた、とたんにそのバルコニーから、落ちて、死んでしまつた。

其後、誰れからとなく、その時、彼れの目の前に、支那人の幻が立ち現はれたのであると云ふことが、傳へられた。

○

支那人の虐殺は、この、シヤトルにもあつた。それは、千八百八十二年と覺へてゐる。

その頃のシヤトルは、まだ小さな漁村であつた。支那人は早くも、この漁村に目をつけた。この頃、スポオケンは、もう、立派な都會になつてゐて、支那人は、そのスポオケンから、ヤキ

ゝ平原を越えて、この漁村へと入り込んで來たのである。

シヤトルの開發には、支那人も與つて力があるのであるが、白人はそれを嫌つて、無法にも支那人の排斥を始めた。

その時、支那人は、銀行へ預けてある金を拂つてくれゝば、この地を立ち退かうと、かう云つた。けれども當時のシヤトルの銀行は支那人に金を拂ひ戻してしまへば、破産するより外はなかつた。

白人は、ぼろ汽船を一艘どこからか持つて來た。そして、銃を擬して、支那人を、その家から追ひ出して、泣きさけぶ彼等の妻子と共に、その船へ追ひ乘せて、彼等の本國へ送り返してしまつた。この時に支那人は、何人となく殺された。

その頃の支那の政府は、それに對して、一言半句の抗議をさへ、持ちだす力がなかつたのである。』

○

次に、演壇に登つた一青年は、一つのエピソオドを話しだした。

『オリンピアには斯う云ふ事があつた。』

オリンピアと云ふのは、ピユーゼツトサウンドの海峽を隔てゝ、シヤトルに向ひ合つてゐる山脈地帶の名である。

○

『一軒の日本人の百姓家があつて、野菜類を作つてゐた。隣りには、白人の百姓が住んでゐて、豚を畜つてゐた。

その豚が、垣をこはして日本人の野菜園へ這入つて、日本人が、折角、丹精した野菜を食つてしまつた。日本人は怒つた。

日本人は、隣家へ、尻を持ち込んだ。ところが白人は一向に平氣なもので、それは豚のせいで、私等のせいではない、あの垣は、あなたの方の垣根で、私の方の垣根ではないから、そんな豚にこはされるやうな垣根を立てたのは、あなたの方が惡いのだ。垣根でも、こしらへ直したらいいでしやうと、斯う云ふ返事だつた。日本人は引きさがつた。

日本人は、ぶつぶつ云ひながら、垣根に、ワイアを增して二三日は無事に過ぎた。

豚は、今度は、垣の根をほつて這入つて來て、直段の高い、カリフラワアを食べてしまつた。日本人は、その豚を叩き出した。

白人は怒つた。日本人は、おのれの不注意から豚に這入られながら、人の家の畜類を打つと云ふのは間違つてゐる。豚の事だから、靑い物を見れば、地をほつてでも這入つてゆく。それ

を防がうと思へば、石の垣を作るなり、または、その靑物の見えないやうた塀を立てるなりしたらどうだらうと、垣根の向ふから怒鳴つた。日本人は憤慨して了つた。

○

すると、或る夜のことに、豚がまた、這入つて來て、家のまはりで、鼻をならしてゐるのを見つけた。怨みかさなつてゐた日本人はとうとう、その豚を捕へて、殺して了つた。それから近所の日本人を呼びあつめて、その豚を煮て喰つてしまつた。

これを知つた隣家の白人は驚いた。然し日本人は平氣なもので、豚の直段だけ拂つてやれば、それで文句はなからうと云つた。

○

人の家の豚を無斷で喰つてしまうやうな日本人が隣りにゐた日には、以後どんな事をされるか知れたものぢやない。これは何とか法律の制裁を彼等に加へなければなるまいと、恐れを抱いた白人は、これを、オリンピックの地方裁判所へ持ち出した。

ところが、そこの判事の判決が頗る振つてゐた。

他人の財産である豚を、無斷で殺して食つてしまうと云ふやうな人間は、それは氣狂か或はカアニボラのやうな野蠻人で、我が文明に準じて定められた合衆國の法律によつて律することは出來ないから、この日本人は無罪であると、宣告を下した。』

彼れはこのエピソオトを語り終つて、沈痛な笑ひをその唇に浮べて壇を降りた。

……………………

桑港(サンフランシスコ)の對岸に、バアクレイと云ふ町があつて、この町にカリホルニヤ大學がある。

バアクレイは所謂カレッヂタウンであつて學者や學生が多く住んでゐる。從つて人氣のいいところであつた。

町の背後には、高い丘陵が波うつてゐて、空氣も清く氣候もよく、まことに住みいい處だつた。日本人も、かなり集つてゐた。

○

日本から來る學生で、學資にゆたかなものは、多くは、紐育とか、ボストンとかへ行つて了ふが、學資に乏しい書生は、夏は農園の手傳ひなどをし、冬はこのカレッヂタウンへ來て勉强

をしてゐた。

土地の白人も、これらの日本人學生には相當の同情を以て色々た便宜を彼等に與へてゐた。私も、しばらくこのタウンにゐたことがあつた。

○

その頃の事である。私の友人に、竹下と云ふ學生があつた。竹下は白人の家庭へはひつて、そこの臺所（ケツチン）の手傳ひなぞをしてゐた。或る日、竹下は非常にエキサイトした顏色をして、私たちの泊つてゐた宿へ歸つてきた。スウツケイスだの書物だのを兩手に下げてきた。靑い顏をして自分の室（へや）へ驅け込んだぎり出て來なかつた。

電話の時鈴（ベル）が鳴つたので、同宿の一人が挨拶（あいさつ）に出て見ると、ミセスDと云ふ人からの電話で、竹下にすぐ歸つて來て貰ひたいと云ふことだつた。

○

竹下は廿五六の靑年だつた。彼れは正直ものだつた、然し、そそつかしかつた。

竹下がよくものを毀（こは）すので、ミセスDは彼れの爲に、その給金を貯金してやつてゐた。毎週五十仙づゝ貯金して、それをクリスマスの時に渡してやる。若しこの上、なにか毀すやうな事があれば、毀したものゝ代價をそのうちから差引かうと云ふことになつてゐた。

何でも其頃はまだ春だつたから、クリスマスと云ふとかなり長い時月がその間にあつた。この長い間を通して竹下を家のものの一人として置かうと考へたミセスDは、相當に竹下を愛してゐたと云へる。

ミセスDは、大學の書記をしてゐる人の細君だつた。竹下は小づくりな男だつたから、白人の目からは、漸く十九ぐらゐに見えたことだらう。ミセスDが竹下の爲に、小兒をあしらふやうた罰則を設けたのは、そのせひでもあらうし、また、白人の中年の女が、凡て年若の男を弟あつかひにする、そのスヰートな情愛からも出たものであらうと思へる。

竹下は、さうは考へなかつた。人を莫迦（ばか）にしてゐると考へた。人をなるたけほだして使はうとしてゐるのだと考へた。結局は給金の幾分を差し引かれることになるのだと考へた。

○

其日の朝、竹下は、大きな皿を毀（こは）した。

勤めに出て行く夫君を送り出してしまつたあとで、ミセスDはすぐピヤノを弾くのが例になつてゐた。竹下が臺所で朝餐の皿を洗つてゐる間に、ミセスはパアラアで、ピアノを弾いてゐた。

物の毀れた音がしたので、ミセスはピアノをはなれて、臺所へ來て見た。すると、今夜客をする爲に使はうと云ふので、わざく取り出して置いた、秘藏のプレートが、割れてゐた。

ミセスDは悲んだ。『これは英國から來た皿で、十二枚揃つてゐたのに、お前が一枚こはしたから、もう、はんぱになりました。お前が來てから、私のうちには、揃つたものはなんにもないやうになりました。』

ミセスDが、女々しく、かきくどく言葉をきいた竹下は、ぐつと癇にさはつた。

『そうですか。これは一たい、一と揃ひ、いくらですか』と、斯う聞いた。

『一揃ひ廿五弗で買ひました、然し、お前が一枚分のチヤアヂをしても、一と揃ひでなければ買へない品だから、ほんとに困つてしひます。もう、そんなにものを毀されてはあなたを使つてゐることも出來ないやうになります』

竹下は、ポケツトへ手を入れた。彼れの唇はふるへてゐた。

廿五弗の紙幣は、ミセスDの目の前に並べられた。

何をするのかと驚いて見てゐたミセスDの目には竹下が十一枚のプレイトを取り上げたのを見た。十一枚のプレイトの重なつたままを、窓の外へ抛り出したのを見た。

竹下は、ミセスDの叫び聲を聞いた。ミセスDが慌てて臺所の外へ驅け出してゆくのを見た。ミセスDの室の戸に鍵のおりる音をきいた。

竹下が、宿へ歸つて來た、その翌日、ミストルDが彼れを訪ねて來た。そして竹下に是非歸つて來てくれろと云ふ傳言を殘して行つた。

竹下は、とうとう歸つてゆかなかつた。三四日たつてから、竹下の廿五弗と、ミセスDが預つてゐた竹下の貯金と、その週間の給料とは、再びミストルDの手によつて、とどけられた。

その後、ミセスDは、同家を訪問した竹下の友人の一人に、『どうも私には日本人の性質はよくわからない。』と云つたさうだ。

……………………

遠くへはなれてきくとその聲が大きくて、近くへ寄つて見ると大した事もなさそうに思はれるのは、カリホルニヤの、日本人排斥である。

をしてゐた。

土地の白人も、これらの日本人學生には相當の同情を以て色々た便宜を彼等に與へてゐた。私も、しばらくこのタウンにゐたことがあつた。

○

その頃の事である。私の友人に、竹下と云ふ學生があつた。竹下は白人の家庭へはひつて、そこの臺所(キッチン)の手傳ひなぞをしてゐた。或る日、竹下は非常にエキサイトした顔色をして、私たちの泊つてゐた宿へ歸つてきた。スウツケイスだの書物だのを兩手に下げてきた。青い顔をして自分の室(ヘヤ)へ駈け込んだぎり出て來なかつた。

電話の時鈴(ベル)が鳴つたので、同宿の一人が挨拶(あいさつ)に出て見ると、ミセスDと云ふ人からの電話で、竹下にすぐ歸つて來て貰ひたいと云ふことだつた。

○

竹下は廿五六の青年だつた。彼れは正直ものだつた、然し、そそつかしかつた。

竹下がよくものを毀(こは)すので、ミセスDは彼れの爲に、その給金を貯金してやつてゐた。毎週五十仙づゝ貯金して、それをクリスマスの時に渡してやる。若しこの上、なにか毀すやうな事があれば、毀したものゝ代價をそのうちから差引かうと云ふことになつてゐた。

何でも其頃はまだ春だつたから、クリスマスと云ふとかなり長い時月がその間にあつた。この長い間を通して竹下を家のものの一人として置かうと考へたミセスDは、相當に竹下を愛してゐたと云へる。

ミセスDは、大學の書記をしてゐる人の細君だつた。竹下は小づくりな男だつたから、白人の目からは、漸く十九ぐらゐに見えたことだらう。ミセスDが竹下の爲に、小兒をあしらふやうな罰則を設けたのは、そのせひでもあらうし、また、白人の中年の女が、凡て年若の男を弟あつかひにする、そのスキートな情愛からも出たものであらうと思へる。

竹下は、さうは考へなかつた。人を莫迦(ばか)にしてゐると考へた。人をなるたけほだして使はうとしてゐるのだと考へた。結局は給金の幾分を差し引かれることになるのだと考へた。

○

其日の朝、竹下は、大きな皿を毀(こは)した。

桑港の市街では、電車は辻々で止まる。電車に乘らうとする人は、線路のわきに立つてゐて手を擧げる。すると、電車は、とまつてくれる。然し私は電車が、遂ひぞ日本人のために、止つてくれたところを、見たことは、なかつた。

私はいつでも電車に乘らうと思ふと、二三丁の間を、見まはした。必ずそのうちの、ある角に白人の女が立つて電車を待つてゐる。そこまで私はすたすた馳けて行つて、この婦人の乘るあとから私も乘つた。

○

私の友人にSと云ふ、東北うまれの極く人のいい男があつた。或る日のこと、電車に乘らうとして、私と同じ方法を用ひて、ある白婦人の、然も、お婆さんのあとに着いて乘らうとしたところが、ひどく年を取つたお婆さんで、なかなか乘れなかつた。Sは見るに見かねて、後から押し上げてやつた。お婆さん悦んで、やつと電車に乘つて、サンキユウと云ひながら後ろを振り向いた。柄の大きなSは、そこに立ちながら、電車が走り出すとたんにお婆さんが、よろけるといけないと思つて、腕をかるくおさへてやつてゐた。お婆さんはSの顔を見上げた。お婆さんは急に顔色をかへた

『オオお前は、ジヤツプか。イヒツ！』、その手を、私からはなしておくれ。』と云つたそうだ。周圍に、これを見てゐた白人は、同じくイヒツ！と云ふ表情をSに向けたそうだ。

○

これに類した事は間々ある。サクラメントでは、自轉車に乘つた少女が歩道のわきのガタアのなかへ輪を入れて、倒れそうになつたので、通りかかりの日本人が、何氣なしにその少女を抱きとめた。巡査がこれを見てゐて、その男をアレストして、婦人侮辱罪に問ふたと云ふ。

パスコでは、汽車往生をしやうとした女を抱き止めて、牢へ入れられた同胞があり、バンクウバでは、海へ落ちた女を救つて、罪を得た同胞があつた。

○

電車の飛びのり飛び降りと云ふことは、その速力の早い向ふでは、なかなか、あぶないことである。然し桑港の日本人は、上手だ。やむを得ず上手になつてしまふ。私もその一人だつた。

或る日、私が、電車から飛び降りる時に、上から帽子をとら

れて、それを二三丁さきの往來へ抛り出された。こちらから馳けて拾ひにゆく迄に、馬に、踏みつぶされてゐたことがあつた。

その時にはこれはちと、おふるまひの分け前が、多すぎると思つた。

以後、私は飛びおりをやめて、やはり女たちのおりるあとについて降りた。その代り自分のおりやうと思ふ處へおりられた事は、たまにしかなかつた。

○

往來を歩けば、子供たちにジャップジャップと罵られ、買ひものに行けば、後廻しにされ新聞を見れば、日本人の惡口が書いてあつた。桑港では、日本人の惡口を書かない新聞は、賣れないさうだ。

一と年、ポオトラ祭と云ふフェスチヴアルがあつた。その時に各國の軍隊の行列があつて、そのなかに日本の海軍旗を押し立てた海軍陸戰隊が加はつてゐた。私は、それを、ストリイトのわきの棧敷の上で見物してゐた。

旭日の旗の飄るのを見た時には、私の、胸は、白人等が、侮蔑の笑ひを交はしてゐる、其の背後に壓迫されながら、高く皷

動した。涙は自然にあふれた。

○

パアクレイに並んで、桑港と相ひ對してゐる一つのタウンがある。オアクランドと云つて、桑港よりも人氣のいい處だつた。

このオアクランドとパアクレイの後ろにある山に、四つの谷があつた。ダイモントと云ふのを右にして、ピイドモント、フエイヤモント、それからリッチモントと順に左に並んでゐた。

私は、この、ピイドモントにゐた、リチヤアド、パアテングトンと云ふ英國人の畫家に愛されてゐた。私はこの人から繪畫を習つたのが、目に自然の色彩を見ることの出來た、そもそもの初めであつた。

私は、谷々の間を馳け廻つて、寫生をはげんでゐた。私は人の來る處へは、カンバスを据えなかつた。私は寫生をしてゐるわきへ人にたゝれるのがいやだつた。のみならず、あの邊の白人はすぐ私の藝術を莫迦にしてかかるので、それが何よりも嫌ひだつた。それで私は自然と私と、二人ぎりで寫生をした。それを私は、パアテングトンの畫室へ持つて歸つて批評して貰つたり、テクニクを敎はつたりするのが例になつてゐた。

氏の寝室は、ユウカレタスの林のなかにあつた。この林を出ると、オアクの樹がところどころに、かがんでゐる野原があつた。野原はポヒイと牧草に蔽はれてゐた。私はその牧草の中に坐つて、夏の雪や、暑さに黄ばんだ草の穂や、陽炎の向ふに見える小屋などを寫生してゐることもあつた。

晝頃になると、パアテングトンの細君は、林のなかから私の名を呼びあげて、ランチヤンを知らせるのが例になつてゐた。私が遠くはなれてゐる時には、細君は、野を下つてきて、碧空の下に立つて私の名を呼んでゐた。

或る日の事、私はいつものやうに、カンパスを抱へて、氏の寝室へ歸つて來た、すると寝室の入口から私を見た氏は、手を振つて、來てはいけないと云ふ事を知らした。私は素直に、そこにあつた大きなユウカレタスの下に待つてゐたやがてパアテングトンは出て來て、私に二た言、三こと話したが、繪を見てやらうとは云はなかつた。寝室の方を見るとその入口に、四五人の白婦人が立つてゐて、私の方を見てゐた。そして桑港の町で逢ふ女が私たちに向けるやうな、冷やかな眼を私に向けてゐた。パアテングトンは、また晩に來いと云つて、私には後ろをむけて寝室へはいつてしまつた。

其の晩、私はパアテングトンに逢つたけれども、もう、カンパスを通じても、二人の間に一度出來た隔りは、再びもとの有樣に、接ぎ合せる事は出來なかつた。

其の後はお互ひに、その隔りを去らうとして努めた。けれども努めれば、努める程、隔りは、たしかな現實となつて行つた。

あたしが若し日本人でなかつたなら、彼の土地に排日と云ふことがなかつたなら、あんなことには、ならなかつたであらうと、今でも思つてゐる。

私が紐育へ來てからも、パアテングトンが逢ふ日本人ごとに私の噂をしてゐたと云ふことを聞いた。

兎も角、私はカリホルニヤを去る時には、一生に二度と再び、こんな土地は踏むまいと靴の底の塵を拂つて立つた。

○

然し、加州の日本人のなかには、無智な勞働者ばかりはゐなかつた。ロスアンゼルスを中心として發展した日本人は、その後、彼の土地に抜くべからざる根據を築いた。サクラメントやフロリンを中心として發達した日本人も、もう深く彼の土地に、その生活をうゑつけて了つた。

これからの在米日本人は、進んで米國の市民權を得。進んで

彼の國の子女と結婚し、進んで彼の國の宗敎を奉じ、進んで日本語を語ることを忘れなければならない、大勢に近づいてゐるのである。

今迄、排斥される爲に努力してゐた彼等はこれから排斥されないやうに努力しなければならないのである。

○

ところが日本人の、努力の仕方が從來とは變つて來たその傾向を、見て取つた加州人は嫉妬の眼を日本人に向けて來た。後日の不安を自家の生存の上に感じて來た。以前には警戒してゐた日本人を、爾來は恐怖するやうになつて來た。その結果は、彼等特有の排他的根性の發揮となつた。今度の在加日本人排斥案がそれである。

元來、加州人は、日本人に向つて排斥心を持つてゐるばかりでなく、彼等は同じ合衆國の他州のものに對しても排斥をやつてゐる。他州人と見ると職業をやり惜んだり、公職に就かせなかつたり、或は勞働組合に入れなかつたり、兎角、新來の他州人に、くだらないハンデキアップを着けたがる。加州人と云へば、合衆國での憎まれものである。

……………………

千九百十八年九月、北米合衆國の人口登錄を、私は紐育に居てうけた。私は紐育のユニオン角園の登錄所へ行つて登錄した。其頃はまだ、世界戰爭の最中で、ことにアメリカは第二國民軍の動員を了つて、第三國民軍の召集をしやつと云ふ前であつたから、往來は星條旗の虹をなびかして、大道を行列する軍隊の喇叭は、高い建物に反響し、市民はもう熱狂してゐた、青年と云へば皆、軍隊の制服を纏ひ、制服を纏はないものは、老人と女と子供と、外國人ぐらゐなものだつた。

○

ユニオン角園には、木造の軍艦が出來て、水兵が其のなかで艦內生活の模樣をやつて見せてゐた。靑芝の波の上に建てられた軍艦を見て、私たちは、彼の軍艦は、いつ歐羅巴へ行くのだへなぞと冗談を云つてゐた。人の國が戰爭してゐるときに、その國に住んでゐてその國の人たちが夢中になつてゐるところを見る程、面白い事はない。彼等のすることなすことは、まるで氣狂ひの沙汰であつた。

○

然し人口登錄の日が來て、私の名を合衆國の帳簿の上に登錄

してやがて、送附さるべき地方兵事課の呼び出し狀を待つ身に、なると、今迄とは心持ちが、がらりと、變つて來た。自分の友人だつた、青年詩人の、スキツプカナアルが、出征する其の勇ましさに、涙を注ぐやうになつた。今、考へて見ると、どうもその時の心もちは、よく私にはわからない。私は十餘年來住んで來たアメリカに對して、相應の愛情を持つてゐたと云ふことは考へられる、また、十餘年來、養はれたアメリカに對して責任を感じてゐたと云ふ事も考へられる、然し私は交りも、さう大して深くなかつた一友人の出征に際して、なぜ、涙をこぼす程に感激しなければ、ならなかつたであらうか。

私は、その頃からは、もう熱心に星條旗に對して敬意を表するものとなつてゐた。人口登錄を怠つた外國人たちが捕へられて、荷馬車に積まれて、ジエールへ送られる有樣を、一笑を以て、見送るものとなつてゐた。

○

一週間ばかり立つと、ロオカルボードの呼び出し狀は來た。私の友人どもは、日本人の私にも呼び出し狀が來たと云ふので、驚異の目を瞠つて、私の出て行くのを、見送つてゐた。私は、ウエスト二十三丁目の、基督敎青年會館のなかにあつた、ロオカルボードへ出頭した、丁度、夕方だつた。

館内の廣いホールには星條旗が掲げられ、自由の女神コロンビヤの繪姿は、壁に粘られて、その上からは電球が、幾つかの灯の蕾を開いてゐた。呼び出された人々は、はや、詰めかけてゐた。

黑人もゐれば、猶太人もゐた。またなかには女房に連れられて來てゐた英語の話せない伊太利人もあつた。

私たちは、女事務員から下調査を受けて、公式の宣誓場に呼ばれるのを待つてゐた。獨身の市民は一も二もなく軍籍へ入れられた。妻子のある人でも財產のある人や、また收入のあるワイフを持つてゐる人は軍籍に入れられた。まだ市民になつてゐなかつた外國人でも、進んで召集に應ずる誓ひを立てたものもあつた。群集は、これに向つて、敬意を表した。

○

私の番は廻つて來た。私は公式兵事委員の前に立つた。

『先づ、あなたの言葉に僞りはないと云ふことを、右の手を擧げてお誓ひなさい。』

私は右の手を擧げて誓つた。

『あなたは合衆國の市民ですか。』

『否』

『あなたは合衆國の市民となる希望を持つてゐますか。』

私の心のなかにはある疑問が閃いた、何人の日本人が、この問ひに向つて『諾』と云ふ答へが出來るであらふ。日本人には合衆國の市民權を與へないことになつてゐる。然し、その市民權を得ようとする希望を持つてゐるかと問はれた時に、その希望だも持つてゐないと云ふ返事をする事になれば、それはつまり、この國に同化することを拒むものであらねばならぬ。あの太平洋沿岸でもこれと同じ問ひを日本人に向つて發してゐる。そして日本人は、それに就て何と云ふ誓ひを立てるであらうか。私は、しばし默然として、コロンビヤの綸姿を眺めてゐた。

この國の市民になるのには、その市民になつたものゝ本國と、この合衆國と、一旦、開戰した曉には、そのものは、その本國に向つて、銃を把ると云ふことを、誓はねばならない。私には、それが誓へるだらうか、いや、私はこの國の市民となることを本心から望んでゐるだらうか、

女神コロンビヤの畫像は、私が知らず知らずに抱いてゐた、二重愛國心を、悲んでくれるやうにも見えた。

委員は、緘默をまもつて、私の答へを待つてゐた。

『否』と私は返事した。

『あなたは、合衆國の軍隊へ加はつて、合衆國の敵と戰ふ意志を持つてゐませんか。』

私は答へをするのが苦しかつた。私は此の國に十三年來住んでゐて、その間この國に養はれて來たものである。今この國民が、各々の犧牲を國に捧げつゝある秋に當つて、この國の軍隊に加はつて、この國の爲に戰ふと云ふことをすら拒まなければならないのである。私は氣の毒でたまらなかつた。

若し一度意を決して合衆國の軍隊に加つて太西洋を渡るからには、私は自分が產れた國土を愛すると云ふ、限られたる愛國心を捨てなければならない。私はそれをいいことであると想ひ得るけれども、私の肉身は、まだ、故國の土に屬したものであることを、考へなければならない。

『否。』と私は答へなければならなかつた。

『あなたは、あなたの本國へ歸つて、あなたの本國の敵と戰ひますか。』

何と云ふ用意深い質問であらう。何と云ふ意味の廣い質問であらう。今、私等の敵と見なしてゐるものは、獨逸及びその聯邦であるが、若し他日に及んで日本とこの國と、砲火のうちに見ゆると云ふ日が來たとすれば、私等は本國へ歸つて、この國

と戰ふかと云ふ質問にもなつて來る。この國の市民になる希望もない。この國の軍隊に加はるのもいや。然しこの國との戰ひならしやうと云ふ誓ひを私は今、誓はなければならない。私はその時、私たちは此の國から排斥されても、しかたがないと思つた。

『諾。(イエス)』と私は返事した。

私はすごすごと、宣誓場を離れた。私は下を向いて、群集のなかを通つて、歩廊を出た。

○

私の友人だつた日本人のなかにも、その際合衆國の軍隊に、從軍して、凱旋ののちに市民權を得たものもあつた。

また、從軍をしただけで、市民となることを謝絕したものもあつた。

私の友人のなかには、戰死したものは、なかつた。(完)

色盲と其遺傳

大阪 醫學士 曾根辰五郎

色盲の遺傳を云ふには先づ色と云ふことから簡單に述べて、次に色盲と云ふことを說明し、最後に遺傳に就て書くのが順序であらうと思ふ。

第一 色の概念

色に就ての觀念は既に二千五百年前釋迦は般若波羅密多心經中に云ふて居る、即ち「舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色」と併し現今の科學的に解決される樣になつたのは實に英國の有名なる數學家アイザック、ニュートンに感謝しなければならぬ、彼れは西暦千六百四十二年に生れ千七百二十七年に死んだ、即ち八十五歳の高齡を保つた。今から丁度二百年程前の人である、日本で云ふと德川初代頃の人だ。彼れは諸種の色は其の者固有の性質ではなくて吾人の眼に反射して來る光線と其の色々な波長によるものだと云ふ卓見を發表した。之れによつて吾

人の現代の色に關する思想は生れたのだ。此の實驗はニウトンが「プリズム」即ち三稜鏡を用ひてやつたのである。諸君「プリズム」を以て光線を分拆せよ、或は三稜鏡を通じて外界を觀察せよ、然るときは赤より橙、黄、綠、青、藍、紫と見ゆること虹と同樣なり、此れニユウトンの實驗の方法であつて今も昔も變りはないのである。即ち波長の最も大きい〇、〇〇〇七六「ミリメートル」を持つて居つて振動數の最も少ない四八一兆であるのが赤で、それより波長は小さくなる一方振動數は段々增して來ると前に云ふた順序の色になるので、最後に波長〇、〇〇〇四「ミリメートル」振動數七六四兆になると紫として吾人の網膜に映ずるのだ。併し赤より波長の大きい振動數の少ないものでも、又紫より波長の小さい振動數の多いものでもあることはあるのだ。これは吾人の網膜の構造が不完全な爲めに見ることが出來ぬ丈けで、之れに赤外光線及紫外光線の名が附いて居つて見えはせぬが、色々なことに此等の光線を使つては居る。其れから色學に關して進步發達を來したのは英國のトーマス、ヤング(一七七三―一八二九)及獨逸のヘルムホルツ(一八二一―一八九四)二人の功に歸せなければならぬ。ヤングは「光と色の理論」なる論文を書いて原色を指定した、即ち赤、黄、青、此の三色は原色で綠は青と黄とを混合すれば出來るのだと云ふた。併し其の後ヘルムホルツが布衍して三原色は赤、綠、紫であると云ふことになつた。此の説を世人はよむで、ヤング、ヘルムホルツ氏色論と云ふて居つて現今最も權威ある色學論である。併しヘーリング(一八七〇)氏説は色のことを解するには最も都合のよき面白き假定説である、これは四原色即ち純紅、純綠、純青、純黄を基本として紅は綠と相對色、黄は青と相對色だと云ひ、色感、色音、色階等を高唱し視質乃至視素に光線作用するとき其の視物質は分解し光線の作用止めば再び視物質は再生す、又一方紅綠視素は紅色分解せば綠色再生し、青黄視素は青色分解せば黄色再生し、白黑視素は白色分解せば黑色再生す、兩色を合して無色の感覺を起さしむるもの之れ補色であると云ふのである。

第二　色盲及色神減弱症

其の一　色盲に關する歴史

歴史的に調べて見るに東洋には之に就ての記載を見ない、唯一つ古今圖書集成藝術典百六十三卷醫部彙考百四十三、目部六十二に視赤如白と云ふ題であるのを見るが、併し到底滿足する樣なとは書いてないが、西洋には既に今から二百卅五年前西曆一千六百八十四年に、「ドクトル」チユーベルビルが『ローヤルソサエチー』に送つた書面中に廿二歳の下女の全色盲に就て記載

して居る。面白いことには其の女は色は白と黒とより區別をすることは出來ぬが、暗調適機能（暗いところで物を見わける働き）は大變よかつた相だ。其れから九十三年後なる西曆千七百七十七年には「ハッダード」氏が「ハルリスト」なる靴屋の色盲であつたことを書いて居るし其れから二年後には「スコット」が自分自身のことを書いて居る。けれども之等は唯色の見わけがつかぬと云ふ丈けで學問的に記載されて居る譯ではない。科學的に色盲と云ふものが立派に存在すると云ふことを世間から認めらるゝ樣になつたのは實に英吉利の理學者ダルトン博士の功である。彼れは自ら先天性色盲であつた爲めに始めて詳細に記載して發表したので一般の承認を得る樣になつた。之れが西曆一千七百九十四年卽ち今から百二十五年前である。之れが爲めに色盲のことを「ダルトニスムス」として知られて居るのである、ダルトンの云ふたことを再記して見ると次の如くである。

『私は千七百七十三年迄自分が色盲であると云ふことは全く知らなかつたが、或時偶然にも蠟燭の火で「ジエラニウム」の花を見た、之の花の色は元來淡紅色であるのに其れが自分には今迄日中で見て確かに空の色と同じであると思ふて居た、處が今蠟燭の火で見ると非常に異ふて見える、卽一寸も青味のところはない、却つて青とは反對の色である、其れから自分は此の事を解決せんが爲め多數の友達に何故だらうと云ふことを尋ねたところが吾々兄弟の他は皆誰でも此の花を日光で見ても燭火で見ても其んなに異つて居る色ではないと答へた。其の後友人の助力で暗室の中で「プリズム」から分散した「スペクトルム」を研究した。人々は此の「スペクトルム」の色を六つに區別するが自分は全く異つて唯二つ或は漸く三つに區別が出來る丈けである。其れは黃と青と今一つは紫である、自分が黃色と云ふのは他の人々の云ふ赤、橙、黃、綠を含むで居る、又自分の青と紫は他の人のと一致する。人の赤と云ふ色は暗黑よりは少し明るい、橙黃綠の部分は同じに見えて黃の少し明るいと暗いとであるが、併し如何に其れを區別すべきかは不可能である。綠と青の部分は其の區別が甚だ容易である。青と紫は一層よくわかる、紫は青が濁つた樣に見える、赤ごちや〳〵と花の咲き亂れて居るのは白き背景に黑き背がある樣に見える。又血の色も青だと云ふて赤とは決して云はない。丁度白紙の上に淡い黑インクで色をつけたのと一致する、月桂樹の葉は赤い「パラフヰン」の色と一致すると云ふのである。』

ダルトン博士は斯くの如く自分の視覺に缺點のあることを知つて眞面目に之を研究して發表した後、他にも自分と同樣の視覺を有するものがあるかと注意して見ると其の數が甚だ澤山あ

ることを發見した。是より後醫者や學者が色盲を注意する樣になつた。其れから西暦千八百七十五年即ち今から四十四年前(明治八年である) 瑞典のラーゲルルンダで汽車の大衝突があつて之れが原因は機關手が色盲であつたが爲めに信號の色を誤つたのだと云ふことを瑞典國の生理學者ホルムグレーン氏が詳細に調査して發表した。其れ以來一般世間の人々の注意を喚び起して、信號殊に色によつて信號する鐵道員又は船員、陸海軍、其の他學校生徒等も綿密なる色神の檢査を行ひ、色神健全なものでなければ採用を許さぬことゝなつた。

其の二　色盲分布の狀態

ダルトン博士色盲の現象を詳細に發表して以來、各地で醫師學者が檢査をして見た、其の數は多少相違はあるけれど平均百人に對し少くとも三人、多くて五人から七人位だ。無論或國或地方又は職業等によつても多少の相違はあるが、之の百分率は男子の方のことであつて女子はずつと少なく、其の割合先づ男子の八分の一乃至十分の一位である。

外國人も日本人も左程相違はない樣だけれど、どちらかと云へば日本人の方が少くはないかと思ふ。有名な學校衛生の大家コーンが男學生二千四百二十九人について檢査せるに、九十五人即ち四%あつたにも拘はらず女學生一千六十一人中には一人もなかつた。日本でも戸祭氏の報告によると明治卅年から卅七年の八ケ年に亘り海軍兵學校生徒志願者五千四百六十九人中九十七人即ち一、七七%ある。其の後山口秀高博士が大正三年四月一日報告された所によると四千六百六十三人中色盲二百十三人即ち五、八%となつて居る。尙小生が最近去年四月京都大學で開かれた日本眼科學會第二十三回總會で報告したるところによると檢査總人員七千七百五十五人內譯男學生四千四百六十七人中色盲及色神減弱者百六十三人即ち三、四%女學生三千二百八十八人中十八人即ち〇、五五%に相當す。

併し以上の數を以て凡て正確なるものとも云へねば亦間違つたものであると云ふ譯にもいけない。何となれば檢査に使用する目的物が異つて居る。又人數も大分相違がある、で余は將來男子五萬人女子五萬人合計十萬人として同一方法による最も進步せる檢査具を使用してやつたならば割合正確な統計がとれはせぬかと思ふ。之れは近き將來に實施して發表する積りで居る。

其の三　色盲の分類

色盲と云ふのは或色が見えないのだ、例へば赤が見えないとか、綠が見えないとか、靑が見えないとか、黄が見えないとか、又或は世中は白と黑と許りで色と云ふものがない丁度夜分に吾人健康者が色を見る樣な狀態にあるのと同一である。次に色神減

弱症と云ふのがある。此れは或色が見えぬのではない、見えることは見えるのだけれど其の見え方が普通の人と異つて居る。赤が樺色に見えると云ふ樣な狀態だ。卽ち見え方が多少弱つて居る。此れを普通色弱と云ふ名を附けてあるが余は色神減弱と云ふ方がよいと思ふ。此の色神減弱は唯程度問題であつて色盲の型に極近似して居るから玆の記載中には色盲とのみ書くが、勿論色神減弱も含むで居るものと思つて貰ひ度い。

色盲には先天性と後天性とある。先天性と云ふのは生れ付きで卽ち親から傳へられたか乃至は親になくとも祖先のが傳つたか、又は偶然に生るゝ前からあつたものである。後天性と云ふのは生れて後に出來たので、眼或は腦のどこかが病氣に罹つて其の結果或色が見えなくなるのである。

先天性色盲は全色盲（世の中が白と黑のみ）紅綠盲（紅或は綠の見えないもの）之れを第一型（赤の見えないもの）第二型（綠の見えないもの）の二つに區別するけれど、余は第一第二の了解し難きを止め、綠の見えざるを綠型と云ひ、赤の見えざるを紅型と云ふたらよいと思ふ。

全色盲は非常に少ないもので十萬人に一人位の割合である。余はまだ一回も見たことがないが陸軍軍醫學校の石原博士は三四回も見られて詳細に記載されて居る。こう云ふ患者は視力が〇、一卽ち普通健康者の十分の一位かなく、且つ甚だ羞明を感ずるが故に眼を細くして居つて家族的にある相だ、この患者は「スペクトルム」中綠の分最も明るしと。

紅綠盲は紅と綠を見ない他は健康者と異なることはなく、殊に視力の如き或は靑黃の判別の如き到底健康者は及ばない位銳敏である。而して分布の狀態は綠型の方が紅型よりも十倍以上多い。吾々健康者でも紅よりはどうしても綠の方が見えにくいのは誰も知るところである。

後天性色盲は網膜或はそれよりも中樞の病氣の爲めに起るところの色視野（色でどれ丈け廣く見ゆるか）の缺けて居るので、通常片方の眼の視野の一部分がやられて居つて且つ色神のやられ方の有樣甚だ不規則で、綠色丈けが早くやられることもあれば、靑色丈け早くやられることもあり、又黃色のことも、赤のことも紫のこともあると云ふ樣な具合だ。殊に色が見えないだの云ふて眼科醫者のところに來ることは稀で、主として視力其の他色々な障碍を訴へて來るのが普通であるから、吾々が常に云ふて居る色盲とは全く別種のものである。

其の四　色盲の檢査

色盲の檢査も色々なやり方がある。之から順々說明して見やう。

(一) ホルムグレーン氏毛糸法

此れは最も早く開け又最も廣く用ひられ、今でもまだ中々用ひられて居る方法で、西暦一千八百七十八年即ち今から四十一年前「ラゲルランダ」で列車の大衝突があつてから三年後に案出したので「スペクトルム」中紅、橙、黄、緑、青、藍、紫の七種を初め淡紅、濃紅等色々の色素を用ひて染めた毛糸數十種をとり、(各種とも濃淡色々なければならぬ) 其の中一種例へば淡紅或は淡緑の毛糸を取り出して之れを受検者に示し、此の見本と同じ種類を其の濃淡に拘はらず全部取り出せと命ず、受検者健全なる色神を持つて居ればすぐにより出して遺すところはない、然るに色盲者は中々容易により出さざるのみならず、折角より出すとも大に間違ふて居る。

附、保利氏絹糸法も之れに準ず。

(二) アードレル氏色鉛筆法、色鉛筆を以て検者先づ白紙上に書き數種の鉛筆を出して同色を記さしむ。之れは後來の參考となる。

(三) ダーエ氏表、假性の同色列を云はしむ。

(四) 暗室にて石油燈の前に色々の硝子例へば赤、青、緑、黄、紫等を置きその名を速かに云はしむ。

(五) スチルリング氏假性同色検査法

假性同色を以て色點集つたもの丶中に色點の文字を書き讀ましむ。

之れに準ずるは伊賀氏石原氏表等なり。孰れも「スチルリング」以上によし。殊に石原氏の色盲者には容易に見え健康者には見え難き表の如きは實に世界にほこるべきものにして目下最も廣く用ひられ、各學校陸海軍等皆之を用ふ、鐵道院は伊賀氏表を用ふ、此れも中々よし。

(六) ナーゲル氏色彩表「カード」に色點を書き多數を置き、一を與へ順次同様なるものを撰び出さしむ。

之れに似たるは小口氏色彩表なり、之れもナーゲル氏表は優るとも劣ることなし。

(七) マイエル氏反對色検査法。

一定の色紙例へば赤色の臺紙の上に灰白色の輪状の紙ぎれを置き、更にその上を薄き紙にて被ふときは輪色一變忽ち臺紙の反對色となる、故に此場合には緑色に見える。

(八) プリユーゲル氏色板

此れも丁度マイエルの反對色法に似たのであつて、各色の臺紙に銀灰色の羅甸、羅馬文字及亞剌比亞數字等を記し、之を一葉或は二葉の薄紙で被ふて受検者に讀ましむ。色盲患者は讀むことが出來ない。

(九)ヘーリング氏色彩混合機

暗室で色々の色硝子を用ひて石油燈の前で檢査するもの。

(十)「スペクトルム」混色機

一つの圓板に「スペクトルム」色を色々に書き廻轉さすときは白色になる。勿論早く廻すと遲く廻すとでは非常に差があることは云ふ迄もない。

(十一)「ナーゲル」氏色神異常計(アノマロスコープ)

此れは現代の色神檢査法中最も正確なるものなるも、器械も中々大きく且つ高價なるが故に誰でもがどこでも使ふ譯には行かない。

(十二)「ジョージ、ヤング」氏法

之れは給の具をうすめて檢査する方法で、最近の發表で東大眼科敎室の伊藤氏が去年四月京大で眼科學會の席上報告されて居る。

(十三)「スペクトルム」法

之れは余が「スペクトルム」を使ふて最後の判斷をするので、前に色の概念のところで云ふて置いたが「プリズム」を通じて外界を觀察するので、透明界と不透明界の境界に虹の如く色彩を見る。之れを一方より色の名稱を云はしむるのである。

以上で大體色盲檢査法の大體を綜つた積りだが、扨色盲を檢査する際には以上の一つで判斷しては間違ひが起きる。で余の現に用ひつゝある方法は先づ主として石原氏片假名或は數字表により其の健否を判斷し色神健全なるときは最早再試を要せない、けれども若しも少しでもあやしき時は伊賀氏のや小口氏小板やを用ひ、時としては毛糸、マイエル氏法プリューゲル氏法等も用ひ、判斷には余の「スペクトルム」を以てし最後に參考としてのこす爲めに「アードレル」氏法を用ふ、これはあらかじめ印刷せる紙上に原圖を畫し置き同樣の色にてぬらしむ。之れには色鉛筆數種を與ふ。併し色鉛筆の外色なきものでなければならぬ。これで非常に面白い結果があらはれる。

其の五　色盲の原因

何故に斯くの如き異樣な色覺を持つて居るかと云ふに、元來色を感ずるのは網膜中の中心部黄斑部であつて、圓錐細胞の視素によるのであるから、發育の初期に色別をなすべき視素發育不完全なるときは色盲となる。網膜の周邊部は白色のみを感ずるのだから全色盲の患者の網膜には殆んど凡て圓柱細胞のみで圓錐細胞は發育せないのだ。次に吾人の網膜の周邊部より稍中央に近い或範圍では白及青、黄の他は何も見えない部分がある。網膜の此の位置は普通の色盲と同じである。普通の紅綠盲は吾等普通眼の網膜中の此の部分と同樣の組織構造が中央迄充滿し

て居ると看做すことが出來る、即ち圓柱細胞の間々に極めて稀薄に圓錐細胞が交つて居るか、或は全く圓柱細胞のみで其形が稍進化して居る狀態であらう。普通の健康なる眼の網膜には其中央に圓錐細胞が密集して、總ての色を感ずる黄斑部尙其中央に中心窩と云ふ所迄あるけれど、色盲には此部分がないのである。

其の六　色盲の治療

色盲は治療せらるゝやと云ふに後天性病的の者は別として、眞の先天性色盲は治療は絕望である。唯幾分か其の不便を輕減せしむる方法としては赤と綠の色硝子の利用を巧みに習熟せしむるのである。光度が同じ紅と綠の物が色盲者に一樣の灰色と見える時、綠硝子を透して見れば紅色の物は綠色のものよりも暗く見え、紅硝子を用ゐれば反對に紅の物が明るく綠の物が暗く見えるので、兩者を區別することが出來る、

尙吾人色神健康者もこの紅綠の硝子をかけると眞似色盲となることが出來るので面白い實驗が出來る。

其の七　色盲と職業

色盲に不適當な職業は繪の具を用ふる繪かき、汽車、電車等の信號手及運轉手、船員（勿論船長機關士を含む）陸海軍航空機にのる人々、交通兵、陸海軍將校士官、染職に從事する人、吳服反物等凡て色彩の入れるものゝ商人、醫者就中皮膚病、眼科內科等を專門とする人、細菌學者、化學者其の他色の判別を要する諸職業である。

其の八　色盲に關する其の他の話

色盲の者は學校であるとか陸海軍であるとか、偶々鐵道從業志望なりしが爲め、其の方面とか兎に角何處かで檢査をされて、初めて知る場合が多い。いや殆んど凡てが其れで色盲者も自分では一かど色のことはよくわかつて居る樣な顏をして居る、即ち色盲であると云ふことは自覺して居らぬ場合が多い。色盲者が畫家となつてうまく繪の具を使ひ分けて居るものなども少くない。之れは長き經驗によつて其の濃度を區別して色調を知つて居るのである。

外國でも色盲者の滑稽談は色々あるが最も有名なのを一二三揭げると、或獨逸人が巴里に行き歸る前、巴里最新流行型の服を作らして一着に及び意氣揚々として獨逸に歸つた。會ふ人々が顏をそむけて笑ふのを見て彼等は最新流行を知らないのだ、田舍者奴がと云ふ樣な調子であつたが、友人の內に立寄つたところが、其の細君が笑つたので、流行先生稍不機嫌な顏をしてなぜ笑ふのかと云ふた、其の細君は之れに答へて曰く、成程あなたの服の仕立方や格構は餘程よいけれど其の色が丸で赤いじやありませぬかと云ふたので、始めて自分が色盲で服地を撰ぶ時に

黑と思ふて赤を注文したと云ふことがわかつて大笑ひとなつたのである。

又「プロイセン」の或郵便局で定時の勘定をして見ると、帳簿の記載に對し實上現金の數が大變不足してゐるので、局員に不都合な者でもあるのではないかと嚴重に詮議して見たが、更に犯罪者らしいものも居らぬので不思議に思ふて居つたが、其の内偶然に局員中の一人が色盲で其の爲め二錢の紅色「スタンプ」を使ふべきところへ三錢の綠色「スタンプ」を使つた爲めである事がわかつた。

又喪中に黑い服でなければならぬのに赤い服を着て行つた爲めに亂暴者として警察に訴へられ、說諭を受けたけれど自分の服は黑であると云ひ張り、遂に官吏侮辱罪として獄に送られた色盲の話もある。

又今から七年前千九百十二年ジエルヘル Jerchel と云ふ男がミユンヘル大學のドクトル」請求論文に紅「綠盲の醫學的研究は那邊迄進歩せりや」Inwieweit das Medizinstudium durch Rot-Grünblindheit beeinflusst wird? なる論文にて自己の色盲に就きて詳細に記載し、色盲學に與へたる貢獻は實に偉大である。彼れは少年時友達と「イチゴ」を取りに行きまだ熟せぬの迄とつて笑はれ或は常によけいとれない爲めに友達のほど袋がふとらなかつたとか、或は幼時既に母は甚だ努力して色の識別の觀念を與へやうと思ふたにも拘らず、區別すること困難にして且つ屢々色を間違へた。ランプ燈火の下で鬪技盤の紅と綠の札を能く間違へた。赤い「テニスボール」や赤褐色の「ハンカチーフ」を如何に熱心にたづねても見出すことが出來なかつた。又余の繪具函の中は凡ての色が非常に早く消費されるにも拘はらず、綠色の丈けは何時迄も使はれずに終つた、草や木は私の繪には何時でも赤く繪かれて居る、と云ふて居る。

又余の檢査せる某小學校の男生（本年十二歲）畫を書かすと草は紅でかき花は綠或は灰色で書いて居る。又某生徒は繪を書かすと繪の具の使ひ方惡しき爲め常に下許り採點されて居つたが或時「エビ」をかゝせたところが大變立派に書いて上を取つた、これも面白い例である。又或農學校の生徒は綠色を見て樺色乃至灰色と云ふて居る。其の他紅綠盲紅型の男で僕の知人で醫者だが此の男は女は皆黑い湯卷を結んで居ると云つて居る。

其の他興味ある實例は澤山あるけれど餘り長くなるから此れ位で止めて置く

第三　色盲の遺傳

全色盲並びに紅綠盲は遺傳するものなることは既知の事實で

あつて誰も疑ふものはない。唯青黄盲が遺傳したと云ふ報告は見當らぬ。併し全色盲に就ては陸軍々醫學校石原忍博士が遺傳の系統等詳細に調査報告されて居る。且つ余は之れに就ては全く經驗がないから何事も云ふ權利はない。唯文獻上より彼此と云ふて見れば云へぬこともない。

唯紅緑盲に就ては前人のまだ知らざる範圍迄も色盲の遺傳に就ては經驗し研究して居る、且つ尚以上に進むべき理想もある。先づ歷史より順次に述べることゝしやう。

(一) 歷史的觀察

最も早く色盲の遺傳を說いたのはスチルリングである。氏は一八七五卽今から四十四年前卽ち瑞典の「ラゲルランダ」で列車の大衝突のあつた年に「眼科臨床月報第十三卷補充卷第二」に「色感學補遺」なる題で二例をあげ、屢々兄弟が犯され、姉妹は全く色神健全なるに兄弟悉しく又時には一人のみ犯され他は無事なりと。

次でホルネルはその翌年「ダルトン氏病の遺傳、遺傳法則に附言」なる題下に眼科臨床報告に盲色遺傳の通常の型を記載し祖父色盲なるときは健康なる娘を介して孫男に遺傳すと此れ實に現今迄一般學者の色盲の遺傳を論ずるとき標準とし證據とせる唯一の根據地なりしなり。

次で翌々一八七八年色盲檢査法の主唱者ホルムグレーンは「瑞典に於ける色盲に就て」と題し記載せる內に紅型は紅型のみ緑型は緑型のみ遺傳すとなせり。

同年シェーラーは或一家族を紹介し、五人の男子兄弟全部色盲にして長男の子は全部健康、三男に三人の女あり、其の二女より生れたる一男子色盲なり、又四男の子男兒四名女子二名にして男兒は三人迄色盲なりしも女子は健康、併し第三男と長女は聾啞なりしと。

次て其の翌一八七九年のコーンの色盲百家族中三家族に遺傳を證明せるが如き、同年ヘッケルの全色盲の遺傳一例、一八八〇シュミッツの統計的報告、一八八三ヒルベルトの報告、一八八八クノル、一八九四マウトネル、一八九八プリューゲル、大正五年石原大正六年草間等の報告を以て文獻の全體とす。小生の調査不充分にして、尚多數いや一つ二つでも色盲遺傳の記載あらば何卒御敎示を乞ふ。

尚エペルスブッシュが今より七年前發行せる小兒期に於ける眼病なる著書中ウエー、アー、ナーゲル、は名代の色盲者を觀察したりとて甚だ興味ある例の如く記載せり。

(二) 余の經驗

余は色盲檢査を思ひ付き色盲者の統計については本文色盲分

布の狀態のところに述べて置いたから再び云ふ必要はないが、唯簡單に述べると檢査人員男四千四百六十七人中百六十三人と女三千二百八十八人中十八人と合計百八十一人の色盲並びに色神減弱者があつて其の內二十例丈け遺傳のことがわかつて居る。一々之れを述べても左程興味がないかも知れぬから最も面白い例五六をぬき出して記載して見やうと思ふ。

第一例　母方より遺傳せる例。

兄弟姉妹各三兄弟二人紅綠盲綠型其の殘り一人は未檢査にて不明、其の姉二人及妹一人は色神健全、其の健全女子色神健なる男子と結婚し男二女三をあぐ、男二名とも紅綠盲綠型。

第二例、父方より遺傳せる例。

姉弟二人の某家族あり、その弟なる男子は紅綠盲中綠型健康なる女子と結婚し一男兒あり、此の子供紅綠色神減弱者にして綠型なり、其の綠盲なる男の姉は早世せるも色神健全なる男との間に一男兒あり、その男兒は紅綠色神減弱中紅型なり。

第三例　父母兩系より遺傳せる例

父紅綠色盲中綠型母紅綠色神減弱中綠型四男三女あり、三女は皆綠型の色盲乃至色神減弱者にして、男一は綠型なる色神減弱者なるも一人は健康の如く（余の檢査にて健全なるも之れ檢査法の不充分なるが爲めと思ふが故に特に斯くの如く記し置く）二人は未檢査なり、面白きことにはその父母の母同志は互に從姉妹たりと。

第四例、母方より遺傳せる例

兄弟あり二人とも紅綠盲中綠型、その父母共に異常なし、然るに母の兄同型の色盲なり。

第五例　父方より遺傳せる例

兄弟二人一女あり、兄弟は紅綠盲中綠型なるも一女及父母健全、然るに父に兄二人あり、一人は未檢査なるも檢査せる一人は紅綠色弱中綠型なり。

第六例　父方より遺傳せる例。

兄弟三人皆色盲綠型母異常なきに父綠型色盲なり。

第七例　母方より遺傳せる適例。

父母健全。母は家付の娘にして養子をとり一男三女をあぐ、一男は紅綠色神減弱中綠型なるも三女異常なし、然るに或事情の爲め其の父は離緣となり、他より養子をとる、養子は異常なし、然るに其の夫婦の間一男兒をあぐ、彼れは紅綠盲中綠型なり。

其他相似の他の例は一々列擧の煩を避く。

（三）　余の見解

以上の例を見るときはホルネルの法則以上に遺傳の頻繁なる

ものなることを知る。尙將來檢査法の完全なるもの行はるゝに至らば必ずや先天性色盲の全部遺傳するものなることを發見し得べく、此れによりて考ふるときはメンデル氏法則も色盲に關して丈けは當て嵌まらざるが如し、併し此の點に關しては將來充分なる檢査を要すと思ふも唯余の心念を述べ置く斗りである。尙將來充分に色盲の遺傳闡明さるゝに至らば凡ての遺傳論乃至遺傳法則にも稍變更を要するやも測り知るべからず、從つて動植物の改良人種改善の如きも稍動搖を來さすことなきやも測知すべからず、唯豫報的に述べ置くのみ。

(四) 結論

第一、第四、第七、三例は母方より遺傳し、第二、第五、第六、三例は父方より遺傳せるを示し、第三例父母兩系より遺傳せり、他は凡て男子のみに遺傳せるに此の第三例は女子男子共に遺傳せり。此れを以て見るときは遺傳素の兩系にあるとき斯くの如き缺點乃至惡質を有する兩系血族結婚をなせるにより益々增惡せるものなることを示す。其の他の例は女子は凡て異常なきにも拘はらず男子に傳ふるを見れば、其の生殖細胞乃至體質中に缺陷を次代の男子に傳ふべき性質を有すること明なり。此等遺傳の關係は凡て想像說にして、尙將來細胞學乃至顯微鏡的化學の發達し研究さるゝに至らされば容易に科學的に解決を附することを能はざるべし。尙余は血族結婚に關し一般の學者の如き見解を有せず、缺陷なき完全なる系統に於ては血族結婚は非常に良好の結果を來すべきも、兩者の孰れかに僅微と雖缺陷あらんか、子孫に著しく增大せる缺陷として顯はるゝものなることを思ふ。

尙遺傳に關し多數の意見を有するも色盲の遺傳とは直接の關係なければ、いや間接には甚だ關係ありと雖、こは孰れ時と場所とを變へて述ぶることあるべし。

尙色盲の遺傳の狀況を見るに、第二例の如く紅綠色盲及色神減弱相互あらはるゝもあれど、多くは盲と減弱との差はあれど同型なり。之を以て之を見るに程度は種々等差を生ずるも型は殆んど常に同一なるべし。

黄天目の茶碗

村松梢風

一

「貴郎！起きて下さい、大變です！」と、茶人澁柿庵其樂の女房お菊は、昨日某家のお留守居が橋場の寮で催した茶會へ招かれて行つて例に依つて夜遲く歸つて來た儘まだぐつすり寢入りばなの、良人の枕元に立つてけたたましい聲で叫んだ。

　其の甲高い聲が其樂の甘い夢を破つた。其樂は、吃驚したやうに其の坊主頭を夜具の襟からニユツと突き出した。丁度彼の額の眞上の處に、女房お菊の、おはぐろの黑々と光つた、眉のあとの青々した、そして泣いてゐるやうな、物に怯やかされてでもゐるやるやうな、顏中の筋肉を縱横にひツつらせた何んとも言ひやうのない顏が來てゐた。寢ぼけた其樂の眼にはそれが般若の面のやうに見えた。其樂は、得體の知れない不安と、譯も無く腹立たしいやうな、不愉快な氣持にさせられた。

「喧ましい。靜かにしろ、馬鹿ツ！」と、其樂は呶鳴つた。

「速く起きて下さい。泥棒が這入つたんですから！」と女房は續いて叫んだ。

「えツ！泥棒が這入つた!?」

　鞭でピシツと打たれたやうに感じて、其樂は恁う鸚鵡返しに叫ぶが否やガバと布團を蹴つて起ち上つたが、體が肥り過ぎてゐるために忽ち重心を失つてヒヨロ〳〵蹣跚めいて危く轉げるところだつた。

「ど……何處に居るんだ……ど、泥棒は？」其樂は吃り乍ら言つた。

「もう居るもんですか、夜が明けてますもの……だが、速く見て下さい、餘つ程澤山盗られたやうですから……まだ調べちや見ないけど」

　とお菊は比較的落ち着いた聲に戻つて言つた。彼女は今時分便所へ起きて、其の序に下婢を呼び起してをいて、夫れからもう一遍寢間へ這入つて陽が高々と昇る頃迄二度寢をするのが

毎朝の習慣になつてゐた。其樂と連れ添うて二十年餘り、今では總領の宗太郎と其の下に娘のお鶴と立派な二人の子供まであるが、昔左褄を取つたお菊には未だにさうした自墮落さと姥櫻の捨て難い色香とがあつた。處で、今朝も彼女は睡むい眼を擦り〳〵しどけない寢間着姿で厠へ行つた。戸外はもう薄明るく夜が明けて、早起きの隣りの家の方からはギイ〳〵いふ撥ね釣瓶の音だのガラ〳〵と雨戸を繰る音などが勇ましく聞こえてゐた。お菊は厠から出て來た時どうも家の中が變だと思つた。其の時はまだ泥棒に這入られたとは氣が付かなかつたが直覺的にさう感じて彼女は暗がりの中を見廻した。すると玄關の方から異樣な明るみが流れ込んでゐるのに直ぐ樣氣が付いた。彼女は手さぐりで進んで間の唐紙を明けた。と、白々した戸外の光線がサッと彼女の顔を襲つた。玄關の横手の雨戸が一枚外されてゐて、飴色に拭き込んだ廊下に大きな泥足の痕がベタ〳〵と印されてあつた。

其樂はヨタ〳〵した足どりで、ガタピシ戸障子に蹴躓いたりしながら寢間から走り出た。次ぎの間に寢てゐたお鶴も、下婢も、眼を醒まして起きて來て、皆んなで其處らぢうの雨戸をガラ〳〵繰り明けた。すが〳〵しい朝の光が、夜なかの闖入者の荒して行つた狼藉の光景を今更の如く瞭然と人々の前に見せつけた。簞笥や何かの引出しといふ引出しは悉く引き拔かれ、押入れや戸棚の戸は自由に開け放たれ、其處らぢう色んな品物が足の踏み場も無い程亂雜に抛り出されてゐて、中から目星い物だけ撰り拔いて悠々と荷造りをして行つた不敵な行動を想像せしむる可く十分であつた。

其樂は座敷の眞ん中に突つ立つて須臾の間は茫然と其の光景を眺めてゐたのであつたが、突然或る大きな不安が彼の腦裡を過つた。それは彼が命にも替へて秘藏してゐる――また彼の家に取つて先祖傳來の寶物でもあるところの唐物の、天目茶碗が賊の手から免かれることが出來たかどうかといふ事であつた。

「お菊、お菊、お茶碗はあるか、お茶碗は――?」と、其樂は隣室でうろ〳〵してゐる妻の方を向いて痙攣したやうに手を振つて見せながら叫んだ、一と口に「お茶碗」と言へば、彼の家では其の黄天目を指して言ふことだつた。

「まだ、見ません……」と女房はおろ〳〵聲で答へた。

「馬鹿ッ! 一番肝心な物を調べて見ないでどうするんだ!」

其樂は呶鳴り込むやうな勢で隣室へ驅けて行つた。茶道具などはふだんから大抵其の部屋へ置くことにしてあつた。そして其の大切な天目茶碗は、桐の二重箱に納められて、いろんな道具類などがはいつてゐる戸棚の奥深く仕舞はれてゐるのだつ

た。短冊を貼り交ぜにした其の戸棚の戸も矢張り一杯に明いてゐた。其樂は夢中になつて戸棚の中へ首を突つ込むが否や慌てゝ泳ぐやうな手つきをして中にある物を掻き廻した。

「お茶碗が無い、お茶碗が無い――」と其樂は頭を中へ入れた儘咽喉を締められるやうな聲を發した。

「貴郎、本統ですか？」箪笥の側で衣類を調べてゐたお菊も㒵の色を變へて恁う言つて夫の側へ驅け寄つて來た。

「お茶碗が無い、お茶碗が無い――」

其樂は押入から離れて二歩三歩フラ〱足を動かしながら放心したやうな眼つきをして言つた。夫婦二人で茫然としてゐる處へ、お鶴が手に何か持つて急でやつて來た。

「お母さん、こんな物が落ちてましたよ」と言ひ乍らお鶴は男持ちの莨入れを母親の前に差し出して見せた。

お菊は何氣なくそれを手に取つて眺めると不審さうな表情をして、

「此の莨入れは宗太郎が持つてたのぢやないか。是れが何處に落ちてたのだえ？」

「縁側へ出た處に落ちてゐたんですよ」とお鶴は答へた。

其樂は腕組みをしながらぼんやり考へ込んで突つ立つてゐたが、此の母子の問答が耳に這入つたので何の氣無しにヒヨイと其の莨入れに眼を付けて吃驚した。彼は妻の手からそれを引つたくるやうに取つて眺めた。それは巾着形の莨入れで、オランダ更紗に縫取りを施した袋に梅の彫りのある竹の筒が附いてゐて、緒締めの珠は瑪瑙だつた。其樂が駭いたのも無理はなかつた。それは曾て彼自身の腰に附けたことのある品で、其の後悴の宗太郎に與へた莨入れに相違無なかつた。――勘當してからもう一年近く顏を見た事もないが、不相變惡所でもゴロ付いてゐるらしい不孝者の宗太郎の顏が眼の前に現はれた――

「泥棒は悴の奴だ――」さう思ふと其樂は急に體ぢうの力が拔けてしまつてペツタリと其處へ尻餅を突いた。

二

其の茶碗には恁ういふ來歷があるのであつた。

其樂の家は、現在こそ微祿してしまつた幇間めいた茶人渡世の人間まで生み出してゐるのだが、其の昔を尋ねると兎に角武士の家すぢだつた。其樂から八九代前に當る先祖の柿木太兵衛といふ人は殊に剛勇の譽まれの高かつた人で、大阪冬の陣の砌關東方に屬して戰場へ臨んだ。

或日の戰に徳川方は眞田の詭計に乘ぜられて不意に本陣を衝

かれた。鐵の軍とて慌てふためくのみで、備へを立て直す追も無く、家康はたゞ少數の旗本を具したるばかりでひた走りに住吉街道を奔つた。敵は激しく夫れを追跡して來た。中にも大將分と見えたる騎馬武者一人、大身の槍を閃めかして「返せ〳〵」と呼ばはりながら山の崩るゝが如く追ひ迫つて來た。喰ひ留めやうとして引き返した德川の同勢は、宛ら草を薙ぎ倒すが如くに其の槍先に突き伏せられた。あはや家康の命も風前の燈火と見えた。其の一刹那だつた。路傍の叢の蔭から、電光一閃、騎馬武者の馬の横腹を突き刺したものがあつた。馬が劇しく嘶いて竿立ちになると同時に、馬上の主は一と溜りもなくどうとばかりに落馬した。其處を隙かさず繰り出した二の槍が、此の強敵の胸板をぐざと突き通した。

家康は九死に一生を得ることが出來た。附近の大きな寺へはいつて休息した時分には味方の軍勢が追ひ〳〵馳せ集まつて來た。家康は寺の方丈の間に座して、和尚が自身に立てゝ出した茶を快く喫んだ。今日家康を脅やかした豐臣方の大將は眞田の郎黨海の六郎といふ豪傑だつた。其の強敵を討ち留めて大御所の危急を救つたのが柿木太兵衛だつた。太兵衛は身分の低い武士であつたが其の時は特に庭前で御目見得を仰せ付かつた、さすがの家康も此の時こそは餘程嬉しかつたものと見え、

「當座の褒美として是れを汝れ取らせる」

と言つて、手にしてゐた美事な黄天目の茶碗を堆朱の臺ごと近侍の手を經て太兵衛に與へた。太兵衛は有難くそれを拜領した。すると下の間で是れを眺めてゐた和尚が前へ進み出て、

「恐れ乍ら、只今君が御家來へお遣はしになられた茶碗は、當寺に古へより傳はるところの什寶で御坐る。あれをお取り上げになられては愚僧が迷惑致しまする」と言つた。

家康は莞爾と笑つて

「左樣か。お身に斷り無くして家來に與へたのは家康が粗忽ぢや。が、許されい。茶碗の替りとして、當寺へは家康別の物を寄進申さうほどに」

家康は卽座に筆をとり、寺領三百石の墨付を認めて和尚に與へた。

柿木太兵衛が軍功は人々の間に喧傳された。そして、彼がこの度びの手柄に對してはどれ位の恩賞が下るであらうかと揣摩臆測し合つた。或ひは二千石位かと言ひ、或ひは三千石だらうと言つた。孰れにしても、太兵衛が拜領した茶碗の替りでさへ三百石だから、どう間違つたところで千石を下るやうな事はあるまいと思はれた。處が、事實は全然人々の豫想を裏切つてしまつた。太兵衛に對しては遂に一石の加增も行はれなかつたの

である。關東關西の和議が熟し、全軍の殊勳者に對しては夫れ〴〵恩賞が行はれたにも係らず、太兵衛には最後迄何の沙汰も下らなかつたのである。一體是れはどうした次第か――？誰れしも疑問とするところだつた。それで樣々な風說が立つた。何人か彼の手柄を嫉む者の讒言に因るのだといふ說もあつた。又中には、それは讒言のためではなく、事實、太兵衛は豪勇の點に於ては決して人後に落ちないが性質は寧ろ邪な方で、殊に此の度びの働きをして以來己が手柄を鼻に掛けて兎角强慢不遜の振舞ひが多かつたから、それらが上樣のお耳へも這入つて折角の首尾を損ねたのかもしれないと言ふ者もあつた。それとも或ひは全然何か別な事情があつたのか、理由は飽く迄明瞭を缺いてゐたが、兎に角それまでの働きをした太兵衛がたつた一個の茶碗を貰つた以外には何んの酬ゐられるところも無かつたのは事實であつた。武士として恁りいふ待遇を受けては虛心坦懷を持して居られる道理はない、と言つて將軍大御所を相手では喧嘩にもならん。太兵衛は腹を切つて死ぬより外に武士道を立てる術は無かつたのである。

　又、一說には恁うもある。家康としては、最初太兵衛に茶碗を與へた時は勿論當座の褒美のつもりで後々加增を行ふ意志があつたものと見るのは當然であるが、然し此の場合それが何等かの事情の下に實現されずにしまつたからといつて、强ち太兵衛が憎まれ者になつたのだとも排斥されたのだとも言ひ難い。目見得以下の者に對して大將軍の御手づから物を賜はつたといふだけで當時の武士としては容易ならん名譽である。解釋の下しやうに依つては千石二千石の加增にも勝るものである。だから、太兵衛が大御所の處置に對する不平の餘り腹を切つて死んだといふのは受け取り難いはなしだ、恐らくそれは坊間の臆測にとどまつて、實際は何か別の事情の下に切腹したものであらう――といふ說である。太兵衛の死が、其の何れの原因に屬するかについては作者も俄かに判斷が下し難い、玆には單に、大阪の陣の後間もなく彼が切腹して死んだといふ事を讀者に知らせるだけにとどめて置かう。

　太兵衛の死後遺族の者は、太兵衛が出生地である勢州松阪在へ引つ込んでしまつた。そして代々柿木の姓を名乘り、鄕士として相應に地方的尊敬を聚めて暮らしてゐた。然るに、太兵衛から六七代目の、其樂に取つては祖父に當る人が、田舍を嫌つて家を弟に讓り自身は江戶へ出て來て、芝の新錢座に店を開いて屋號も苗字を其の儘柿木屋といふ町人になつた。其樂の祖父は、鄕士上りにも似ず機敏な人であつたから、常に材木や米の買占めをしては莫大な利得を收め、一代の間に柿木屋と言へば

江戸でも相當に聞こえた店にまで漕ぎ付けた。然し、折角祖父が築き上げた柿木屋の土臺はぢきにぐらついて引つくり返つてしまつた。柿木屋の二代目の主は可も不可もない好人物だつたが、金運は餘り好くない方で、一生の間に身代を半分ばかりに減らして置いて死んで行つた。三代目が其いであつた。若い時から放蕩の有る限りを盡した其樂は、最後に川柳の惡口通り、柿木屋の表口へ「賣り據」と唐様で書く運命を有つてゐたのであつた。

身代を失つた其樂は木から落ちた猿よりも慘めだつた。藝者上りの女房と子供とを抱えて彼は唯爲す事もなく暮らしてゐたが、いつ迄さうしても居られぬところから、何か元手入らずの骨の折れない商賣もがなと考へた末に始めたのが茶の湯の師匠といふ思ひつきだつた。茶道では免許も取つてある腕前だから大丈夫だと考へた。其處で本名の壽助を改め、柿木屋に因んだ澁柿庵其樂と名乘つて俄か造りの茶人に成り濟した。然し世の中は其樂が考へてゐた程單純なものではなかつた。早い話が、廣い江戸中に茶の湯の師匠は有り過ぎる程有るのだつた。其の中に伍して、高が彼の旦那藝を以て身を立てやうとするには容易ならぬ困難がつき纒つてゐた。辛抱の惡い其樂は、折角上げた看板の墨色さへまだ生々しくてゐるうちから早くも前途を悲觀してしまつた。僅かばかりの女子供の弟子を取るくらゐの事では格別生活の足しにはならなかつた。其のうち追ひ〳〵其樂はほんたうに困つてきた。

或年、其樂は伊勢參宮を兼て初めて祖先の地を訪れることにした。伊勢の家は、彼とは再從兄弟になる人が相續してゐた。最初の其樂の心では、參宮や祖先の展墓といふ事の外に別な目的を有つてゐたのであつたが、さて行つて見ると彼の期待は外れてしまつた。其の家も近年何彼と失敗や不幸が重なつた後で餘り氣樂でない狀態で、事實其樂を救ふだけの餘裕は無かつたのだ。然し主は鄕士らしい質朴な人物で、其樂の來遊を非常に喜び、家を擧げて歡待して吳れるので、其樂は失望の中にも餘りわるい氣持はせず幾日かを其處に逗留したのだつた。さうしてゐた或日のこと其樂は主と酒を吞んでゐたが、ふと二人の間に先祖の柿木太兵衛の話が出た。其の時其樂が何氣なく「其の茶碗は今でも家に有りますかしら」と訊くと「嘗て出して見たことも無いが、有ることは確か藏にしまつてあつた筈だ」と言つて主は直ぐ樣古い土藏へ這入つて家寶の茶碗といふのを出して來た。其樂は商賣柄らしい眼つきをしてそれを見た。茶碗と臺とは別々にどちらも古い時代のついた箱に納められてゐた。箱を開いて茶碗を手に取つて眺めて其樂は驚いた。それは黃天目

で、日本中にも幾つもはあるまいと思はれるくらたの美事な茶碗だ。臺は珍らしい堆朱だつた「臺付きなら足で差し出しても三十兩がものはある」と其樂は駁き乍らも心の中で直ぐに値踏みをした。

「どうも結構な物だ——其樂は魅せられたやうな眼つきをして恁う言つて茶碗と臺と交る〲手に取つては未練らしくひねくり廻してゐた。

其樂は、どうかして茶碗を自分の手に巻き上げ度いものだと、夫ればかりを考へてゐた。最後に彼は主に向つて恁う言ひ出した。

「時に、例の茶碗のお話ですが、あれを私に讓つて頂けないでせうか。私も茶人冥利にあれ位の道具を一つ持ちたいと思ふんですから——だが人に賣つて儲けやうといふ譯でないから澤山は出せないが、十兩位なら江戸へ歸り次第直ぐさま飛脚で屆けますから——」

すると主は笑ひながら、

「いや、あの茶碗ならあなたと私の間で賣るの買ふのといふとはありません。お氣に入つたら遠慮なく持つて行つて下さい。私の方で持ち腐れにしてゐるから見ると、茶碗の身になつても其の方がよつほど幸福でもありますから」

と無造作に言ふのだつた。假りにも家寶とまでなつてゐる大切な茶碗を、縱ひ本家分家の間柄とは言へ恁う易々讓つて呉れやうといふのも、先方が其樂の身の上に同情を寄せてゐたからには相違ないが、又一方から言ふと、全體此の茶碗は、家寶でこそあれ謂はゞ其茶碗のために祖先の一人が腹を切つて死んだやうなもので、先祖柿木太兵衛の痛ましい身の上を紀念するだけの物であるから、東照神君拜領の品とは言ひ乍ら有難味が薄く、代々餘り珍重がられてゐなかつたといふことも一つの理由であつた。兎に角恁ういつた次第で其樂は其の茶碗を貰つて江戸へ歸つたのであつた。

作者は須臾筆を擱いて運命の測り難なさを考へた。禍福吉凶は糾へる繩と言ふが、全く何が幸になるかも判らない。何が不幸を生み出さぬとも言ひ難い。さういふ不思議な現象が、表面無秩序に人生の上に間斷なく働いてゐるのである。——其樂の場合が、さうした運命觀を一層力強く感じさせるものだつた。

其樂が持つて來た茶碗は江戸の好事家仲間での評判になつた。茶碗其のものには其樂が自慢してゐた程の値うちはなかつたのかも知れないが、軍記物にも傳はつてゐる柿木太兵衛の事蹟に對する興味と、東照神君に對する習慣的尊崇の感情が加はつて、茶碗の聲價は寧ろ其樂の豫想以上に昂まつてしまつたの

だつた。其の茶碗を買ひ求め度いといふ所望も隨分來たが、さすがに其樂は賣らうとはしなかつた、根岸の澁柿庵へは、評判の茶碗を拜見し度いと言つて來る物好きが引きも切らずにあつた。自然其樂の名前が世間に弘まつて來た。人情といふは妙なものだ。それほどの茶碗を有つてゐる澁柿庵其樂といふ茶人になんとなく箔が付いて、世間の人の眼に偉さうに映じて來た。交際も弘まれば弟子も殖えた。總てが順調に滿足に行き出して、瞬て一二年の間に其樂は押しも押されもせぬ宗匠に成り濟ましたのであつた。

三

「俺の先祖は此の茶碗故に腹を切つて死んだのに、俺は此の茶碗のお蔭で出世することが出來たのだ」

恁う考へると其樂は不思議な氣持がした。同時に、此の黄色い色をした土で拵らへた茶碗に、人間の浮き沈みを左右する靈のやうなものが存在してゐるのでもあるかのやうな迷信に近い考へさへ伴なふのだつた。

それだけに、今度茶碗を盜まれた時の其樂の慌て方はなかつた。「あのお茶碗を失くしては御先祖樣へ申し譯がない」口では恁ふ言つたが、夫れよりも以上に、折角我家へお宿り遊ばした福の神に今更出て行かれては溜まらないといふ氣持の方が多分であつたことは言ふまでもない。

然し、現場に落ちてゐた莨入といふ證據がある以上、茶碗を盜んだ泥棒は確かに悴の宗太郎だと見るより外はないのだから、眞逆に親の情として町奉行へ訴へ出るわけにも行かなかつた。茶碗の在家を探し出して買ひ戻しするより仕方が無いと諦めた。じれつたくても仕方はなかつた、それには何より宗太郎當人を連れて來て何處の誰れに賣つたか白狀させねばならないので其樂は八方に手を分けて宗太郎の行衛を尋ねたのだが何處へ行つてしまつたのか何時になつても、尠しの手掛りさへ得られなかつた。自身の運不運が悉く茶碗一つに由來したものの如くに考へてゐただけに、恁うなつて見ると其樂の失望落膽の度は言語に絶してしまつた。彼は運命の神に見放されてしまつたやうな氣持がした。そして何事も手に付かなくなつてしまつた。

「貴郞のやうに何時迄も未練らしくお茶碗の事ばかり考へてゐたつて始まらないでせう。失くなつた物は失くなつたで好い加減に諦めが肝心ですわ。そしてちつと稼業の方にも身を入れて下さらなきや困るぢやありませんか」

女房はよく恁んな風に良人を励ますやうな意見をした。

「うむ……」と共樂は口でばかり承知した。何んと言はれても彼は駄目だつた。

「あの茶碗が自分の手に戻らぬ限り、どう勵んで見たところで、どう踠いて見たところで、それは大海原で櫓櫂を失つた小舟のやうなもので所詮はどうすることも出來ない運命に到達する外はないのだ――」

直ぐにそんな氣持になるのを共樂はどうすることも出來なかつた。彼は酒ばかり呑んで怠けて暮らす日が多かつた。弟子は次第に減るばかりで澁柿庵はやがて幾何もなく昔のやうに寂れてしまつた。

下谷から通つて來る弟子に和吉といふ經師職の伜があつた。色の白い華車な體つきをした、職人でも茶を習はふといふだけけに何處か人柄な處のある若者だつた。此の和吉だけは、他の弟子が離れた後迄も不相變せつせと通つて來た。そして、近頃では師匠が殆んど面倒を見て吳れないにも係らず、餘り惡い顏もせず、却つて其處らの掃除でもして遣つたりして、來れば屹度半日位遊んで行くのだつた。家内の者はみんな「和吉さん〳〵」と言つて特に親しんでゐた。

「若いのに感心な男だ――」

共樂も初めのうちは唯さう思つただけで格別氣にも留めてゐなかつたが、何時となく、和吉がさうし通つて來るには茶を習ふ事以外にも一つ別な目的があるらしいことに氣が付いた。時に依ると自分の眼にさへ恍惚りする位美しい娘になつて來たお鶴の事を考へると、さすがに共樂は親らしい心配に襲はれた。

「和吉と懇意にするもいいが餘り親しくせんやうにしろよ。女は出世前の體だといふことを特別考へなけりやあ不可ないんだ」

娘に向つてもさういつた注意を口に出したりした。共樂の考へとしては、和吉も滿更見處の無い若者といふではないが、高が經師屋の伜では娘の亭主にするには不足過ぎた。自分は鄕士の血統だといふ誇りと、柿木屋時代の夢を忘れ兼ねるからでもあつたが、事實お鶴の縹緻では此先どんな幸運が降つて湧いて來ないとも限らないやうに思へたのも、強ち共樂が親の慾目とばかりも言へなかつた。然し共樂と違つてお菊の方は誠に無頓着だつた。以前が以前だけに兎角娘に對しても寬容過ぎる妻の仕打ちに共樂は立腹して、蔭で嚴しく小言を言つたりした

或日のこと、和吉が慌て込んで澁柿庵へ遣つて來た。和吉は共樂の顏を見るが否や、

「先生！お茶碗の在所が知れましたッ！」

と息せき切つて言つた。

丁度其樂は二三の子供弟子に炭の仕方を教へてゐる處だつたが、さう言はれたので思はず火箸を握つた儘振り向く途端、夥しく灰を跳へはね上げた。

「なにお茶碗があつた――?ど、何處なんだ、と、處は?」

すると和吉は恁う言つて話した。

「實は今朝芝の方のお華客先へ行つた歸りのことです。日蔭町をぶら／＼遣つて來ますとちよいとした道具屋がありますから何氣なく前へ立つて見たんです。するてえとヒヨイと眼についた箱かありました。どうも見たやうな箱だと思ひましたから其家の亭主に訊いて見ると黄天目の抹茶々碗だと言ふんです。眞逆とは思ひましたが、念のために見て置かうと思つて箱から出して見ると、それが先生矢つ張り當家(こちら)にあつたお茶碗に違ひないちやアありませんか。私ゃ驚いた位のことちやア御座いませんが、そんな樣子を氣取られては後の障りと思ひましたんで、値も訊いて見ず白つぱくれて出て來たんですが、ちつとも早く驅けてまゐりましたやうなわけです」

其樂の喜びは言語に絕してしまつた。彼は子供のやうに座敷中を飛んだり跳ねたりして步いた。和吉の手を執つて、丁度神に感謝するやうに押頂いて淚を零した。

「和吉さん、此の恩は決して忘れないからな――」

其樂は何遍も繰り返してから言つた。「首尾よく茶碗を取り戾した曉に、お鶴を和吉の女房に吳れて遣らう――」忙しい中で其樂はそんな事までも考へた。

直ぐ樣和吉を案內に立てゝ其の道具屋へ出掛けやうと思つたが、一つ困つた事は、和吉が値段を訊いて來なかつたために、茶碗を買ひ取るには、何れ位の金が要るか見當が付かない事だつた。一度當つて見た上で、出直しても差し支えはない譯だが、それでは相手に足許を見られて不利益だから、成る可く十分に金を用意して行つて手つ取り早く埒を明けるに越したことはなかつた。

「幾らつて言ふだらう?」

其樂は、あれ程有難くて溜まらなかつた茶碗に對して、今や初めて冷やゝかな評價を下さなければならない立場にあつた。相手が盲なら只のやうな値で買へないとも限らないが、假りにも黄天目と斷る程では滿更安くも賣りさうに思へない。其處で正當に踏んで見た處が、茶碗其の物の價値としては十兩か十五兩山さけ二十兩止りの物だ。それに柿木太兵衛だの東照神君拜領の品だのと嚴ましい由緖を言ひ立てる日になれば限りの無い

やうなものだが道具屋が直逆それ迄調べてもゐまいし、又假りに出所を究めてゐたにした處で有らゆる由緒も茶碗がわが柿木家の所有に屬してゐればこそ光を放つてゐるやうなもののそれが一旦他人の手に渡るからには其の價値が半減も四半減もしなければならない道理だ。要するに、どう高く踏んだところで三十兩より高いといふ法はない。

處で、其の三十兩の金の問題で其樂は又もや困つた。三十兩は愚か、五兩の金も手許には無かつた。止むを得ず其の日は一と先づ和吉に歸つて貰つて其樂は金策に奔走しなければならなかつた。彼は、女房や娘の持ち物を入れ質してもまだ足りないので、近來無沙汰を極めてゐる知人の處へまで出掛けて行つて借金をして漸う三十兩の金を調達することが出來た。

翌朝は毎も寢坊の其樂が暗いうちに飛び起きて、彼の方から和吉の家へ出向いて行つた。二人は勇んで芝迄歩いて行つた。

道具屋の直ぐ手前の處で

「先生、其處の道具屋ですよ」と、和吉は往來端迄がらくた道具がはみ出してゐる其の店を指差しながら言つた。和吉は顏を知られてゐるから一緒でない方が宜いといふわけで、其處から少し後へ引き返して待つてゐることにした。其樂は一人で道具屋の前へ立つた。

其の貧弱な店つきを見た時其樂は尠なからず安心した。そして毎度道具屋を素見す時のやうな態度で、しばらく店先きから何を見るともつかぬ風にじろじろと家の中を見廻した。其の視線が向ふの隅の棚の上に載つかつてゐた一個の箱にぶつかると其樂の胸はドキリと鳴つた。

「何か面白いものは無いかね」彼はさう言つて道具屋の店へ這入つていつた。

道具屋の主は、掌の中へはいるくらゐの何か小さな物を黄色い布で頻りに磨いてゐたが、眼鏡越しに其樂の顏を見て「はあ――」と寢ぼけたやうな返辭をしたばかりで、直ぐ又默り込んで手の中の物を拭き始めた。

「その棚の上の箱は茶碗だらうね？」と其樂は指差しをしながら言つた。

「はあ、さうです。抹茶々碗ですよ」と道具屋は答へた。

「どれ、どんな茶碗か一寸見せて呉れないか」恁う言つて其樂は桐胴の火鉢の側へ腰を掛け込んだ。

道具屋は默つて其の箱を卸ろして來て其樂の前へ置いた。

其樂は顫へる手先きで箱の紐を解いた。彼の手のうちには絕えて久しい茶碗があつた。黄色い、朝顏形をした其の茶碗を手にした瞬間に、其樂の胸には歡喜と悲哀とを綯ひ交ぜたやうな何

んとも言へない感激が込み上げて來た。

「うむ……佳い茶碗だ……」其樂は茶碗の廻りを柔かに撫でながら言つた。「幾許だね、此の茶碗は？」

「お高うがすよ、それは。何しろ珍らしい黄天目で、日本中にも是れ位のはたんと有るまいつてことですからな」と言つて道具屋の主はピカリと稲妻のやうな眼を走らせて客の顏を見た。

「一體幾許だゝ言ふんだね？」

「實は旦那、そいつは一度二百兩迄値が付いた品です、ギリ〳〵結着といふところで百五十兩より負かりません。」

「百五十兩――!?」其樂はのけ反るばかりに驚いた。

「はゝゝゝは」と其樂は白い齒を見せて笑ひ出した。然し其の笑ひは、例へば袋が破れて空氣が漏る時のやうな力の無い笑ひ方だつた。

「ちよ、冗談言つちや不可ない、高の知れた茶碗一つを百兩だの百五十兩だのつて――はゝゝゝゝは」

主はむツとした顏をした。

「冗談を言ふもんですか。正直正銘百五十兩がビタ一文缺けても賣れないんです。」

「然しあんまり馬鹿々々し過ぎやうちやないか。物には大抵相場といふものがあらあね。」

「相場なんてもなあ人々の氣持次第のものでさあ。幾ら高くても欲しい物なら買ふでせう。要らない人に遇つたら只だつて持つてきませんからな。兎に角私の眼ぢやあ百五十兩がものはあると見たからさう申したんで高いとおつしやられりやア夫れ迄のことです」

恁う言つて道具屋はさつさと茶碗を箱に仕舞ひかけるのだつた。其樂はどうすれば宜いか分らなかつた。

「まあ一寸お待ち」と其樂は慌てゝそれを止めた。兎に角恁んな羽目になつたからには、或程度迄實情を打ち明けた話をするの外はないと突嗟の間に思案を固めた。

「御亭主、實はお話をせねば判らんが、此の茶碗を私が買ひ度いと言ふに就いては混み入つた事情があるのです。先づそれから聞いて下さい」

其樂は恁う切り出して、そも〳〵此の茶碗は自分の家に先祖代々傳へられて來た家寶であるといふ事から、それを泥棒に盗まれたので極力今日迄の行方を捜索してゐたところ、昨日或人が偶然此家に在るのを發見して報らせて來て呉れたので實はとる物もとりあえず遣つて來たといふことを話して、

「さういふ譯で、私の家としては是非無くては叶はぬ品なのです。さて私も恁うぶちまけてお話したんだから、お前さんにも

一つ掛引の無い處を言つて貰ひ度いのだが」
「さうでしたか。實あ私もそんな來歴があるとは知らずに買ひ込んだ物です。お話を伺いてよく分りました。さういふ譯なら誠にお氣の毒ですから私も此の際出來るだけ負けて仕舞ひませう――だが、全體あなたのお見込みはどの位の處です？」恁う言つて道具屋は凝と相手の顏を見詰めた。
「さあ――正直な話が、私は今日玆へ三十兩持つて來てゐるんです。私の目利きでは茶碗の値打とすれば十兩高くて十五兩が關の山だらうと思ふが、今も言つたやうな譯で是非共欲しい品物ですから、默つて三十兩まで奮發しよう」
「それあ駄目でがす。到底出來ない相談です」道具屋は何アんだといふ顏をして「夜店の商人ぢやあるまいし、そんな馬鹿々々しい商ひがあるものですか。――それぢあ手っ取り早く私の負かる値を言ひませう、宜かつたら買つて頂く、不可なかつたらそれ迄の御縁としてね。――丁度百兩にして置きませう」
「おいッ⁉」其樂は憤りが心頭に燃え上つて來て思はず恁う呶鳴つてしまつた。道具屋の亭主の鼻柱へ噛みついて遣り度いやうな氣持になつた。
「足許を付け込むのもいゝ加減にしないか、だがな、全體此のつ物は盜人の手すじの物なんだ。立派に手續きを踏んで取り戾すことを知らんぢやないが、それぢや事が面倒だと思ふから穩便に買ひ戾さうと言つてるのだ。あんまり好い氣になり過ぎると後で後悔しなければならまいぞ」
「何んだと、好い氣になつて後悔するな？冗談言つちやあ不可ない。贓品買ひでもしやあしめえし。人聞きの惡い事を言ひなさんな、成る程、以前はお前さんの物だか、盜人の手口の物だか知らないが、私ア確かに仲間うちから買つたのだ。證人を出せと言ふなら何時でも連れて來てお目にかける。然しお前さんが願つて出なさるのはそれあ勝手だ。お奉行樣の前へ出やうと誰れの前へ出やうとこちとらあちつとだつて後暗え事は無えのだから」と道具屋の亭主はせゝら笑ひながら言ふのだつた。
結局、其樂は百兩で買ひ取る約定をして、持ち合はせの三十兩を手金に打つて來なければならなかつた。

四

家へ歸つて來て其の話をすると女房のお菊は眼の色を變へて駭いた。
「貴郞、そんな約定を極めて、手金まで打つて來て、一體あとのお金はどうするつもりです？」
實は其樂にも其當ては皆目付いてゐないのだつた。途々も彼

は其の事を考へては、過度の困惑と焦躁のために頭が狂ひさうになるのだつた。それ程當ての無い手金を、茶碗を目前に眺めてゐると前後も辨へぬやうな氣持になつて道具屋の手に渡さずには居られなかつたのだ――。

其の日から其業は明け暮れ金策のために奔走して歩いたが、七十兩は愚か十兩の金の算段もつかなかつた。それでも彼は當てもなく驅けずり廻るのがせめてもの心遣りだつた。手金の日限が切迫して來るにつれて彼は益々居ても起つてもゐられなくなつた。

百計盡きてしまふと、其業は全然別な方法で金をつくることを屢々考へて見るのだつた。「それでも餘り可哀さうだ――」と彼は娘を見ると其の考へを否定した。そして親らしくない無慈悲な自分を恥ずるやうな氣持になるのだつた、だが、矢つ張りそれが、今は彼に殘されてゐる唯一の金策の方法であることは事實だつた。

「先達てちうから お前に相談して見やうと思つてゐたんだが」

或日其業は他の者の居ない折を見て女房に向つて、到底他の手段では金をつくる見込みはないから、お菊を勤め奉公に出さうと思ふと話した。

「まあ貴郎は何んといふ人でせう」お菊は呆れたやうな顔をして「それぢやあまるでお茶碗とあの子と替へつこするやうなものぢやありませんか。まあよくも〳〵そんな馬鹿々々しい事を考へたもんです。」

「然し、さうでもしなけりや金を拵へる當てが無いのだ。此の儘捨てといたら茶碗の方だつて手金流れになつて何うする事も出來なくなるんだ」

「それも困るけど……。だつて貴郎あの子が可哀さうだとは思ひませんか。然う言つちやおかしいけれど、あれだけの縹緻ですもの、普通にしてゐればどんな良い處へでも縁付ける體ぢやありませんか。それを勤めなぞさせたら一生廢り物にしてしまふんですもの――」と、お菊はもう鼻をつまらせて言つた。

「それあ俺だつて親だもの、可哀さうだと思はん譯ぢやあない。が、是れも先祖に對する義務といふものだ。若し俺の代にあの寶物を失くしてしまつて見ろ。後代は兎も角先祖の位牌へ申譯が立たないぢやないか」

「では貴郎、是れが若し火事にでも遇つて燒いてしまつたんならどうします？それも是れも同じ災難といふものぢやありませんか。何も人間一人を廢り物にして迄買ひ戻さないからつて御先祖樣が罰も當てまいとわたしや思ひますがね」

其業はぐツと詰つてしまつた。自分の心の中の穢い物を探り當

でられたやうな氣持がして彼は赤くなつた。——だが、俺は何も自分一箇の慾のために娘を犠牲にしやうといふのではない、一家全體の行く末を思つてゐるのだ。もしあの茶碗が此の儘自分の手に戻る機會が無いとしたらどうか？自分達は益々零落して早晩酷たらしく亡びてしまはなければならないではないか——と彼は考へて見た。自分の苦しい心持ちが妻に理解されてゐないやうに感じて、彼は苛ら〳〵して來ると同時に、言ひやうのない昂奮と悲哀が胸に込み上げて來て彼もホロ〳〵涙を零した。

「お前には俺の氣持が解らないのか、なるほど、茶碗を失くしたからつて先祖の罰は當らないかも知れないが其の前に俺達は食うに困つてしまふのだ」と其楽は悲痛な聲をして言つた。

「又あんな事を——。お茶碗が無いからつて、稼業は稼業で精を出さうといふ氣に貴郎はなれないんですか」

「なれない、縱しんば精を出して見た處で所詮は駄目だ——」

其楽は呪はれてゐるやうな眼つきをしながら喉からしぼり出すやうに言つた。

　其楽は、到頭娘を賣つて其の金で茶碗を買ひ戻して來た。再び茶碗を我が物になし得た其楽は、宛ら釜中の魚が水に放たれたやうに元氣を恢復して派手々々しく活動し始めた。茶碗再生の披露の茶會を開いたりしたので、其の茶碗の評判は益々高くなつた。そして根岸の澀柿庵は昔に勝る盛大を呈したのであつた。

　吉原の玉屋山三郎の抱えで華山と呼ばれた太夫が全盛の名を馳せたのも同じ時代であつた。其の太夫華山が、澀柿庵其楽の娘お豊の成り變つた身の上であることを知つてゐる者は、經師屋の悴の和吉のほかには餘り無いやうであつた。然し、おなじ物の價値といつても、茶碗は老ひる程聲價を增すが、人はさうはいかなかつた。華山の名聲が喧しかつたのも僅々三年か四年ぐらゐの間のことで、其の後の成り行きはどうあつたのか、人の噂にものぼらなかつた。

夏目先生の畫について

―漱石遺墨展覽會の印象―

野上豐一郎

日常不斷の對話の中で不用意に幾らか特殊的の意味で使はれたたつた一つの言葉が、決して一時的でなしに内包的な本質的な或物の説明になつてゐる場合を、我々は屢々發見することがある。夏目先生は或時自分の畫についての行き方を形而上的といふ言葉で辯護して私の非難に對抗されたことがあつた。勿論笑ひながらの話のことではあつたが、今から考へて見るとそれが先生の態度を端的に云ひ表はしてゐるのである。客間の正面の更紗のから紙には白雲紙に描いた細長い彩色畫が二三枚ピンで貼り付けられてあつた。老子が牛の背中に坐つて紅葉の林間を通つてゐる畫や寒山と拾得が背中合せに立つて月を仰いでゐる畫などがあつたやうに思ふ。畫が出來ると、よくそんな風にから紙の上にピンで留めて見せてくれるのが先生の習慣であつた。それを見て私たちは勝手なことを云つて批評した。私の惡口は形の不正確なことに就いてであつた。私は大概感服させられる場合が多かつたが、先生の描く形（殊に生物の形）だけにはどうしても感服するわけに行かなかつた。例へば馬の後足が芝居の馬のそれと同じ方向へ屈折してゐたり、鳥の足にも同じ曲げ方をさせたのがあつたりした。そんな場合は注意すると直ぐに取り消された。先生は自分が形を無視するのではなく、形の方が逃げるのだといふ意味のことを云はれたことがある。目をつぶつて想像して見ると火鉢の形さへはつきりと記憶に歸つて來ないと云はれたこともあつた。そんな話をして自分でも形についての自信のないことを認めてゐられるくせに、その時は容易に屈服しないで、寧ろ逆襲的に、おれは形而上派だからなと云はれた。それは云ひ換へれば、君は形而下派だからそんな事に拘泥してゐるのだと云ふ意味にも取られるのであつた。

「形而上」といふ言葉を此處では、形を超越した、若しくはデッサンを無視したと云ふ意味に轉用し、形而下といふ言葉を反對に形の概念に囚へられてゐると云ふ事と同意義に用ひたのは云ふまでもない。その頃私は物の一つ一つの個性を出すには先づ形を正しく捉まへなければならぬと、理論の上からさう考へて自分でも寫生をしてゐたので、先生のその宣言は幾らか輕い氣分に於いての多少挑戰的の意味にも受け取られたのであつた。

それから後でもその言葉は度々先生と私の間に繰り返されて、例へば私の描いたスケッチを先生が或雜誌の裏繪で見られて、どうも形而下派の勝利になりさうだといふ意味の葉書をよこされたことなどもあつた。

併し形而上派は決して敗けはしなかつた。否、敗けどころではなく、遂に高所に達したのである。

畫が近代的であるかないかを區別する時に、その畫が科學の影響を受けてゐるかゐないかを標準にする人がある。此の場合科學と對立するものは想像である。科學に基礎を置かないで想像のみを生命とする畫――さういふ畫を考へて見ると、夏目先生の畫がそれである。此の意味に於いて、畫家としての夏目先生は近代的でなかつたと云つてもよい。けれどもその畫が近代的であるかないかは、先生に於いては初めから問題にならなかつたのである。なぜといふに、先生の覘つてゐたものは、多くの畫家のあたまを支配してゐる專門的技術に關するすべての物から遙かに後の方へ逆戻りして、人間が初めて畫をかくことを考へ出した時の心持になることであつたと私は思ふ。畫が發明された時には目的があつた。それから今日まで長い時が經過した。畫家は皆目的を忘れてしまつた。何處から出て何處へ行くかを考へないでただ歩いてゐる人のやうに、ただ手だけを動かしてゐる。だから手先は非常に器用になつた。それで、手先の器用でないものを輕蔑する。けれどもあたまが働かなくなつたのである。云ひ換へれば人間が畫を描く器械になつたのである。その群から後戻りして、初めて畫が出來た狀態へ歸つて見ることは、意義のあることではあるまいか。實際、人間が幻想に初めて形を與へた時の歡はどうであつただらう。言葉や文字では云ひ表はせなかつたものが、不完全ながらでも形と色に依つて表はせるやうになつた時、その人に取つては世界が一つ殖えたやうなものであつたに相違ない。その歡を夏目先生も持つてゐただらうと私は信じてゐる。

先生は誰にも畫を敎はらなかつた。自分で繪の具を買つて、自分で描き方を工夫された。西洋の畫でも日本の畫でも昔からの良い物は機會のあるごとに見てゐられた。けれども殆ど何人

の模倣者でもなければ、何人の亞流でもなかつた。文字通りに自分で畫をかくことを發明した人であつた。先生の場合に於いては、初めに技術があつて、後からたましひが從ふのではなく、初めにたましひが動いて、技術が追つかけるのであつた。だから、いつも技術がおくれてゐた。畫のたましひと技術とが別々のやうになつてゐた。たましひだけがいら〳〵してゐた。何處かに出口を求めようとしてもがいてゐた。水彩畫をやつて見たり、油を塗つて見たり、文人畫風のものを描いて見たり、南畫風の行き方をして見たりした。併しどれも成功しなかつた。自分では常に傳統的な因襲的な手法に反對してゐながらも、まだ自分を最も切實に表現する方法を發明してゐなかつたので、矢張り其の古い手法を時々採用した。さうして最後にそれを皆打ち捨てて、同時に初めて畫家漱石山人が生れたのである。實に徐々たる道程であつた。

道程が徐々たるものであつただけ、それはまた苦しい骨の折れる迷路の多い道程でもあつたに相違ない。

遠い山の頂から火を持つて來る藝術家の仕事は未完成なものばかりだと或る詩人が云つた。

遺墨展覧會を見て、私の一番に感じたことは、未成品の多いことであつた。迷つてゐる畫もあれば、平凡に終つてゐる畫もあれば、中には若し他人が描いたらに反對されさうに思はれるやうな畫もあつて、それ等が雜然として一堂に集まつてゐるのであつた。それでも學者としての、小說家としての一つの餘技として『漱石崇拜者』に興味を感ぜしめるには十分であつただらう。或はそれ以上、創作心理等について考へて見ようとする人たちに多少の効果を與へることは在り得たかも知れない。けれども畫家漱石山人の才能を示す上に於いては、當を得た方法とは云へなかつたと思ふ。

多くの畫の中で、注目に値するのは極めて少數であつた。少し不遜な云ひ方を許して頂けば、それ等だけが本ものである。その他は先生が正しい進み方を發見するまで如何に迷つてゐられたか、如何に試みてゐられたか、如何に廻り路をしてゐられたかを示すに過ぎないものばかりで、參考品として以上の價値のないものだと私は思つてゐる。

眞面目な心を持つた人には誰にもあることだが、自分の一度描いたものを後になつて否定したくなることがある。それは單に羞耻の感情若しくは名譽心のみで說明すべきものでなく、もつと深い所から來た一種の藝術的良心の命令と見るべきである。夏目先生は自分の書いた小說(の或物)を思ふと冷汗が出ると云はれてゐた。例へば『虞美人草』は燒き棄ててしまひたい

などとよく云はれてゐた。それと同じ心持で畫にも對してゐられたと思ふ。『漱石全集』の中の書簡集を讀んだ人は、先生が自分のもと描いた物をどんなに嫌つて、別なものを描くから撤回してくれないかといふやうな手紙を書いてゐられるのに氣がついたであらう。過去の製作を否定する心は新しい境地へ向つて進む心である。私の知つてゐる限りに於いて、先生は畫を描くことを一つの餘技として考へてはゐられなかつたやうである。小說を書き論文を書くと同じ眞面目さが常に見られた。にも拘らず、小說を書くことは苦しいが畫は樂しみだと云はれてゐた意味は、表現に於いて全く性質を異にした此の別種の藝術に於いて一種の心意轉換の休養を得られてゐたといふことに解すべきものと私は考へる。先生に於いて畫は純粹の詩的陶醉であつた。だから出來上つたもののまづいとまづくないとはその心境に餘り多くの影響を與へることはなかつた。けれどもまづい畫とまづくない畫の對立は別人の製作の如く著しく目立つてゐる。たまに柄にない器用な畫を描いてゐることもあるが、それは大概他人の手法を試みて見たやうな場合で、畫としては個性のない平凡なものになつてゐる。よく考へて見るのに、どうも先生の畫は元來不器用なまづいのが本領であつたらしい。まづいのには皆まづいなりに自分が出てゐる。少くとも出る傾向を持つてゐる。例へば京都(大正四年)で描かれた椿の畫が一つある。一つは白椿で中々手ぎわよく行つてゐるが、平凡で、何處ででも見られる畫である。今一つの赤椿の方は、自分でも戲賛をして『椿とも見えぬ花かな』云々と斷つてゐられる程に不器用なまづい出來である。併しまづいといふのは形が正確でないと云ふだけの事で、生命の把持はしつかりと行はれてゐる。其處に私は價値を認める。今一つ例を擧げると、『僧歸る竹の中』云々と俳句を題した墨畫がある。甚だ不手ぎわな畫で、二人の僧を載せた小徑が木製の臺のやうに見えたり、山門の向にのぞいてゐる建物の軒が眞つ黑にごまかしてあつたりして缺點だらけではあるが、畫面全體からにじみ出てゐる感じは漱石山人獨得のもので、後の大作(私はさう云ひたい)を豫言してゐる。會場のその附近に列んでゐた文人畫風の達者な器用な併し平凡な菊や竹などに較べると、遙かに個性のよく出た藝術的な作品といふことが出來る。

文人畫風の手法を用ひたものの中でも『松石圖』と題した淡彩の松などは、大きな一本の幹に疎らに配置した枝の枝ぶりが最大の氣取り方をしてゐたり、松の根方に二つ三つ生えてゐる靈芝の描き方が他と調和を破りさうなまでに氣が利いてゐたりする點を除けば、その淡紅色の幹の細かい鱗の熱心な集まりと、

淡青色の美しい葉の愼み深い整列とに依つて、他の何人をも聯想させない靜かな明るい調和を作り出してゐる。幹の向側に不安定な形をした黒い大きな不格好な石がそれほど目ざわりにならないまでに、その松の木は品格の高い紳士の如く立つてゐる。これ等は傳統的な手法から入らうとして、偶然自分みづからの手法を思ひついたものと見られる。併し皆缺點があつて、完成されてゐない。良い畫ではあるけれども、まづいことは相當にまづい。

先生は自分でまづいことの德に關する講釋をして、まづい事と眞面目である事が畫に於いての最大要件ででもあるかの如く强調してゐられる。これはたましひのない技術、目的を忘れた器用の陷穽に落ち込まない反省と見れば見られるが、併しまづいといふことが決して美德とは考へられない。言葉の正しい意味に於いてのまづくない事の方が、どれだけまづい事より立ち優つてゐるかは云ふまでもない。

思想さへあれば手法は第二だといふ人があるが、それは間違つてゐると思ふ。畫に於いては手法が即ち思想である。表現が同時に內容である。先生は勿論それを知つてゐられた。それで自分に最も適當な切實な表現を探し覓められた。さうして遂に探し當てた時に最後の大作が出來たのである。私の持つてゐる『南山松竹』が其の大作の初期の一つである。

先生は先づ構圖に於いて成功した。先生以前の誰も思ひ付かないやうな(但し極めて單純な)配列に松の山を五つほど積み重ねて、その下に竹林に埋もれてしまひさうな驛亭を二筋見せて、豆人寸馬を列べてある。さうして紙の一番上の所に手の平ほどの餘白が殘されてある。それが空である。畫面は實に夥しい數へきれないほどの松と竹で充たされてある。その數百本の松の木と竹の簇生を描くのに一つの省略も用ひないで、驚くべき根氣を以つて丹念に線を引き繪の具を塗つてゐる。これも先生以外の何人も恐らく敢てしない原始的の企であつたと云ふことが出來る。

初め松の山は四つであつた、これを何だか物足りないと云つて後から一番上に一つ附け足されたのであつた。大正二年の秋頃の或る木曜日であつた。傑作が出來たから見てくれと云つて、いつもの通りから紙にピンで貼り付けられた。正直に云ふと、私はそんな畫が先生に描けるやうになつたことを非常に驚いた。今まで描いてゐたものとは全く種類も品質も違つてゐた。めちやくちやに感服した。本ものだと思つた。同時に欲しくなつた。けれども、先生が毎日緣側に中腰になつて苦心慘澹で描き上げたのだと聞いて、とてもそれを云ひ出す勇氣はなかつた。

すると意外にも先生の方から、君にやらうかと云ひ出した。勿論私は、頂かせて下さいと云つた。併しそれは、此の次描いた畫がうまく出來たらば、といふ條件付であつた。私は第二の大作の成功を祈つた。

その次に出來たのが『崖臨碧水』の圖であつたか、『閑來放鶴』の圖であつたか、或は此の二つは前後して出來たのではなかつたかとも思ふ。此の畫に關する記憶は、私の知つてゐる三田の或る家に先生と津田青楓君を誘つて遊びに行つた時、先生は主人の自慢の雪舟などをば餘り喜ばないで、高芙蓉の小さい山水の畫をほめてゐられたことである。それから暫くたつと、高芙蓉が出來たと云つて見せられたのが此の二つの內のどちらか(たしか前者)であつた。塔が山の上に立つてゐる所だけが高芙蓉で、それ以外の類似はなかつた。(墨畫の竹に藏澤の影響が多いやうな程度ではなかつた。)さうしてそれが非常にきたないので、構圖を變へて描き直されたのが今一つの方(鶴の二羽ゐる方)であつたやうに覺えてゐる。先生は鶴のゐる方の畫が手ぎわよく行つたのを喜んでゐられた。——手ぎわよく行くといふことは實際それまでの先生にとつては困難な仕事であつた。ところがそれ以後は皆手ぎわがよく行つた。驚くべき進み方であつた。

それで『南山松竹』は手放さねばならぬことになつ[illegible]れでも直ぐには吳れなかつた。先生は自分の(よく出來た)[illegible]は自分で表裝させて取つて置きたいと云はれてゐた。その心持は私にもわかるので無下に催促することも出來ないで、とう〳〵年を越してしまつた。その間に次々にと大作が出來た。私も時々は矢張り催促をした。それで遂に割愛されたのであつた。その時までは賛もなければ落款もなかつた。その日松山の上の餘白に『淵上淡煙橫古驛』の七絶を書いて漱石山人詩畫と署名してくれた。ところが其の次の木曜日であつたか、此の間の畫をちよつと持つて來てくれないか、平仄が間違つてゐたから、と云ふことで、持つて行くと、承句の驛外の二字をぼた〳〵と消して峽中と直された。ひやりとしたが仕方がない。表裝の出來たのは夏の初であつた。先生は默つて畫を持つて箱書をして下さつた。

先生は畫が出來ると津田君に批評させるのがきまりであつた。私にも見せてくれた。『山下隱栖』の圖であつたかと思ふが、例の如くから紙に貼られた。『竹林煮茶』であつたやうにも思ふ。私が感服しないやうな顏をしていつまでも何んにも云はないでゐると、先生は、寺田も津田も褒めて居たよと云はれた。此の畫のよい所がすぐにわからない奴は話せないと云つたやうな口

調であつた。私は氣に入らない理由を擧げた。先生は、そんな事は畫のわからない人間の云ふことだといふ意味の言葉を答へられた。形而上派の鼻息が次第に荒くなつて來た。自分の道を見出してから先生に自信が出來たのである。

自信は強くなつても、得意になつて相手かまはず見せるといふやうなことは少しもなかつた。畫を見てゐる内に人が來て、その人も一緒になつて見てゐても、話がすむと、かまはずどん〲ピンを拔いて紙を捲いてしまはれた。畫の話はまだ殘つてゐても、一度捲いてしまつた後では、また人が來ても、賴まない限り自分からまた出しかけて見せると云ふやうなことは滅多になかつた。

先生の畫は(京都で描かれた分を除けば)大がい私は見たものばかりであつたが、さて展覽會へ行つて、殆ど全部まとまつてゐる所を見ると、前にも云つたやうに甚だ雜然たる印象を與へられた。遠慮なく批評すると、『猫』時代の水彩畫の寫生帖(斷片)は初から色彩家(カラリスト)としての才能を持つてゐたことがわかる以上に、畫としては何でもないものである。併し書冊の寫生の上にペンで小さく

You and I,
Nobody by.
—— K. N. Oct. 1903.

と書いたのを見たりすると、その頃の先生の内生活の一端が偶然にも覗かれたやうな氣持がした。

それから十年の合間を置いて白雲紙の彩色畫の組に移る。これは取材が漢詩趣味、佛敎趣味の物に多くなつただけの變化で、手法は十年前の水彩畫で、まだ幼稚な、併し忠實な行き方をしてゐる。その次の油畫(板)にもカラリストの素質が見える以上に殆ど何物も發見されない。

それと前後して藏澤影響の墨竹が始まつたのであるが、私はこれも餘り高く評價しない。文人畫風の小品もいろ〲描いてゐられるが、自習の手でこれまで描けるといふことを示す以上に個性の表はれたものは殆どない。たまにあれば、竹が棕櫚竹のやうであつたり、棕櫚竹がはたきのやうであつたりする不格好な形に於いてでないとそれは發見されない。

それから一躍して大作の組(皆風景)に入ると、今までの不恰好、不正確、若くば平凡、常套が悉く去つて、調和と正確と獨創の境地が新たに開けて來る。私は上に擧げた畫の外に『孤客入石門』『花開水自流』『煙波縹緲』『一路萬松』『靑嶂紅花』及び『秋景山水』をも此の列の中に數へたいと思ふ。——その外の物は思ひ切つて捨ててしまつた方がよいと思ふ。

先生は最後の勢力(畫についての)をすべて風景畫の上に注が

れた。けれども普通に呼ばれてゐる意味での風景畫家（山水畫家）では決してなかつた。先生の描く自然は此の世の中には在り得ないやうな自然が多かつた。一本の路が海の中を走つて、緩やかに渦まく潮の中から無數の松の木が生えて泰平の歌を奏してゐたり、圓い小さい山が果てしなく海に向つて列んで、山の皺ごとに桃の花が咲き充ちてゐたり、それはすべて幻想の郷土であつた。晩年『明暗』を書きながら、早くこれをすまして今あたまの中に在る畫が描きたいと云つてゐられた。それは二つの畫で、今までのどの畫よりもよい畫になると何度も話してゐられた。

先生は學者としては可なり多く近代科學の影響を受けた人であり、小說家としても科學の影響（寫實）の下から出發した人でありながら、ひとり畫家としてのみ幻想の國に生きてゐられたことは一見矛盾の如くに見える。けれども我々は、小說は近代人夏目漱石氏が書いたのであり、畫は自然人夏目漱石氏が描いたのだと、別々に考へて見ることも出來る。外の言葉で云へば、畫筆を執つて紙に臨む時の漱石山人は學者からも小說家からも全く離れた一日本人、否、一東洋人として、その幻想の表はれに於いても、表はれの選擇に於いても、遠い佛教の情緒と支那の文化の趣味に培はれた昔の祖先の夢に浸つてゐる人であつた。その時は、スペンサアの哲學も、ゼエムスの心理學も、メレディスの思想も、コレリッヂの感情も、これ等のものからは少しも觸れられてゐなかつた。すべて外から來た知識は皆拭ひ落されて、ただ祖先の血に歸つた一自然人が生きてゐたのである。此の甚だ奇異なる人格分裂的の現象を見て、私は今更の如く、我々の中に脈搏つてゐる血と、我々を載せてゐる土の、どうすることも出來ない大きな縛しめの力を實感せずにはゐられなかつた。

（十月十九日）

瀧田君。

畫のことが長くなつたから書のことは省きます。實を云ふと、書については僕は畫についてほど興味がありません。わからないと云つた方が正しいかも知れない。所感の一二を述べると、『有徑金沙軟』の五言絶句の字が一番に目についたが、なんだか無理に拵へた形のやうに思はれて感服しません。笹川臨風氏の爲に書いた『閒居偶成』の五絶と森成氏に贈つた『風流人未死』の五絶はひどく際立つて見えました。『酒渇愛江清』は良寛張でせうが、先生の書の内ではよい方ではないでせうか。君の所藏の『幽居人不到』の五絶と横山大觀氏の『大觀天地趣』の五絶と森圓月氏の『樓頭秋雨到』の五絶と、此の三幅が下の床の間に並んでゐたのは佳作の均勢を得たものと思ひました。何しろ數が多くて一周り見て歩くと頸が痛くなります。『般若心經』と『歸去來辭』の横卷は珍品の双璧と云ふことが出來るでせう。

豐。

「鮫人」の續稿に就いて

谷崎潤一郎

中央公論の讀者諸君！

私は今月も亦「鮫人」の原稿を休まなければならなくなつた。就いては此れまでにも度び度び心にもない言譯をし、心にもない違約をして、私自身としても甚だ不愉快な譯であるから、此の機會に於いて一應私の立ち場を明かにし、今後二度と再び言譯をする必要がないやうにして置かうと思ふ。

最初、私があれを書き出した時には、既に其の當時斷つて置いた通り、大體一と月置きぐらゐに掲載して、年内には完結させる豫定であつた。しかし私は其の後活動寫眞の方に關係するやうになり、關係して見ると思ひの外暇を潰すことが多くなつたので、豫定通りの實行が不可能になつた。（私は決して活動の仕事を道樂にやつて居るのではない。それが極めて意義のある事業たることを信じ、文學と同じやうに重く見てゐるのである。追ひ追ひ此の方面に於いても相當自信ある物を發表するつもりである。「鮫人」にしても、或は將來映畫劇にするかも知れない。）暇を潰すと云つても勿論年が年中その方にばかり奔走してゐる譯でもないが、かりに一と月のうちの半分が潰れるとして、殘りの半月の間に規則的にあれを書き續けて行くことは、可なり苦しい仕事なのである。一氣に書き終へられるやうな短篇なら兎に角、あのやうな長篇では前後の組み立てを考へ考へ筆を附けるのであるから、充分に氣が落ち着いて來なければ書けるものでない。どうかすると半月ぐらゐは考へてゐる間に立つてしまふのである。餘人は知らず、私の性質ではさうであるから、せめて一と月は遊び、一と月は書くと云ふくらゐにしなければ到底氣に入つたものは出來さうにもない。それも果して何枚ぐらゐ書けるかは、正直のところ全く豫定が附かないのである。

にも拘らず、私は從來瀧田君の督促に攻められて、出來るだけは間に合はせるやうにして居た。同君の話に依ると、あの原稿に對しては每月中央公論社へ宛て丶讀者諸君からの苦情が少からず舞ひ込むのださうである。やれ「一と月置きでは感興が殺げるから困る」とか、「每月掲載の分量をもう少し殖やしてくれろ」とか、いろいろの投書が來るので、編輯者としての責任

上氣が氣でないのだといふ。私としても、自分の作物を愛讀して下さる諸君の好意に對しては、出來るだけ其れに應ずるのが至當であるから、この二三箇月來僅かな隙を割いては無理やりに書き續けて來たのであるが、未だに一回の分量が少いと云ふ苦情が絶えないさうである。やれこんな投書が來た、こんな註文があつたと、私は瀧田君に會ふ度毎に聞かされるのである。

玆に於いて、私は改めて讀者諸君にお斷りをしたい。私は私の作物を愛讀して下さる諸君に對しては、飽く迄感謝しては居るけれども、しかし私は讀者諸君の爲めにのみ作物を書くのではない。私に限らず、作者は常に必ずしも讀者の御機嫌取りではない。そんな事は今更云ふ迄もない話ではあるが、諸君が若し眞に作者を愛し、その作物を愛して下さるなら、たとへ一年が二年かゝつても作者をして成るべく立派な物を書かせたいと云ふ寛容があつてもいゝものと思ふ。作者は讀者に對する義務の前に、自分自身に對する義務がある。一時の註文に應ずる爲めに好い加減に書き流すといふ事は、苟くも其れが眞面目な動機を以て書き出された物である限り、決して自己に忠實なる所以ではない。極端に云へば、感興の湧く迄はいつ迄でも待たなければならない。さうして其れが、讀者に對しても結局は眞に忠實なる所以となるのである、私は「鮫人」を書き出してから、讀者と自分との間に板挾みとなつて此れ迄に少からぬ不快を覺えたことを白狀して置く。

以上の如き譯であるから、どうか今後は私をして心置きなく、悠々と稿を續けて行くだけの餘裕を與へられんことをお願ひする。兎に角私は讀者諸君の性急な催促には頓着せずに、暇に任せ感興に任せて、好きな時に少しづゝ書き貯めて行かうと思つてゐる。さうして其れが相當の量に達した時に始めて誌上へ發表する。從つて二三箇月も打ツ續けて休むことがあるかも知れない。雜誌の讀み物としては不適當であるかも知れず、編輯者には甚だお氣の毒であるが、どうもさうするより仕方がない。私としては完成の期を樂しみにして、急がず騷がずにポツポツと筆を進めて行くばかりである。無論來年一杯ぐらゐは懸るに違ひないが、年に四五回の定期增刊號へ載せることにするか、或は勝手な時期に發表するか、それらも今の所では明言する譯に行かない。確定してゐるのは、本年十月以降の分を一と纏めにして、正月號へ載せることだけである。

いづれにしても、今後私は讀者に對して發表の時期に關する御約束は一切しない事にする。私は全く自由な立ち場に立つて氣樂に書いて行かうと思つて居る。度び度び言譯をするのも嫌であるから、事情を明らかにして、豫め諸君の御諒恕を乞ふ次第である。（大正九年十月記）

帝大遂に漕界の霸者たり

——霸者たる理由と其意義——

海老名一雄

◎日本漕艇協會の名の下に、帝大・商大・早大・明大・高工の五校が十月廿三四日の兩日に渉つて、隅田川で對抗レースを行つた。兩國から言問に至る二哩の間に群集した觀衆の數無慮廿萬、我が日本運動競技界空前の盛況であると唱はれた。

◎『ボートレースは偉らい人氣ものになつたね』と運動と云へば野球が最上のものであると許り考へて居る人達は驚ろいた。『とう〳〵ボートも復活したね』と昔向島で採つた杵柄の人達は泣いて嬉しがつた。實際ボートがたつた一年の間に斯んなに盛んにならうとは漕艇協會の當事者でさへ夢想だもし得なかつた一の大きな奇蹟である。要するに時の力だと云へば夫れまでゞあるが、ボート界が斯くまでに突如として復活したに就いては深い〳〵理由が無くてはならぬ。

◎ボートが復活した玆一箇年間のことを順序を逐うて書き列ねることは限られたる頁が許さない。唯一言陳べて置かう。夫れはボート界復活の根柢に於て眞のスポーツマンシツプに目覺めたボートメンが、凡べての御都合主義を排して眞つしぐらに理想にのみ向つて突進したと云ふ大きな事實が存在して居たことである。情實や秘密や猜疑心を以て事に當るはスポーツマンとして恥づ可き惡德である。國粹だとか國技だとか云ふ文句に拘泥するは大國民として爲す可きことでは無い。堂々たる君子の爭に於けるウイン二ング・スピリットと、狭まい又卑劣なるショーヴイ二ズムとは全然相反したものである。此美しいスポーツマンシツプに依らずんば國際聯盟も何もあつたものでは無い。斯う考へて彼等は漕艇協會の名の下に完全なる五校のリーグを作ることに努力した。而して此精神こそ現代の世界を支配す可き精神であつたのだ。ボート界は唯偶然に時勢に乗じたのでは無い。自ら進んで此大きな潮流に乗り出して今日の成功を得たのに外ならないのである。

◎漕艇協會の創立と共に、其第一回競漕に於て、豫選・決勝二つ乍ら堂々たる大勝を博し得た帝大は明かに斯界の覇者として天下の公認する所となつた。併し帝大がボート界の覇者であると云ふ意味は、單にレースに勝つたと云ふこと許りでは無い。之れにも色々深い意味がある。

◎遡つて考へると帝大のクルウが日本ボート界の覇者を以て任じ又斯く認められたとは決して昨今の話では無い。實は廿年も卅年も昔からの話である。而かも他校より一段も二段もお高く止まつて對校競漕と云ふものを絶對にやらず、唯法工醫三科の內輪爭ひにのみ沒頭した居た時代には、全體何が故に帝大がボート界の覇者であるかと云ふことが具體的には少しも判然して居なかつた。從つて過去十年間に帝大が依然として固定席艇競漕を墨守しつゝある間に、商大・明大・早大が進んで滑席艇——素より今日の正式競艇から見て取るに足らぬ鵜式競艇ではあつたが——を採用したとから考へて、帝大の所謂覇權なるものは、恰も今日の羅馬法王の權威見たやうな一種の空名に過ぎないものとも考へられたのであつた。世間からは帝大のボートが何だと嘲笑ふ聲も聞えた。又帝大自身としても所謂覇者の名が內容の少しも伴はぬ空名を負はされて居るのではなからうかと一種くすぐつたいやうな氣持をしたことも再三あつたに違ひない。

◎此意味から云つて一年前までの帝大の立場は、恰も大戰前の英國のやうなもので、覇者だとか何だとか云はれて居乍ら其實力は頗る疑はしいものとされ、いざ戰となれば恐らく新進の獨逸のやうな早大や明大にしてやられるのではあるまいかと少なからず危ぶまれたのであつた。

◎所が愈戰爭となつて大英帝國の眞價が立派に發揮され、老大國の有した所謂覇者の名が決して單なる空名で無かつたことが證明されたと等しく、帝大が覇者としての眞の値打は今回の競漕を機會として立派に立證されたのである。

◎英國が獨逸に勝つた所以が決して新式の武器を有して居た爲めで無く、全く英國人そのものに偉らい或るものがあつた爲めであつたのと同樣に、帝大が今回のレースに優勝した其根本原因は帝大のボートメンが代々養つて來た隱れたる或る偉いものゝお蔭であつた。滑席艇の經驗乃至は滑席艇漕法の智識のみから見れば、一年前までの帝大は、早大にも明大にも又商大にも遙かに劣つて居たのである。其の證據には帝大のクルウが去年の春始めて新式の滑席艇に乘つた時には、夫れこそ櫂一本漕ぐことさへ出來なかつたのである。

◎然るに僅一箇年の間にあれだけの長足の進步を滑席艇の漕法

に於て示し、今日では兎も角押しも押されもせぬ覇者として立てられるやうになつた根本の理由は何處にあつたか。私は之れを説明して、帝大のクルウには長い間の修養に依つて生み出されたボートメンの人格と云ふものが具つて居たと云ふより外は無い。簡單に云へば帝大のクルウにはボートメンたる精神的基礎が出來て居たのである。

◎帝大系の私の口から斯う云ふのは如何にも自畫自讃のやうで片腹痛く思ふ人もあるかも知れぬが、私は唯率直に其所信を告白するに過ぎないのであつて、他校の人達がどうか虚心坦懐に之れを以て他山の石として頂きたいと思ふのである。

◎失敬かも知れぬが實例をあげて云ふ。例へば明大のクルウの如き滑席艇にはかなり長い經驗を有して居るのである。然るに今日に及んで尚ほ殆んど見るに足る可き進歩を示すこと能はざる所以のものは、畢竟ローイングと云ふものを眞面目に科學的に研究しやうと云ふボートメンとして最も大切な精神的基礎が缺けて居るからではあるまいか。又今年の商大のクルウに就いて云ふが、商大は倫敦でスカリングを根本的に研究した川副君が基礎的漕法のコーチをし、隅田川育ちの木下岩下兩先輩が隅田川のレース哲學を教へて呉れたのである。私は實に此位理想的のコーチは無かつたらうと思ふ。此二方面から與へられたコーチを充分に解釋し渾一融合して行くことが實に今年の商大のクルウが爲す可き唯一の仕事であつたにも拘らず、結局双方とも虻蜂取らずで終つたと云ふことは、要するに川副君のコーチも理解し得ず、木下君岩下君のコーチも理解し得ず、唯盲目的に練習して居たことを證明するものでは無かつたらうか。聞く所に依れば、川副君のコーチは全然スカリングのコーチであつて、夫れが禍を爲して商大が負けたのであると主張する商大の先輩があるとのことである。私は斯う云ふ無理解な先輩を有する商大短艇部の歴史的價値を疑ひたいのである。

◎此點から見て、帝大のクルウだけは確かに他に秀でた精神的基礎を有して居たと云ふことを私は今日に於てしみ〲思ひ當るのである。

◎帝大のクルウが最初に受けたのは、バイエルと云ふ波蘭人のコーチであつた。今から考へると其コーチは一の昔話として傳へたら面白からうと云ふ程幼稚なものであつたが、帝大のクルウは夫れでも決して無駄言として聽かなかつた。同時に彼等は川副君と等しく倫敦でスカリングを學んだ齋藤力君から滑席艇漕法のグランマーを學んだ。併し彼等は決してコーチの一言半句をだに鵜呑みにするやうな無理解者では無かつた。彼等は英獨の原書に示された漕艇術の學理を幾度となく繰返して讀ん

だ。併し彼等は決して書物にのみ依頼する翻譯漕法に甘んじなかつた。彼等は自ら漕いで考へに考へた。而して不可解の點に達すると或は書物を繰返し讀み、或は齋藤君の說を叩き、或は隅田川系先輩の直覺的批判に訴へた。斯くて練りに練つて仕上げたものが曲りなりにも今日出來上つた帝大の漕法であつて、云ふ迄も無く未成品ではあるが、無理解で鵜呑みにしたものに較べてどの位價値があるものであるかは問はずして明かであるであらう。

◎最早餘白も無いことであるから之れ以上の長談義は止めにする。私は帝大クルウが覇者たり得た理由及び覇者としての意義に就いて述べたが、此ボートメンとしての人格を彼等が失はない限り、而して他校のクルウが此處に其缺陷を見出して反省し修養を重ねざる限り、所謂帝大の覇權なるものが尙ほ暫らくは繼續して然る可きものであることを斷言して筆を止めたいと思ふ(廿四日決勝競漕の夜記す)



想華

小さな出來事（大正九年夏）

吉村冬彦

（一）蜂

私の宅の庭は、割に背の高い四つ目垣で、東西の二つの部分に仕切られて居る。東側のは應接間と書齋と其上の二階の坐敷に面して居る。反對の兩側の方は子供部屋と、自分の居間と、隱居部屋とに三方を圍まれた中庭になつて居る。此中庭の方は垣に接近して小さな花壇があるだけで方三間ばかりの空地は子供の遊び場にもなり、又夏の夜の凉み場にもなつて居る。

此の四つ目垣には野生の白薔薇をからませてあるが、夏が來ると、此れに一面に朝顔や花豆を這はせる。其上に自然に生へる烏瓜も絡んで、殆んど隙間のない位に色々の葉が密生する。朝戸をあけると赤、紺、水色、柿色さま〴〵の朝顔が咲き揃つて居るのは可也美しい。夕方が來ると烏瓜の烟のやうな淡い花が繁みの中から覗いて居るのを蛾がせゝりに來る。薔薇の葉などは隱れて見えない位であるが、垣根の頂上からは幾本となく勢の好い新芽を延ばして、此れが眼に見えるやうに日々生長する。此れに又朝顔や豆の蔓がからみ付いて何處迄も空へ〳〵と競つて居るやうに見える。

此の盛んな勢で生長して居る植物の葉の茂りの中に、枯れかゝつたやうな薔薇の小枝から、焦けた色をした妙なもの

が一つぶら下つて居る。それは蜂の巣である。

私が始めて此の蜂の巣を見付けたのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散つてしまつて、朝顔や豆がやつと二葉の外の葉を出し始めた頃であつたやうに記憶して居る。花の落ちた小枝を剪つて居る内に氣が付いて、よく見ると大さはやつと拇指の頭位でまだほんの造り始めのものであつた。此れにしつかりしがみ付いて、黄色い強さうな蜂が一匹働いて居た。

蜂を見付けると、私は中庭で遊んで居る子供達を呼んで見せてやつた。都會で育つた子供等には、こんなものでも珍らしかつた。蜂の螫の恐ろしい事を學んだ長子等は何も知らない幼い子にいろんな事を云つて驚めたりおどしたりした。自分は子供の時に蜂を怒らせて耳たぶを刺され、さんしちの葉をもんですりつけた事を想ひ出したりした。あの時分はアムモニア水を塗るといふやうな事は誰れも知らなかつたのであつた。

兎に角こんな處に蜂の巣があつてはあぶないから、落してしまはうと思つたが、蜂の居ない時の方が安全だと思つて其日は其儘にして置いた。

それから四五日はまるで忘れて居たが、或朝子供等の學校へ行つた留守に庭へ下りた何かの序に、思ひ出して覗いて見ると、蜂は前日と同じやうに、軀を逆様に巣の下側に取り付いて仕事をして居た。二十位もあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管に繼ぎ足しをして居る最中であつた。六稜柱形の壁の端を顎でくはへて、ぐるぐると廻つて行くと、壁は二ミリメートル位長く延びて行つた。其の新に延びた部分だけが際立つて生々しく見へ、上の方の煤けた色とは著しくちがつて居るのであつた。

一廻り壁が繼ぎ足されたと思ふと、蜂は更にしつかりとからだの構へをなほして、そろそろと自分の頭を今造つた穴の中へ挿し入れて行つた。如何にも用心深く徐々と身體を曲げて頭の見へなくなる迄挿し入れた、と思ふと間もなく引き出した。穴の大さを確めて始めて安心したと云つたやうに見えた。そしてすぐに隣の管に取りかゝつた。

私は此歳になる迄、蜂の此のやうな擧動を詳しく見た事はなかつたので、強い好奇心に驅られて見て居る内に、此の

小さな昆虫の巧妙な仕事を無殘に破壊しやうといふ氣にはどうしてもなれなくなつてしまつた。

其れからは時々、庭へ下りる度にわざ〳〵覗いて見たが、蜂の居ない時は寧ろ稀であつた。見る度に六稜柱の壁は段々に延びて行くやうであつた。

或時は顎の間に灰色の泡立つた物質を一杯溜めて居る事が眼についた。そして顎を延ばす代りに穴の中へ頭を挿しこんで内部の仕事をやつて居る事もあつた。しかしそれがどういふ目的で何をして居るのだか自分には分らなかつた。

其内に私は何かの仕事にまぎれて、しばらく蜂の事は忘れて居た。多分半月程經つてからと思ふが、或日ふと想ひ出して覗いて見ると蜂は見えなかつた。のみならず巣の工事は前に見た時と比べてちつとも進んで居ないやうであつた。なんだか豫想が外れたといふだけでなしに一種の――極輕るい淋しさといつたやうな心持を感じた。

其れから後は何時迄經つても、もう蜂の姿は再び見えなかつた。私はどうしたのだらうと色々な事を想像して見た。往來で近所の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたのかとも考へて見た。しかし又此の蜂が今現に何處か遠い處で知らぬ家の庭の木立の中を迷つてあてもなく飛んで居るやうな氣もした。

私は親しい友達などが死んだ後に、獨りで街の中を歩いて居ると、ふと其の友が現に同じ東京の何處かの町を歩いて居る姿をあり〳〵想像して、云ひ知れぬ淋しさを感ずる事があるが、此の蜂の場合にも此れとよく似た幻を頭に描いた。そして強い眩い日光の中にキラ〳〵して飛んで居る蜂の幻影が妙に淋しいものに思はれて仕方がなかつた。

或日何かの話の序にSに此の話をしたら、Sは私とは丸でちがつた解釋をした。蜂は場所が悪いから斷念して外へ移轉したのだらうといふのである。そう云はれて見れば或はそうかも知れない。實際兩側に廣い空地を控へた此の垣根では風が吹き通したり、雨に洗はれたり、人の接近する事が頻繁であつたりするので蜂に取つても餘り都合のいゝ場所ではない。しかし果して蜂が其の本能或は智慧で判斷して一旦選定した場所を、作業の途中で中止して他所へ移轉するといふやうな事があるものか、ないものか。此れは專門の學者にでも聞いて見なければ判らない事である。

若しSの判斷が本當であつたとしたら、つまり私は自分の想像の中で強て憐れな蜂を殺してしまつて、其死を題目に

した小さな詩によつて安直な感傷的の情緒を味つて居た事になるかも知れない。しかしいづれにしても私は私の幻想を無雜作に事務的に破つてしまつたSに對して、輕い不平を抱かないでは居られなかつた。

此んな些細な事柄にもオプチミストとペシミストの差別は現はれるものかと思つたりした。

今日覗いて見ると蜂の巢のすぐ上には棚蜘蛛が網を張つて、其上には枯葉や塵埃が一杯にきたなくたまつて居る。蜂の巢と云ひながら、矢張り住む人がなくて荒れ果てた廢屋のやうな氣がする。此の巢のすぐ向側に眞紅のカンナの花が咲き亂れて居るのが一層蜂の巢をみじめなものに見せるやうであつた。

私は兎も角も此巢を來年の夏迄此儘そつとして置かうと思つて居る。來年になつたら此の古い巢にもしや何事か起りはしないかといふやうな豫感がある。（九、八、二三）

（二）乞食

或朝Qが訪ねて來た。

此の男は私の宅へ來る時には、屹度何か一つ二つ、皮肉なそして私を不愉快にするやうな暗示に富んだ言詞を用意して來るやうに見える。そして話して居る內に適當或は不適當な機會を捕へて其の言詞を吐き出してしまう迄は落ち付く事が出來ないやうに見える。兎も角も其れを云つてしまふと、其れ迄ひどく緊張してきつい表情をして居た彼の顏が急に柔かになつてくる、そして平生氣持の惡いやうな靑黑い顏色には少し赤味さへさして來て、見るから快いやうな感じに變化するのである。

私は此男の癖をよく知つて居て、可也久しく馴らされて居るし、又そのやうな特殊な行爲の動機も充分に諒解して居るので、別に大して氣にしないつもりでは居るが、それでも此の男と話をした後では何處か平常とはちがつた心持にな

つて居るものと思はれる。そうだといふ事が、其の後に自分の身邊に起る些細な事柄に對する自分の情緒の反應によつて證明される場合があるやうに見える。

此の日Qが用意して來た材料は、私の病氣に關した事であつた。つまり私が、わざ〳〵自分の病氣をわるくして長引かしては密に喜んだりする一種の精神病者に似た心理狀態にあるといふ事を巧に暗示すると云ふよりは寧ろ露骨に押しつけやうといふのであつた。自分はQに云はれる前から自分の頭の奥底にどこか此のやうな不合理な心理狀態が潜んで居るのではないかと疑つて見た事があつただけに此のQの暗示は可也のきゝめがあつた。

Qが歸つてから晝飯を食つた。それから子供部屋へ行つてオルガンをひいた。

其日はよく晴れて暑い日であつた。子供部屋の裏の縁先にある花壇には、强烈な正午過の日光が眩しいやうに輝いて、草木の葉もうなだれて居るやうであつた。花壇に赤い花が火のやうに見えた。併し此の部屋は一番風がよく吹き通すので、みんなが此處に集つて居た。子供等は寢轉んで本を見て居るのもあれば、繪の具箱を出して繪を描いて居るのもあつた。老人は襖に背をもたせて御伽噺の本を眼鏡でたどつて居た。私は裏庭を左にした壁のオルガンの前に腰かけて、指の先の鍵盤から湧き上る快い樂音の波の中に包まれて、しばらくは何事も思はなかつた。涼しい風が、食事をして汗ばんだ額を撫でゝ行くと同時に樂譜の頁を吹き飜した。そして頭の中のあらゆる濁つたものを吹き掃ふやうな氣がした。

手頃な短い曲をいくつか彈いてから、何時もよくやるペルゴレシの Quando corpus morietur といふのをやり始めた。此れは Stabat mater の一節だといふから、いづれ十字架の下に立つた聖母の悲痛を現はしたものであらう。私は此れをひいて居ると、歌の文句は何も知らないのに拘らず、いつも名狀の出來ないやうな敬虔と哀愁の心持が胸に充ちるのを覺へる。

此の曲の終りに近づいた頃に、誰れか裏木戸の方からはいつて來て縁側に近よる氣はいがした。振り向いて見ると花壇の前の日向に妙な男が突つ立つて居た。

三十前後かと思はれる背の低い男である。汚れた小倉の霜降りの洋服を着て、脚には泥だらけのゲートルを巻き、草鞋を履いて居る。頭髪は長くはないが踏み荒らされた草原のやうに亂れよごれ、顔には鬚がもぢや／＼生へて居る。しかし顔には寧ろ柔和な、人の好さゝうな表情があつた。唯額の眞中に斜に深く切り込んだやうな大きな創痕が、見るも恐ろしく氣味惡く引き釣つて居た。よく見ると右の腕はつけ元からなくて洋服の袖は空しくだらりと下つて居る。一足二足進み寄るのを見ると足も片方不隨であるらしい。

彼は私の顔を見て何遍となく頭を下げた。そしてしや嗄れた、胸につまつたやうな聲で、何事かしきりに云つて居るのであつた。顔一杯に暑い日が當つて汚れた額の創のまわりには玉のやうな汗が湧いて居た。

よく聞いて見ると或る會社の職工であつたが器械に喰ひ込まれて怪我をしたといふのである。そして多くの物貰ひに共通なやうに、國へ歸るにも旅費がないといふやうな事も訴へて居た。

幾度となくおじぎをしては私を見上げる彼の悲しげな眼を見て居た私は、立つて居室の用箪笥から小紙幣を一枚出して來て下女に渡した。下女は臺所の方に呼んでそれを彼に與へた。

私が再びオルガンの前に腰を掛けると彼は又縁側へ廻つて來て幾度となく禮を云つた。そして「旦那様、どうぞ、御からだを御大事に」と云つた。更に老人や子供等にも一人／＼丁寧に禮を云つてから、とぼ／＼と片足を引きずりながら出て行くのであつた。

「どうぞ、御からだを御大事に」と云つた此の男の一言が、不思議に私の心に強く滲み透るやうな氣がした。此れ程平凡な、餘りに常套であるが爲に殆んど無意味になつたやうな言葉が、どうして此時に限つて自分の胸に喰ひ入つたのであらうか。乞食の眼や聲は可也に哀れつぽいものではあつたが、唯それだけで此のやうな不思議な印象を與へたのだらうか。

嗄れた聲に力を入れて、絞り出すやうに云つた「どうぞ」といふ言葉が、彼の胸から直ちに自分の胸へ傳はるやうな氣がすると同時に、私の心の片隅の何處かが急に柔くなるやうな氣がした。そしてもう一度彼れを呼び返して、何かもう少しくれてやり度いやうな氣さへした。

默つて乞食の擧動を見て居た子供等は、彼れが歸つてしまふと、額のきずや、片手のない事などを話し合つて居たが、間もなく、それぐの仕事や遊びに氣を奪はれてしまつたやうである。子供等の受けた印象は知る事は出來ない。

乞食は私の病氣の事などは固より知つて居る筈はなかつた。恐らく彼は誰れの前にも繰返すお定まりの言詞を繰返したに過ぎないだらう。唯それがOの冷罵とベルゴレシの音樂とのすぐ後に出くわしたばかりに偶然自分の子供らしいイーゴイズムに迎合したのかも知れない。

併し私が彼れの歸つて行く後姿を見た時に突然閃いた感傷的な心持の中には、後から考へると可也に色々なものが含まれて居たやうである。例へば自分が彼の乞食であつて門から門へと貰つて歩く、何處の玄關や勝手口でも疑と輕侮の眼で睨まれ追はれる。其の屈辱の苦味をかみしめて歩いて居る内に偶然或る家へはいると、其處は冷やかな玄關でも臺所でもなく思ひがけない平和な家庭の團欒があつて、そして誰れかゞオルガンをひいて居たとする。その瞬間に乞食としての自分の情緒がいくらかの變化を受けはしないだらうか。少くも此の時の此の男はそんな心持がしたのではないかといふ氣がする。彼れの顏の表情には私が此れ迄見たあらゆる乞食に見られない或物があつた。

彼れはそれ切り來ない。もう一度來ないかとも思ふが、矢張りもう來てくれない方がいゝ。（九、八、一三）

（三）簑蟲

八月の或日、空は鼠色に曇つて雨氣を帶びた風の涼しい晝過であつた。私は二階の机に倚れてK君に端書を書いて居た。端書の面の五分の四位迄書くと、もう何も書く事がなくなつたので、萬年筆を握つたまゝで、しばらくぼんやり縁側の手欄越しに庭の楓の梢を眺めて居た。すると私のすぐ眼の前に突き出て居る小枝に簑虫のぶら下つて居るのが眼

に付いた。それは此虫としてはかなりに大きいものであつた。よく見ると嚢は主に紅葉の葉の切れはしや葉柄を綴り集めたものらしかつたが、其中に一本間抜けて長い小枝が交つて居て、其の先の方は嚢の尾の尖端から下へ一寸程も突き出て不恰好に反りかへつて居た。其れが此の奇妙な紡錘體の把柄とでも云ひたいやうな恰好をして居るのであつた。枝に取り付いて居る上端は眼に見えない程小さい糸になつて居るので、風の吹く度に嚢はさま〴〵に複雜な振子運動をし、又垂直な軸のまはりに廻轉もして居た。今にも落ちそうに見えるが實は中々しつかりして居るのであつた。嚢虫自身は眠つて居るのか、或は死んで居るのか、兎も角も此の干からびた嚢を透して中に隱れた生命の斷片を想像するのは困難なやうに思はれた。それで私は今書きかけた端書のさきへこんな事を書き加へた。

『今僕の眼の前の紅葉の枝に嚢虫が一匹居る。僕は蟻や蜂や毛虫や大概の虫に就ては其の心持と云つたやうなものを想像する事が出來ると思ふが、此の嚢虫の心持だけはどうしても分らない。……』

此れだけで端書の餘白はもうなくなつてしまつたが、それが緒になつて私は此虫について色々の事を考へたり、想像したりした。

昔の學者などの中には殆んど年中或は生涯貧しい薄暗い家の中に引籠つたきりで深い思索や瞑想に耽つて居たやうな人もあつたらしい。此んな人達はすぐ隣に住んで居るゴシップ好の眼には或は丁度此の嚢虫のやうに氣の知れない、又存在の朧氣な者としか見えなかつたかも知れない。現世とは唯僅かな絲でつながつて飄々として風に吹かれて居るやうな趣があつたかも知れない。唯嚢虫とちがうのは幾年かの後に思索研究の結果を發表して急に或は徐々に世間を驚かした事である。しかし中には纏つた結果を得なかつたり、又得てもそれを發表しないで死んでしまつた者も澤山あるかも知れない。そんな人は脇目には此の嚢虫と變つた處はなかつたかも知れない。

此んな空想に耽りながら見て居ると、嚢の上に隙間なく並んで居る葉柄の切片がなんだか此の隱れた小哲學者の著書に背皮を並べた書物でもあるやうな氣もした。

此の嚢について思ひ出すのは、私が子供の時分に母か誰れかに教はつたなゝに、嚢虫の裸にしたのを細かに刻んだ色

々の布片と一處にマッチの明箱の中に入れて、五色の簑を作らせやうとした事である。此の試驗の結果は熱心な期待を裏切つて、虫は死んでしまつた。それに拘らず、美しい五彩の簑を纏うた蟲の心象(イメージ)だけは今も頭の中に呼び出す事が出來る。ところで、つひ近頃私の子供等が矢張祖母に此の話を聞いて私の失敗した經驗を繰返して居たやうである。一體此の話は事實であらうか。事實であるとしても稀有な事であるか、それ共普通な事であらうか。私の母自身にも實際自分で經驗したのではないかも知れないが、つひ今迄それを確めて見なかつた。又別に今すぐ確めやうとも思つて居ない。さういふ種類の事がさう容易くたしかめられやうとは思はないからである。

此んな事から次ぎ〳〵に空想をたどりながら、私は人間のあらゆる知識に關する所謂オーソリテイといふものゝ價値に考へ及んだ。そして考へれば考へる程、今迄安心だとばかり思つて居た色々の知識の根柢が、脚元からぐらついて來るやうな氣がした。しかし其の時考へた事は玆に書くには餘りに複雜でそしてデリケートな、そして纏りのつきかねるものであつた。

此のやうな事を考へた翌日の同じ時刻に私は例のやうに二階の机の前に坐つた。そして昨日の簑虫はと思つて大凡此の邊と思ふ見當を捜して見たが見付からない。其内にずつと高い處の大きな枝に何か動くものがあると思つてよく見ると、それが昨日のあの把柄のついた簑虫であつた。唯意外な事には、昨日生死も分らないやうに靜まり返つて居たあの小哲學者とは思はなれいやうに活動して居るのであつた。簑の上端から黑光つた頭が出て居た。それが波を打つて動くにつれて紡錘體は一きざみづゝ枝の下側に沿ふて下りて行つた。時々休んで何か搜すやうな樣子をするかと思ふと又急いで下りて行く、とう〳〵枝の二叉に別れた處迄來ると、其處から別の枝に移つて今度は逆に上の方へ向いて彼の無細工な重さうな簑を引きずり〳〵這つて行くのであつた。把柄のやうな長い棒が如何にも邪魔さうに見えた。

見て居る内に段々滑稽な感じがして來てつひ笑はないでは居られなくなつた。そして昨日K君に書いた端書は訂正しなければならないと思つた。昨日の哲學者も今日はやつぱり自分の家を荷厄介にして引ずりながら、長過ぎて邪魔な把柄をもて扱ひながら、あくせくと歩いて居た。一體何ういふ目的で歩いて居るだらうと考へて見たが、多分矢張り食ふ

爲だらうとしか思はれなかつた。

其日の夕方思い付いて字引でみのむしといふのを引いて見ると、此の虫の別名として「木螺」といふのがあつた。成程這つて行く様子は如何にも田螺か或は寄居虫に似て居る。それから又「避債虫」といふ字もある。此れも中々面白いと思つた。それから手近な動物の事をかいた書物を捜したが、此の虫の成虫であるべき蝶蛾がどんなものであるか分らなかつた。英語では何といふかと思つて和英辭書を開けて見たが虫の一種とあるばかりで要領を得なかつた。一體此の虫が西洋にも居るだらうか。もし居れば、こんな面白い虫の事だから、隨分色々な人が色々な事を此れに就て書いたのがありさうなものだと考へたりした。昆虫學者に會つたら聞いて見たいものだと思つて居る。

「蓑虫鳴く」といふ俳句の季題があるのを思ひ出したから調べた序に歳事記をあけて見ると、清少納言の枕草紙からとして次のやうな話が引いてある。「蓑虫の父親は鬼であつた。親に似て恐しからうといつて、親のわるい着物を引きかぶせてやり、秋風が吹く頃になつたら來るよとだまして逃げて行つたのを、そうとは知らず、秋風を音にきゝ知つて、父よ父よと戀しがつて鳴くのだ」といふのである。どういふ處から出た傳説だか、或は才女の空想から生み出された事だか、兎に角現代人の思ひも付かないやうな事を考へたものである。併し此の清少納言のオーソリチーが九百年も其まゝに保存されて來たとすると、自然界に對する日本人の知識が如何に長い間平和安穩であつたかといふ事を物語つて居る。

其後も二階へ上る度に氣をつけて見ると、蓑虫の數は一つや二つではない。大小さま〴〵のが少くも七つ八つは居るらしい。長い棒の付いたのはまだ外にも居た。中には丁度一本足の案山子に似たのもある。或は二本の長い棒を横へた武士のやうなのも居る。皆大概はじつとして居るが正午頃には時々活動して居るのを見受ける。彼等にも一定の勞働時間や食事の時間があるのかと思つたりした。或時大きなのが丁度紅葉の葉を食つて居る處を見付けたが、頭をさしのべて高い處の葉を引き曲げ蠶が桑を食ふと同じやうにして片はしから貪り食ふて居た。近邊の葉はもう大分喰ひ荒されて居るのであつた。此んな處を見て居る内に蓑虫に對する自分の心持は段々に變つて來た。そして虫の生活が次第に人間に近く見えて來ると同時に、色々の詩的な幻覺（イリュージョン）は片端から消へて行つた。

M君が來た時に、此の話をしたら、M君は笑つて、「大分暇だと見えるね」と云つた。併しM君も矢張り暇だと見えて、此の間自分で蟻の巢を底迄掘り返して見た話をして聞かせた。（九、八、二六）

（四）新星

毎年夏になつてそろ〳〵夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持ち出される。此れが持ち出される日は、私の單調な一年中の生活に一つの著しい區切りを付ける重要な日になつて居る。もう明日あたりは涼臺を出さうぢやないかといふ事が誰れかの口から云ひ出される。しかし其翌日が雨であつたり、さうでなくても色々の事に紛れたりしてつひ一日二日も延びる。其の內にいよ〳〵今日はと云ふ事になつて朝の內に物置の屋根裏から臺が取り下され、一年中の塵埃や黴が濡れ雜巾で丁寧に拭ひ淸められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ〳〵夕方になつてから中庭に持ち出されると、それで始めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

涼臺の外に折り疊みの椅子が三つ同時に並べられて一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の內にも縄飛びをする者もあれば、寫生帖を出しておばあさんの後姿をかいて居るのもある。明朝咲く朝顏の蕾を數へて報告するのもある。幼い女の兒二人は緣側へいろ〳〵なお花を並べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんに「お國の話」をさせたりして居る。幼ない子等には未だ見た事のない父母の鄕國がお伽噺の中の妖精國のやうに不思議な幻像に滿たされて居るやうに思はれるらしい。例へば鄕里の家の前の流れに家鴨が澤山遊んで居て、夕方になると上流の方から飼主が小船で連れに來るといふやうな何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを幼い頭の中に描かせると見える。それでいつも「おくにの話」をねだつてはおしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ」と一人が云ふともう一人が同じ言葉を繰り返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢々出る。私自身が子

供の時分に幾度も聞かされた話が又同じ母の口から出るのを聞いて居ると、それがもう遠い〳〵昔の出來事であつて、數年前迄生きて居た私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は朧氣にしか覺へて居ない子供等には、會津戰爭や西南戰爭時代の昔話は書物で見る古い歷史の斷片のやうにしか響かないだらう。そして其れだけに却つて祖父に對するなつかしみは淨化され純化されて子供等の頭の中の神殿に收められるだらうと思つたりする。

今年の夏始めに凉臺が持ち出されて間もなく、長男が宵の内南の空に輝く大きな赤味がゝつた星を見付けてあれは何かと聞いた。見るとそれは黃道に近い處にあるし、チラ〳〵瞬きをしないからいづれ遊星にはちがひないと思つた。そして近刊の天文の雜誌を調べて見るとそれが火星だといふ事がすぐに判つた。星坐圖を出して來てあたつて見るとそれは處女宮(ヴイルゴ)の一等星スピカの少し東に居るといふ事がわかつた。それで其圖の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其脇へ日付をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見やうといふ事にした。

其れが動機になつて子供は空のよくはれた晩には時々星坐圖を出して目立つた星宿を見較べて居た。其頃は未だ織女や牽牛は宵の中には可也に東にあつた。西の方の獅子宮(レオ)には白く大きな木星が屋根越しに水のやうな光を投げて居た。星圖にある「變光星」といふのは何かといふ疑問も出た。私は簡單な説明をしてやつて、丁度見えて居た「織女(ヴエガ)」のすぐ隣りのベータ、ライラの面白い光度の變化を注意させた。それから夜毎に氣を付けて見て居ると果して天文雜誌にある豫報の通りに光が變るといふ事實が子供の頭にどういふ風に感ぜられたか、それは私には分らなかつた。

空を眺めて居る内に時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星觀測者が夜中空を見張つて居る話をして、それから所謂新星(ノヴア)の發見に關する話もして聞かせた。主だつた星坐を暗記して居れば素人でも新星を發見し得る機會(チャンス)はあるといふ事も話した。

一秒時間に十八萬哩を走る光が一ケ年かゝつて達する距離を單位にして計られるやうな莫大な距離をへだてゝ散布された天體の二つが偶然接近して新星の發現となる機會は、例へば釋迦の引いた譬喩の盲龜が百年に一度大海から首を

出して孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられる程少なさうであるが、天體の數の莫大な爲に新星の出現はそれ程珍らしいものではない。唯光度の著しく强いのが割合に稀である。

此んな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふ事であつた。我家の先祖の誰れかが何處かでどうかして居たと同じ時刻に、遠い〳〵宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと自分等の今の世に此の世界に屆くといふ事である。

併しさう云へば一體吾等が「現在」と名けて居るものが、唯永劫な時の道程の上に孤立した一點といふやうなものに過ぎないであらうか。よく考へて見るとそんなに切り離して存在するものとは思はれない。つまりは遠い昔から近い過去迄のあらゆる出來事にそれ〴〵の係數を乘じて積分（インテグレート）した總和が眼前に現はれて居るに過ぎないではあるまいか。

こんな事を考へたりしながら、もう聞き古した時の昔話を今迄とは別な新しい興味をもつて聞く事もあつた。

八月になつてから雨天や曇天がしばらく續いて凉臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。

或朝新聞を見て居ると今年卒業した理學士K氏が流星の觀測中に白鳥星坐に新星を發見したと云ふ記事が出て居た。其日の夕方になると凉臺へ出て子供と共に北の新星を搜したらすぐに分つた。しばらく見なかつた間に季節が進んで居る事は織女牽牛が宵の内に頭上に來て居るのでも知られた。そして新星は可なり天頂に近く白鳥坐の一番大きな二等星と光を爭ふ程に輝きまたゝいて居るのであつた。

「しばらく、怠けたので新星の發見をし損なつたね」と云つたら子供はどう思つたか顏を眞赤にして、そしてさも面白さうに笑つて居た。

私は冗談のつもりで云つたのだが子供には其の意味がよく分るまいと思つた。それで誤解をしない爲に次のやうな說明をして聞かなければならなかつた。

新星の出現する機會（チャンス）は極めて少ない。吾々素人が星坐の點檢をする機會も亦甚だ少ない。從て先づ新星が現はれて、それから吾々がそれを發見するといふ確率（プロバビリテー）は、二つの小さな分數の相乘積であるから、つまり極小さいものゝまた

小さい分數に過ぎない。此れに反して毎晩缺かさず空の見張をして居る專門家に取つては、「偶然」は寧ろ主に星の出現といふ事のみにあつて、吾々の場合のやうに星と人とに關する二重の「偶然」ではない。強いて云へば天氣の晴曇や日常の支障といふやうな偶然の出來事の爲に一日早く見付けるかどうかといふ事が問題になるだけであらう。

此の說明は子供には、よくは分らないらしかつた。

其のうちに又曇天が續いて朝晩はもう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み台もつい忘れられ勝になつた。從て星の事ももう子供の頭からは消へてしまつて居るらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は此れから始まるので、學者達は毎晩曇つた空を眺めては晴間を待ち明して居る事であらう。(九、八、二八)

(五) 幼ない Ennui

夏休み中に一度は子供等を連れて近くの海岸へ日返りの旅をするのが近年の常例になつて居た。其以前には一週間位泊りがけで出かける事にして居たが、そうすると乾度きまつたやうに誰かゞ轉地先で病氣をした。或る年は母がひどい腸加答兒に罹つて半年程後迄も祟られた。又或年は父子三人も熱が出たり腸を害したりして不安心な怪しげな醫者の手にかゝらねばならなかつた。其の内に知人の或者は保養地で疫痢のために愛兒を亡くしたりした。それでもう海水浴といふものが恐しくなつてしまつて泊りがけに行く氣にはなれなくなつてしまつた。それでも一度も行かないのは子供等に氣の毒なやうな氣がするので、日返り旅行といふ事を考へてそれにきめて居たのである。子供等はそれでも十分に滿足して居たやうである。

今年は自分が病氣で行かれない事になつた。のみならず二人の男の子も健康に故障があつて旅行は餘り望ましくなかつたので、とう〳〵何處へも行かない事になつた。其代りに銘々に何か望みの本や玩具を買つてやる事にして、それで

現代が生み出した此の一種の新しい父親の義務といつたやうなものを免して貰ふ事にした。

年とつた方の子供等は書籍を買つた。近頃繪が面白くなつた末から二番目の八重子は水彩繪具と紙とを買つて規定の金額は一度に使つてしまつた。末の冬子は線香花火や千代紙やこま〴〵した品を少しづゝしか買はないので、配當された僅かな金が割合に長く使ひでがあるやうであつた。そういふ事實は多少小さな姉や兄の注意をひいて居るらしかつた。

學校へ出て居る子等は毎朝復習をして居た。まだ幼稚園の冬子は其の時間中相手になつてくれる人がないので、仲間はづれの佗しさといつたやうなものを感じて居るらしかつた。それで自分も祖母の膝の前へ繪雜誌などをひろげて矢張り一種の復習をして居る事もあつた。

此の四五月頃から父親が毎日繪を描いて居たのが子供等に影響してみんなが熱心な自由畫家になつてしまつた。誰れの發案だか小さな「繪の雜誌」をこしらへた。五人の子供が銘々に隠しあつて描いたのを長女が纏めて綴つた後に發表する事にして居た。「かなりや」といふ名前をつけて一週間に一回位づゝ發行したのが存外持續して最近には第九號が刊行されたやうである。表紙畫は順番で受け持つ事になつて居るらしい。

出品畫を書いて居る内はひどく人の見るのを厭がつてみんな方々の部屋の隅へ頭をつゝこんで描いて居た。時々大きいのが無理に覗きに來ていけないといふ訴が小さい子等から母や祖母の前に提出されて居るやうであつた。畫家の内には未成品を人に見られる事を厭がる人が隨分多いやうであるが、此れには無論種々な複雜な實際的の理由もあるに相違ない、しかし其外に矢張子供の時から既に存つて居る一種の妙な心理作用も手傳つて居る場合がありそうに思はれた。

五人の描く繪が五人ながら、それ〴〵の小さな個性を主張して居るのが可也目立つて見えた。のみならず銘々にもう既にきまつた一種の型のやうなものが芽を出しかけて居るのであつた。何と云つても一番多くの獨創的な點をもつて居るのは一番小さい冬子の自由畫であつたが、その面白い點が一度認められ賞められると其れがもう十八番になつて例へば富士山が出だすと、それが如何なる繪にでも必らず現はれるのであつた。今度は趣向を變へて驚かしてやらうといふやうな氣は流石に未だ無かつた。

其内に又「かなりや」文藝號といふのが發行された。私が晝寝して居る隣の室で八重子と宗二とがひそ〳〵話し合つては宗二が何か半紙へ書いて居ると思つたら其れは八重子の御伽噺を兄が筆記して居るのであつた。出來上つたのを見ると、隨分色々の文章や歌があつた。長男のは感想的のもので姉や弟の繪や文の傾向が論じてあつたりした。八重子の日記にはおやつやおかずの事が大分詳しくかいてあつた。冬子の「ホシ」と題した歌のやうなのがあつたが、意味のどうしても分らない全く未來派のやうなものであつた。

子供等が此んな事をして割合に仲よく面白く遊んで居る内に夏休みは容赦もなく經つて行つた、もう幾つ寢ると學校や幼稚園が始まるかといふ事が幼い子等によつて毎日繰り返されるやうになつた。さう思つて見るせいか、子供等の顔にも何處かに倦怠の影がうかゞはれた。私は親類や知人の誰れ彼れが避暑先からよこした繪葉書などを見る度になんだか子供等にまだ何等かの負債をして居るやうな心持を打消す事が出來なかつた。

或夕方一同が涼臺と縁側に集つていろんな話をして居る間に、去年みんなで夜銀座へ行つてアイスクリームを食つた時の話が出た、それを聞くと八重子と冬子が今年も銀座へ連れて行つてくれと云ひ出した、實際昨年行つた切りで一度も行かなかつたのである。

翌日の夕方は空もよくはれて夕立のおそれも無さゝうであるし、風も涼しくて漫歩には適當であつたから、妻に五人の子供を連れさして銀座へ遊びにやつた。末の二人はどんな好い處へ行くかと思はれるやうに喜んで、そして自分等の好みで學校通ひの洋服を着せて貰つて一時間も前から靴をはいて勇んで庭を飛び廻つて居た。私は此の二人の寧ろ見裘らしい形ばかりの洋服を見比べて居る内に一種の侘しさを感じた。其侘しさは恐らく吾々階級の父親が此のやうな場合に感ずべき共通のものだらう。

子供等が出て行つた後で私は涼臺で母と唯二人で話して居た。座敷の電氣も大方消してしまつたので庭は暗かつた。家中が珍しくしんとして表庭の方で虫の音が高く聞えて居た。

十時頃に床へはいつて本を讀んで居ると門の戸が開いて皆がどや〳〵歸つて來た。どうしたのか冬子が泣きながらは

いつて來て、着物をきかへ床へはいつてもまだしく／＼泣いて居た。どうしたかと思つて聞いて見ても何も云はないし、外のものにも何故だか分らなかつた。

銀座を歩いて夜店をひやかして居る内に冬子が「どうして早く銀座へ行かないの」と何遍も聞いたそうである。此處が銀座だと說明しても分らなかつた。どうも銀座といふのはアイスクリームのある家の事と思つて居たらしいといふ事である。宅の門迄は元氣よく歸つて來たのが、どうしたか門をはいると泣き出したそうである。

私は『珍らしく繁華な街へ行つたから疳でも起つたのだらう』と云つた。私が此れを云ふと同時に冬子は急に泣き止めた。そして何か考へてでも居るやうな風であつたが間もなく、すや／＼寢入つてしまつた。（九、九、三）

時論

日米兩國間の懸案

法學博士 吉野作造

本月二日を以て行はるゝ加州の人民投票の結果は、豫期の如く、新土地法の成立を見るに至るであらう。其成立を阻止するの目的を以て、中央政府の干渉を促し得べしとの豫想は、大統領選擧委員の選擧の懸引といふ事を度外に置いても、實は困難であつたらうと思ふ。何れにしても土地の所有並にその賃借に關する差別的待遇は、愈峻嚴となつた。此の結果を見たるに對して日本政府は如何ともする事は出來ない。嘗ては所謂移民問題の方を犠牲にしても、此の差別的待遇に就いては、何とか讓歩して貰はふと云ふやうな意見があつたけれども、結局は何も彼も向ふの言ふが儘にならんとして居る。そこで政府も默視しては居れず、我々國民もまた之れに就いて政府を鞭韃せんとするの態度に出たが、然しよく考へて見ると、我國からは表向き奈何とも手のつけやうのない問題なのである。政府を促して何等かの方法を取り得べしと考へたのが抑々の間違であつた。

然し我々の方から奈何とも手のつけやうがないと云ふのは、法律上並に條約上の權利として何等請求すべき餘地が無い、否、有つても極めて不確かだと云ふ意味であつて、道德的にはお互に大いに論ずべき部分がある。向ふにも言ひ分があらう。我々にも言ひ分がある。尠くとも日本人を容れないとか、入つて居る日本人に差別的待遇を與ふるとか云ふ事は、睦じい友達同志の間にあり得べき事ではない。從つて我々日本人の不平不滿は言ふまでもないが、米國人と雖も決して之を快しとしては居ない。されば現在の狀態を一時假の取捌きとして、双方を滿足せしむべきもつと根本的な解決策を發見しようとして居るものは彼の國に於いても甚だ多い。其處で所謂日米問題は尠くとも道德的意味に於いて兩國間の懸案となつて居る。

然らばどう云ふ事が懸案となつて居るか。土地法に於てあらはれて居る差別的待遇ばかりではない。此事をここに少しく明にしておかう。

日米兩國間の懸案、卽ち向ふの遣り口に對して我々の不平とする問題は、主として移民勞働者に關するものであるが、大別して之を二つに分けることが出來る。一つは新たに日本移民の米大陸に入り來るを拒まうとする問題で、他は已に來住を許した所謂在留日本人に差別的待遇による不便不利益を與ふると云ふ問題である。前者は卽ち普通、移民問題と呼ばるゝものであつて、後者は云ふ迄もなく差別的待遇の問題である。

移民問題卽ち新來移民勞働者を米大陸から絶對に拒斥せんとする問題は、更に分れて日本から直接入つて來るのを妨ぐるのと、已に布哇に行つて居るものが、よりよき勞働條件を追うて大陸に移住し來ることを防がんとするのである。前者の目的を達するが爲めに出來たのが彼の紳士協約で、後者の方は普通、布哇移民轉航禁止と呼ばれて居る。

布哇移民轉航禁止は、學童問題と聯關して居ることは今更ら說くの必要はなからう。桑港大地震の後、市當局が日本人學童を東洋人の爲めの特殊學校に隔離しようとした時、在留日本人は素より本國の内地人も非常に憤慨した。時の大統領ルーズヴェルトが日本の立場に非常に同情を表し、大いに斡旋する所あつたに拘らず桑港の當局は頑として改めない。そこで問題は、大いに險惡に進んだが、結局日本は所謂布哇轉航禁止を承諾することによつて、學童問題に面目を立て通すことが出來たのである。米國の移民法には布哇其他屬領地に居る勞働者が、大陸に來る時、若しそれが大陸の勞働狀態に危害を及ぼすやうな恐れがあれば、大統領は之を禁ずることが出來ると云ふ規定がある。併しながら若し此規定により、布哇に居る日本人の桑港上陸を禁ぜんとするならば、それは明白に條約違反である。條約には日本人が米國に、米國人が日本に往來して、國内を自由に歩くことが許されて居る。日本政府が、北海道に居る米國人に、九州に旅行してはいけないと言ひ得ざると同じく、米國政府は布哇に居る日本人の桑港上陸を禁ずることは出來ない。若し之を禁じようと云ふなら、さう云ふ條約違反の行動をしても、日本政府から抗議しないと云ふ内諾を得てなければならない。而して日本政府は此内諾を與へて學童問題の解決を自己の主張通りになさしめたのである。桑港當局は初めはなか〳〵讓歩しようとしなかつたけれども、轉航禁止の承諾と云ふ實益を得るなら、空名は捨てゝもいゝと云ふので、斯う云ふ妥協案が出ると直ぐに同意した。考へやうによつては、名の爲めに實益を捨てた日本當局は飛んでもない馬鹿を見たと云ふ形になる。が然し之は日本當局の内諾であつて、表向き條約を變へたのではない。政府としては條約違反を楯として爭はないと云ふ道德的拘束を受けて居

るけれども、彼の禁止令の適用によつて不利益を蒙らされた個人が條約違反を以て爭ふ分には構はない。例へば或日本人が布哇から桑港にもぐり込んだとする。後、發見されて布哇に追ひ還されさうになつたとする。此時彼れは國内來往の自由と云ふ條約上の權利を楯として官憲と爭ふ事は出來る。只事實上は困難があるに相違ない。けれども理論の問題としては、兎も角も爭ひ得る。そこで布哇轉航禁止は、少くとも理論の上から云へば中間浮動の状態にあると云はなければならない。

米國側では、布哇から流れ込む移民を拒斥するばかりに滿足するを得ず、更に日本の本國から來る移民をも拒絶しようとした。そこで米國では毎年のやうに、移民法の改正が議會の問題となり、入國を許さゞる移民の列擧の中に、新たに米國市民となり得ざる人種と言ふ一項を置かんとした。而して此事は條約の違反にはならない。何となれば條約は相互國民の來往の自由を規定して居るけれども、勞働者の移入については特別の法律を設くることを但書に於て許して居つたからである。そこで日本人たる移民を拒絶すると云ふやうな規定は、德義上甚だ不都合だとは思ふけれども、條約上の權利義務の問題としては異議を挾むべき餘地がない。そこで米國議會に於ては毎度此事が問題となつて、而かも多數は之を贊成するものゝ如くに見える。かくては日本の不利益でもあり、又面目にも關するので、駐米大使は本國政府の訓電により何とか斯る露骨な規定の成立しないやう中央政府に向つて盡力を賴んだのである。此間にいろいろなイキサツがあるが結局紳士協約と云ふことで埒が付いた。協約とは云ふけれども、條約ではない。日本の方から自發的に一般移民勞働者には旅行券を下附しないと云ふ事を宣明し、其宣明を米國が信じて、それならば移民法の規定を今迄通りにして置かうと云ふ事になつたのである。即ち日本が一旦宣明した事を破らない。紳士として確實に之を守る。米國も亦日本の紳士的宣明に信賴すると云ふ事に落着いたのである。之れで表向き一段落は附いたけれども、日本の國論は之を承知しない。屢々之が撤廢を迫つて居ることは人の知る所である。同じやうな撤廢の要求は米國にもある。然し米國の方は紳士協約では移入防止の目的を十分に達し得ないからと云ふのである。蓋し紳士協約には再渡航者及び已に來住せるものゝ親、妻、子等の外は旅行券を下附しないとあるけれども、子と云ふ中には養子があり、妻と云ふ中には寫眞結婚によるものがある。日本から言へば當然の話かも知れないが、萬已を得ざるものゝ外出來る丈け日本人の入來を防止しようと云ふ米國から觀れば、協約の不備

に乘ずる不當の侵入のやうに見えたに相違ない。斯くして紳士協約は問題の紛糾に對する一時の鎭靜劑に過ぎずして、双方共に十分の滿足を表してはゐない。從つて之も何とか別種の解決案を見出さなければならないと云ふ所から、一種の懸案となつて居る。

因に云ふ、日米條約は明治四十四年に改正になつた。改正條約には勞働者の移住に關しては特別の法律を設くることが出來ると云ふ但書が無い。之が日本の面目上より論ぜる要求に基いたものであらう。けれども此但書が無いと日本の移民を制限することが條約違反となるから米國としては承知が出來ない。强いて承知させる爲めに日本から時の全權大使内田康哉氏の名を以て紳士協約は今後も確實に守ると云ふ一札を入れてある。

次の既に在住を許して居る日本人に不便不利益を與ふる方面の事を考へて見よう。いろ〳〵の不便不利益が個々の米國人から加へられて居ると云ふ不愉快な例を擧ぐれば際限もないが、市や村の規則で同じやうな事をやらるゝ場合もある。斯くの如き差別的待遇はどの點から觀ても不都合に相違ないが、殊に州法を以て露骨に差別的待遇するなどは、最も明白な不當行爲である。假令日本の勞働者は明白に好ましからざる移民であるに

しろ、一旦入來を許した以上、之に公正な取扱を拒むと云ふ事は間違つて居る。此等の點に就いても大いに彼と爭ふべきものがあるが、就中此方面の最も代表的なものは例の土地法である。即ち大正二年八月の土地法、並びに今度一般投票によつて成立すべき土地法が即ち之れである。之は日本人の土地所有權並びに借借權に拘束を加へ、日本移民の唯一の生活基本たる農業を根柢から覆さんことを目的とするものである。其内容は昨今の新聞に屢々出て居つたから玆には繰り返さない。要するに之は如何にも不都合だと云ふので、我國では朝野擧つて議論が沸騰し、政府からも亦特に彼の國國務省に向つて何等か交渉する所があつたやうだ。米國としては斯る法律を制定することは勝手なので、別に問題として殘る所はない。只日本が餘りに之に不滿を表するので彼の國でも識者は何とかもつと穩便な解決を附けたいと考へて居る。此種の解決を見ることの困難な事は大正二年の土地法發布の時にも明かであつたが、今度も同樣で、如何とも手の附けやうがないらしい。只双方共此儘にして置いては、兩國の關係は益々困難になることを懸念して居る所に本問題の懸案としての意味が出て來る。

尤も土地法には日本人とは書いてない。他にも例があることとだが、合衆國市民たるを得ざる外國人とある。所謂外國人の中

には、歸化し得るものと、歸化し得ざるものとあるは讀者の知らるゝ所であらう。歸化し得ざるものゝ中、已に歸化せるものは立派な米國市民だから問題にならない。已に歸化の意思を表示して第一歸化證を得たものは又之を准市民として市民同樣に取扱つても差支へはなからう。獨り歸化の意思を表示せざるものに至つては、米國の市民にあらず、又米國市民たらんことを欲せざるものなるが故に、之と歸化し得ざるものとを一所にして、待遇を市民、准市民と異にすると云ふのなら、それが法律上條約上差支ないや否やは別問題として、少くとも道德上之を是認する理由がある。然るに土地法は、米國市民たることを欲せざるに拘らず、單に歸化し得る種類に屬するの故を以て、獨り之に市民同樣の待遇を與ふるのは、反對の側から言つて歸化し得ると得ざるとの差別に藉口して故らに日本人等に市民同樣の待遇を拒んだものと云はなければならない。此點からして加州土地法に對しては少くとも道德上大いに異議を挾むの理由はある。獨り日本人の利害に關係すると云ふ問題ばかりではない。

尤も此外に加州土地法は加州の憲法に違反しないか、合衆國憲法に違反しないか、又日米通商條約に違反しないかと云ふ問題もある。若し違反の證明が成り立つなら高等法院に出訴して土地法の無效を爭ふと云ふ餘地もある。併し予輩の觀る所によれば土地法は條約にも違反せず、又加州の憲法にも違反して居ない。米國憲法に對する關係に於ては多少の疑はあるけれども、併し出訴によつて急速な解決を得るの見込は甚だ少い。何故なれば米國の有利に之を判決すれば日米の國交を險惡ならしむるの惧あり、日本の有利に判決を下せば、加州全人民の激昂を招ぐと云ふ懸念があるので、恐らく高等法院は政治上相當の妥協的解決の發見せらるゝまで、最後の判決を延期すべきを以てゞある。して見れば法律上條約上の問題として之を爭ふと云ふ事は適當でもなければ又得策でもない。何處までも道德問題として之を爭ふと云ふ事にして行きたい。此意味に於て、此問題は日米兩國間の重大な懸案として將來の解決を待つものである。

朝鮮の暴動について

朝鮮に於ける民心の險惡は愈々猛烈になり、各所に露骨な爆發を見つゝある事は、毎日の新聞に表はれて居る。暴動が大規模になり、遣り方も精巧になつた。徹頭徹尾日本に反抗するといふ精神で猛進し、殆ど他を顧みない點に於て、朝鮮の今日は愛蘭の現狀に比すべく、更に一層類似の例を求むるなら、戰前

に於けるクロアシアのやうなものであらう。洪牙利がクロアシアの處置を過つた事、並に之が爲めに非常に苦んだ歴史は、朝鮮の問題に心ある者の大に參考とすべきものがあらうと思ふ。之につけても我々の常に遺憾に堪へないのは、朝鮮に於ける日本官憲の朝鮮統治上の根本的謬想である。他の言葉を以て言へば、彼等が出發點と到着點とを混同し居る事である。

朝鮮人にして少しでも帝國の權威に反抗する者があると、之を不逞呼ばはりする。其說明に曰く、彼等は日韓合併條約によつて既に立派な日本人となつた、日本人として日本人の指揮に反抗するのは叛國的行動ではないかと。形式的法律論としては正しい。併し乍ら實際上の統治原則としては、朝鮮人が日本人として我々と同じやうな國家觀念を抱くといふ事は、出發點ではなくして到着點である。日韓合併によつて日本人と云ふ譯になつたから、之れから親切に彼等を世話して、彼等が本當の日本魂を遠からざる將來に持つやうに努力せねばならない。彼等が本當の日本魂を持つに至ると云ふ事實は、吾々の努力によつて將來に期すべき到着點なのである。然るに之を出發點として、日本人と同じやうな考を日本の國家に對して持たないのが惡いと云ふのでどし／＼罪するやうでは、之れ本末を顚倒するものではないか。

日韓合併が如何なる實際的事情の下に取定められたか。又其後朝鮮は如何に日本官憲によつて治められたか、是等の點を冷靜に考ふる時、我々は自ら朝鮮に對して爲す可き事を十分に爲して居なかつた事を認めざるを得ない。即ち朝鮮人を心からの日本人たらしむるといふ責任を我々は十分に盡して居ない。而して朝鮮人としては、差し當り日本の支配を喜ばず、動もすれば之れに反抗するといふの氣分を出發點とするのは當然ではないか。只朝鮮も日本領土の一部となつた以上は、朝鮮人が此出發點に立つて、形の上に日本に反抗するなら法律上之を默過する事は出來ない。故に若し不軌を謀る者があれば、政府として固より峻嚴なる態度を以て之に莅むべきであるが、併し彼等の出發點が如何なるものであるかに同情と理解とのある以上、少くとも道德的に彼等の立場は不當なものでないと見てやらなければならない。之れ丈けの諒解が無いなら、朝鮮人は益々反抗するに至るのは當然ではないか。我々は彼等の道德的立場を相當に尊敬する時に、始めて彼等に臨むに假借する處なき法律的制裁を以てする事が出來るのである。我々は日本人としての義務に背くの故を以て彼等の外形上の行爲に法律的制裁を附するのは好い。けれども彼等が事實未だ日本人になり切つて居ないと云ふ事、並に之に基く彼等の道德的立場は之を認めてやる丈けの

量がなければならない。況んや我々は時々まだ本當の日本人になり切らざるの故を以て、彼等に生來の日本人同樣の權利を認めざるにおいてをや。彼等が未だ十分に日本人になり切らないのは寧ろ我々の責任である。日本人でないものが日本人になると云ふ事は、本人が自發的に變つて來る事を待つては何時までも期せられない。なるとならざるは事らする者の責任である。

朝鮮の統治に就て述ぶべき事は此處に盡きない。只最も根本的た者として茲に出發點と到着點との顚倒を擧ぐる所以は、今や朝鮮の暴動は殆ど鎭靜に入るの姿にして、高壓手段による外如何とも爲し難きが如く、而して高壓手段に出でざるべからざる以上、右い點の注意は最も肝要なりと信ずるからである

小題小言六則

◎政敵の首　先頃の支那新聞に廣東通信として、陳炯明君が飛行機場より檄文を廣東城内に撒布し、岑春煊を生擒せる者には一萬兩、莫榮新は六千兩、溫宗堯と楊永泰は四千兩、銃殺せる場合には各其半額の賞を懸くる旨を公告したといふ事である。こんな事は支那に於て珍らしい事ではない。只首の値段が著しく廉くなつた點が昔と違ふ。陳炯明は最近に於ける支那の勢力者中最も開明の思想を有つて居ると云はれて居るのに尚ほ[illegible]事あるを見れば、支那の政界の今日尚ほ頗る遅れて居る事が想像さるゝ。政敵を殺さなければ政界に志を伸ぶる事が出來ないといふのは、政爭がまだ理義の爭になつて居ない證據であり又政界の巨頭の生命を覗ふと云ふ事は、政治がまだ國民のものとなつて居ない證據である。政爭が人と人との爭を超越しない間は駄目だ。實際政界に出沒して居る誰れ彼れによつて支那の[illegible]はるべき見込みは當分ない。斯くして我々は密かに隣邦靑年の純眞な運動に翹望せざるを得ない。

◎兵變と財政　先般の安直兩派の爭に關聯して奉天軍は二千萬元、直隸軍は二千四百萬元を中央政府に要求した。政府は其出所に苦しみ、周自齊、葉恭綽の辭職說も傳はつた。支那の政府で財政の鍵を握つて居る者は、財政總長と交通總長であるが、此兩者が辭職騷ぎをする時は、必ず要求された金の遣繰りに苦しみ拔いた時である。やがて又周、葉兩氏は米國の資本團から若干借款をするといふ報が傳つた。さうすると張作霖と曹錕とは北京から直ぐ天津に驅け着けた。借りた中から自分達の立て替へた軍費の一部をせしめようといふのであらう。斯うなると支那で戰爭は一つの商賣になる。碌な金の準備もなくて事を擧げる、一旦事を擧げれば相當に勢力がつく。お互に

武器にも彈藥にも乏しいのだから、敵から根本的に討伐される憂は無い。北内に等しく國家の爲めに事を起したのだからといふので、費用の支出を請求する。戰爭して損は無いといふ計算になる。所謂革命黨の志士が外國に亡命中さん〲苦しんで置いたのも、一つには一朝風雲に際會する時の樂しみがあるからである。かういふ狀態では兵變は何時までたつても止まない。支那の動もすれば武力を以てする政權爭奪は、文字通りの意味に於て閑人の遊戲に過ぎない。まだ曾て民生の利益幸福に資するやうな意味の政爭は一度も無いではないか。而して財政は膨脹する一方で、定まつた收入は其半分にも足らない。して見れば結局苦しむものは人民のみである。之れ人民の聲を代表する靑年學生が望を政界に絕つて、時として過激の思想を弄する所以である。何れにしても支那は是等空論の靑年によつて治めらるゝに至るまで殆ど恢復の望は無い。

●中橋文相の演說

先月十三日師範學校長會議で中橋文相のなした訓示演說の中に、次のやうな意味の事があつた。曰く、我國體の精華は極めて悠久なる歷史を貫いて輝いて居り、區々たる外來思想によつて決して曇りを生ずるやうなものではないが、近年世界各國を通じて時代の思想が急激に變化し、各國の社會問題が起り、或は政治運動となり、或は經濟運動となつて居り、今日は敎育上最も考慮を要する大切な時期であると思ふ、此際外來の思想中國家國民に惡影響を及ぼすが如きは、飽くまでも之を防止すると同時に、國情に合致する思想に之を利用善導して尊嚴無比な我國體を擁護し、ます〱國運の發展を圖らなければならないと。尤もな說ではあるが、然し之れ丈けの事なら文相を煩はさなくとも誰も知つて居る。近來世界各國を通じて時代の思想の急激に變動せる結果、いろ〱の問題が起つて居る事は百も承知だが、唯人々の切に知らんとする所は、何が這の急激な變化の動因であるか、這の變化の奧に働いて居る動因の道德的價値如何の點である。昨今我國の人心を著るしく影響して居る外來の思想の中には、善いものもあらうが又惡いものもあらう。善いものを採つて惡いものを捨てよといふ形式論なら聞かなくとも分つて居る。折角勿體振つて訓示をする位なら所謂國家國民に惡影響を及ぼす思想の何であるか、又所謂國情に合致する思想の何であるかを明かに敎ふべきであつた。敎授細目は何うの此うのと五月蠅い程に干涉好きな文部省が、善いものは取れ、惡いものは取るなといふ漠然たる形式論を訓示した丈けで、其善惡の具體的標準を明示しなかつたのは如何[illegible]ふ譯であらうか。尤もこのやうな事は文部省に限つた事[illegible]く、思想問題になると內務省の訓示も司法省の訓示も皆此調[illegible]

で、標準を示さない。唯漠然善を取り惡を捨てよと迫るのだから、下級の屬吏は覺束ない自己の判斷で善惡の區別をつけ、無暗に取締りを勵行して、上官訓示の趣旨に應へ得たりとする。其結果、善を捨てゝ惡を取る事もないではないやうだ。善を取れ惡を捨てよと事新しく訓示するの必要はない。當今に差迫つた必要は、何が善で何が惡かを最も鮮明に指示する事である。

●思想に關する無用の取締

此頃演說會や講演會に巡査憲兵などが荐りに筆記して居るのが目に着く。聞く所に據れば、某々の演說は其題目の如何に拘らず速記する、又問題が社會とか國家とかいふ事に關するなら、演者の誰れ彼れに拘らず速記する事になつて居るとか、まるで鵜の目鷹の目で演說講演の中から不穩の文字を搜し廻つて居るやうだ。そして此探索の目は裁判所に於ける辯護士の辯論、學校に於ける教授の講義にまで及ぶ事があるといふのだから驚く。國家は何の必要あつてかういふ餘計な事をするか。吾々は寧ろ此無用の浪費を惜しむものである。否、無用の浪費丈けに止まるならいゝ。時として無用に罪人を拵る。且つ派遣さるゝ者は、講演を聞く事によつて開發さるゝよりも、初めから人を罪人視してかゝるから、ます〳〵意味を誤解するようになる。鍛錬者が好んで人を殺すように、是等の制度がどれ丈け國民を累ひして居るか分らない。

●官制婦人會よりも女子教育

先月初めの[illegible]に、內務省では先々月末約一週間各府縣の理事會、郡市町村[illegible]の他の爲めに自治及民力涵養の普及及徹底を期すべく、協議[illegible]及講演會を開いたが、此協議會に於て內務省の肝入れで「國[illegible]的及社會的活動と覺醒とを促す爲め婦人會を設立」し、之を全[illegible]的に統一しようといふ考で役人連中が其體案を相談中だといふ[illegible]やうな記事が載つて居た。併し官製の會合の爲す無きは已に[illegible]年會に於ても明かである。眞に婦人の活動と覺醒とを促さんとするなら、もつと婦人の教育の進行を圖つたがいゝ。殊にあらゆる法律上の拘束から婦人活動の自由を解放したがいゝ。婦人をして殊更に公事に興味を有せしめず、且つ教育の機會を大いに制限して居つては、婦人會も何もあつたものではない。

●尼港遭難紀念碑建設計劃の行き悩み

大隈侯堀內中將を首腦に戴く帝國軍人後援會は、尼港に於ける「同胞の遭難を紀念し、國家の威信を張るの目的」を以て十五萬圓の豫算で紀念碑を建設するの計劃を立てた。堀內中將の談に據れば、出金者は低級の人のみで富豪などは甚だ冷淡を極め、九月末まで集まる所僅か一萬圓位に過ぎないとの事であるが。併し乍ら熟く考へて見るのに、一體之は何の爲めの紀念である

が我々には分らない。私の交際に於ては友達が死ねば直ぐ追悼會をやる。尼港遭難者の如きは、氣の毒だといふ點に於ては最も我々の同情に値するものだから、其點から之を追弔するのはいゝ。殊に其遺族を勞ふといふが如き計劃は是非あつてほしいと考へる。けれども天下の財を集めて紀念碑を作るといふやうな事になると、茲に何等か國家的意義が無ければならない。然るに尼港遭難者は遭難其事によつて如何なる貢獻を帝國の進運に爲したか。事情は氣の毒だけれども、國家の大局から云へば全く無益の死に終つたのではないか。政府當局の失策の犠牲になつたといふ以外に、公の意味に於て我々は彼等の勳勞を説くべき何等の理由がない事を斷定せざるを得ない。さうすれば何處に紀念碑などを建つて理由があるか。昔露西亞から斯ういふ非道い目に合はされたといふ事を、將來の國民に思ひ起さしめ、以て敵愾心を喚るといふなら分かる。然し斯ういふ意味で紀念碑を作るといふのなら、多數の國民は恐らく別個の理由で反對するだらう。斯くして我々は此計劃の失敗は國民の良心の當然の反映に外ならないと考へる。堀内中將は計劃の不振につき、「外國に對して此際此時、日本の國民性の墮落を疑はれ、從つて其輕侮を受けはしまいか」と慨嘆せられて居るが、我々は寧ろ紀念碑を建つる方が、外國の誤解と輕侮とを受くる所以なるを確信し、帝國の道德的名譽の爲めに、斯う云ふ計劃の成功するのがいゝかわるいかは自分に取つては一の疑問だ。





微笑

上司小剣

一

奈良の心齋橋筋だと言はれてゐる餅飯殿の通りを、今はこの古い都跡の寂れた田舍町にも全く見ることの出來ない、昔し流行つたお高祖頭巾に頭を包んで、家々の店飾にすゞし氣な眼の光を投げかけながら行く人があつた。錦紗お召のコートを裾長に着て、白足袋が人形の足のやうに、小ひさくチラ〳〵と見える。

其のお高祖頭巾の頭と、白足袋の足とを二三間こなたから見詰めて、人目を厭ふやうに跟いて行くのは、三十四五になる男で、春はまだ淺く、御蓋山の木立から吹いて來る東風が、咲いた梅の花をもう一度蕾に戻しさうに、冷たく頸を撫でるのを寒がりもしないで、外套も着けず、襟卷きもせず、大島の着物と羽織とを下着なしに輕々と瘦形の足に捌いてゐた。

『奈良の銀座と言ひたいね。心齋橋筋なんて、間が拔けてる。』と、男はお高祖頭巾に近づくなり稍高い聲で言つた。女は默つて、素知らぬ風をしてゐた。

たゞそれだけのことだのに、狹い町の人目は皆この女と男との上に集つた。

女は身を翻へすとでもいふやうにして、ひら／＼と暗い方へ足を早めた。男も其の後から急いだ。西城戸の眞ツ暗なところで、崩れかけた土塀を背にして二人は立つた。

『東京とちがうからあなた、あんなところであんな大きな聲をしちやいけないことよ。土地が狹いから直ぐ分つちまうぢやありませんか。』と、女は四邊に氣を配りつゝ、怒るやうに言つた。

『さうか。』と男は、暗黒の中で黒い頭を掻いた。長く伸びた頭髪が、蓬々と逆立つて、武者繪にある大童のやうに見えた。星明りに見かはす顏と顏とは、だん／＼ハッキリして來た。

『御免なさい。……』と、男は女のやうな聲を出した。

『また御免なさい……ツていふのね、あなたの御免なさい、隨分安價ね。』と、女はツンとして、お高祖頭巾の端を弄つてゐた。

『それぢや、何んと言つたらいゝんだね、僕がわるいから、あやまつてるんぢやないか。』と、男もツンと仕返して見せかけた。

『遠いとこを來たのね。』と、女は急に涙ぐましい聲になつて、しかと男の手を握つた。男はそれを握りかへして、默つてゐた。

『冷たいこと、この人の手。』と、言つた女の眼からは、ハラ／＼と熱さうな涙が落ちた。其の一雫づゝに星影が宿つて、眞珠でもこぼれるのかと、男は思ひたかつた。

『御免なさい、わたしがわるかつたわ。』と、今度は女の方からかういふ言葉を使つた。

『何んだか東京に居るやうな氣がするね。』と言つて、男は濕つた瞼で、幾度かつゞけて瞬きをしたが、口元には寂しい微笑があつた。

ほかに人影は見えないけれど、何處からか足音が近づくといふ氣がしたので、男は背に負ふやうにしてゐた土塀を離れて、散歩するほどの足どりで、フラ〳〵と、暗い町を西の方へ行つた。

『わたし怖い、どうかして頂戴。』と、女は男に寄り添ふて歩きながら言つた。

『僕ほんとに愛といふものが解つた。……眼が覺めたんだね。……どうしても僕はこの人と離れられない。』

『わたしだつてさうだわ。』

『けども、久江さんはもう花岳寺へ歸らなけやならないだらう。』

『今から駄目だわ。』

『駄目。……それや大變だ。』

『わたしを寺へ歸したいの。』

『歸したくはないさ、だけど歸らなけや仕かたがないだらう。』

『歸らないでもいゝやうにして頂戴！』

『そんなこと、出來やしない。』

『出來やしない？……ぢや何故あなたは花岳寺へ來たの。……私に姿を見せたの。』

『逢ひたくて、逢ひたくて、たまらなかつたから。……僕もうどうなつたツて構はない。だけどこの上まだ久江さんを苦めちやいけないから、どうぞこれから寺へ歸つて頂戴。こッちの野路の方から送つて上げるから、路々ゆつくり話を

して、それを一生の別れにしよう。』

『一生の別れ？……そしてあなたは東京へ歸るの。』

『どうするか分らない。』

『わたしも一所に連れて行つて。……』

二人はいつしか、細い野路へ出てゐた。振りかへると、餅飯殿の賑かな燈火は、ぼうツと空に映つて、猿澤の池の水氣であらう、霞の如くどんよりしたものが、其の脇から立ち騰つてゐた。若草山や御蓋山は、枕屏風のやうに、星を梨子地に撒々ちらした空を仕切つて、奈良の町々をこんもりと包んでゐた。大佛の大鐘が、ギヤアンと凄い響を立てて、初夜を報じた。

『あなた、餅飯殿の勸工場で、お雛さまを賣つててね。わたしあれを見ると、去年のことを思ひ出して、欲しくなつちやつたわ。この邊のお節句は舊暦ださうですが、でも新暦からお雛さまを賣り出すのね。』と、女は物を懷かしむ風で、餅飯殿の明るい空を眺めやりながら言つた。

大鐘が初夜を撞き了ると、近くの鐵道線路をば、短い汽車が轟と走り過ぎた。二人の眼は星明りの下に、異樣な光を見せ合つて、汽車の響きに耳を澄ました。

『久江さんは暢氣だね。生きるか死ぬるかといふ場合に、まだお雛さまが欲しいの。』と、男は厭や味のやうに言つた。

『えゝ、欲しいの。……わたし死ぬのなら、あの小ひさいお雛さまを抱いて死にたいわ。』と、女の眼はなほ餅飯殿の花やかな燈火に憧憬がれてゐるやうであつた。

『どうして僕はから久江さんが忘れられないんだらう。』

稍暫らくしてから男は、麥畑の畦にドタリと腰をおろして言つた。

『あなた、着物がだいなしになつてよ、何か敷いて。……』と、女は少し慌てた樣子であつた。

『着物なんか構やしない、どうなつたツて、僕は久江さんさへあれやいゝんだ。』

『さう。……でも、わたしのこの姿を見たら厭やになるでせう。』と言ひ〳〵、女が錦紗お召のコートの袖を捲つて見せると、下には黒い麻法衣と鼠色の着物とに、白い肌を包んでゐるのが、星明りに窺はれた。男は頓に哀しくなつて、しく〳〵と男泣きに泣いた。

『この頭巾をとつて見せませうか。』と、女は案外落ち着いて、紫のお高祖頭巾に、白く細い指をかけた。其の指には昔し──と言つても僅か一年前──其のまゝの大きなエメラルド入りの指輪が、星の光を受けてキラ〳〵した。

『いゝよ、見せなくツたツて、……分つてる。……』と、男は慌てて女の手を押さへた。二人は其のまゝ手に手を取り合つて、星明りにまたつく〴〵、顔と顔とを見交はした。

女の額には白粉があつた。お高祖頭巾を食み出した額に、著しく痩せが見えて、肌理も殊にあらくなつてゐるやうであつた。白粉のノリがわるくて、斑らになつてゐるらしいが、夜目にはもとよりハツキリと分りやうもなかつた。

『わたしのこの姿を見せたら、あなたきツと厭やになつて、東京へ逃げて歸るわ。』と言ひ〳〵、女は解きかけたお高祖頭巾を、もとのやうにした。高い鼻が餘計に高くなつたやうに、ツンとして見えてゐた。

『先刻ちよツと見たぢやないか。なか〳〵よく似合ふよ、尼さん姿が。』と、男はまた泣き聲になつた。或る時は島田、或る時は大髷にも丸髷にさへ結つた髪、そんな日本髪は、日曜か祭日なぞの休みの日ばかりで、平日は始

総束髪であつた。男がデツと眼を瞑ると、頭の中の心の鏡に映るものは、必ず束髪姿の女である。それがつる〳〵とした青い尼の頭になつてゐるのかと思ふと、情けなくてたまらなかつた。

『お〻恥かしい。……』と女は言つて、お高祖頭巾の頭を俯向けた。

『仕方がない、みんな僕の故だから。』

『あなたの故ぢやない、わたしがわるいんだから。……あなた餅飯殿まで行つて、あの小ひさなお雛さま買つて來て與れない。厭や？……』

二

この男女には、丁度去年の今頃のことが、寫し繪のやうになつて、心の中に浮き出してゐた。——

女が三年級の生徒に獨唱の試驗をしてゐる時、男は同じ女學校——それは頑固で鳴り響いた一老教育家の獨力で經營してゐる私立——の四年級に英語の文法を教へてゐた。それが濟むと、二人の其の日の身體はあいた。

諜し合はしてあつた通り、廣小路で待ち合はして、二人は角の四層樓の大呉服店へ入つた。丁度三月の節句に二週間ばかり前で、大呉服店には店飾りにも、三階にも、重に赤い色から成り立つてゐるお雛さまがいつぱいであつた。まだ老孃と言はれるには早いが、一人くらゐ幼いのがあつてもよい年頃の久江が、白粉の下に羞れを伏せて、美しいお雛さまを見廻つてゐる姿が哀れであると、男は思ひながら、連れ立つてゐるのだとは、人に氣づかれないほどにして、込み合ふ中を泳ぎ歩きつ〻、女の後に隨つた。ある時は人の目を忍ぶのが主になつたり、またある時は、女の姿を見失はないのを第一に心がけたりして、男の心は一生懸命であつた。

『綺麗だわね、立花さん、一つ買はない、小ひさいのを。』と、久江は立ちどまつて、群集の中から立花の顔を扠き出すやうにして言つた。

『生徒が来てやしないか。』と、立花は何よりもそれを怖れた。

『いゝえ。……』と言ひながらも、久江は用心深い眼をして八方を睨み廻はした。しかしまだ學校の生徒が歸りがけに立ち寄る時刻には少し早かつた。

『買つてもいゝね、どれがいゝだらう。』

『一番小ひさいのがいゝわ。書斎へ置くんだから、本箱の上へ載るやうなのがいゝぢやありませんか。』

『どれでも、あなたの好きなのを買つたらいゝぢやないか。早くおしなさいよ。』

二人はこれだけのことを話し合ふのも、おツかなびツくりであつた。久江はついツと、鮎が水をきるやうにして、人込みの中を滑りつゝ、小ひさなお雛さまばかり集めてある棚の方へ行つた。立花も其の後についゝて、一間ばかり離れたところから、久江の派手な銘仙の羽織と、青い肩掛けとを目標に、横目をつかつて立つてゐた。しかし其の目標は動もすると人込みに隠されて、白い頬までを見失ひかけることがあつた。眞ツ黒で、他の人よりも艶の多い束髪に挿した赤い玉の簪が、最後の目標に残つて、それさへ折々見えなくなつた。

買物の選擇には、いつもひまどつて、あれかこれかと迷つてゐるのが、久江の癖であつた。しかしこの時は案外に早く買物がきまつて、久江の白い手が人込みの間から立花を麾いた。赤い玉の簪や、黒い髮や、白い頬や、青い肩掛や、派手な銘仙の羽織の模様や、そればかりに注目してゐても、動もすればこつちから見失ひかける久江が、あツちからこツちの立つてゐるところを、それと直ぐ知つて手招きした目の早やさに、立花はほと〳〵感心して、側へ寄るなり、先

刻から右の手へ汗とゝもに握りしめてゐた十圓紙幣を、そッと久江に渡した。

學校の門を出るなり、物蔭で脫いで、ぐる／＼卷きにして包んである袴の中へ、お雛さまの箱を入れて、更紗の風呂敷をギユウと締めた久江は、稍暫らく大膽になつて、立花と肩を並べつゝ歩いたが、忽ち物に驚いた顏をして、『あたた高山さんが來ててよ。』といふなり、するりと人込みを拔けて、太い柱の側に寄り添ふた。

立花は高山といふ名に馴染はなかつたが、ひよいと橫の方へ眼を向けると、自ら豫言者と名乘る高山道三が、例の羊羹色のフロツクコートに、白木綿の袈裟のやうなものへ『豫言者』の三字をば黑々と書いたのを、小鳥の眼にも見落されないほど、鮮かに現はして、お雛さまの前をうろついてゐた。この奇異な對照に、人々の目は齊しく豫言者の袈裟に集つてゐたが、眞ッ黑な髯の間から額の白い顏が覗いてゐるやうな豫言者の太い手には、五歲ばかりの女の兒の手が繫がつてゐた。さうして其の兒の小ひさな手の指さすお雛さまを豫言者の輕さうな財布が買ひ求めてゐるのを、人々はまた珍しさうにして、眺め込んでゐた。立花も其の一人であつた。豫言者の買つた小ひさな、木彫のお雛さまが、今しがた久江の買つたのと同じものであつたのを、チラと見た立花は、何んだか變な氣がしてならなかつた。

久江はどこまでも豫言者の眼を怖るゝやうに、ズッと先きの方へ行つて、もう階段を下りかゝつてゐた。

『あなたあの人知つてるの。』と、立花は久江に追ひ縋つて、出口のところで下足を待ちながら小聲で訊いた。

『お父さんが生きてる時よく來たの。』と、久江は俯向いて、何か深く考へるやうな樣子をしながら、面倒くさゝうにして答へた。彼女にはよくかういふことがあつて、其の時は立花が全身の力を籠めたやうにして、久江の機嫌をとるのである。これをまた久江がうるさがることは、立花によく分つてゐながら、立花はどうしても默つてゐることが出來なかつた。

『僕、死んじまうか知らん。』

さういふ場合、立花は戯れながら白々しいと思ふことも、思ひ詰めたやうに言ふのであるが、『死』の一語を聞くと、嘘であらうと、偽りであらうと、久江は必ず跳ね上るやうな風をして、直ぐに機嫌を直した。

『うまいのよ、この人。……驚かすことがうまいんですもの。』と、円い顔に片靨を拵へるのであつた。

『また死んじまうッて言ふんでせう。』

大興旅店を出て、わざ／＼選つて行つた寂しい横町を一層寂しい方へ曲ると、久江は頓に機嫌を直して、立花の後から追ひつくのを待ちながら、大きな聲で言つた。立花は久江の口を押さへたいやうな氣持ちになつて、戸の閉め切つてある四邊の家の耳を恐れた。

『臆病ね、この人。ほゝゝゝゝ。』と、久江は氣味のわるいほど乾燥いで、且つ非常な大膽さを見せた。沈んで、ふさいで、俯向いて、考へ事ばかりしてゐた後には必ず來るにきまつてゐる躁狂の發作の如きものであるけれど、立花にはいつもそれが、不思議でもあり、珍らしくもあり、また嬉しくもあつた。

それから石段を登つて、少し行つた寂しい町に、久江の二階家はあつた。母一人娘一人には廣過ぎる家の、日本造りには珍らしい入口の扉(ドア)が、摺り硝子入りの把手の附いたものであつた。其の把手の白い陶器を冷たさうに握つて押し開くと、久江は、

『さアどうぞ、先生。』と、改つた調子で言つた。

『家の近所へ來たら、思ひ切つて遠く離れて歩くか、連れ立つて話しながら歩くかしなければいけないことよ。』と、久江はよく言つてゐたが、この日は其の後者の方の手段をとつて來たのである。

『阿母さん、お客さま、立花先生！』と、久江は押し込むやうにして、立花を扉の中へ入れてから、自分も入つて、ガタンと勢ひよく閉めるなり、乾燥いだ聲で言つた。

看經の聲が階下座敷に聞えてゐた。久江の母は暇さへあると、小ひさな佛壇の前に坐つて、久江の亡き父にお經を上げるのを勤めにしてゐる。お經の聲がパツタリ止むと、約ましやかな足音がして、お經と同じやうな聲で、

『あら立花先生、入らツしやいまし。ほんとによく入らして下さいました。』といふのが聞えると同時に、其の上品な細面が立花の前に現はれた。母子でも久江とは餘り似てゐない、少しも似てゐないと言つても差支へのないほど似てゐない。どツちかと言へば大柄な久江に比べて、母親は小づくりで、總べてがチマ〳〵と片付いてゐる。久江はお父さん似であるさうな。亡き父親に似てゐるといふことが、餘計に母の愛を促して、久江は二十三にもなつた身體を、子供のやうに、膝へ抱き上げられんばかりにされてゐる。

『さア、あなた、どうぞお上りあそばして。お宅とちがひまして、まことにむさくるしいところでございますが、さアどうぞ。』と、滴るばかりに愛想よく言はれて、立花は母親にモーニングコートの背中を見せつゝ、靴の紐を解いた。まだ寒いのに、外套は着て來なかつた。

久江は茶の間へ上るなり、持つてゐた風呂敷包みを棄てるやうに置いたが、つひ忘れてゐたお雛さまの箱が、疊の上にガチヤンと鳴つた。

『あら大變だ。毀れやしないでせうか。』と、久江は慌てた風をして母に問ふた。

『亂暴だね、この娘は。……毀れやしないかツて、お前、何が入つてるんだか、阿母さんは知らないぢやありませんか。』と、母親はにツこりして、其の風呂敷包みを拾ひ上げた。

『お袴よ。』

『お袴なら、まさか毀れやしないでせう。』と、母親は何が嬉しいのか、ほく／＼しながら、風呂敷を解かうとした。

『あらッ、阿母さん、いけないことよ。い〻ものが入つてるの。當て〻お覧なさい、先生に買つて頂いたのよ。』と、久江は母親の手を抑さへるやうにした。

『さう何んでせうね。』と言ひ／＼、母親はにこ／＼して、風呂敷の上から揉む風に撫で廻はした。

『お雛さまよ。小ひさい、木彫りの。赤い毛氈までみんな揃つて、そらよく出來てますよ。』

『さう、ほんとに毀れやしなかつたかね。』と、言つて、母親は風呂敷を擴げた。別状もなく、小ひさな木彫りの雛が、箱をそのま〻臺にして、恰好よく並べられた。背後の衝立にはお能の背景のやうな老松が描いてあつて、五つの階段も小ひさく附いてゐる。

『まアい〻のだね。』と言つた途端、母親は背後にノッソリ立つてゐた立花に氣がついて、少し驚いた様子をしながら、

『あら先生、こんなところへお出でになつちやいけませんよ。此處は楽屋でございます。久江さん、先生をお二階へ御案内しなけれやいけませんよ。』と、早口で言つた。しかし久江はニヤ／＼笑つたま〻動かなかつた。母親は久江の袴の皺くちやになつたのを取り上げて、黒塗りの衣桁にかけた。それを見ながら、

『阿母さん、わたし袴を穿くのが厭やで仕様がないわ。……學校なんか廢しちまうか知らん。』と、久江は可なり白粉の濃い顔を鏡に眺めながら言つた。

『また始まりましたね、赤ちゃんの我儘が。……先生、どうも、からッ子供で仕様がございません。……叱つていたゞかなけや、困ります。』と、母親は手際よく茶を淹れて、立花に勧めた。

『ほんとに厭やですよ、教師なんてね。大學か專門學校程度の學校ならまだいゝかも知れませんが、中等學校は一番厭やですね。いッそ小學校の方が邪がなくていゝでせう。』と、烟草を吸はぬ立花は、手持ち無沙汰に、ピカ〳〵と拭き込んである長火鉢の縁を撫でゝゐた。

『わたし、小學校へ行かうか知ら。おいッち二、おいッち二、ッて、面白いでせう、ね立花さん。』

『どッちにしても、品行を賣り物にしなければならないやうな職業は厭やですね。』

『品行を賣り物？……』

久江はまた沈み切つた樣子になつて、俯向き始めた。

『さア、先生、どうぞお二階へ。』と言つて、母親は先きに立つて、トン〳〵と階子段を昇つた。其の後を靜かに見送つた久江は、左の食指で赤い唇を輕く突き示しながら、立花に寄り添ふて來た。

三

それから四五日、立花は久江に逢ふ機會がなかつた。學校へ出ても、時間が食ひちがつて、廊下で顏を合はせる樂しみが空しくなつてばかりゐた。職員室の大卓子の一角を領した久江の椅子は、赤い友禪メリンスの小蒲團を載せたまゝ、主を待つてゐるやうであつた。其處に久江の細腰が落着いてゐる時、立花は其の後を通りがけに、コツ〳〵と椅子のよりかゝりを叩いて通つた。ほんの無心に偶然にするやうなこの手すさびは、正面の校長にも、其の横の教頭にも。取られることはなかつたが、久江の身體には、鐵槌か何かで擲られるやうに、ヒシ〳〵と身に染みて響くさうな。それをやつてみるには、主のない椅子では張り合ひがなかつた。

ほかの教諭が、しかも男が、何かの都合でうつかりと久江の椅子に腰をかけて、教科書の下調べなぞをしてゐるのを見ると、立花は忽ち胸がわく／＼して、其の方ばかり見詰めてゐた。けれども、自分は何んだか氣が咎めて、久江の空椅子に腰をおろしてみる勇氣は兎ても出なかつた。

『あの椅子を何處かへ片附けておくといゝな。』

口の中でかう呟きたかつた。

一日……二日……三日目に事務室へ行つて、それとなく調べてみると、久江の缺勤屆が出てゐた。『病氣の爲め』といふのは普通の文句だが、自分のところへ何んとも言つて來てゐないのを見れば、病氣でもあるまいと思ひながら、どうやら心配になつて來た。家へ尋ねて行くことも、何んともなく氣が進まないので、獨りで氣を揉みつゝ、立花は一週一回の土曜の密會日を待つてゐた。

小糠三合あつたら行くな、といふ古い言葉のある養子の身分とて、立花には出入ともに儘ならぬことが多かつた。養父母は疾くに亡なつて、むづかしい親戚とてもないのだが、自分より二つ年上の家附き女房が、何かにつけて喧しかつた。遊んでゐても困らぬだけの財產があるので、おきんといふ其の家附き女房は、立花を何處へも出さずに、毎日家に置かうとするが、立花は養父母の遺志を楯にして、こればかりは、悍馬のやうな家附き女房の前に降らなかつた。亡き養父母の志といふのは、幾ら困らないでも、人間は手足の利く限り、相應に働きをしなければならないといふことであつた。相場師であつた養父は、老來スツパリと騒がしい場所への出入を止め、仲買なぞの來ることをも禁じて、毎日／＼大弓を引きに行くのを仕事のやうにしてゐた。

『まア五十までは、働くさ。何んでもいゝから、自分の身體にむいたことをしてゐれやいゝ。五十過ぎたら、俺のやうに弓を引くんだぞ。』と言つてゐた養父は、稽古を止めてから頓に人品がよくなつて、白い額が哲學者か何かのやうに光つて來た。それはだいぶ頭髪が禿げかゝつたのと、それまでは毎日氣にして剃つてゐた頬髯を伸ばしたのとにも因るのであつた。

奈良の或る神社の神職の一人息子に生れた立花佐一は、スケカズと呼ばれて、十七まで頭納米に成長したが、春の闌はな或る日、一頭櫻の花吹雪とゝもに、舞ひ込むやうにしてお宮の境内へ入つて來た一群の參詣人の中に見出された親娘三人連れの東京婦の人に、安産の神符を授けたのが縁になつて、其の家の婿養子にと望まれた。白い着物に紫の袴お穿いて、社務所に坐つてゐた昔しのお稚兒さんのやうな立花を、娘が見染めたのだとも言ひ、貧しくとも昔しは三位にまで陞つた家柄を、成り上りの小富豪が買はうとするのだとも言ひ、親類中の噂さはまち／＼であつたが、十萬圓ばかりの財産が何よりだといふことに評議は纏り、立花佐一はスケカズをサイチと呼ばるゝことになつて、遙々と東京へ婿養子に送られた。この時の花恥かしい都娘おきんが、今は悍馬のやうな老婆で、佐一十七、おきん十九の雛のやうな若夫婦が出來上つたのは、二た昔し前の事である。

何分一人息子のことであるから、佐一は戸籍といふ紙片の表では先方の人になることが出來なかつた。婿養子に行つても矢張り立花で、吉岡といふ養家の姓は表向きに名乘れなかつた。おきんとの間に最初生れたのが女、其の次ぎが男で、『一姫二太郎だ』と言つて、養父母はひどく喜んだが、其の喜びが悲みに變つて、養父が先きに、續いて養母が、同じ肺臓の病で生命を取られた。女と男とが新しく生れて來て、老いた男と女とが死んだ。新らしい物が古い物に代つたやうなものであると、立花は考へて、格別哀しいとも思はなかつた。

續いてまた男の子が生れたので、それは初めの約束通り、若干のお金を添へて、奈良の方の相續人として送つた。さうして吉岡の財產は全部おきんの私生子男たる立花の積が相續した。政府の帳面の上では、いろ〳〵やゝこしいことになつてゐるが、要するに、立花は男妾と種取り馬とを兼ねたやうなもので、今はそれに吉岡家の支配人ともいふべき役目が一つ加はつた。

おきんの方では年をとつて來るほど立花を自分一人のものにしておかうといふ强い專有慾——愛といふのとは少しちがつた——が熾んになるけれど、立花の方では最初の女の子が生れた頃から、妻に對する情といふものが無くなりかゝつて、今はもうこの悍馬のやうな女の皺の多い顏を見るのが厭やでたまらなくなつた。十七のまだ半ば子供心なのを父母と親類とに命令されて、おきんの夫になつたのであるから、何事も殆んど夢中であつた立花は、異性に對する愛といふものが、胸の奥で芽生えからさう伸びもしないまゝ、立て枯れになつてゐた。

第一におきんといふ名が立花には厭やであつた。おきんとかおきちとかいふ名は、裏長屋の女房の名であるやうに思はれてならなかつた。二十二三の若盛りの頃に、おきんをばお錦と書いてみたり、錦子としてみたりしたが、どうも意に充たなかつた。名が厭やであるとともにそろ〳〵と其の人間が厭やになつて來た。おきんはお乳母日傘で育つた一人娘のやうにもなく、初めは我儘の尠い方で、愼み深い質であつた。家附き女房を鼻にかけて夫に迫るといふやうなことはなく、何かにつけて小意地の惡い姑根性の母の前に、其の身を楯にして立花を庇つた。

鄕里の中學校を二年でやめて、白衣に紫の袴で社務所へ坐らせてゐた立花は、養家からまた東京の或る私立中學校へ入れて與れて、私立大學の英文科まで卒業させて貰つた。鄕里に居る時から、英語は好きの方であつたので、私立大學を卒業すると、中等學校の英語教師の免狀は文部省から直ぐに下がつて、養父母も鄕里の父母も共に鼻を高くした。そ

れからズッと芝の方の或る私立高等女學校に英語を教へてゐて、今は教頭に次ぐ位地になつてゐるのである。

養父母の亡くなつてから、妻のおきんがそろ／＼と慎みを忘れて來た。何かに支へられてゐたものが、其の突ッかひ棒を外されたやうになつて立花の上にのしかゝつたのである。立花は其の重量にヂリ／＼と壓し付けられて、養父母の生きてゐた時よりは、直接に強く身を悶えさせられた。彼れは家に居るのが一層厭やになつて、脱出するやうな心で、朝早くから學校へ出かけた。生徒はもとより、小使さへまだ來てゐないで、ガランとした職員室に火のない火鉢を抱いてゐたことが度々ある。堪へられないやうな乾燥無味の學校の空氣も、立花には、家庭といふ厭やなものゝ中に浸つてゐるよりは幾らましであつたか知れぬ。

妻が自分を押さへ付けてゐるので、男女二人の子にも、父たる自分を馬鹿にしてゐるやうな樣子が見えた。戸籍にも何にも、父といふものが表面に出てゐないで、小學校へ入つても、保護者には母の名前が書いてある。そんなことが如何に幼いものゝ小ひさい心を傷つけたか知れなかつた。幼いもの等は、其の肉身の父をば、『立花さん』と呼ばせたら呼びさうな氣色に見えた。從つて、立花の方でも二人の幼いものを自分の子だとも思はないやうな日が多かつた。『坊ッちやん、孃ちやん』と呼びたいやうなこともあつた。母の乳房を離れると、直ぐ奈良へやられた季の男の子のことだけが、どうかすると、自分の子として思ひ出された。

其の寂しい生中妻のないやうな立花の上に、一滴の香水を振りかけたといふ風にして、微笑を促したものは、去年音樂學校を出たばかりの若い聲樂家瀧本久江孃が、音樂の教諭として立花の女學校へ新任されて來たことであつた。

建物も備品も、校長の禿頭とともに古くて、一臺のピアノさへない私立の女學校へ、久江のやうな人の入つて來たのは、少し戸惑ひの形であつた。後で聞くと、久江の方では、成るだけ目立たぬところでコツソリと教師でもして、二三四

年後の洋行準備をしたいつもりなのであつた。

塵埃溜に鶴が下りたやうな久江の姿を、生徒たちは渇き切つた咽喉に水を迎へるやうにして、欣び騒いだ。『瀧本先生、瀧本先生』の聲は、ところ〴〵に突つかい棒のしてある元何んとか講習所といふ官立の建物であつた古い校舎を揺かしさうで、久江の人氣は素張らしいものであつた。女の教諭たちは意地の悪い不器量顔を向けて、チロ〳〵と久江の方を見るし、校長や教頭は古くさい頭を傾けて、『飛んだものを入れた。』と言ひたいやうな顔をしてゐた。

數學の教諭の兼任であつた申譯けばかりの音樂が、久江の專任に移ると、古びた風琴の音色までが、頓に鮮かになつて、生徒の唱歌のうたひ方がスツカリほんものになつた。口先きばかりで歌ふのでなくて、たとへば夜の調ならば、全身の力を絞つて、夜の情趣を描し出さなければならないといふやうなことを、若いだけに生徒は直ぐ呑み込んだ。古い校舎の中に藝術的の匂ひが著しく濃厚に漂ひ始めた。

若い男の教諭たちが、頻りに身形を氣にし出し、女の教諭たちは、久江の悪口を囁き合ふといふ仕事が一つ殖えたなかで、立花は久江と口を利くことの最もおそい一人であつた。新任の折りの挨拶には、校長の紹介でたゞ一寸頭を下げておいたゞけであつた。さうして家庭を離れて學校へ行くのが前よりも餘計好きになつた其の理由をば、どういふわけだとも自分には氣がつかないほどであつた。學校の空氣に、匂ひの高い潤ひが出て來てゐるのだけを知つてゐた。

日曜日の朝、突然赤阪の自宅へ久江の訪問を受けた時、立花は胸がわく〳〵して、覺えず赧くなつた顔を、妻に見られないやうに横へそむけてゐた。二階の書齋でヂッケンスを讀んでゐたところへ、丁度女中の手がふさがつてゐたので、妻が自身に取次ぎをして、小ひさな名刺を片手に、『あなた、綺麗な人ですよ。學校の生徒ですか。』と、厭やな笑を含みながら入つて來た。

若く見える上に、若づくりの久江は、學校へ新任の初登校の日、職員昇降口から上らうとして、門衛に叱られた。それは生徒と間ちがへられたのであつたが、白粉が濃いので、校長から教頭を通じて、もう少し薄く塗るやうにとの注意を受けたとかいふことゝ共に、それが不器量組の女教諭の陰口に上つてゐた。

『いゝえ、生徒ぢやないよ。新任の音樂の先生が挨拶に來たんでせう。』と言ひ〳〵、立花は態とらしくいつまでも小ひさい名刺を眺めて、言ひわけのやうに言つた。

『まアあれで先生？うちの文を少し大きくしたくらゐぢやありませんか。』と、妻は呆れた顏をして階下へおりて行つたが、やがて今日は妙に若々しく十四五の娘の着るやうなものを着て、帶は赤いのを、袖に模樣のある藤紫の錦紗縮緬の羽織の襟の間から見せてゐた。手土産を包んだ萌え立つやうに青い風呂敷の色も、この人のケバ〳〵しさを助けるものであつた。

女中の持つて來た茶を受け取つて、立花から進めると、兩手で抹茶でも飮むやうにして、赤い唇に茶碗を觸れてゐた。

二つ三つ學校のことなぞを話して、直ぐ歸つて行つた久江を、玄關に送り出して、絞りの爪革をかけた日和下駄の音が、門前の敷石の上に消えてから、立花はぼんやりと二階の書齋に戻つたが、美しく水引のかゝつた藤村の羊羹の折りに並んでゐる渦卷き模樣のある茶碗を取り上げて、其の底に飮み殘つてゐた茶をば、滓とゝもにぐツと飮み干すなり、久江の赤い唇に觸れた茶碗の縁を舐めまはした。

四

立花と久江との戀は、それから半年ほど後に成り立つた。蟲も殺さぬやうに、約ましやかな様子をして、男子に對し

ては常にツンとした威嚴を示しつゝ、職員室でも滅多に笑ひ顏を見せたことのない久江が、立花の誘ふ水を待ち兼ねたといふやうにして、流れ込んで來た時は、立花の方で意外の感に打たるゝほどであつた。

最初の密會は、暑中休暇があけてからの、第一の土曜日の午後であつた。少し早目に學校を出た久江の後から、二十分間ほどして、立花が歸りかけると、久江はにツこりとして、いつもの停留所のところに立つてゐた。

『電車が滿員で、乘れないものですから。……』と、久江は少し顏の色を赧くして、言ひわけのやうに言つた。

『さうですか。……あのヂッケンスは讀めますかね。』と、立花も二十歲頃の心になつて、きまりわるさうに言つた。

『えゝ、なか〳〵むづかしくて、解らないところが多いんでございます。其のうちまたお邪魔でございませうが、お宅へ伺ひにあがります。』と、久江はだん〳〵立花の側へ寄つて來た。立花は離れか學校の人の目がありはしないかと怖れて、方々をキョロ〳〵見廻はした。學校は優等で卒業しても、久江の英語の力はまだ十分でなかつた。讀みかけた本を持つて時々立花に宅の方へ質問に來たり、または本を借りて行つたりすることが、二人を接近させる媒介にもなつたのである。

あるむづかしい語句を、間違つた意味に解釋してゐる久江に、立花がさうでないと訂してやつて、食指の先きで、久江の丸ぶくれの白い頰を輕く突ついた時、久江はぽうッと赧い顏をした。其の時から立花の高い鼻の先きに、時々久江の顏の白粉が移つて、久江の注意であわてて拭き取るやうなことがあつた。——

次ぎに來た電車も、可なり込んでゐたけれど、立花が乘ると、久江もつゞいて乘つて來た。彼女は就任の初め、海鼠色の袴をば宿直室へ預けておいて、着流しで來ては、其處で敎室へ出られるやうに仕度をするのであつたが、敎頭注意で、それを止めてからは、厭や〳〵ながら袴を穿いて往來してゐた。しかしどうかすると途中で袴を脫いで、帶を結

もしてゐた。袴を包んだ風呂敷を、邪魔ッ氣に抱へて、立花と肩を並べつゝ、人目を忍んで、成るだけ生徒の通らなさうな町を選んで歩いた。築地から渡船で月島へ行くと、二人は安全地帯へ乘り込んだやうに、ほッと安心して、殆んど天下晴れた心で、手を引き合はんばかりにして歩くのであつた。

最初の密會の日は、まだそんな安全地帯を知らなかつたから、おッかなびつくりに、日比谷へ入つて行つた。其處を出て、日本橋邊の或る家で食事をしてゐると、夕方になつた。

『奥さん。……』と、女中に呼ばれて、彼女は眞ッ赤になりながら、其の顏を女中に見られまいとして、横を向いたり、天井を仰いだりしてゐた。

『奥さん、……と言つてよ。』と、女中が去つてから彼女は怖さうに、さうして嬉しさうに言つた。

日が暮れると、スッカリ安心して、また日比谷の方へ行つたが、公園には音樂があつて人がガヤ／＼と賑はつてゐた。

二人は其處の成るだけ暗いベンチに並んで、いつまでも低い聲で、樂しいことを語り合つた。

『わたしの久江さんよ。』

『えゝ。』

『あなた、わたしと阿母さんと、どッちがいゝんですか。』

『そんなこと分つてるぢやありませんか。』

『阿母さん？……………』

『………………』

『わたし？……………』

『えゝえ！』

久江は當然だと言ふ意味を十分に見せて、強く打ち頷いた。さうして、忽ち立花に取り縋つて來た。

公園音樂は、突然大きな聲で、日本の俗曲を奏で始めた。

五

二人が鎌倉から江之島に遊んだのは、其の秋であつた。秋と言つてもまだ暑く、二人とも單衣を着てゐた。九月の第二日曜をば、學校の運動會の準備に出なければならないと、彼れは家附きの老妻を、彼女は一人の母を僞つて、東京驛の廣間に待ち合はした。

立花の方が先きになつて、場内をぐる／＼と廻はつてから、青色出札口の前に立つてゐるところへ、派手な銘仙の單衣に青い博多の帶を締め、日傘の窄めたのを斜めにして、久江は勢ひよくやつて來た。其の日傘は彼女が音樂學校の同窓生のかみがた見物の土產に貰つたものださうで、厚い日本紙を貼つて、美しい模樣が現はしてあつた。切符は別々に買つて、同じ車室へ別々に乘つた。新橋からも品川からも、識つた顏が入つて來なかつたのに些か安心して、二人は同乘客へ遠慮しつゝ、少しづつ摺り寄つて、漸く話の出來るまでに近づいた。

『もつといゝ着物を着て來ようと思つたんですが、阿母さんは運動會の準備のお手傳ひなら、これで澤山だツて言ふんですもの。……』と、彼女は彼れの身形を見やりながら、不平らしい顏をして言つた。彼れは結城お召の單衣に縞絽の羽織を着てゐた。それにくらべて、可なりに見劣りのする彼女の銘仙の飛白は、彼女を哀しい氣持ちにさせたものらしかつた。

『早く公然二人で遊びに出られるやうになりたいわ。わたしの家だけでも公然と。……』と、彼女はもう人目を厭はずに、彼れの側へ摺り寄つて來て、小ひさい聲で言つた。

鎌倉で下りて、八幡や長谷を見て廻はるのも、可たりおツかなびツくりであつた。人さへ來ると、こツちからヂイツと見詰めて、其の顏を見定めなければ、足が運ばれないほどであつた。長谷から電車で江之島へ來て、長い棧橋を渡る時、彼れの脫いだ薄羽織を彼女が袖だゝみにして抱へてゐた。この時彼女の腕に汗が染んで、それが彼れの羽織に附いたのが、汚點になつて、この日のことが彼れの家で發覺するもとになりはしないかと、彼女は内々で心配してゐたのであると、後になつて彼女は馴れ初めの追懷談が出る每に、それを彼れに話した。

江之島で大きな宿屋へ客引きに呼び込まれた時、二人は初めて稍落ち着いた氣持ちになつた。三階か四階かの靜かな一室の障子が開け放たれてあつて、頂きだけの白い富士の山が、海の彼方に雲とゝもに浮んでゐた。

『いゝ景色ね！』と、彼女は生れて初めて見たやうに、大きな歡聲を揚げた。

小づくりな、狐のやうな顏をした女中の案内で、二人は別々に浴室へ案内されたが、入つて見ると、同じ湯槽であつた。彼女はハツと顏を赧らめて、石像のやうに、隅の方へうづくまつたまゝ、身動きもしないで、彼れが浴室を去る時まで、眞ツ白な背中を見せ通してゐた。

立花が浴衣姿で、胡座をかいて、菓物を喰べてゐると、久江も同じ浴衣に白い身體を包んで座敷へ戻つて來たが、男に顏を見られて眞ツ赤になつた。

二人の着物が女中の手で衣紋竿に通して壁にかけてあるのを見ると、彼女はまた自分の銘仙が男の結城お召にくらべて、著しく見劣りのするのを氣にしたらしく、直ぐに浴衣を銘仙に着更へてしまつてから、床の間の鏡臺を下ろして、

身じまひを初めた。好きな白粉がバックから取り出されて、湯氣にほてつた掌に、柔かく溶かれた。

二人の關係を、久江の母親が氣どつたのは、其の年の暮であつた。ひどく叱られるかと思つたら、さうでもなくて、母親の顏には苦笑があつた。と少し安心したやうな、また心細いやうな顏をして、彼女は彼れに告げた。

『必らず妻子のある人に……』と、滅多に鼻唄なぞはうたつたことのない母親が、こんな唄をうたつて、臺所をしてゐることがあるのを、久江は胸が痛くなるやうな氣持ちで、苦しく聞いたと、泣き顏をして、立花に告げた。

しかし、其の冬季休暇には、母親にだけは公然と、四五日がけで、寒い伊香保へ入湯に出かけた。冬はこの方面なら人目が勘なからうと、少し安心しながらも、二人は矢張りおツかなびツくりで、汽車、電車を乘り降りした。

伊香保の山には雪が堆かゝつた。二人は電車の中で僞りの姓名を相談し合つて、それを溫泉宿の帳面に記した。『會社員△川△雄三十六歲。妻△△子二十三歲』

『同じやうな紙片だけど、戶籍よりもこの方が正しいんだよ。……』と言つて、立花は久江の顏を見ながら、寂しく笑つた。帳面を置いて行つた番頭の冷たさうな足音が、長い廊下に消えて、久江の顏にも、寂しい笑ひが浮んだ。

六

四階樓の大呉服店で、立花が久江の爲めに木彫りの雛人形を買つてやつたのは、其の年の二月の半ばであつた。それから學校を休んでゐる久江に久々で顏を見交はすのを樂しみに、立花は土曜の密合日の夕暮を、打ち合はせてあつた街の角に立つて、其處の停留場で電車を下りる久江の白い顏を待ち兼ねた。

來る電車も、來る電車も、久江を載せてゐなかつた。五時半といふ約束なのに、赤い電柱の圓い時計の針は、もう六時五分を指してゐる。

『どうしたのだらう、仕様がないなア。』と、立花は幾度呟いたかも知れなかつた。

どうかすると、自分の家とは反對の方の線路からやつて來て、いつの間にか立花の背後へ默つて突ツ立つて、待ちくたびれた焦々しさに、唾液ばかり吐き散らしてゐる立花の熱い顏へ、水でも注ぎかけるやうな冷笑を見せることもある久江なので、立花はまた其の方角へ行つて、向ふから來かゝる人々を一々物色した。しかし久江の姿は、電柱の上の時計が六時半を指してゐるのに、まだ何處にも現はれなかつた。

長く待たしたことも待たされたことも、お互ひに三四度づゝはあつた。焦々して、出て來たら噛み附くやうに怒つてやらうと思つてゐても、顏を見ると、忽ち何もかも忘れてしまつて、にツこりと笑ひ合つた。『御免なさい。出ようと思つてるところへ、人が來たものだから。』とか、『うちの時計がおくれてゐて。』とか、『電車が停電して。』とかいふことが、肩を並べて微笑みながらの、互ひの言ひわけの言葉であつた。

しかし、この夕のやうに、一時間からも待たされたことは、お互ひに一度もなかつた。たツた一度、立花が學校への來訪者に應接してゐて、四十分ばかり約束の時刻より遲れた時、丁度此處のこの赤い電柱の前で、久江が『もう歸つちまうかと思つた。』と言つて怒つた顏を見せたことがある。けれども其の怒つた顏は忽ち微笑の顏に變つて、『長く立つてたんで足が痛くなつちやつた。揉んで頂戴。』といふ柔かい言葉が、赤い唇から漏れた。それほど二人はお互ひに時間が正確で、十分間とは空しく立つてゐることなしに、街上で顏を見交はすことが出來たのである。

この夕は、ほんたうにどうしたのか、七時になつても久江の姿が電車からも、街の何處からも現はれなかつた。靜生

りに乘つた客の顏の中に、白粉の濃い、まん圓いのを見出さうとつとめて、立花は一心に電車の窓の奥を見詰めてばかりゐたので、果ては眼が痛くなるのを覺えた。たま〳〵似寄つた顏があると、嬉しさに胸が躍るやうであつたが、似てゐるものは到底似てゐるもので、ほんものとはまるで違つてゐるのが、また新らしい失望の層をつくつて行くばかりであつた。もう一臺待つてみよう、まアもう一臺と、電車の横腹を幾つ見たか知れなかつた。番號をよく覺えて置けば、同じ車を三度ぐらゐ見たのを知ることが出來たかも分らなかつた。

赤い電柱を前にした葉茶屋はよく賣れた。入れかはり立ちかはり買つて行く人の數が、二十人には上つたであらう。其の隣りの小間物屋には、窓飾りの電燈が徒らに明かで、丸髷や島田の模型は、美しく硝子戸に映つてゐるが、手絡一つ簪一本買つて行く人もなかつた。店に坐つた小僧の大きな欠伸を、立花は五六度も見せられた。丸髷用の櫛、笄、赤い玉の簪、そんなものを窓飾りの中に、二人が首を並べて覗きつゝ、『あれがいゝ、これが……』と品評(しなさだめ)した過ぐる土曜の夜が、無暗に戀しかつた。

もう三十分待つてみよう。…………と強く決心して、今度は久江の姿の現はれるのよりも、時計の針の進むのを待つといふ心持ちになつた。七時！　赤い電柱にかゝつた時計は、命令でもするやうに、短い針でVIIを指したけれど、久江の姿はたゞ幻に見るだけである。自分の懷中時計を出して見ると、七時にはまだ五分あつた。この五分を生命の綱のやうにも思つて、立花はまた電車を見詰めたが、暫らく途絶えてゐた電車が三四臺ほど續いて、一丁ばかり先きのカーブを曲つて來るので、このうちにこそと、稍強い望みを繋いで待ち受けたが、それも空しく通り過ぎて、チンチンと鳴らす車掌の發車合圖の鈴(べる)が、痛ましく耳の底に殘るばかりであつた。後の一臺の如きは停車もせずに、鈴の音だけを殘して駛せ去つた。

立花はもう奮然として、其の電車を追つかけつゝ飛び乘つた。しかし十丁ほども來ると、また其の一臺後の電車で、久江があたふたと運ばれて來て、今頃はつひ先刻まで自分の立つてゐたあたりにぼんやりと、失望の色を白い圓顏に浮べて佇んでゐやしないかと思ふと、俄に矢も楯もたまらなくなつて、直ぐ其の電車を飛び下りるなり、反對の方向へ急速力で駛走して行く電車を、鋭く追つかけて、車掌臺へ縋り着くやうに飛び乘つた。

けれども、もとの場所には相も變らず久江の姿が見えなくて、葉茶屋は榮へ、小間物屋は寂しかつた。それから二三軒先きの花屋の店には、いつ持つて來たのか、先刻はなかつたと思ふ溫室咲きのアマリリスが、眞ッ赤に見事な花を見せてゐた。

全く諦めて、立花が其の場所を立ち去つたのは八時半頃で、街の夜色はいよ／＼深く、屋根に霧が浮んで、仁丹の廣告燈は茫として、白く、赤く、暈をかぶつたやうに見えてゐた。

赤阪の家へ歸ると、面白くもない老妻の顏が、茶の間の長火鉢の前に、木彫りのやうな堅い感じを見せて、其の前の餉臺には、久江からの葉書が、寂しさうに載つてゐた。

七

着物を着更へ、茶を飲んでから、懶と落ちつき切つたやうにして、仕方なしに見るといふ風を裝ひながら、立花は餉臺の上の久江の葉書を取り上げた。其の途端に、

『今日は大層遲かつたんですね。また職員會議ですか。』と言つた妻の聲は、別に他の意味を含んでゐたのではあるまいけれど、立花の胸に沁み入つた。

久江の葉書は、疑はれるのを恐れてか、時々用ゐることのある英文ではなくて、日本字でやさしく、『今日チツケンスを持つてまたお伺ひいたすつもりでございましたところ、數日來少々加減をわるくいたしまして、學校も休んで居りますので、まだ外出が出來ません。もう二三日靜養いたしまして、全快の上お邪魔にあがります。委しくはお目もじの上。末ながら奥樣によろしく。』とあつた。郵便局の日附印を見ると、昨日の午前に出てゐるのであるが、どういふものか延着して、今日の約束に無駄足をさせまいとした久江の心づかひの無駄になつたのを、立花は寧ろ久江に對して、いぢらしく思つた。

妻が座を立つた隙に、立花は其の葉書の久江の名前のところへ、二三度つゞけて熱いキスをした。

翌日が待ち兼ねられた。學校へ出れば、自分の時間の來るのを急いだ。何事にも折急いで、午後の三時には、手綱を切つた奔馬のやうな心で、立花は本郷の高臺へ行く電車に、せか〳〵した身體を載せてゐた。

何んとなしに這入りにくい、久江の家の、例の白い把手の附いた扉（ドアー）の戸を開ける時は、把手の手ざはりと共に、ひやりとした氣がした。扉さへ開ければチリリリンと鳴る鈴（りん）の音を聞き付けて、母親の姿は早や上り口にあつた。

『入らつしやいまし、さアどうぞお上り下さい。』と、母親が笑顔のなかにも心配さうな色を浮べてゐるのを、立花は決して見落さなかつた。

『お孃さんが、おわるいさうでございますね。いかゞでございますか。』と、立花はさり氣ない物の言ひやうをするのが心苦しかつた。

『えゝ、有り難うございます。なアに少し胃をわるくいたしましたのでございますよ。喰（た）べ過ぎで、………』と、母親は寂しく笑つたが、其の瞬間、自分の家の内のやうにもなく、用心深くあたりを見廻はして、つと立花の側へ寄るな

り、耳に口を寄せて、

『流産らしいんでございますよ。うちで出ますと、近所がうるさうございますから、早く病院へでも入れたいと存じまして、あなたのお出でを待つてゐたのでございます。』と言つた母親の聲は、戰き慄へてゐた。立花はハッとして、天も地も一時に何處かへ落ち込んで行くやうな氣がした。白晝の光が暗く自分の頬を撫でゝ、奈落へ〳〵と誘ひ込むやうに思はれた。

全く夢にも想はぬことであつた。母親は急に元氣のよい、大きな聲をして、

『さア、先生、どうぞこちらへ。』と言ひ〳〵、立花を奥の方へ導いた。

離座敷のやうになつた奥の三疊へ、狹くるしく敷いた床に、久江は蒼い顔をして仰向けに寢てゐた。立花の顔を見ると、嬉れしさうな微笑とゝもに、蒼い顔が心もち赤くなりかけた。

母親は立花を、其のむうッと變な臭ひのする一室へ押し込むやうにして置いて、ひらきになつた戶を閉めると、パチリと小ひさな摘まみ手の附いた締りをつけた。

『どうしたの。…………』と、立花は心配さうにして、葡萄酒の瓶や、煉乳の罐の置いてある其の枕頭に坐つた。久江は默つてまじ〳〵と立花の顔を見てゐたが、其のすゞしい兩眼がだいぶ窪んだやうで、湧き出すやうに底から涙が見えて來た。

『どうしたの。…………』

『…………』

久江は白い手を長く伸ばして、立花の手を握つた。其の手は火にでも溫めてゐたほどに熱かつた。涙が眦から溢れて、

無造作に束ねた髮の中へ流れ込んだ。

『どうしたの。……………』

『…………………』

『姉娘だつたの。…………少しも知らなかつた。』

立花が低く言ふつもりでも、自然に彈んで高くなる聲を押さへ〳〵かう言ふと、久江はハツと顏を紅くして、子供のやうに、搔卷の襟の中へ頭を埋めた。其處へ母親が、ひらきを開けて、茶托に載せた茶を持つて來た。

『食物はいかゞです。あがれますか。』と、立花が醫者でゞもあるかのやうにして問ふたのには答へないで、母親は、娘に言つたものと思つたらしく、ニヤリと一つ寂しく笑つて立ち去つた。ひらきの締りをつける金具の音がまたコチ〳〵と聞えた。

『ミルクがおいしいのよ。』と、久江は搔卷の襟から顏を出して言つた。

『流產?…………』

『いゝえ、まだ出ないのよ。』

『どうしたの。…………』

『あれを…………もう死んでるのよ。』と、久江は小さな聲で、痛ましさうに、濃過ぎるほど濃い眉を顰めながら言つた。立花はこの時また惡魔の手に兩足を攫まれて　スル〳〵と奈落の底へ引つ張り込まれるやうな氣がした。

八

それから立花は毎日學校の時間を都合して、一度づゝは必ず久江を見舞ふた。久江のお腹にある小ひさな生命は、久江が言つたやうに、決して死んではゐなかつた。立花は安心の中に不安心を探り、不安心の中に安心を求めた。

久江が母にも告げず、立花にも諮らず、單獨に決行しやうとした或る恐ろしい手段は、兒戯に類することで、兎ても一つの生命を奪ふほどに力のあるものではなかつた。たゞ其の數分間後に、偶然眩暈を起したので、テツキリ自分の用ゐた手段の爲めと早や合點して、其の恐ろしい手段のことは言はずに、姙娠と流産と、二つの驚くべき言葉を一時に母親の耳へ入れたのであつた。

流産は嘘であつたが、姙娠はほんたうで、悪阻の兆候が日一日と著しくなつた。肌理の細かい顔に、ぽつり〳〵と吹き出ものが見えたりした。

近所の醫者にかゝつても、診察の後、『夫がありますか』と訊かれて、『いゝえ』と答えるので、醫者に長いこと首を傾けさせた末、『胃がわるいんでせう。』と言はれて、胃病の藥ばかり飲まされ、もう一人別の醫者は胃病のほかに、神經衰弱の氣味があると言つたりした。

そんなことでは仕様がないので、立花は無理に勸めて、自身に自動車を頼んで來て、近所へ氣兼ねする母親をば宥め〳〵、久江を遠方の産科婦人科病院へ連れて行つて診察を受けさせ、此處では『夫がありますか』といふ問に正直な答へをさせると、院長の宣言は、『確かに御姙娠です。御心配はありません。』と、甚だ明瞭なものであつた。この明瞭な宣言をば久江の口を經て聽き取つた立花は、またもや不安心の中に安心を掬ひ、安心の中に不安心を押し付けられた。

自動車で久江の家へ歸り着くなり、久江は立花とゝもに母親の前に端座して、もう覺悟をしたものゝやうに、ゆッたりと醫者の口調を眞似て、其の宣言を受け繼いだ。立花と同じやうに、半ばゝ危みつゝも、なほ幾分の安心を、よもやといふ疑ひの中に包んでゐたらしい母親は、今更らしく颯と顏色を變へて、『到頭駄目だ』とでも言ひたげな風をした。

立花はたゞ申しわけなさゝうに、差し俯向いてゐるよりほかはなかつた。

『どうでございませうかね。………』と、母親は隣家の方を氣にする風に、欄間の障子を仰いでから、殊に聲を潜めて、

『親類に一二軒、それは〱頑固なのがありますし、近所がうるさうございますから、いッそ此娘をあなたに差し上げてしまつたらいかゞでございませう。承りますれば、奥さんはもうお年を召した方で、よくお解りになりませうから、其のお話をしましたら、案外思ひ切りよく御承知下さるのでございますまいか。殊に戸籍もお入れになつてゐないさうですから。……』と、母親は立花の家へ、妾の籍が入つてゐないやうに誤り聞いてゐるらしかつた。

『駄目です、それや。あれは悍馬のやうな女ですから、そんなことを聞いたら、狂人のやうになつて、何をするか知れません。』と、立花は一言の下に、撥ね付けるやうに言つた。

『さうでございますかね。』と、母親は口を噤んで唾液を呑み込んだ。

『だッて、姙娠したら、わたしと結婚するッて言つてたぢやありませんか、……』と、不滿らしく言ひかけた久江の聲が、少し高かつたので、母親は手を振つてそれを制した。

『だからわたし、かうなつた方が總べての解決がついていゝとも思つたんだわ。』と、久江は小聲で言ひ足した。

母親は默つて額へ手をあてながら、考へに沈んでゐた。

九

『兎に角、家へは置けませんから、親類へは朝鮮に居ります此娘の叔父の方へ手傳ひに行つたといふことにして、何處かの産婆へでも預けなければなりますまい。成るべくなら横濱の方の田舍あたりがいゝと思ひますね。』と、母親に言はれて、其の翌日、立花は學校を十二時限りにして、其の方角へ出かけてみた。

先づ電車を神奈川に下りて、あの邊のゴミ〳〵した町を歩き廻はつたけれど、工合の好さゝうな家もなかつた。失望して高臺の赤土の上に立ちつくしつゝ海を眺めてゐると、青々とした沖合に、白帆が點々と浮んでゐるのも、懶いことの限りであつた。あの船に乘つて果て知れぬ海原へ漕ぎ出したならば、……………などと思つて、綠に晴れた水天髣髴の境を見渡した。

電車で鶴見まで戻つて、砂埃の多い路を歩いてゐると、帶を落したやうにして、四條の鐵軌が不意に眼の前に現はれた。こんなところに鐵道が？と、立花は狐につままれたといふ氣持ちになつたが、其の鐵道が最も馴染の深い東海道線であることを、心に確め得るまでには、なか〳〵の時間がかゝつた。彼れは全く獨樂のやうに身體を廻はされて、ぽんと投げ出された人の如く、方角も何も分らなくなつて、ぼんやりと山の手の方へ海岸を求めて歩いてゐたのである。

踏切りを越えると、ペンキ塗りの三角な木標に『姙娠預り産婆酒井スギ』とした文字を鮮かに見出した。何んの信仰もない立花もこの時ばかりは、神佛の導きのやうに思つて、其の木標の指さす方へ廻つて行くと、同じ文字を金看板にして懸けた小ひさな尖ツかけ格子の家が直ぐに見出された。

『御免下さい。』と、立花は格子戸の前に立つて二度三度呼んでみたが、應へはなかつた。隣りの荒物屋のおかみさんら

しい人が、嬰兒を抱いて軒下に立ちながら、にこ〳〵笑つて見てゐるだけで、何んとも言つて呉れないのが腹立たしかつた。『お留守ですかね、こちらは。』と問ふてみても、『どうですかね。』と、矢張りにこ〳〵してばかりゐた。

『御免なさい。』と、思ひ切つて大きな聲を出すと、荒物屋のおかみさんは、一層可笑しさうに相好を崩して、『御免なさい。』と立花の口眞似して、抱いた嬰兒をあやした。

漸くにして、色の黒い、角張つた顔をした二十六七と見ゆる束髪の人が、上り口に現はれて、前垂れから離した手のまだ濡れてゐるのを、其のまゝ上り口に支へてお辭儀をした。

『先生、いらツしやいますでございませうか。』と立花の言つた口の下に、其の人は眩しさうな眼をしながら、『わたくしでございます。』と言つた。

ヘツキりとしたことは何も知らさないで、食料のことなぞを、土間に立つたまゝで訊いた上、奥の方をちよい〳〵と覗いたが、二間切りの家らしく、疊も襖も粗末な中に、簞笥や鏡臺の不釣り合ひに立派なのが置いてあつた。

『いづれ歸つて相談いたしまして。』と言つて、其のトタン屋根の小ひさな家の軒下を立ち去つた時、前の往來に砂煙りを立てゝ、引ツきり無しに馬や車の通る騒がしい町を摺り抜けつゝ子供等がガヤ〳〵と遊んでゐる有樣を見ると、これは兎ても駄目だと立花は思つて、電車の方へ急いだが、もう隨分足が疲れたので、この一軒だけを申し譯げばかりの報告に齎らして、久江の家まで歸り着いた。久江は相變らず蒼白い顔で、頭髪をぐる〳〵卷きにして、始終唾液の溜つてゐるやうな口をしながら、大儀さうな身體を褞袍に包んで、三疊に敷いた蒲團の上に坐つてゐた。花やかな獨唱で、榮壇に活きてゐた時の面影は、何處にも見られなかつた。

『どうでございました。』と、母親が摺り寄つて問ふたので、立花は少しきまりのわるい思ひをしながら、瞞見在の噓—

野の小ひさなトタン葺きの家のことを話すと、母親は安心したらしい顔をして、

『それ、いゝぢやございませんか。餘り上等なところより、そんなのが却つて目立たないでようございませう。』と、立花の顔を覗き込むやうにして言つた。

十

それでも、いざ行かうとなると、母親は『まア明日、まア明日。』と、一日二日づゝ、積み重ねるやうに延ばして、到頭四月になつてしまつた。人よりも長い久江の悪阻は、まだつゞいて、胸のわるさうな顔が、生れつきの痴のやうに見えて來た。其のうちにだん／＼お腹の方が人目につきさうなのと、飛んでもない遠いところまで、電車に乗つてお湯に行かなければならない不便とで、流石の母親もこの上は引き留め兼ねて、いよ／＼明日は行くといふことに、久江は母親にいらきめて貰つた。

『阿母さんは暫くお寂しいでせう。ほんとに濟みませんね。この御恩報じはきツといたしますから。……』と、鶴見在の産婆の家へ明日連れて來るといふ前觸れに行つて歸つた立花が、慰めるやうに言ふと、

『いゝえ、別に寂しいこともありませんよ。』と、打ち消す如く答へたけれど、其の眼には涙が溜りかけてゐた。

『女中を頼みませうかね。阿母さんお一人ぢや大變でせうから。』と、立花は俯向いて疊の目を數へるやうにしながら言つた。

『いゝえ、わたくし一人の方が結構です。此娘が居りましても、何もしやいたしませんのですもの。一寸外へ用立しに出る時困りますけど、お隣りへ頼んで行きませう。少し遠方へまゐります時は、あなたに來て頂いて、留守番を願ひま

せうよ。ほゝゝゝ。』と、母親は力なく笑つた。

家の内は暫らく荷物を拵へるのでごた／＼した。久江も縕袍の裾を引き摺りながら、大儀さうに立ち上つて、持つて行く本なぞを取り揃へた。

『欲しいものが出來たら、僕が後から持つて行つて上げるから、何もさうスッカリ用意するには及ばないよ、直ぐ近いんだもの。』と、立花が少い高い聲で言ふと、母親は手を振つて激しく制した。其の手は二坪ばかりの庭を隔てた隣家の羽目板を指さし、其の眼は救獸を求むる合圖に光つた。

『わたし、これ持つて行くわ。』と、久江は二階の書齋へ飾る筈であつた木彫りの小ひさな雛人形が、三疊の病室の枕頭の小机の上に置いたまゝ三月の節句このかたの塵埃を被つてゐるのを、ふッふッと、乾いた唇で吹いて、一つ宛箱に納めかけた。

『久江さん、そんなものをお前。……この子は暢氣だね。』と、母親はまた力なく笑つた。

『だツて、わたしこれ持つて行きたいわ。田舍のお節句はまだでせう。』と言ひ／＼、其の小箱をば書物とともに行李の中へ納めてしまつた。立花が臺所へ行つて柱暦を調べて見ると、舊暦の節句は三日の後に迫つてゐた。

其の翌日、久江は久し振りに早朝から身じまひをして、人力車で親類へ暇乞ひに廻はつて、歸りに兩方の隣家へも玄關まで挨拶に行つたが、何處でも突然の朝鮮行を疑ふものも怪むものもなかつた。學校の方は一年間休むことにして、其の間は同期の卒業生で久江と一對の人間のやうに言はれた聲樂家の廣谷弘子といふのを代理ともつかず補缺ともせずに、出て貰うことにした。それ等のことは皆立花が内部から周旋したのであつた。

『校長さんのお宅へ名刺だけを置いて來たわ。何んだか怖かつたわ。』と、無事に暇乞ひを濟まして歸つて來た久江は、

ホツと肩で息をするやうにして言つた。

『誰れか東京驛へ送つて來やしないかね。』と、母親は心配さうに言つた。

『いゝえ、これから横濱の親類へ行つて、事によつたら一晩泊つて、明日横濱から立つかも知れないと言つて、時間を言はずに置きましたよ。』と、久江は母親の耳に口を寄せて言つた。

『なか〳〵うまいね。』と、母親は覺えず大きな聲をして、また力なく笑つてから、隣家の方を見て、慌てゝ自分の口を押さへた。

立花は荷物とともに一足先きへ東京驛へ行つた。荷札はポケットに押し隱して、驛へ着いた上、荷物が車夫から赤帽へ渡るのを待つて、手早く結び着けることにして、それ等の手順はスッカリ巧みに捗んだ。十二時頃になつて、漸く久江の白い顔が驛の廊間に現はれた。化粧上手の彼女が、今日に限つて白粉の斑らなのも、立花の傷いた心を暗くさせた。久江は婦人待合室の化粧室へ入つたまゝ、稍暫らく出て來なかつたが、漸く現はれた其の顔は、矢張り白粉ののりがわるかつた。

鶴見へ着くと、驛前の小料理屋へ入つて、二人は晝飯をしたゝめた。粗末な餉臺を置いた一室を閉め切つて、差し向ひになると、久江はいきなり立花の手をとつて、

『阿母さんが、出がけにひどく泣いたのよ。わたしも泣いたわ。……先生がわるいのよ。』と、聲を震はして言つた。

立花は何も言はないで、雨漏りの痕らしいものが、模様のやうに擴がつてゐる天井を眺めてゐると、其の隅の方に蜘蛛の巣の可なりに大きいのがあつて、二匹の圓い蜘蛛が靜かに引ツかかつてゐた。其の蜘蛛をば、自分たちの上に引きくらべて、立花も泣けるだけ泣きたい心地になつた。久江はもう餉臺の上に顔を伏せて、しく〳〵と泣いてゐた。

一時間ばかりの後、久江はトタン葺きの小ひさな家の奥座敷に、借りられて來た猫のやうにして、ちよこんと坐つてゐた。涙の痕は紙白粉に拭き消されて、五月雨の合間の月影を見るやうに、寂しい微笑が折々愁ひの雲を破つて、無理から現はれてゐた。

『また明日來るよ。』と言つて、後に心を殘しつゝ、立花は其のトタン葺きの家を出た。産婆には一人の女の兒のまだ乳を呑んでゐるのがあつて、それに十四五の子守りが附いてゐた。二間切りで、兎ても長居の出來さうな家ではなかつた。

踏切まで行くと、丁度閉鎖になつてゐたので、立花はまたフラ〳〵と、トタン葺きの家の前まで後戻りした。さうして往來に面した櫺子窓の障子の破れから覗くと、久江は先刻のまゝで、しよんぼりと坐つてゐた。其の手に短刀でも握つてゐるのにふさはしいやうな、思ひ詰めたらしい、物哀しい樣子なのに、立花はたまらなくなつて、『久江さん、久江さん。』と二た聲呼んだが、家の人への手前、突嗟に何か用事を拵へなければならないのが苦しかつた。

『紙を一枚下さい。』と、漸く言つた立花を、子守りが裏から廻はつて來てチツと見た。久江の顏には急に嬉しさうな色が浮んで、桃色の薄い紙を其の白い手から、立花に握らせる途端、二人の手は強く相觸れた。

思ひ切つて、スタ〳〵と停車場へ來ると、丁度東京行の電車が來たので、立花は地獄の火の車にでも乘るやうな心で、それに乘つた。踏切りを通る時、窓から振り返ると、産婆の家の金看板が春の日に光つてゐた。

本郷へ廻はつて、無事に行つたことを告げると、母親は一人ぼツちになつた家の內を見廻はしてまた泣いた。

漸くにして赤阪の家へ歸ると、老婆の硬い顏が、木彫りの假面のやうに茶の間に見えてゐた。男の子が奥から走り出して來て、

『お父さん、何處へ行つて來たの。』と言つて、立花に飛び付いた。

忘れてゐた。今日は日曜日であつた。

十一

翌日行つて見ると、久江はもう餘ほど落ち着いてゐた。素直な質だから、家の人にも直ぐ馴染んで、産婆とももう友達のやうになつてゐた。昨夜は夜つぴてお産に行つてゐたと言つて、産婆は眠さうな顔に、心やす氣な微笑を浮べてゐた。其の膝の上にえんこをした、此頃漸く歩きかけた君子ちやんといふ子に、久江は『雛さん、雛さん……』を歌つて聽かせたりした。表を通る人などの耳に立たぬやうに、無理から聲を殺してゐるのが、立花にはよく分つた。

『姉ちやんはお上手ね。ほんとにお上手だこと。』と、産婆がお世辭でもなく言ふのを聞いて、立花は物哀しく、涙ぐましい氣持ちになつた。花形の聲樂家も、こんなところへ來て、臺なしになつたやうに思つたのであつた。

『雛さん、雛さん…………』と、産婆がまた濁聲で歌ひ出した。

床の間には、三社の託宣の掛物のかゝつた前に、あの木彫りの雛人形が小ひさく飾られてあつた。この邊は舊暦で、桃の節句が明後日であつた。

『瀧本さん……』と、産婆が久江の苗字を呼ぶのが、どういふ譯だか、立花には合點が行かなかつた。

『瀧本さんにあれを頂いたんでございますよ、ほんとにいゝんでございますことね。有り難うッて、小父ちやんにもお禮を申しな。』と言つて、産婆は膝の上の子の頭を押して、無理にお辭儀させた。立花は氣前のよい久江があの思ひ出の深い木彫りの雛人形を、もうこの薄汚ない子にやつてしまつたのかと思つて、少し不平でもありまた惜しくもあつた。それが顏の色に現はれたのを見て取つたらしく、久江は言ひ譯のやうに、

『あなた、このお子さんの初節句なのですよ。何かお祝ひを上げようと思つたんですが、幸ひあれがあつたから……』と、床の間の方を見て言つた。

耳ざはりがざら〳〵してゐるし、全體に下等な生活らしいのが、産婆の愼んでゐる言葉づかひにも、ちよい〳〵現はれるので、立花は何んだか厭やになつて來たが、久江は却つて、萬事に氣のおけぬのを喜んでゐるやうであつた。

二人で川の堤の方へ散歩に出て見ると、人通りが尠く、總てにのんびりした氣分が漂ふて、おかなびつくりで東京の街を歩くのとは、別の人になつたやうに思はれた。堤の下にはクローバーが白く咲いてゐた。もう春であるぞよと、言ひ聞かせて呉れるやうに、ぽか〳〵と暖い太陽が二人を照らした。

柔かいクローバーを踏みながら、久江は堤から下りて水に近づいて行つた。

『あなた、此處だツて、さう油斷はならないわね。』と、微笑とともに言つた彼女の白い手には、クローバーの丸い花が摘まゝれてゐた。

海近く川の水が緩く泡沫を浮べて流れてゐた。赤く煉瓦を積んだ舟が動いであつた。久江の投げたクローバーの花が、舟の赤煉瓦の上にちよこんと載つた。下流から漕ぎ上つて來た端艇の學生が、櫂とともに眼を揃へて此方を見るので、久江は眩しさうに顏をそむけた。

『あんな汚ない家に長く居られないね。それに狹いから、僕が行つたツて、しみ〳〵話も出來やしない。』

『話はかうやつて、外へ出た時すればいゝぢやありませんか。あなたさへよけれや、わたし彼處で構はないわ。』と、久江は餘ほどあのトタン葺きの家が氣に入つてゐるやうであつた。

『あすこの主人は居るんでせう、何をしてゐるの。』

『運輸會社とかへ出てるんですッて、朝早く暗いうちに出て行くわ。でも夫婦なか非常にいゝのよ。』

『きッと職工だね。』

『さうらしいわ。』と、久江は何んだか氣兼ねしながら物を言つてゐるやうであつた。

『まアいゝさね、それぢや、そんなに氣に入つてるんなら。臨月になつて、病院へ入るまで、あすこに居るさ。』と、立花は遥か向ふの高い烟突から力なく出る薄い煙を見ながら言つた。

『だッて、産婆さんですもの、臨月になつて、ほかへ行くのは變でせう。わたし矢ッ張りあすこで産みたいわ。あの人上手なんですッて。……』と、久江はもう一種の執着をさへあのトタン葺きの家に感じてゐるやうであつた。

『ぢや、どうでも久江さんの好きなやうにしたらいゝよ。……どんな子が生れるだらう。』

『男でせうか、女でせうか。わたし何んだか男のやうな氣がするわ。』と、久江は赤い帶の上から、心もち膨れてゐるお腹を押さへた。

『名は何んと命けるの。』と、立花は暫らく考へつゝ、指を屈めて月を數へてから、『生れるのは十一月だから、菊の花の盛りでせう。……菊男としようか。』と、微笑とともに言つた。

『菊男……立花……菊男。……何んだか、新派俳優のやうね。』と、久江の顏にも微笑があつた。

『女だッたら。……』と、立花が一種の興味に驅られて、少し浮いた調子で言つたのには答へないで、久江は、

『でも、立花菊男にはなれないのだわね。瀧本菊男でせう。』と哀し氣な顏をした。

『お産は苦しいんだよ。久江さんはきッと泣くよ。』と、立花は稍暫く沈默の續いた後に言つた。

『どんなでせう、そんなに苦しいんでせうか。……わたし怖いわ。死にやしないでせうか。』と、久江は淚らしい眼

をまん圓くした。

風が來て、河水には漣が立つた。

『おゝ寒い。』と久江は、ちよく／＼歩きには勿體ない錦砂お召のコートの、一度は脱いで手に持つたのをまた着た。

十二

春から夏、秋と、堤の下にはクローバーの花が咲いたり、蓮華草が咲いたり、撫子の花が咲いたり、桔梗が咲いたりして、此頃では夕方の散歩に、二人はポカリと咲いた月見草の花を見るやうになつた。

黄色くなつて刈り取られた麥の跡を、稻がまた青々と染め返して、それが再び黄色くなるまでは、隨分長くて、暑い日が幾日も／＼續いた。稍凉しくなる頃には、久江のお腹が垂れ落ちさうであつた。

母親はたツた一度トタン葺きの小ひさな家を訪れたゞけで、久江の淺間しい（？）姿を見るのが厭やなのか、二度とは來なかつた。さうして立花からいろ／＼の報告を聽くのを待ち受けてゐた。

立花は密會の日を其のまゝに、毎週の土曜日は必ずトタン葺きの家を訪れた。雨が降つても風が吹いても、一度だつて怠ることはなかつた。二人連れ立つての散歩に、近まはりの案内は、小徑の末まで皆呑み込んでしまつた。

到頭臨月にまで漕ぎ着けたけれど、分娩の豫定が十日からも遲れた。母親が首を長くして氣を揉み始めた。

其の第三の土曜日に、立花が夕方から行つて見ると、久江は腰が筋張ると言つて、床を敷いて寐てゐた。『今日はもう散歩を廢さうね。』と言ふと、『いゝえ、行きます。』と言つて、起き上るなり、あの錦砂お召のコートを引ツかけた。

『氣持ちがわるくなつたら、直ぐ歸つていらツしやい。……………旦那に負つて頂くといゝわ。』と言つた産婆の聲を背中

に受けて、水のやうな月光を浴びつゝ、二人はまた例の堤に行つて見た。其處まで歩くのが、久江にはやツとであつた。

歸りにはもうトタン葺きの家へ寄らずに、前を素通りにして、立花は停車場へ急いだ。踏切まで送つて來た久江の、土を引き摺るゴム草履の足が、無事にトタン葺きの家の敷居を跨ぐのを見屆けて。

翌日の日曜日の十時頃に、久江の母親が珍らしく赤阪の家へ尋ねて來た。座敷へ通るなり、母親は袂と一通の電報の封を引き切つたのを立花の手に渡した。立花は直ぐ便所へ入つて、それを披いて見ると、『ハハブジスグコイ』と讀まれた。

立花はぼうツとして母親の前へ歸つて來たが、母親は大きな聲で、滅多に出したことのない大きな聲で、『あんまり御無沙汰いたしましたものでございますから、一寸お伺ひいたしました。いづれ朝飯からもう久江も歸るでございませうから、またお邪魔に伺はせます。何分よろしくお願ひいたします。あのう今日一寸校長さんのお宅へもお伺ひいたしましてございます。』と、うまいことを言つて、手土産の菓子折を差し出しつゝ、座を立たうとした。

『まア、およろしいぢやございませんか。』と、妻も出て來て留めたのを、振り拂ふやうにして母親は、『毎度久江がお世話さまになりまして。……』を繰り返へして、そこ／＼に立ち去つた。ぽつり／＼と雨が降つて來た。

立花は手早く洋服を着けて、洋傘片手にまた『學校へ』と言つて飛び出して見たが、もう母親の姿は其處らに見えなかつた。

本降りになつた雨の中を、鶴見へ行つて見ると、トタン葺きの屋根に、秋の雨が音を立てゝゐる下で、久江は頭髮をしツかりと麻緒で結ばれて、蒼い顏を枕の上に浮かしてゐた。其の裾の方に剃男と名づけらるべき筈のものが、白蠟のやうな顏を、ガーゼに掩はれて、眠つてゐるのかと思はるゝ風に、小ひさく仰向けになつてゐた。母の乳汁を一口だも

吸ひ得ないばかりでなく、明るい世の空氣の少量だも其の小ひさな肺臓に送ることの出來なかつたものは、纔に人工呼吸法を施さるゝだけの溫みをもつて生れて來たが、遂に細い産聲をも立てることがなくて、所謂暗からへ暗と移つたのであつた。

『旦那、まア抱いて上げて下さいよ。』と、産婆は言つて、ガーゼを取り拂つた冷たい小ひさな顔を、立花の胸へ押し付けるやうにして持つて來た。

抱きにくいものを、ヂッと抱いてゐると、立花の兩眼からは熱い涙がハラ〳〵と流れ落ちた。久江の眼がこッちを向いて、涙に光つてゐた。『わたしにもう一度抱かして頂戴。』

其の後のことは多く書くに忍びない。――――

黄菊白菊に包まれた菊男の遺骸を納めた小ひさな柩を、丁度トタン葺きの小ひさな家の眞後にあるお寺の墓地に葬つて、『採菊水子代菩提』とした卒塔婆を立てゝから、二十一日經つのを待ち兼ねて、母親は久江を本郷の家に迎へ取つた。

立花が尋ねて行くと、母親は急に他人行儀に凝つた態度で、奥座敷に請じて、儼然とした言葉に威儀を正しつゝ、『今までは彼娘の身體に障るといけないと思ひまして、申し上げずに居りましたが、これからはどうか、わたくしの家へおいで下さらないやうにお願ひいたします。彼女にもようくさう申しまして、學校の方は直ぐ辭職させます。もう決してお目にかゝらせませんから。…………』と言つた母親の様子は、さながら舊劇の舞臺の上に見る昔しの烈女といふものゝ表現のやうであつた。

次ぎの間には、久江の啜り泣く聲が聞えた。

人が好く、おとなしい母親の口から出た厳格な言葉に威壓されて、立花はしを／＼と久江の家を出た。久江の吸り泣きの聲が、いつまでも耳にあつた。

其の年の暮になつて、都下の一新聞紙は、或る一つの報道を、多くの人には面白かるべく、立花にだけは哀しく載せた。それは、『聲樂家瀧本久江嬢佛門に入る』と云ふ標題で、樂壇の花方瀧本久江嬢は何んの感ずるところあつてか、突然剃髪して、奈良の尼寺へ入つた。原因は厭世の爲めともいふし、失戀の結果だともいふが、素行の點に就いて申し分のない嬢のことだから、多分は厭世の爲めであらうと嘯き、其の後に母親の話として、嘘ばかりが語られ、私立△△高等女學校長の談として、お座なりが並べてあつた。立花は胸の張り裂ける思ひをして、それを讀みをはると、今時の新聞の記事の不確實さに微笑したくなつた。

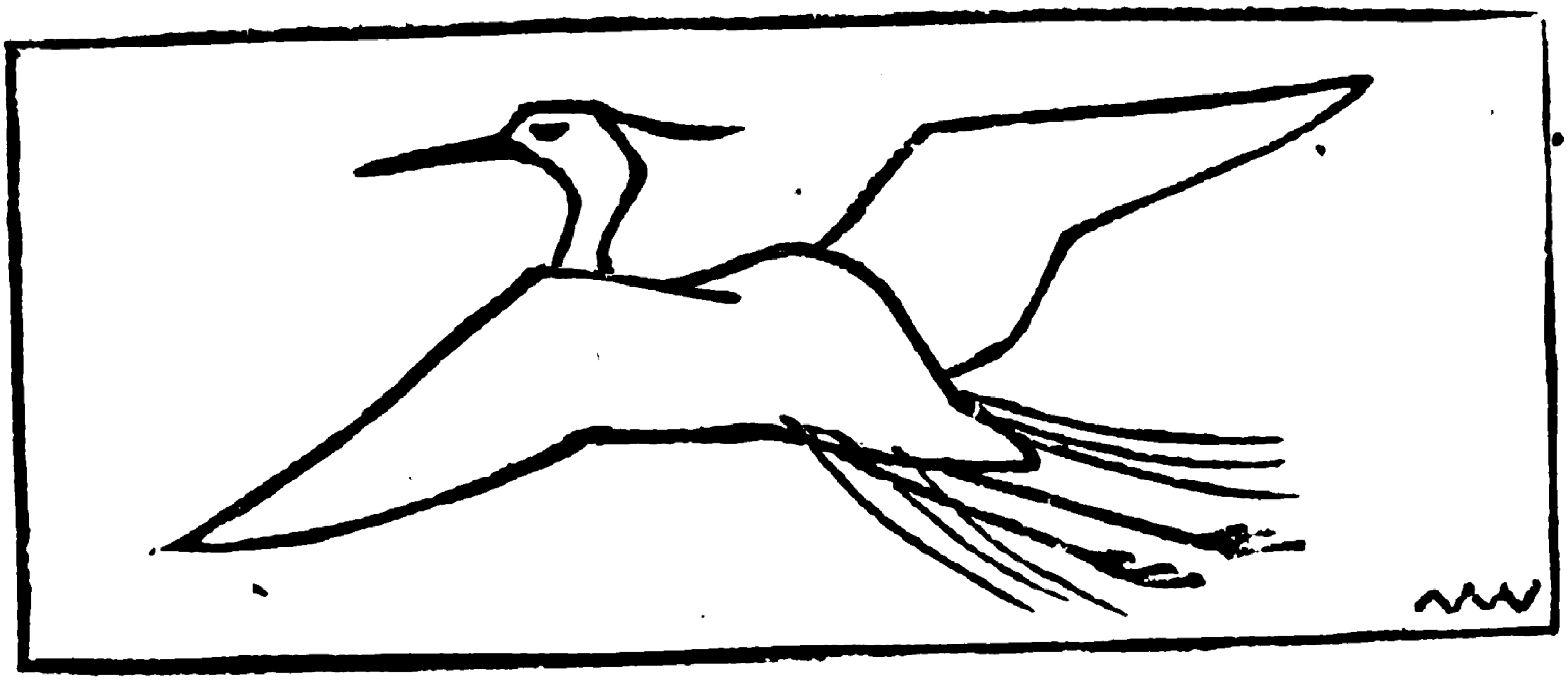
『あなた、あなた。』と、老妻がけたたましく立花を呼んで、『久江さんは尼さんになつたんですね、まア厭やだ。何故でせう。』と、面白さうに笑つた。

『久江さんが尼さんになつたの。』と、長女が新聞を手にしてゐる母に摺り寄つた。

久江と立花とが、東京の街を歩いた時のやうにして、奈良の夕暗に並び立つたのは、それから二ケ月あまり後で、餅飯殿の勸工場には、三月の節句の雛が並べられ、久江は圓い頭をお高祖頭巾に包み、黒ひ川の深い錦砂お召のコートで法體を掩ふてゐた。

夜どほし、麥の秀でた畑の中を歩き廻つて、ぐツたりと疲れ切つた二人の身體は、夜露が骨まで透りさうであつた。唇の白い二人の顔に微笑が浮んで、其の身の行方は、夜が明けるまで、まださまらなかつた。

——一九二〇・一〇・二〇——



お律と子等（後篇）

芥川龍之介

一

午過ぎになつてから、洋一が何氣なく茶の間へ來ると、其處には今し方歸つたらしい、夏羽織を着た父の賢造が、長火鉢の前に坐つてゐた。さうしてその前には姉のお絹が、火鉢の緣に肘をやりながら、今日は濕布を卷いてゐない、綺麗な丸髷の襟足をこちらへまともに話してゐた。

「そりやおれだつて忘れるもんかな。」

「ちやさうして頂戴よ。」

お絹は昨日よりも又一倍、血色の惡い顔を擧げて、ちよいと洋一の挨拶に答へた。それから多少彼を憚るやうな、薄笑ひを含んだ調子で、怯づ怯づ話の後を續けた。

「その方がどうかなつてくれなくつちや、何かに私だつて氣がひけるわ。私があの時何した株なんぞも、みんな今度は下つてしまつたし、――」

「よし、よし、萬事呑みこんだよ。」

父は浮かない顏をしながら、その癖冗談のやうにこんな事を云つた。姉は去年嫁づく時、父に分けて貰ふ筈だつた物が、未に一部は約束だけで、事實上お流れになつてゐるらしい。――さう云ふ消息に通じてゐる洋一は、わざと長火鉢には遠い所に、默然と新聞をひろげた儘、さつき田村に誘はれた明治座の廣告を眺めてゐた。

「それだからお父さんは嫌になつてしまふ。」

「お前よりおれの方が嫌になつてしまふ。お母さんはああやつて寢てゐるし、お前にや愚痴ばかりこぼされるし、――」

洋一は父の言葉を聞くと、我知らず襖一つ向うの、病室の動靜に耳を澄ませた。其處ではお律が何時もに似合はず、時時ながら苦しさうな唸り聲を洩らしてゐるらしかつた。

「お母さんも今日は樂ぢやないな。」

獨り言のやうな洋一の言葉は、一瞬間彼等親子の會話を途切らせるだけの力があつた。が、お絹はすぐに居ずまひを直すと、ちらりと賢造の顏を睨みながら、

「お母さんの病氣だつてさうぢやないの？　何時か私がさう云つた時に、御醫者樣を取り換へてゐさへすりや、きつとこんな事にやなりやしないわ。それをお父さんが又煮え切らないで、――」と、感傷的に父を責め始めた。

「だからさ、だから今日は谷村博士に來て貰ふと云つてゐるんぢやないか？」

賢造はとうとう苦い顏をして、抛り出すやうにかう云つた。洋一も姉の剛情なのが、さすがに少し面憎くもなつた。

「谷村さんは何時頃來てくれるんでせう？」

「三時頃來るつて云つてゐた。さつき工場の方からも電話をかけて置いたんだが、――」

「もう三時過ぎ、――四時五分前だがな。」

洋一は立て膝を抱きながら、日暦の上に懸つてゐる、大きな柱時計へ眼を擧げた。

「もう一度電話でもかけさせませうか？」

「さつきも叔母さんがかけたつてさう云つてゐたがね。」

「さつきつて？」

「戸澤さんが歸るとすぐだとさ。」

彼等がそんな事を話してゐる内に、お絹はまだ顔を曇らせた儘、急に長火鉢の前から立上ると、さつさと次の間へはひつて行つた。

「やつと姉さんから御暇が出た。」

賢造は苦笑を洩らしながら、始めて腰の煙草入れを拔いた。が、洋一は又時計を見たぎり、何ともそれには答へなかつた。

病室からは相不變、お律の唸り聲が聞えて來た。それが氣のせいかさつきよりは、だんだん高くなるやうでもあつた。谷村博士はどうしたのだらう？　尤も向うの身になつて見れば、母一人が患者ではなし、今頃はまだ便々と、回診か何かをしてゐるかも知れない。いや、もう四時を打つ所だから、いくら遲くなつたにしても、病院はとうに出てゐる筈だ。事によると今にも店さきへ、——

「どうです？」

洋一は陰氣な想像から、父の聲と一しよに解放された。見ると襖の明いた所に、心配さうな淺川の叔母が、何時か顔だけ覗かせてゐた。

「餘つ程苦しいやうですがね、――御醫者様はまだ見えませんかしら。」

賢造は口を開く前に、まづさうな刻みの煙を吐いた。

「困つたな。――もう一度電話でもかけさせませうか？」

「さうですね、一時凌ぎさへつけて頂けりや、戸澤さんでも好いんですがね。」

「僕がかけて來ます。」

洋一はすぐに立ち上つた。

「さうか。ぢや先生はもう御出かけになりましたでせうかつてね。番號は小石川の×××番だから、――」

賢造の言葉が終らない内に、洋一はもう茶の間から、臺所の板の間へ飛び出してゐた。臺所には襷がけの松が、鰹節の鉋を鳴らしてゐる。――その側を通りぬけながら、いきなり店へ行かうとすると、出合ひ頭に向うからも、小走りに美津が走つて來た。二人はまともにぶつかる所を、やつと兩方へ身を躱した。

「御免下さいまし。」

結ひたての髪を匂はせた美津は、極り惡さうにかう云つた儘、ぱたぱた茶の間の方へ駈けて行つた。

洋一は妙にてれながら、電話の受話器を耳へ當てた。するとまだ交換手が出ない内に、帳場机にゐた神山が、後から彼へ聲をかけた。

「洋一さん。谷村病院ですか？」

「ああ、谷村病院。」

彼は受話器を持つたなり、神山の方を振り返つた。神山は彼の方を見ずに、金格子で圍つた本立てへ、大きな簿記帳

を戻してゐた。
「ぢや今向うからかかつて來ましたぜ。お美津さんが奥へさう云ひに行つた筈です。」
「何てかかつて來たの?」
「先生は唯今御出かけになつたつて云つてたやうですが、――唯今だね? 良さん。」
呼びかけられた店員の一人は、丁度踏臺の上にのりながら、高い棚に積んだ商品の箱を取り下さうとしてゐる所だつた。
「唯今ぢやありませんよ。もうそちらへいらつしやる時分だつて云つてゐましたよ。」
「さうか。そんなら美津のやつ、さう云へば好いのに。」
洋一は電話を切つてから、もう一度茶の間へ引き返さうとした。が、ふと店の時計を見ると、不審さうに其處へ立ち止つた。
「おや、この時計は二十分過ぎだ。」
「何、こりや十分ばかり進んでゐますよ。まだ四時十分過ぎ位なもんでせう。」
神山は體を扭りながら、帶の金時計を覗いて見た。
「さうです。丁度十分過ぎ。」
「ぢややつぱり奥の時計が遅れてゐるんだ。それにしちや谷村さんは遅すぎるな。――」
洋一はちよいとためらつた後、大股に店さきへ出かけて行くと、もう薄日もささなくなつた、もの靜な往來を眺めまはした。

「來さうもないな。まさか家がわからないんでもなからうけれど、——ぢや神山さん、僕はちよいと其處いらへ行つて見て來らあ。」

彼は肩越しに神山へ、かう言葉をかけながら、店員の誰かが脱ぎ捨てた板草履の上へ飛び下りた。さうして殆走るやうに、市街自働車や電車が通る大通りの方へ歩いて行つた。

大通りは彼の店の前から、半町も行かない所にあつた。其處の角にある店藏が、半分は小さな郵便局に、半分は唐物屋になつてゐる。——その唐物屋の飾り窓には、麥藁帽や籐の杖が奇拔な組合せを見せた間に、もう派手な海水着が人間のやうに突立つてゐた。

洋一は唐物屋の前まで來ると、飾り窓を後に佇みながら、大通りを通る人や車に、苛立たしい視線を配り始めた。が、少時さうしてゐても、この問屋ばかり並んだ横町には、人力車一臺曲らなかつた。たまに自働車が來たと思へば、それは空車の札を出した、泥にまみれてゐるタクシイだつた。

その内に彼の店の方から、まだ十四五歳の店員が一人、自轉車に乘つて走つて來た。それが洋一の姿を見ると、電柱に片手をかけながら、器用に彼の側へ自轉車を止めた。さうしてペダルに足をかけた儘、

「今川村さんから電話がかかつて來ました。」と云つた。

「何か用だつたかい？」

洋一はさう云ふ間でも、絶えず賑な大通りへ眼をやる事を忘れなかつた。

「用は別にないんださうで、——」

「お前はそれを云ひに來たの？」

「いいえ、私はこれから工場まで行つて來るんです。――ああ、それから旦那が洋一さんに用があるつて云つてゐましたぜ。」

「お父さんが？――」

洋一はかう云ひかけたが、ふと向うを眺めたと思ふと、突然相手も忘れたやうに、飾りの窓の前を飛び出した。人通りも疎な往來には、丁度今一臺の人力車が、大通りをこちらへ切れようとしてゐる。――その梶棒の先へ立つが早いか、彼は兩手を擧げないばかりに、車上の青年へ聲をかけた。

「兄さん！」

車夫は體を後に反らせて、際どく車の走りを止めた。車の上には愼太郎が、高等學校の夏服に白い筋の制帽をかぶつた儘、膝に挾んだトランクを、骨太な兩手に抑へてゐた。

「やあ。」

兄は眉一つ動かさずに、洋一の顔を見下した。

「お母さんはどうした？」

洋一は兄を見上げながら、體中の血が生き生きと、急に兩頰へ上るのを感じた。

「この二三日惡くつてね。――十二指腸の潰瘍なんださうだ。」

「さうか。そりや――」

愼太郎はやはり冷然と、それ以上何も云はなかつた。が、その母讓りの眼の中には、洋一が豫期してゐなかつた、とは云へ無意識に求めてゐた或表情が閃いてゐた。洋一は兄の表情に愉快な當惑を感じながら、口早に切れ切れな言葉を續けた

「今日は一番苦しさうだけれど、――でも兄さんが歸つて來て好かつた。――まあ早く行くと好いや。」

車夫は愼太郎の合圖と一しよに、又勢よく走り始めた。愼太郎はその時まざまざと、今朝上りの三等客車に腰を落着けた彼自身が、頭の何處かに映るやうな氣がした、それは隣に腰をかけた、血色の好い田舍娘の肩を肩に感じながら、母の死目に會ふよりは、寧ろ死んだ後に行つた方が、悲しみが少いかも知れないなどと思ひ耽つてゐる彼だつた。しかも眼だけはその間も、レクラム版のゲエテの詩集へ、ぼんやり落してゐる彼だつた。……

「兄さん。試驗はまだ始らなかつた?」

愼太郎は體を斜にして、驚いた視線を聲の方へ投げた。すると其處には洋一が、板草履を土に鳴らしながら、車とすれすれに走つてゐた。

「明日からだ。お前は、――あすこにお前は何をしてゐたんだ?」

「今日は谷村博士が來るんでね、あんまり來やうが遲いから、立つて待つてゐたんだけれど、――」

洋一はかう答へながら、かすかに息をはづませてゐた。愼太郎は弟を劬りたかつた。が、その心もちは口を出ると、何時か平凡な言葉に變つてゐた。

「餘つ程待つたかい?」

「十分も待つたかしら?」

「誰かあすこに店の者がゐたやうぢやないか?――おい、其處だ。」

車夫は五六歩行き過ぎてから、大廻しに梶棒を店の前へ下した。さすがに愼太郎にもなつかしい、分厚な硝子戸の立つた店の前へ。

二

一時間の後店の二階には、谷村博士を中心に、賢造、愼太郎、お絹の夫の三人が浮かない顔を揃へてゐた。彼等はお律の診察が終つてから、その診察の結果を聞く爲に、博士をこの二階に招じたのだつた。體格の逞しい谷村博士は、すすめられた茶を啜つた後、少時は胴衣の金鎖を太い指にからめてゐたが、やがて電燈に照らされた三人の顔を見廻すと、

「戸澤さんとか云ふ、――かかりつけの醫者は御呼び下すつたでせうな。」と云つた。

「唯今電話をかけさせました。――すぐに上ると仰有つたね。」

賢造は念を押すやうに、愼太郎の方を振り返つた。愼太郎はまた制服を着た儘、博士と向ひ合つた父の隣りに、窮屈さうな膝を重ねてゐた。

「ええ、すぐに見えるさうです。」

「ぢやその方が見えてからにしませう。――どうもはつきりしない天氣ですな。」

谷村博士はかう云ひながら、マロック革の巻煙草入れを出した。

「當年は梅雨が長いやうです。」

「兎角雲行きが惡いんで弱りますな。天候も財界も昨今のやうぢや、――」

お絹の夫も横合ひから、滑かな言葉をつけ加へた。丁度見舞ひに來合せてゐた、この若い呉服屋の主人は、短い口髭に縁無しの眼鏡と云ふ、寧ろ辯護士か會社員にふさはしい服裝の持ち主だつた。愼太郎はかう云ふ彼等の會話に、妙な齟齬さを感じながら、剛情に一人默つてゐた。

しかし戸澤と云ふ出入りの醫者が、彼等の間に交つたのは、それから間もない後の事だつた。黑絽の羽織をひつかけた、多少は酒氣もあるらしい彼は、谷村博士に慇懃な初對面の挨拶をすませてから、すぢかひに坐つた賢造へ、

「もう御診斷は御伺ひになつたんですか？」と、强い東北訛の聲をかけた。

「いや、あなたが御見えになつてから、申し上げようと思つてゐたんですが、――」

谷村博士は指の間に短い卷煙草を挾んだ儘、賢造の代りに返事をした。

「猶あなたの御話を承る必要もあるものですから、――」

戸澤は博士に問はれる通り、此處一週間ばかりのお律の容態を可成詳細に說明した。愼太郎には薄い博士の眉が、戸澤の處方を聞いた時、かすかに動いたのが氣がかりだつた。

しかしその話が一段落つくと、谷村博士は大様に、二三度獨り頷いて見せた。

「いや、よくわかりました。無論十二指腸の潰瘍です。が、唯今拜見した所ぢや、腹膜炎を起してゐますな。何しろかう下腹が、押し上げられるやうに痛いと云ふんですから――」

「ははあ、下腹が押し上げられるやうに痛い？」

戸澤はセルの袴の上に、威かつい肘を張りながら、ちよいと首を傾けた。

少時は誰も息を吞んだやうに、口を開かうとするものがなかつた。

「熱なぞはそれでも昨日よりは、ずつと低いやうですが、――」

その内にやつと賢造は、覺束ない反問の口を切つた。しかし博士は卷煙草を捨てると、無造作にその言葉を遮つた。

「それがいかんですな。熱はずんずん下りながら、脈搏は反つてふゑて來る――と云ふのがこの病の癖なんですから。」

「成程、さう云ふものですかな。こりや我々若いものも、伺つて置いて好い事ですな。」

お絹の夫は腕組みをした手に、時々口髭をひつぱつてゐた。愼太郎は義兄の言葉の中に 他人らしい無關心の冷たさを感じた。

「しかし○○が診察した時にや、まだ別に腹膜炎などの兆候も見えないやうでしたがな。――」

戸澤　かう云ひかけると、谷村博士は職業的に、透かさず愛想の好い返事をした。

「さうでせう。多分はあなたの御覽になつた後で發したかと思ふんです。第一まだ病狀が、それ程昂進してもゐないやうですから、――しかし兎も角も現在は、腹膜炎に違ひありませんな。」

「ぢやすぐに入院でも、させて見ちや如何でせう?」

愼太郎は險しい顏をした儘、始めて話に口を挾んだ。博士はそれが意外だつたやうに、ちらりと重さうな眶の下から、愼太郎の顏へ眼を注いだ。

「今はとても動かせないです。まづ差當りは出來る限り、腹を温める一方ですな。それでも痛みが強いやうなら、戸澤さんにお願ひして、注射でもして頂くとか、――今夜はまだ中々痛むでせう。どの病氣でも樂ぢやないが、この病氣は殊に苦しいですから。」

谷村博士はさう云つたぎり、沈んだ眼を疊へやつてゐたが、ふと思ひ出したやうに、胴衣(チヨツキ)の時計を出して見ると、

「ぢや私はもう御暇します」と、すぐに背廣の腰を擡げた。

愼太郎は父や義兄と一しよに、博士に來診の禮を述べた。が、その間も失望の色が、彼自身の顏には歴々と、現れてゐる事を意識してゐた。

「どうか博士も亦二三日中に、もう一度御診察を願ひたいもので、――」

戸澤は挨拶をすませてから、かう云つて又頭を下げた。

「ええ、上る事は何時でも上りますが、――」

これが博士の最後の言葉だつた。愼太郎は誰よりずつと後に、暗い梯子を下りながら、しみじみ萬事休すと云ふ心もちがせずにはゐられなかつた。……………

三

戸澤やお絹の夫が歸つてから、和服に着換へた愼太郎は、淺川の叔母や洋一と一しよに、茶の間の長火鉢を圍んでゐた。襖の向うからは不相變、お律の唸り聲が聞えて來た。彼等三人は電燈の下に、はづまない會話を續けながら、ややもすると云ひ合せたやうに、その聲へ耳を傾けてゐる彼等自身を見出すのだつた。

「いけないねえ。ああ始終苦しくつちや、――」

叔母は火箸を握つた儘、ぼんやり何處かへ眼を据ゑてゐた。

「戸澤さんは大丈夫だつて云つたの?」

洋一は叔母には答へずに、E・C・Cを啣へてゐる兄の方へ言葉をかけた。

「二三日は間違ひあるまいつて云つた。」

「怪しいな。戸澤さんの云ふ事ぢや、――」

今度は愼太郎が返事せずに、煙草の灰を火鉢へ落してゐた。

「慎ちやん。さつきお前が歸つて來た時、お母さんは何とか云つたかえ？」

「何とも云ひませんでした。」

「でも笑つたね。」

洋一は横から覗くやうに、靜な兄の顔を眺めた。

「うん、——それよりもお母さんの側へ行くと。莫迦に好い匂がするぢやありませんか？」

叔母は答を促すやうに、微笑した眼を洋一へ向けた。

「ありやさつきお絹ちやんが、持つて來た香水を撒いたんだよ。洋ちやん。何とか云つたね？　あの香水は。」

「何ですか、——多分床撒き香水とか何んとか云ふんでせう。」

其處へお絹が襖の陰から、そつと病人のやうな顔を出した。

「お父さんはゐなくつて？」

「店に御出でだよ。何か用かえ？」

「ええ、お母さんが、ちよいと、——」

洋一はお絹がさう云ふと同時に、早速長火鉢の前から立ち上つた。

「僕がさう云つて來る。」

彼が茶の間から出て行くと、米噛みに即效紙を貼つたお絹は、兩袖に胸を抱いた儘、忍び足にこちらへはひつて來た。

さうして洋一の立つた跡へ、薄ら寒さうにちやんと坐つた。

「どうだえ？」

「やつぱり藥が通らなくつてね。——でも今度の看護婦になつてからは、年をとつてゐるだけでも氣丈夫ですわ。」

「熱は？」

愼太郎は口を挾みながら、まづさうに煙草の煙を吐いた。

「今計つたら七度二分——」

お絹は襟に顋を埋めたなり、考深さうに愼太郎を見た。

「戸澤さんがゐた時より、又一分下つたんだわね。」

三人は少時默つてゐた。するとそのひつそりした中に、板の間を踏む音がしたと思ふと、洋一をさきに賢造が、そはそは店から歸つて來た。

「今お前の家から電話がかかつたよ。後程どうかお上さんに御電話を願ひますつて。」

賢造はお絹にさう云つたぎり、すぐに隣りへはひつて行つた。

「しやうがないわね。家ぢや女中が二人ゐたつて、ちつとも役にや立たないんですよ。」

お絹はちよいと舌打ちをしながら、淺川の叔母と顏を見合せた。

「この節の女中はね。——私の所なんぞも女中がゐるだけ、反つて世話が燒ける位なんだよ。」

二人がこんな話をしてゐる間に、愼太郎は金口を啣へながら、寂しさうな洋一の相手をしてゐた。

「受驗準備はしてゐるかい？」

「してゐる。だけど今年は投げてゐるんだ。」

「又歌ばかり作つてゐるんだらう。」

洋一はいやな顔をして、自分も巻煙草へ火を移した。

「僕は兄さんのやうに受驗向きな人間ぢやないんだからな。叔母は大嫌ひだし、——」

「姉だつてやらなけりや、——」

愼太郎がかう云ひかけると、何時か襖側へきた看護婦と、小聲に話をしてゐた叔母が、

「愼ちやん。お母さんが呼んでゐるとさ」と火鉢越しに彼へ聲をかけた。

彼は吸ひさしの煙草を捨てると、無言の儘立ち上つた。さうして看護婦を押しのけるやうに、づかづか隣の座敷へはひつて行つた。

「こつちへ御出で。何かお母さんが用があるつて云ふから。」

枕もとに獨り坐つてゐた父は、顋で彼に差圖をした。彼はその差圖通り、すぐに母の鼻の先へ坐つた。

「何か用？」

母は括り枕の上へ、櫛卷きの頭を横にしてゐた。その顔が巾をかけた電燈の光に、さつきよりも一層窶れて見えた。

「あゝ、洋一がね、どうも勉強をしないやうだからね、——お前からもよくさう云つてね、——お前の云ふ事は聞く子だから、——」

「ええ、よく云つて置きます。實は今もその話をしてゐたんです。」

愼太郎は何時もより、大きな聲で返事をした。

「さうかい。ぢや忘れないでね、——私も昨日あたりまでは、死ぬのかと思つてゐたけれど、……」

母は腹痛をこらへながら、齒齦の見える微笑をした。

「帝釋樣の御符を頂いたせいか、今日は熱も下つたしね、この分で行けば癒りさうだから、――美津の叔父さんとか云ふ人も、やつぱり十二指腸の潰瘍だつたけれど、半月ばかりで癒つたと云ふしね、さう難病でもなささうだからね。――」

愼太郎は今になつてさへ、そんな事を頼みにしてゐる母が、淺間しい氣がしてならなかつた。

「癒りますとも。大丈夫癒りますからね、よく藥を飲むんですよ。」

母はかすかに頷いた。

「ぢや唯今一つ召し上つて御覽なさいまし。」

枕もとに來てゐた看護婦は、器用にお律の唇へ、水藥の硝子管を當てがつた。母は眼をつぶつたなり、二吸程管の藥を飲んだ。それが刹那の間ながら、愼太郎の心を明くした。

「好い鹽梅ですね。」

「今度はをさまつたやうでございます。」

看護婦と愼太郎とは、親しみのある視線を交換した。

「藥がをさまるやうになれば、もうしめたものだ。だがちつとは長びくだらうし、床上げの時分は暑からうな。こいつは一つ赤飯の代りに、氷あづきでも配る事にするか。」

賢造の冗談をきつかけに、愼太郎は膝をついた儘、そつと母の側を引き下らうとした。すると母は彼の顏へ、突然不審さうな眼をやりながら、

「演說？　何處に今夜演說があるの？」と云つた。

彼はさすがにぎよつと、救ひを請ふやうに父の方を見た。

「演說なんぞありやしないよ。何處にもそんな物はないんだからね、今夜はゆつくり寢た方が好いよ。」

賢造はお律をなだめると同時に、ちらりと愼太郎の方へ眼くばせをした。愼太郎は早速膝を擡げて、明るい電燈に照らされた、隣の茶の間へ歸つて來た。

茶の間にはやはり姉や洋一が、叔母とひそひそ話してゐた。それが彼の姿を見ると、皆一度に顏を擧げながら、何か病室の消息を尋ねるやうな表情をした。が、愼太郎は口を噤んだなり、不相變冷やかな眼つきをして、もとの座蒲團の上にあぐらをかいた。

「何の用だつて？」

まつさきに沈默を破つたのは、今も襟に顋を埋めた、顏色の好くないお絹だつた。

「何でもなかつた。」

「ぢやきつとお母さんは、愼ちやんの顏が唯見たかつたのよ。」

愼太郎は姉の言葉の中に、意地の惡い調子を感じた。が、ちよいと苦笑したぎり、何ともそれには答へなかつた。

「洋ちやん。お前今夜夜伽をおしかえ？」

少時無言が續いた後、淺川の叔母は欠伸まじりに、かう洋一へ聲をかけた。

「ええ、——姉さんも今夜はするつて云ふから、——」

「愼ちやんは？」

お絹は薄い眶を擧げて、じろりと愼太郎の顏を眺めた。

「僕はどうでも好い。」

「不相變愼ちやんは煮え切らないのね。高等學校へでもはひつたら、もつときはきするかと思つたけれど。——」

「この人はお前、疲れてゐるぢやないか？」

叔母は半ばたしなめるやうに、稍高いお絹の言葉を制した。

「今夜は一番さきへ寢かした方が好いやね。何も夜伽ぎをするからつて、今夜に限つた譯ぢやあるまいし、——」

「ぢや一番さきに寢るかな。」

愼太郎は久弟のE・C・Cに火をつけた。垂死の母を見て來た癖に、もう内心ははしやいでゐる彼自身の輕薄を憎みながら、……

四

それでも店の二階の蚊帳に、愼太郎が體を横たへたのは、その夜の十二時近くだつた。彼は叔母の言葉通り、實際旅疲れを感じてゐた。が、愈電燈を消して見ると、何度か寢反りを繰り返しても、容易に睡氣を催さなかつた。

彼の隣には父の賢造が、靜かな寢息を洩らしてゐた。父と一つ部屋に眠るのは、少くともこの三四年以來、今夜が彼には始めてだつた。父は鼾きをかかなかつたかしら、——愼太郎は時々眼を明いては、父の寢姿を透かして見ながら、そんな事さへ不審に思ひなぞした。

しかし彼の眶の裏には、やはりさまざまな母の記憶が、亂雜に漂つて來勝ちだつた、その中には嬉しい記憶もあれば、寧ろ忌はしい記憶もあつた。が、どの記憶も今となつて見れば、同じやうに寂しかつた。「みんなもう過ぎ去つた事だ。

好くつても悪くつても仕方がない。」——愼太郎はさう思ひながら、糊の匂のする括り枕に、ぼんやり五分刈の頭を落着けてゐた。

——まだ小學校にゐた時分、父が或日愼太郎に、新しい帽子を買つて來た事があつた。それは兼ね兼ね彼が欲しがつてゐた、庇の長い大黑帽だつた。するとそれを見た姉のお絹が、來月は長唄のお浚ひがあるから、今度は自分にも着物を一つ、拵へてくれろと云ひ出した。父はにやにや笑つたぎり、全然その言葉に取り合はなかつた。姉はすぐに怒り出した。さうして父に背を向けた儘、口惜しさうに蔭口を利いた。

「たんと愼ちやんばかり御可愛がりなさいよ。」

父は多少持て餘しながらも、まだ薄笑ひを止めなかつた。

「着物と帽子とが一つになるものかな。」

「ぢやお母さんはどうしたんです？　お母さんだつてこの間は、羽織を一つ拵へたぢやありませんか？」

姉は父の方へ向き直ると、突然險しい目つきを見せた。

「あの時はお前も簪だの櫛だの買つて貰つたぢやないか？」

「ええ、買つて貰ひました。買つて貰つちやいけないんですか？」

姉は頭へ手をやつたと思ふと、白い菊の花簪をいきなり疊の上へ抛り出した。

「何だ、こんな簪位。」

父もさすがに苦い顔をした。

「莫迦な事をするな。」

「どうせ私は莫迦ですよ。愼ちやんのやうな利口ぢやありません。私のお母さんは莫迦だつたんですから、——」

愼太郎は苦い顏をした儘、このいさかひを眺めてゐた。が、姉がかう泣き聲を張り上げると、彼は默つて疊の上の花簪を摑むが早いか、ぴりぴりその花びらをむしり始めた。

「何をするのよ。愼ちやん。」

姉は殆氣違ひのやうに、彼の手もとへむしやぶりついた。

「こんな簪なんぞ入らないつて云つたぢやないか？　入らなけりやどうしたつてかまはないぢやないか？　何だい、女の癖に、——喧嘩なら何時でも向つて來い。——」

何時か泣いてゐた愼太郎は、菊の花びらが皆なくなるまで、剛情に姉と一本の花簪を奪ひ合つた。しかし頭の何處かには、實母のない姉の心もちが、不思議な位鮮に映つてゐるやうな氣がしながら、——

愼太郎はふと耳を澄せた。誰かが音のしないやうに、暗い梯子を上つて來る。——と思ふと美津が上り口から、そつとこちらへ聲をかけた。

「旦那樣」

眠つてゐると思つた賢造は、すぐに枕から頭を擡げた。

「何だい？」

「お上さんが何か御用でございます。」

美津の聲は震へてゐた。

「よし、今行く。」

父が二階を下りて行つた後、愼太郎は大きな眼を明いた儘、家中の物音にでも聞き入るやうに、ぢつと體を硬ばらせてゐた。すると何故かその間に、現在の氣もちとは緣の遠い、かう云ふ平和な思ひ出が、はつきり頭へ浮んで來た。

――これもまだ小學校にゐた時分、彼は一人母につれられて、谷中の墓地へ墓參りに行つた。墓地の松や生垣の中には、辛夷の花が白らんでゐる、天氣の好い日曜の午過ぎだつた。母は小さな墓の前に來ると、これがお父さんの御墓だと敎へた。が、彼はその前に立つて、ちよいと御時宜をしただけだつた。

「それでもう好いの？」

母は水を手向けながら、彼の方へ微笑を見せた。

「うん。」

彼は顏を知らない父に、漠然とした親しみを感じてゐた。が、この憐な石塔には、何の感情も起らないのだつた。

母はそれから墓の前に、少時手を合せてゐた。すると何處かその近所に、空氣銃を打つたらしい音が聞えた。愼太郎は母を後に殘して、音のした方へ出かけて行つた。生垣を一つ大廻りに廻ると、路側の狹い往來へ出る、――其處に彼よりも大きな子供が、弟らしい二人と一しよに、空氣銃を片手に下げたなり、何の木か木の芽の煙つた梢を殘惜しさうに見上げてゐた。――

その時又彼の耳には、誰かの梯子を上つて來る音が、みしりみしり聞え出した。急に不安になつた彼は、半ば床から身を起すと、

「誰？」と上り口へ聲をかけた。

「起きてゐたのか？」

聲の持ち主は賢造だつた。

「どうかしたんですか？」

「今お母さんが用だつて云ふからね、ちよいと下へ行つて來たんだ。―

父は沈んだ聲を出しながら、もとの蒲團の上へ横になつた。

「用つて、――惡いんぢやないんですか？」

「何、用つて云つた所が、唯明日工場へ行くんなら、簞笥の上の抽斗に、單衣物があるつて云ふだけなんだ。―

愼太郎は母を憐んだ。それは母と云ふよりも母の中の妻を憐んだのだつた。

「しかしどうもむづかしいね。今なんぞも行つて見ると、やつぱり隨分苦しいらしいよ。おまけに頭も痛いとか云つてね、始終首を動かしてゐるんだ。」

「戸澤さんに又注射でもして貰つちやどうでせう？」

「注射はさう度々は出來ないんださうだから、――どうせいけなけりやいけないまでも、苦しみだけはもう少し、樂にしてやりたいと思ふがね。」

賢造は暗い中に、ちつと愼太郎の顏を眺めた。

「お前のお母さんなんぞは後生も好い方だし、――どうしてああ苦しむかね。―

二人は少時默つてゐた。

「みんなまだ起きてゐますか？」

愼太郎は父と向き合つた儘、默つてゐるのが苦しくなつた。

「叔母さんは寢てゐる。が、寢られるかどうだか、——」

父はかう云ひかけると、急に又枕から頭を擡げて、耳を澄ますやうな表情をした。

「お父さん。お母さんがちよいと、——」

今度は梯子の中段から、お絹が忍びやかに聲をかけた。

「今行くよ。」

「僕も起きます。」

愼太郎は搔卷きを刎ねのけた。

「お前は起きなくつても好いよ。何かありやすぐに呼びに來るから。」

父はさつさとお絹の後から、もう一度梯子を下りて行つた。

愼太郎は床の上に、少時あぐらをかいてゐたが、やがて立ち上つて電燈をともした。それから又坐つた儘、電燈の眩しい光の中に、茫然とあたりを眺め廻した。母が父を呼びによこすのは、用があるなしに關らず、實は唯父に床の側へ來てゐて貰ひたいせいかも知れない。——そんな事もふと思はれるのだつた。

すると字を書いた罫紙が一枚、机の下に落ちてゐるのが、偶然彼の眼を捉へた。彼は何氣なくそれを取り上げた。

「M子に獻ず。……」

後(あと)は洋一の歌になつてゐた。

愼太郎はその罫紙を拋り出すと、兩手を頭の後に廻しながら、蒲團の上へ仰向けになつた。さうして一瞬間、眼の涼しい美津の顏をありあり思ひ浮べた。…………

五

愼太郎がふと眼をさますと、もう窓の戸の隙間が、薄白くなつた二階には、姉のお絹が賢造と、何か小聲に話してゐた。彼はすぐに飛び起きた。

「よし、よし、ぢやお前は寢た方が好いよ。」

賢造はお絹にかう云つたなり、忙しさうに梯子を下りて行つた。

窓の外では屋根瓦に、瀧の落ちるやうな音がしてゐた。大降りだな、――愼太郎はさう思ひながら、早速寢間着を着換へにかかつた。すると帶を解いてゐたお絹が、やや皮肉に彼へ聲をかけた。

「愼ちやん。お早う。」

「お早う、お母さんは？」

「昨夜はずつと苦しみ通し。――」

「寢られないの？」

「自分ぢやよく寢たつて云ふんだけれど、何だか側で見てゐたんぢや、五分もほんたうに寢なかつたやうだわ。さうしちや妙な事を云つて、――私夜中に氣味が惡くなつてしまつた。」

もう着換へのすんだ愼太郎は、梯子の上り口に佇んでゐた。其處から見える臺所のさきには、美津が裾を端折つた儘雜巾か何かかけてゐる。――それが彼等の話し聲がすると、急に端折つてゐた裾を下した。彼は眞鍮の手すりへ手をやつたなり、何だか其處へ下りて行くのが、憚られるやうな心もちがした。

「妙な事つてどんな事を？」

「半ダアス？　半ダアスは六枚ぢやないかなんて。」

「頭が少しどうかしてゐるんだね。——今は？」

「今は戸澤さんが來てゐるわ。」

「早いな。」

愼太郎は美津がゐなくなつてから、ゆつくり梯子を下りて行つた。

五分の後、彼が病室へ來て見ると、戸澤は丁度チキタミンの注射をすませた所だつた。母は枕もとの看護婦に、後の手當をして貰ひながら、昨夜父が云つた通り、絶えず白い括り枕の上に、櫛卷きの頭を動かしてゐた。

「愼太郎が來たよ。」

戸澤の側に坐つてゐた父は、聲高に母へさう云つてから、彼にちよいと目くばせをした。

彼は父とは反對に、戸澤の向う側へ腰を下した。其處には洋一が腕組みをした儘、ぼんやり母の顏を見守つてゐた。

「手を握つておやり。」

愼太郎は父の云ひつけ通り、兩手の掌に母の手を抑へた。母の手は冷たい脂汗に、氣味惡くじつとり沾つてゐた。

母は彼の顏を見ると、頷くやうな眼を見せたが、すぐにその眼を戸澤へやつて、

「先生。もういけないんでせう。手がしびれて來たやうですから」と云つた。

「いや、そんな事はありません。もう二三日の辛棒です。」

戸澤は手を洗つてゐた。

「ぢきに樂になりますよ。——おや、いろいろな物が並んでゐますな。」

母の枕もとの盆の上には、大神宮や氏神の御札が、柴又の帝釋の御影なぞと一しよに、並べ切れない程並べてある。——母は上眼にその盆を見ながら、喘ぐやうに切れ切れな返事をした。

「昨夜、あんまり、苦しかつたものですから、——それでも今朝は、お肚の痛みだけは、ずつと樂になりました。——」

父は小聲に看護婦へ云つた。

「少し舌がつれるやうですね。」

「口が御粘りになるんでせう。——これで水をさし上げて下さい。」

愼太郎は看護婦の手から、水に浸した筆を受け取つて、二三度母の口をしめした。母は筆に舌を搦んで、乏しい水を吸ふやうにした。

「ぢや又上りますからね、御心配な事はちつともありませんよ。」

戸澤は鞄の始末をすると、母の方へかう大聲に云つた。それから看護婦を見返りながら、

「ぢや十時頃にも一度、喰りを注射して上げて下さい」と云つた。

看護婦は口の内で返事をしたぎり、何か不服さうな顔をしてゐた。

愼太郎と父とは病室の外へ、戸澤の歸るのを送つて行つた。次の間には今朝も叔母が一人氣拔けがしたやうに坐つてゐる、——戸澤はその前を通る時、叮嚀な叔母の挨拶に無造作な目禮を返しながら、後に從つた愼太郎へ、

「どうです？　受驗準備は」と話しかけた。が、忽ち間違ひに氣がつくと、不快な程快活に笑ひ出した。

「こりやどうも、——弟さんだとばかり思つたもんですから、——」

愼太郎も苦笑した。

「この頃は弟さんに御眼にかかると、何時も試驗の話ばかりです。やはり宅の伜なんぞが受驗準備をしてゐるせいですな。――」

戸澤は臺所を通り拔ける時も、やはりにやにや笑つてゐた。

醫者が雨の中を歸つた後、愼太郎は父を店に殘して、急ぎ足に茶の間へ引き返した。茶の間には今度は叔母の側に、洋一が卷煙草を啣へてゐた。

「眠いだらう？」

愼太郎はしやがむやうに、長火鉢の緣へ膝を當てた。

「姉さんはもう寢てゐるぜ。お前も今の内に二階へ行つて、早く一寢入りして來いよ。」

「うん、――昨夜夜つぴて煙草ばかり呑んでゐたもんだから、すつかり舌が荒れてしまつた。」

洋一は陰氣な顏をして、まだ長い吸ひさしをやけに火鉢へ抛りこんだ。

「でもお母さんが唸らなくなつたから好いや。」

「ちつとは樂になつたと見えるねえ。」

叔母は母の懷爐に入れる懷爐灰を燒きつけてゐた。

「四時までは苦しかつたやうですがね。」

其處へ松が臺所から、銀杏返しのほつれた顏を出した。

「御隱居樣。旦那樣がちよいと御店へ、いらしつて下さいつて仰有つてゐます。」

「はい、はい、今行きます。」

叔母は懐爐を愼太郎へ渡した。

「ぢや愼ちやん、お前お母さんを氣をつけて上げておくれ。」

叔母がかう云つて出て行くと、洋一も欠伸を噛み殺しながら、やつと重い腰を擡げた。

「僕も一寢入りして來るかな。」

愼太郎は一人になつてから、懐爐を膝に載せた儘、ぢつと何かを考へようとした。が、何を考へるのだか、彼自身にもはつきりしなかつた。唯凄まじい雨の音が、見えない屋根の空を滿してゐる、――それだけが頭に擴がつてゐた。

すると突然次の間から、慌しく看護婦が駈けこんで來た。

「どなたかいらしつて下さいましよ。どなたか、――」

愼太郎は咄嗟に身を起すと、もう次の瞬間には、隣の座敷へ飛びこんでゐた。さうして逞しい兩腕に、しつかりお律を抱き上げてゐた。

「お母さん。お母さん。」

母は彼に抱かれた儘、二三度體を震はせた。それから青黑い液體を吐いた。

「お母さん。」

誰もまだ其處へ來ない何秒かの間、愼太郎は大聲に名を呼びながら、もう息の絶えた母の顏に、食ひ入るやうな眼を注いでゐた。（九・十・二十三）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附録號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信頼社
三誠社、東亞通信社

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正九年十月三十一日印刷納本
大正九年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷壽治
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（小石川一四四一 小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可 大正九年十月三十一日印刷納本 中央公論十一月號（第三十五年第十二號）定價六拾錢